設

特205
306

醇正國語

教授參考書

東京高等師範學校教授 能勢朝次編

株式會社 文學社刊行

昭和十四年・本館圖書

緒　言

一

本書は「醇正國語」教授の參考に供するため、編述したものであります。編者の立場から、教授の進行を想定し、參考となる事柄は廣く網羅するやうに心がけました。併し樣々な資料の雜纂になることを避け、組織的に叙述すると共に本質的な部分に特に力を入れました。各教材の研究を、「解題」・「解釋」・「備考」の三部に分ち、「解題」に於ては豫備的研究を、「解釋」に於ては本質的研究を、「備考」に於ては補足的研究を行ひました。

二

第一部「解題」は次のやうに組織されてゐます。

(1)　作　者

(2)　出　典

(3)　主眼及び採擇の趣旨

(1)に於ては作者に就いてなるべく詳細に記述し、單に履歴を掲げるのみでなく、教材の文學史的取扱の場合を考慮し、その作風にもふれておきました。履歴不明の點につき直接作者の教示を仰いで掲載したのも少くありません。(2)に於ては各教材の出典をなるべく詳細に記し、その典據を明らかにすると共に、原典を髣髴たらしめるやうに致しました。(3)に於ては各教材の主眼を簡單に述べてその陶冶的價値を明らかにすると共に、教材排列の用意に就いて述べました。

三

第二部「解釋」は次のやうに組織されてゐます。

(1) 語釋
(2) 文の構成
(3) 文意
(4) 鑑賞批評

解釋は教材の本質的研究でありまして、編者はこゝに最も力を注ぐやうに致しました。近時我が國に於ても國語教育や國文學の基礎學として解釋學が研究されてゐます。これは主としてドイツ解釋學の流を汲むもののやうに思はれますが、デイルタイ以後俄かに勃興したこの學問は、解釋の普遍妥當性への關心から生まれたもので、元來理論的な特性を有するものであります。從つてその理論的體系をそのまゝ解釋の實踐に適用しようとする場合には、樣々な困難の存在するのを免れません。飜つて思ふに、幾多の優れた古典を有する東洋には東洋獨自の實踐的な解釋學が成立して居ります。本書の編述に當つては特にこの點に反省を加へました。「韋編三絶」「讀書百遍義自見」などといふ古聖賢の言行は別としましても、東洋の實踐的解釋學の根本的性格は、「解釋」乃至「理會」といふ術語の中に端的に示されてゐます。これは元來、支那古典學の發生と共に古典解釋の事象に反省が加へられた時、類推の結果工藝の術語が援用されたものであります。卽ち「解釋」は牛角を分析して盉(觚・觶・觴・觶等)を作る作用であり、「理會」は璞(あらたま)を分析綜合して種々の飾玉(玦・珌・珩・珮・琚・瑞等)を作る作用であります。その中、「解」は牛角を分析する作用を示し、「釋」は字書に「捨也」とありまして、分析された牛角の中不純不用な部分を捨てること卽ち否定することを意味してゐます。又「理」は璞を分析研磨する作用を示し、會は字書に「合也」とありまして、分析研磨された玉を綜合することを意味してゐます。この分析及び否定(又は綜合)といふ二つの作用を經て解釋が成立し、理會が成立するとなすのが、東洋人の解釋學的思想であります。

これはもと支那に發生し、後日本にも移入せられた解釋學でありますが、日本人は又本來獨自の解釋學的思想をもつて居ります。日本的解釋の第一段の作用は「わけがわかる」といふやうな言ひ方の

中に示されてゐます。即ち「分けられる」と「分け」が「分り」、「分けられぬもの」は「分け」が「分らぬ」とするのであります。初め單純であつた言語は、相互に複合せられることによつて語彙の數を益し、次第に複雜な思想の表現に堪へられるやうになります。從つて複合せられた言語の具體的な意味は、その言語を個々の成分に「分け」、各成分の意味を明らかにすることによつてのみ把捉せられるのであります。日本語の「わけ」といふ言葉はこの間の消息を簡明的確に示して居ります。併し言語の單なる分析は訓詁註釋の域を脱しません。日本人の解釋學はこの「分ける」といふ境地を越えて更に「あきらめる」といふ點に到達してゐます。「あきらめる」といふことは「明瞭にすること」であり、同時に又「斷念し否定すること」であります。明らかにすることは斷念し否定することであり、斷念し否定することによつて始めて事物の眞相が明瞭になるとするのであります。即ちこの「あきらめ」といふ語は、分析された結果について檢討を加へ、不純なものを否定し、純粹にして本質的なものだけを把捉するといふ日本人本來の認識法を示すものでありまして、短歌や俳句といふやうな文藝はかゝる態度の最も典型的な表現であります。

本書に於ては以上のやうな東洋的解釋學に反省を加へつゝ教材の本質的研究を試みました。即ち「語釋」及び「文の構成」は「解」であり、「理」であり「わけ」であります。それに對して「文意」及び「鑑賞批評」は「釋」であり「會」であり、「あきらめ」であります。從來の國語教育はこの「わけ」と「あきらめ」との二つの極端の間に動搖を續け、一方に偏向しては他方を閑却してその弱點を暴露して來ました。當來の國語教育は綿密にして正確な「わけ」の上に、鋭い「あきらめ」を加へるといふ方向に發展せられなければなりません。それは又國語教育によつて陶冶せらるべき日本人の理想的な生活態度でもあらうと思ひます。

第三の「備考」は次のやうに組織されてゐます。

(1) 指導研究

(2) 參考

「指導研究」に於ては實際指導の方法に關し編者の立場から一つの試案を提出しました。併し指導そのものは元來指導者獨自の人格的背景をもつて始めてその生命ある機能を發揮するものであります。教材の十分な研究の上に自然にして妥當な指導案を各自に工夫することが絶對に必要であると思はれます。從つて本書に於ても全く一つの試案を描いて見たに過ぎません。(2)「參考」としては教材研究上乃至指導上參考となるべき各種の資料を輯錄いたしました。即ち或は教材と原文との比較をなし、或は補充教材を附錄し或は又挿繪について説明いたしました。

本書は概ね以上の組織と方法とによつて編述いたしましたが、何分短時日の間に完成する必要がありましたので、或は思はぬ所に不備な點がありはせぬかと懸念に堪へません。幸に各位の御叱正を仰ぐと共に益〻研鑽をつみ、本書をして完璧たらしめたいと念じてゐる次第であります。

昭和十四年一月

著者識

醇正國語　教授參考書　卷三

目次

一　聖天子上にいます……濱口雄幸……一
二　明治神宮……北原白秋—花田比露思—太田水穗……三
三　日滿の契……林出賢次郎……三〇
四　滿蒙の四季……上田恭輔……三七
五　叡山……夏目漱石……七六
六　舊友……横光利一……八八
七　日本海の海戰……九九
八　興國の樅……内村鑑三……一三
九　誠の說……三浦梅園……一四八
一〇　歸り來て……古泉千樫—木下利玄—若山牧水……一五六
一一　燈影雜興……馬場孤蝶……一七〇

目次

一三 海邊の觀察……寺田寅彦……一九
一五 ひもの……荻原井泉水……一九四
一四 椰子の實……島崎藤村……二一一
一五 焚火……志賀直哉……二三
一六 心の小徑……金田一京助……二四五
一七 赤んぼ目……小林一茶……二六〇
一八 良夜……德富蘆花……二七六
一九 鐘の音……奥田正造……二八四
二〇 天德寺了伯……湯淺常山……二九一
二一 伊達政宗……新井白石……三〇三
二二 杉浦重剛翁……小笠原長生……三一九
二三 敬神の情……杉浦重剛……三三九

一　聖天子上にいます

一　解題

1　作者

濱口雄幸　ハマグチヲサチ　政治家。明治三年四月、高知縣長岡郡五臺山村に水口胤平の三子として生まれ、後濱口義立の養嗣子となつた。二十八年帝國大學法科大學政治學科を卒業して大藏省に入り、本省屬・山形縣收稅長・書記官兼參事官・松山稅務管理局長・熊本稅務管理局長・東京稅務監督局長・煙草專賣局書記官・煙草專賣局部長等を歷て、四十年專賣局長官、大正元年遞信次官、三年大藏次官に任ぜられた。四年衆議院議員に當選し、十三年大藏大臣に、十五年內務大臣に任ぜられ、昭和二年立憲民政黨の組織せられるに當つて第一次の總裁となつた。四年總理大臣の重任を拜し、行政整理を斷行して國庫の緊縮を圖り、またロンドン軍縮會議に參與して世界平和に貢獻したが、五年十一月陸軍大演習陪觀の爲西下の際、東京驛頭に於て佐鄕屋留雄に狙擊された。爾來東京帝國大學附屬病院に於て療養、翌年內閣總理大臣・民政黨總裁を辭してひたすらに回復に力め、一時小康を得たが、捗々しからず遂に八月に至つて歿した。享年六十二。

2　出典

濱口雄幸氏の遺稿「隨感錄」の一部が編纂されて、同名の題箋で三省堂から出版された。本文は同書に「聖天子上に在ます」と題されてゐる文章の殆ど全體である。只同書本文最後にある「此の一言を以て謹んで此の項を結ぶこととする」とある個所を省略しただけである。隨感錄は昭和四年七月組閣以來同六年八月始め容體の急變を見るに至るまで感興の湧

くまゝに自ら執筆し、或は口授筆記させたものである。

其の文中に「隨感錄とは讀んで字の如く感想の湧くに隨つて書き附けるのであるから、何等特別の目的はないが、題目を選ぶ時には主として修學時代の學生の精神修養上の參考の一端ともならうと思はれるものを選んで居る積りである。從つて極めて幼稚にして意義に乏しいものが多く、直接國家に貢獻する所は極めて尠少であらうと思ふ。尤も中には成學の士特に政治家の一讀を煩はし度いものもある。その處世上萬一の參考ともなれば非常な仕合せである」といはれて居り、自らその執筆の所以が明らかであらう。

3　主眼及び採擇の趣旨

「聖天子上にいます、大丈夫たるもの、當に大いに蹇々匪躬の誠を盡くすべし。生死安んぞ論ずるに足らんや」の感激を抱いて御國の爲に盡し得る事は日本男子たるものの無上の光榮であり、本懷とするところであらう。第二學年の初に當つてこの感激を作者と共に別ち、愈〻各自の目的に向つて邁進する意氣を生ぜしめることがこの課の主眼であり採擇の趣旨とするところである。

二　解釋

1　語釋

【なほ】（一）それでも、やはり。（二）まだ、まだ〳〵。（三）そのうへに、いよいよ。こゝは（二）

【微官】ビクワン　いやしい官職。微とはほのか、精妙、賤し、隱れ行く等の意がある。

【天顏】テンガン　天皇の御顏。龍顏。聖顏。

【咫尺】シセキ　咫は周制度の尺度の名目で長さ八寸のこと。中婦人の手長八寸之を咫といつたものである。我國上古アタと訓んで尺度の名とした。卽ち掌の幅の長さ。一說に大指と小指とを張つた間ともいふ。尺は十寸。咫尺とは卽ち距離の極めて近いことをいふ。

【賜宴】ンエン　天子が臣下に賜ふ宴會。

【優渥】イウアク　すぐれて手厚きこと。渥とはあつし。

【御宇】ギョウ　宇とは天地四方。御とは治む。御宇とは天皇の御治世の間。晉書に「握圖御宇」。

【大藏次官】オホクラジクワン　大藏省の事務次官。次官とは各省大臣の補助官府。他の補助官府は皆それぞれ各部局の事務を掌るに對し、次官のみは大臣の權限の全體について補助するを特徵とする。勅任一等官で各省にこれを置く。現行官制によればこのほか政務次官を置き全局補助殊に議會との交渉を掌らせるが故に區別することを要する。單に次官といふときは事務次官、卽ち政務官でなく事務官たる行政官吏を指す。

【在野】ザイヤ　任官せずして民間にある。「野」は「朝」（朝廷又は政府）に對する語にて民間をいふ。

【代議士】ダイギシ　衆議院議員を呼ぶ通俗的用語。外國語の Representateiv又は Deputé を譯し、且つ國民の選擧に依り國民の意見を代表して政治を議するの義からかく稱されるに至つた。

【御大典】ゴタイテン　大典に敬稱接頭語御をつけたもの。御卽位の大禮をさす。大典とは（一）重大なる典禮。（二）重大なる法典。（三）古の太宰府の職員。こゝは（一）の意。

【稀有】ケウ　まれにしかない。

【大藏大臣】オホクラダイジン　大藏省の職員。國務大臣であつてその職務はその實質からいへば、左の三種となる。

（イ）天皇を補弼する職務。天皇を補弼することは國務大臣の最も主要な任務である。この地位に於て國務大臣は各〻その主任事務に關する法律案、勅令案を起草しこれを閣議に提出し、部下の官吏の任免、進退その他すべて勅裁を要する事項について、或は案を具して閣議に提出し或は總理大臣を經てこれを上奏するのである。樞密院に諮詢せらるゝ事項については、その諮詢を奏請し、樞密院に出席して政府の意見を開陳し、樞密院の答申に對してはその採擇の可否を上奏するのである。既に勅裁を得たものであつて、詔勅として表示されるものにはこれに副署し、その他のものについては旨を奉じてこれを外に傳へ或はこれを宣する。（ロ）議會との交渉に關する職務。議會に對する關係に於ては、國務大臣は事情の許す限りなるべく本會議及び委員會に出席して政府の意見を述べまたは政府委員に命じてその意見を述べさせ、議會の質問に對してこれに答辯しまたは答辯を拒絕する時はその理由を開陳する義務を負ふのである。（ハ）行政官廳としての職務。行政官廳としては主任事務に關して閣

令または省令を發し、その權限に屬する行政行爲をなしまた部下を指揮監督する職責を有する。この地位に於ての職務は各省大臣（行政大臣）としての職務である。即ち天皇の委任によつて自ら國家の意志を決定してこれを表示する最高の行政官廳であるから、各省大臣が直接人民に對して行政行爲をなすことは少なく、各省大臣の職權は主として、下級官廳の指揮監督又は所部官吏の職務及び身分上の監督をなす監督權と、主任の事務について發する命令即ち副立法權と、主任の事務について行政處分その他の行政行爲をなす行政行爲の權とに分つ事が出來る。

大藏省は政府の財務を總轄し、會計、出納、租稅、國債、貨幣、預金、保管金、政府の所有又は保管に係る有價證券、銀行、信託、無盡及び有價證券割賦に關する事務を掌理し、北海道地方費、府縣市町村及び公共組合の財務を監督する任を有する。省內は大臣官房、主計局、主稅局、財理局、銀行局、預金部に分れ、職員は大臣、政務次官、次官、參與官、祕書官、各局長各々一人、書記官十一人、事務官十一人、銀行檢査官十八人、技師一人、技手十一人、屬百六十四人、銀行檢査官補五十一人、この外臨時職員として海外駐劄財務官一人、大藏事務官五人、主稅局事務官一人、財務書記四人等がある。この省の管轄に屬する官衙は、營繕管財局、造幣局、專賣局、稅關、稅務監督局、稅務署、釀造試驗所である。また大藏大臣の管理する委員會は關稅訴願審査委員會、國有財産調査會、預金部資金運用委員會、寺院境內地讓與審査會、中央諸官衙建築準備委員會、關稅調査委員會、特別融通審査會、特別融通捐失審査會等である。

【內務大臣】　ナイムダイジン　內務省の職員であり、大臣については前項を參照されたい。內務省は內務大臣及びその補助官府からなり、中央行政官署である。大臣官房の外に五局に分れてゐる。大臣官房では省內部の整理に關する事項の他、褒賞及び都市計畫に關する事務を管掌し、祕書、文書、會計、都市計畫の四課がある。神社局に於ては、神社、神官神職に關する事項を管掌し、總務考證の二課がある。地方局に於ては、選擧に關する事項府縣市町村、公共組合に關する事項、徵兵徵發に關する事項、北海道に關して他局の所管に屬しない事項等を管掌し、行政、財務、地方債の三課を置いてゐる。警保局に於ては、警察、圖書出版、著作權に關する事項を管掌し、警務、保安、高等、圖書の四課がある。土木局に於ては、公共の土木工事または工費補助に關する事項、その他軌道の特許監督、河川、道路、港灣、砂防、公有水面及び水流、土地收用に關する事項等を管掌し、河川、

道路、港灣、第一技術、第二技術の五課に分れてゐる。衞生局に於ては、公衆衞生、醫師、藥劑師、藥品、賣藥等に關する事項を管掌し　保險、豫防、防疫、醫務の四課がある。その他內務省には社會局が附屬してをり、また內務大臣は必要に應じて、土木出張所または土木試驗所を設けることが出來る。

【畏し】　カシコし　（一）恐れ多し。勿體なし。恐惶。（二）恐し。（三）かたじけなし。忝し。こゝは（一）

【御不例】　ゴフレイ　御病氣。類聚名物考、二百十七、痾部、二「不例、フレイ、思フニコノ詞、古ヘハ貴賤上下ノワカチナクイヘリ、今ハ大貴人ナラデハ申サヌコトトナレリ」

【攝政】　セツシヤウ　天皇に代つて萬機の政を攝行する職。古は別稱に攝籙、執政、執柄、殿下、冢宰、負扆等の語が用ひられた。神功皇后が應神天皇の御幼少中、皇太后として政を攝せられたのが最初で、ついで推古天皇の御代に皇太子厩戸皇子が攝政となられた。この後、中大兄皇子(天智)安倍皇女(元明)氷高皇女(元正)が攝政となられた傳があるが正史には見えてをらぬ。藤原良房が淸和天皇の貞觀八年に外祖父として機務を執りつゝあつた時に攝政の詔を拜して、人臣攝政の例を開いてから、天皇の御元服以前には臣下の中の重位の者を以て攝政と

することが慣例となつて江戸時代の末に及んだ。天皇御元服に及べば攝政は萬機の政を天皇に返し奉る。これを復辟といふ。しかし攝政は復辟後は概ね關白となつて萬機を統理することが慣例となつた。良房以來明治天皇の慶應三年に二條齊敬が罷めたまで、攝政を置かれたのは三十四代、攝政を任じたのは六十回、攝政に任ぜられた者は四十五人であつた。その中、朱雀天皇は御元服後に藤原忠平を攝政とされ、三條及び仁孝天皇は御病氣のために一時攝政を置かれたことは特例であつた。この時は政務儀式の中、或る部分を攝政に準じて行ふべき準攝政の詔を下された。攝政は天皇と血緣の關係を有し、外祖父、外祖父兄、叔父等に當るものであつたが、五攝家が成立してからは、血緣のない者もこの任に當るやうになつた。攝政は正官でなく、大臣が兼ねる慣例であつたが、後には單に攝政の任にある者も出るやうになつた。攝政を任ずるには詔書を以てし、または讓位の宣命によつて宣せられ、後にはこれに伴なつて牛車、氏長者、隨身兵仗の勅書を同時に下された。攝政は宣下によつて拜辭の上表を奉り、これに對して優詔を下して表を却下されることが例となつた。これを上表勅答の儀といつて、普通三回繰返された。いづれもその文は當代の碩學の起草になつたが近世に至つては次第にこの儀が廢絕した。

攝政は、天皇の御元服によつて復辟の上表を奉り、これに對して勅答の詔書を下し、關白と改められることが例であつた。このほか病氣、薨去、讓補等の特別の形式によつてその任が更まつた。院政時代には攝政の任命は太上天皇の詔によつて行はれることとなり、また幕府の政治時代には幕府の意志によつて任免が遂行されるやうになつた。鎌倉時代の中頃に五攝家が成立してからは、攝政はこの家に限られることとなつた。攝政は天皇に代つて政治を行ふを任とし、その職掌は第一に天皇に代つて御畫を加へ、覆奏文に可または聞の字を書し、また尊號詔書に天皇の御諱を書いた。第二には官奏を覽た。これは直廬に於て行つた。第三に敍位除目を行つた。これは直廬議所で行つた。近世には官位議定と稱せられ、重大な任務であつた。第四は太政官の文書內覽で、近世には攝政は別に內覽の宣下を蒙つた。時には攝政と竝んで內覽の置かれたこともあつたがこれは異例である。このほか大神宮奉幣使發遣の儀を行ひ、宸筆宣命を代書し、また禮服御覽の儀を行つた。攝政はその待遇として、牛車、隨身、兵仗、封戶、準三官の宣下を蒙り、また三公の上座に列せしめられた。明治元年に攝政を廢止されたが、二十二年に「皇室典範」が制定され、天皇の成年に達し給はぬ時に攝政を置き、また天皇が久しきに亘る故障によつて大政を親うし給ふこと能はざる時には、皇族會議及び樞密顧問の議を經てこれを置くことと定められ、その任は成年に達せられた皇太子、または皇太孫とし、若し皇太子、皇太孫がましまさざるか、または成年に達せられない時には、親王及び王、皇后、皇太后、大皇太后、內親王及び女王の順序によつて任じ、皇族男子の攝政に任ずる順序は、皇位繼承の順位に從ひ、女子もまたこれに準ぜしめ、但し皇族女子は配偶者あらざる方に限る等のことが定められた。この規定により大正十年に大正天皇御病のため、當時皇太子にましました今上天皇は攝政に任じ給うた。現制の攝政は「帝國憲法」に於て天皇の御名に於て大權を行はれ、ただ「憲法」及び「皇室典範」の變更を行ひ得ぬことが定められてゐる。

【所管事務】　ショカンジム　つかさどつてゐる事務。こゝでは內務大臣のあづかつてゐる事務である。大臣及び內務省の項參照。

【御陪食】　ゴバイショク　貴人の食事に相伴すること。「陪」は主たるものにつきしたがふ意。

【優渥】　イウアク　てあつい。なさけぶかい。「渥」は「厚」に同じ。

【令旨】　リヤウジ又はレイシ　東宮、三宮（大皇太后、皇太后、皇后）の命令を記した文書。後世、女院、親王、諸王などの皇族の命令をも言ふ。

【內閣組織の大命】　ナイカクソシキのタイメイ　內閣を組織せよとの陛下の御命令。內閣とは帝國の施政外交の中心であつて國務大臣を以て組織し、天皇の下に帝國議會及び樞密院と鼎立してゐる。即ち作者を總理大臣とする各省大臣の適任者を得て天皇に奏薦せよとの御命令である。即ち內閣は國務大臣の任命によつて成立する。その任命が天皇の親任によるものであることは勿論であるが、現今立憲政治の實際に於ては、內閣は議會の下院に多數を制する政黨の領袖を以て組織せしめるのが例であり、內閣組織の大命はその政黨の首領に降下するを原則とする。こゝでは民政黨總裁としての作者に內閣組織の大命が下つたのである。

【內閣の首班】　ナイカクのシュハン　內閣組織中の首席である總理大臣。「班」は「位」「席次の順序」をいふ。

【國務】　コクム　國家の政務。

【侍立】　ジリツ　側に侍り立つこと。

【天機】　テンキ　（一）造化の心。（二）自然の性狀。（三）深き祕密。（四）天子の御機嫌。こゝは（四）

【內奏】　ナイソウ　直々に內々で陛下に申上げること。

【御諚】　ゴヂヤウ　貴人又は上官の命令。諚は國字。變更し得ざる言の意から定と言とを合す。且つ定の音をとる。

【閱す】　ケミす　ケミは檢の音の轉。（一）習はして檢め見る。（二）糺さうとして見る。（三）經過す。こゝは（三）

【蝟集】　キシフ　蝟（ハリネズミ）の毛の集り生ぜる如く、事項の一時に多く起るに言ふ。

【氣餒う】　キウう　餒は魚肉の敗れ爛れる義。氣持が衰へて統一を失つた有樣。

【凜乎】　リンコ　（一）寒氣烈しい貌。（二）勢威の盛んな貌。こゝは（二）

【蹇々匪躬】　ケンケンヒキユウ　臣下が君のために心を苦しめて仕へるにいふ。蹇々は忠貞なる貌。匪躬とは躬の故にあらずの意で自らの利害を顧みないこと。

【安んぞ】　イヅクんぞ　どうしての意。副詞。

【熾烈】　シレツ　さかんにはげしいこと。

【洵に】　マコトに　洵は信に通ず。副詞。

【燮理】　セフリ　（一）理め治めるの意。（二）和げる。こゝは（一）

2　文の構成

第一節　初―一頁四行　明治天皇時代の感激。

一　聖天子上にいます

第二節　一頁五行―二頁五行　大正天皇時代の感激。
第三節　二頁六行―四頁七行　今上天皇陛下時代の感激。
第四節　四頁八行―終　日本國民としての作者の幸福と責任。

3　文　意

麗しき天顔を拜し優渥なる御諚を承る際の作者の恐懼感激、感奮興起の情を抒べ、日本國民の幸福を思ひ更に自らの幸福とその責任の重大さを述べた。そして相共に國民としての責任を果すべき覺悟を促したものである。

4　鑑賞批評

作者の人格そのものの如く着實にして飾らず、誠心誠意の泌んだ文章である。漢文調であることも作者らしい表現である。以下順次鑑賞を進めよう。

【遙かに天顔を拜し、優渥にして莊嚴なる勅語に耳を聳てて感激に胸を躍らすのであつた。】

明治大帝の天顔であり、御勅語である。感激に胸を躍らした四十代の作者が思はれる。

【余は如何なる場合に如何なることを申し上げ云々。】

愼しみ深く忠貞なる作者の心境が偲ばれる。この心あつてこそ深い感激があるのである。

【平素の修養足らざる爲か、殘念ながら時に或は氣餒る力弛む樣なことがないでもなかつた。】

一國の首相として不健康となり、しかも解決の容易ならぬ國務が蝟集してはどんなにか意氣の銷沈する事もあるだらうかは察しても餘りがある。代々の首相が週末旅行の必要性を說いたり、殆ど多くの人達が病にをかされるのを見ても如何に劇務であるかは想像されるのである。しかも「平素の修養足らざる爲か」と反省の言葉を加へてゐる點、修養と努力とを以つて立つてゐた濱口氏その人の平常を思はせるものがある。

【精神凜乎として勇氣百倍云々。】

忠貞なる總理大臣として氣餒る力弛んだ際の感激である。麗しき天顔を拜し優渥なる御諚を承る事によつてこの感激があるのである。次の句「聖天子上にいます」の意味がそこに感ぜられるであらう。

【聖天子上にいます云々。】

生死を顧みずひたすらに誠を盡す忠義一徹の思ひが大いなる感激と共に滾り叫ばれた句である。力强い漢文調がその効果を十二分に發揮してゐる。

【此の君の御爲には眞に生命を擲つて云々。】

誠實を以つて貫いた氏の覺悟として、その眞實性が胸をうつ。

【相共に一致協力して。】

作者の提案に對して生徒の一人々々が心から頷いてもらひたい言葉である。

三　備　考

1　指導研究

作者自身の體驗にふれた言葉であるから一言一句血と肉とを盛つた內容である。この點に觸れさせる事によつて氏の感激を如實に感じ氏の覺悟を覺悟とする樣指導せねばならぬ。この爲には氏の地位や職責を明確に知り人となりを讀取らせ、尙補充として參考文を讀みきかせる事が必要であらう。

2　參　考

氏が平凡人として、修養と努力によつてその地位を築いた事情は左の文によつて明にされる。隨感錄「余と趣味道樂」

の項に

「第一余は生來極めて平凡な人間である。唯幸にして余は余自身の誠に平凡な人間であることをよく承知して居つた。平凡な人間が平凡なことをして居つたのでは此の世に於て平凡以下の事しか爲し得ぬこと極めて明瞭である。修養と努力とは、自覺したる平凡人の全生活であらねばならぬ。故に余は日常生活の實際に於て心の閑暇を持つことが少かつた。學生生活、官吏生活、政治家生活、の全面を通じて自らその本分を信ずるところに向つて――自分から言ふと可笑しいかも知れぬが――全力を傾注した積りである。余としては殆ど餘事を顧みるだけの心の餘裕がなかつたのである。而してその努力の效果は如何であつたかといふことは別問題であるが兎も角も余の今日あるは此の努力の御蔭であると信ずる。」又

隨感錄最後に「無題」と題して感想がのせられてゐる。氏の人物の一端を知る事が出來よう。

「余は已に一たび死線を超えた。此の上の死生は只天命の儘である。以前の樣に生に對する執着もなければ死に對する恐怖も淡い。若し死ぬるものならば萬事休するまでである。

若し此の上なほ生くるものならば、そは生の意義に從つて、生きただけの活動を爲すべきである。其の活動とは、前數項に述べた通り、心ゆくまで君國に對する最後の御勤めを果して、然る後に笑つて餘命を樂しんで天命を待つことである。

笑つて餘命を樂しんで天命を待つとは、言葉を以て說明することは出來ぬが、要は萬里の淸風に浴し、明月簾花の境地に坐したいといふ希望である。唯これのみである。他に何等の欲望はない。併し事は決して容易ではない。主として今後の修養に俟たなければならぬ問題である。」

尙病院生活百五十日と題された文には次の文がある。

「萬事は心靜かに健康の恢復を待つべきである。

雲冉々水漫々明月簾花君自知。

櫻花の好時節たる四月の上旬は余が二回の手術を受けて入院中最も苦しかつた時であつた。其の時に口吟んだ駄句が一寸新聞に出たことがあつた。

紅葉より櫻につゞく嵐かな

之は句になつて居るまいが余の心情を率直に語つたものである。ところが櫻花の節も新綠の候も梅雨の空も既に過去つて炎暑燒くが如き時となつたけれども、余の傷は未だに全癒しない。恐くは此の秋までかゝるであらうと思はれる。今から全癒した時の豫感を十七文字に言ひ現はして見れば

二年の病も癒えて今日の月

然し天はこの至誠の人に生命をかさず、九ケ月餘に亘る忍苦の養生の末、八月二十六日六十二歲で卒然として他界した悲しんでも餘りがある。

二　明治神宮

一　解題

1　作者

北原白秋　キタハラハクシウ　本名隆吉。明治十八年一月二十五日福岡縣山門郡沖端村（柳河の近傍）に生まれた。父は酒造を本業とした。中學傳習館に入り、十九歳卒業前に退學。同年四月上京、早稲田大學英文科豫科入學。同級に若山牧水、土岐善麿が居た。十五歳の時から詩歌をつくり、それらを「文庫」に投じてゐたが、三十九年二十二歳で新詩社に入り「明星」に詩作を發表した。以來新體詩に精進し、明星末期の近代主義とエキゾチズムの融合により詩集「邪宗門」「おもひ出」等を出し詩壇に一期を劃し、早くも詩名を謳はれた。このあたりから歌境にも獨自のものがある。明治四十二年新詩社を連袂脱退し、木下杢太郎と「屋上庭園」創刊。大正二年一月第一歌集「桐の花」出版。大正四年四月弟鐵雄と阿蘭陀書房を創め、文藝雜誌「ARS」創刊。八月第二歌集「雲母集」出版。六、七、八年には葛飾眞間、小田原等に住み「雀の生活」を書き、童謡新興に力め、小説をものし歌作はやゝ少なかつた。八年小田原に木兎の家成る。九年二度目の妻と別れた。十年八月第三歌集「雀の卵」出版。十一年「詩と音樂」を創刊し、民謡、歌作汎濫。十三年四月古泉千樫と雜誌「日光」創刊。夕暮、迢空、純、善麿、順、庄亮、利玄其他聚る。十五年十一月詩の雜誌「近代風景」創刊。（昭和三年九月廢刊）昭和四年二月歌集「篁」を出版。アルスより「白秋全集」全十八卷刊行。尚改造社短歌選集「花樫」現代短歌全集中の「北原白秋集」等の刊行がある。「白南風」は昭和十一年七月發行であり、單行新作集としては「雀の卵」以來約十三年ぶりの刊行である。現在世田谷區成城に住み、短歌雜誌「多磨」を刊行。全國的に呼びかけてゐる。その著書は多數に上つてゐるが、前述のものの他に、詩集「觀相の秋」「水墨集」民謡集「日本の笛」「白秋小唄集」「あしの葉」童謡「祭の笛」「白秋童謡集」散文集「洗心雜話」「季節の窓」等がある。

花田比露思　ハナダヒロシ　本名花田大五郎。大をヒロシと讀むところから、比露思と號した。明治十五年福岡縣に生れ、中學は久留米明善校に學んだ。明治三十八年十七歳ではじめて歌をよむ。三十三年熊本高等學校に入學。この前後に強度の神經衰弱にかゝつたが、佐藤一齋の言志四錄によつて敬の眞意を會得し、三十六年四月某日豁然として廣大無邊の天地に接することが出來たといふ。この年高等學校を卒業すると米國に遊び、港桑に半年、アラスカに半年を過し、翌年十月唐詩選、山家集を抱いて歸國した。翌年京大法科に入學、九月から十月にかけて、子規を學びはじめ、以來萬葉に心をひそめた。著書には、大正四年から十三年にかけての歌に關する考察及び感謝、告白をのせた「歌についての考察」（紅玉堂發行大正十三年四月）及び考察に對する實行を示すものとして明治四十年以來大正九年までの長歌、短歌、旋頭歌、詩等をのせた歌集「ざんげ」（紅玉堂發行、大正九年）がある。尚あけび叢書第一卷は「萬葉集私解」と題した氏の研究である（昭和三年十月）。現在大阪商科大學教授である。

太田水穂　オホタミヅホ　本名貞一。明治九年十二月九日、長野縣東筑摩郡原新田村（廣丘村）に太田億五郎三男として出生。幼少父に大學、孝經、三字教の素讀を受け、小學校卒業後（島木赤彦）等がゐた。十歳の頃父から百人一首を教へられ、十七歳「日本の少年」に和歌を投書したりしたことがあるが、師範在學中、萬葉、古今、源氏物語等に親しみ「文學界」「帝國文學」「めざまし草」等を讀み、詩作投書し、また四年生の時には作歌をも多く試みた。三十一年同校を卒業、東筑摩郡川邊尋常高等小學校に赴任。翌年和田村尋常高等小學校に轉じ、三十四年同校長となつた。この間良寛和歌集、桂園一枝、賀茂翁歌集を耽讀。三十三年九月には窪田空穗、矢野

奇偶等と「この花會」を組織し、又職員と萬葉集研究會を開きなどして、新調短歌を作つた。三十五年三月東京より詩歌集「つゆ草」出版。三十六年松本高等女學校に轉任。この頃より倫理、哲學の書を讀んだ。三十八年久保田柿人（赤彦）との合著「山上湖上」出版。文藝同人會を組織し、翌年信濃毎日新聞の歌壇選者となり、更に翌年は日曜附錄に文藝評論を執筆した。四十一年（卅三歳）松本高等女學校を辭して上京。小說評論隨筆等を發表し、又私立日本齒科醫學校（後、專門學校）教授となり、倫理を講じた。四十五年四月「新譯伊勢物語」出版。大正二年牧水の第二期「創作」再刊に加はり、大正四年七月雜誌「潮音」を創刊した。萬葉・記紀の歌を講じ、芭蕉を耽讀。大正九年十月より幸田露伴、阿部次郎、沼波瓊音等と芭蕉俳句研究會を開いた。十年三月「短歌立言」出版。十一年四月歌集「雲鳥」出版。九月「紀記歌集講義」出版。十二月一日、研究會同人との共著「芭蕉俳句研究」出版。十三年七月「續芭蕉俳句研究」十五年四月「芭蕉俳諧の根本問題」、六月「續々芭蕉俳句研究」、十一月「和歌俳諧の諸問題」出版。昭和二年四月歌集「冬柴」昭和五年十一月「芭蕉連句の根本解說」昭和八年歌集「鵜・鷺」等を出版。

第一歌集「つゆ草」の歌は、古雅靜寂な自然諷詠で、萬葉集の手法である。「山上湖上」に至つてやゝその風調が亂れて、明星派風の影響を見る事が出事る。上京後は小說や評論を書き「創作」に加はつたりしたが、「潮音」を創刊し主宰するに至つて、人としての良寛に私淑し、暗示を說き象徵主義を提唱した。最近の歌風は更に一歩出でて、芭蕉の不易流行の說の流行相を重んじ現代精神現代相を詠み、動的美、機構美をうたひあげようとしてゐる。最近の潮音選集「荒海」にそれをみることが出來る。水穗は作歌そのものよりも評論家としての面に重んずべきものがあるが、大正以後アララギの寫生主義に對し、象徵道を說き、芭蕉の連句の味を短歌に移入し、一旗幟をかゝげたところに、歌人としての面目がある。

2　出典

白秋氏のものは昭和十一年七月アルス發行の白秋單行新作集「白南風」からとる。この書は白秋第六歌集である。第三歌集「雀の卵」の後に出版されたものであるが、第四第五の未整理歌集がエアーポケットとしてのこされてゐるのである。「天王寺墓畔吟」「綠ヶ丘新唱」「世田谷風塵抄」「砧村雜唱」の四部に分れてゐるが、こゝに採錄されてゐる四首は「砧村雜唱」中の初にのせられた「白南風」中の最初のものである。砧村に移つたのが昭和六年であるから、六年から八年までの間に作られたものである。

花田比露思の歌は、現代日本文學全集の中、現代短歌集に氏の自選した中より採つた。

太田水穗の歌は、昭和八年十二月出版の「鵜・鷺」の中より採つた。これは昭和二年より昭和八年までの水穗の作品を自選した集であつて、その中、昭和五年帝都震災復興御巡幸と題する八首の中より拔いたものである。

3　主眼及び採擇の趣旨

白秋の明治神宮初夏の叙景、花田比露思の明治神宮遷座式についての吟詠、太田水穗の今上天皇の御巡幸を仰ぎまつつての感吟を選んで、前課を受けて、後の課を起す藝術的教材をこゝに配した。

白秋の歌は若葉の候の叙景、內にこもつた萬象の力が今かゞやかしくも展開される時季である。しかも處は明治大帝の神靈の靜まります淸淨の域、その深い寫生によつて表現された白秋氏の歌境を通して、自然莊嚴の祕密に參ぜしめ、その幽玄なる風韻を味はしめようとする。

白秋氏の作品は、これ以外に、第一卷に新月（詩）第四卷に落葉松（詩）第八卷に浪千鳥（長歌）の三篇が採られてゐるが、本課は「新月」の後をうけて、氏の歌境をしらしむべき唯一の教材である。又和歌教材としては既出の「明治天皇御製」啄木の「ふるさとの歌」と比較し、その特異な風格を味はしむべきである。

花田比露思の歌は明治大帝の大御靈を神として齋きまつる嚴かにも尊い思ひの端的な表現である。卽ちこの歌を眞に味はふ事によつて神それ自身に對する尊崇と敬虔な思ひとを養ふ事が出來るであらう。

太田水穗の歌は國民を治し給ふ大君の尊い御姿と、これに對して持つ國民の純眞な尊敬と親愛の情を表現したものである。こゝに君臣の間に流れる我が國體獨特の美しい純情をうけとらせ、自らの情の世界のものとして生かせたいと思ふ。前課に於て「聖天子上にいます」心強い國民的感情を受取つた後に、大帝の大御前に額づく思ひで神として齋きまつつてゐる尊さを思ひ、或は神域の莊嚴を感得させ或は又君臣の間の純情を酌みとらせたいのである。特に藝術的表現をとほして國民的情操を高めようとするところに配列上の用意がある。

二　解　釋

若葉樫しきりかがよひ午ちかし明治神宮の春蟬のこゑ

【樫】カシ　字は堅木の合。材が堅いので堅木の名がある。櫧、橿とも書く。赤樫、白樫の二種がある。赤樫はぼう樫ともいひ高さ數丈、葉の形は楕圓で厚く粗い鋸齒がある。互生し冬枯れず、春二寸ばかりの穗を生じて黃白の花を開く。栗の花の痩せたる如し。實の形小さく圓く尖り熟すれば黃褐色になる。苦くて食せず。材の色赤黑し。白樫は葉狹く小さい。椎の如く鋸齒あり。實はあかがしよりやゝ小さい。苦みなく食することが出來る。材の色稍ゝ白く最も堅い。

【しきり】(一)しきること。間を隔てるもの。(二)商家で帳面の勘定を締切ること。(三)仕切金の略。(四)しきりにの略(副詞)こゝは(四)の意。樫のし音としきりのし音との響のつながりによつて、堅さを持つた「しきり」の音がさほどのぎこちなさを持たぬのみか、一句と二句との間の結びの美しさをもたらしてゐる。

【かがよひ】自動四、かがは、赫(かが)、よふは搖ぐ。かがやく、きらめく也。かがやくとかゞよふとでは、後者に柔かさ溫さの音感のある事に注意。

【明治神宮】東京市澁谷區代々木外輪町に鎭座。明治天皇、昭憲皇太后を奉祀。官幣大社。國民の赤誠により、大正四年秋着工、九年十一月御鎭座大祭をあげられた。素木造檜皮葺の流造、植込の樹木は松、樫、椎、榊、犬つげなどが主なもので、大凡二百餘種、日本にある樹木種類でこゝにないものはないといつてもいゝ。

【春蟬】半翅目、セミ科の一種。體長三糎內外。身翅共に黑色。全面に金灰色の鱗毛がある。五月上旬乃至中旬から松林でなき初める。本州・四國・九州に亘つて生存する。

樫の若葉がしきりにかがやいて初夏らしい光を見せてゐる午ぢかい時だ。この神々しい明治神宮にいち早く鳴きそめた春蟬の聲がひゞく。

鑑賞批評

この歌の中心境地は萬象の生氣の橫溢する尊さである。すべてものは極點に於てはある衰へを示すものである。然るにこゝにあつかはれてゐるものは「若葉樫のしきりなるかがよひ」と「午ちかし」といふ時である。更に「春蟬の聲」である。そこに些の衰へを見せぬ英氣溢れる頂點がある。眞夏の一歩前に樫の若葉がかがようて居るのである。眞夏などは「かゞやく」であらう。「かゞよふ」そこにゆとりがある。ひそんだ力がある。その光は寂光と對應的な位置を保つて、無限大の前途を持ちつゝある。若さのやはらぎがある。しかもそれは正午に近い。正午でもなければ早朝でもない。正午直前なのである。萬物のかゞやきの頂點の一歩前である。そこにも「かゞよふ」といふ語を選んだ意味があると思ふ。かうした前途ある力に充ちた「かゞよひ」の中にあつて春蟬が鳴くのである。早くも孟夏來を豫告するかのごとくに鳴くのである。國民崇敬の的であり、信念の表徵とも申すべき明治神宮を中心として、現代日本の姿を表徵したかとも思はれる一首である。

第一句と第二句とが「し」音でつながり、二句三句がイ韻でつながれ三句の終まで些のゆるみも見せずに明瞭に「午ちかし」といひ切つた手法は、その內容の緊張感をそのまゝリズムに盛つてゐると思はれる。尙各句の終韻がイ韻に統一されてゐることもこの緊密感をもたらすに力がある。そしてゆつたりとした八音の第四句が續き第五句の名詞止を以つてい

ひ据ゑた點、ゆたけさと力強さとを充分に表現する歌調である。

雨は今朝ふりながしけむ若葉檀や神苑の森は塵もとどめず

【ふりながし】雨が降つて神苑の塵をながすのである。
【けむ】過去推量の助動詞。
【若葉檀】ワカバカシ　若葉のみづ〳〵しい檀の意。
【や】詠嘆の助詞。
【神苑】支那に於ける文字の用法上よりいふと、苑は囿と同じく塀のない廣いそので、中に禽獸草木を蕃育し、游觀射獵の場所とするもの。園は果を植うるその、又は庭先の小さなそのをいふ。神苑とは神のまします廣いその の意。

雨が今朝この神苑の朝清めをしたのであらう。若葉檀が瑞々しい色を見せて、廣い神苑一帶塵をもとゞめない清々しさである。

鑑賞批評

雨後の若葉檀のあまりの清々しさに、神苑の森全體に對して塵をもとゞめぬ淨まりを感じたのである。第二句で切つた倒置法を用ひて居るが、この句切までは「雨は」のはの強さが心を惹くだけですらりと平坦に言ひ切つてゐる。第三句になると六音で、しかも「や」の提示助詞を用ひ強い感動を表現してゐる。雨は洗はれた若葉檀を明瞭に生々と惹き出して、廣大な神苑の森全體が潔齋をすませたやうな清淨さにゐることを表現した。第三句の強さに對して第五句の稍々誇張的にも思へる程の表現がよく平衡を保つてゐる。最後の斷定的否定助動詞「ず」も力強くひゞいてゐる。

赤松の木群しづけきここの宮椎の若葉の時いたりけり

【赤松】アカマツ　雌松。松杉科、松屬の常綠喬木。天然の分布區域は九州の南端から四國、本州の北端に及び、朝鮮にも自生する。陽燥地に自生し、樹皮は赤褐色で厚い。土砂扞止林、防風林、風致林、松蕈採集林等の目的で植ゑられ、日本式庭園、公園の主木、また盆栽用になる。內苑敷地內の赤松は鎭座以前からあつた赤松の喬木を保存されたものである。
【木群】コムラ　木の群れ立つてゐること。又そのところ　こゝでは前者、卽ち群れ立つてゐる木である。
【椎】シヒ　喬木、葉は樫に似て狹く長く薄く硬い。面は深綠、背は褐色で光り、冬枯れず。花は葉の間に生じ尾狀の穗で淡黃である。子をしひのみといひ樫の子より小さく外に粗皮がある。全く包んでゐて樫の子の椀形のものとは違つてゐる。炒つて食用とする。
【若葉の時】「の」は領格。若葉が盛に芽ぶく時の意。
【時いたる】時とは(一)時間。(二)一晝夜の間を區分した稱。(三)年代、時代。(四)季節、時季。(五)折り、ころ、時分。(六)期限、時期。こゝでは(五)の意。
【けり】詠嘆の助動詞。

赤松の木群しづけきここの宮椎の若葉の時いたりけり

傍には椎の若葉がみづみづしい綠をみなぎらせて、その時を得た姿が心にしむ。嚴かな神宮の宮居の前である。

鑑賞批評

第一首に見たと同樣な內にこもる力を表現し乍ら、嚴肅にひそまつた相である。靜の力である。第三句までに肅然とした靜けさが見え、第四、第五句に力の漲りを感ずる。亭々として天を摩するかに見える巨木赤松の群立。それは大地につつたつて天空高く大帝の御功績を標徵するかの如くである。虛なる靜けさではない。無音の中に偉大なるものを象徵する靜けさである。その靜けさくも尊い雰圍氣の中に椎の若葉が若葉としての力を一杯に漲らせてゐるのである。「ここの宮」と第三句で中止してしづけき宮居を髣髴させ、再び第四句第五句と續けて「いたりけり」と詠嘆の助動詞「けり」で結んだ重々しさ、すべて巧みである。

又「赤松の」「ここの宮」「椎の若葉」にあらはれた「の」のリズム「いたりけり」の流音の響きによる若々しい、なりひ

びく如き感觸等音調の妙を得てゐる。

眼は向ふ芝生なだりの日のおもて寶物殿にうかぶ白雲

【なだり】傾斜の意味の動詞としては下二。名詞としては「なだれ」である。こゝに「なだり」とあるのは音調上特に選んだものと思はれる。

【日のおもて】太陽の直射面。

【寶物殿】西參道の東北、北池の北側にある。祭神御在世中の御調度や、御由緒の品々を陳列して、公衆に拜觀させる。耐震耐火、校倉風大床流造の殿舍。屋根は褐色の藥掛瓦葺。

一面に陽光のあふれてゐる芝生の傾斜に向つた眼路は又寶物殿上に浮ぶ初夏の白雲にむけられた。心も晴れる初夏の光景である。

鑑賞批評

寶物殿を東北の彼方に見て、芝生を右に眺める西參道上に作者はゐよう。第一句の「は」の強さと「向ふ」の語感は、あの廣々とした光景に急に接した時の視野の動きを動的に表現してゐる。先づ眼に入るものは、ひろびろとした傾斜の芝生、それが隈なく陽光をあびて萌えてゐる。「芝生なだりの日のおもて」の四、五句は、この光景を充分に寫生してゐる。視野は動いて寶物殿に移る。美しい曲線を持つた黒みがかつた褐色の屋根、その堂々とした大屋根の上に、夏らしい白雲が浮んでゐる。空は一面の紺碧である。滿面に光りをあびた芝生に讃歎した作者は、更に寶物殿上に浮ぶ白雲を讃美してゐるのである。先づ第一句が、一首をリードしてゐる。そして第二、三句と、第四、五句とは、それ〴〵場面を別々に表現しながら、第一句によつて一つの大きな風景にまとめられてゐるのである。空間のひろがり、色彩の對照が表現の主眼である。

ひさかたの天の御靈を乞ひ降し代々木の宮に齋ひ祀るも

【齋ひ祀るも】「齋ひ」は(一)いみ愼むこと。いみ。(二)神靈をかしづきまもること。こゝは(二)。「祀る」は定つたまつり。

【ひさかたの】(一)天の枕詞。(二)轉じて雨、月、星、雲などすべて天上のものにも用ひる。(三)又轉じて日の光、月の都などを略して光、都にも用ひ、光より轉じては鏡などにも用ひる。こゝは(一)

【天の御靈】「天」とは(一)そら、こくう、おほぞら。(二)日の神のゐるところ、神仙・魔王などのすむところ。こゝは(二)。天にまします明治天皇の御靈。

【乞ひ降し】お願ひしてお降りいたゞき。

【代々木の宮】代々木にある神殿、即ち明治神宮である。こゝは遷座式であるからこの字を用ひたものであらう。

神の御國にまします明治大帝の大御靈の御降臨を願ひ、こゝ代々木の宮居に御祀り申す。かたじけなき極みである。

鑑賞批評

この歌には「大正九年十一月一日明治神宮遷座式」と詞書がついてゐる。明治神宮は大正九年秋に至り社殿及び附屬建造物が殆ど成り、十月二十八日清祓式並に新殿祭翌二十九日御飾式が行はれ、十一月一日即ちこの歌のよまれた日には未曾有の盛大なる御鎭座の大祭を擧げさせられたのである。

「ひさかたの天の御靈」といふ大きな嚴かな表現が第四句第五句と相まつて大どかに、しかも張つて敬虔な思ひに充ちた表現をつくりあげてゐる。「ひさかたの」といふ枕詞と、感動の助詞「も」は、最初と最終にあつて前者は嚴かさと大きさと、後者は咏嘆の力を以て一首をひきしめてゐる。

あきらけき御靈は永遠に國民の慕ひ敬ふ神にまします

【あきらけき】（一）鮮明な。（二）くもりなき。（三）光さやかな。こゝは（三）

明德さやかにまします大帝の御靈は、我等國民が永遠にお慕ひし、お敬ひする神でゐらせられるのである。

鑑賞批評

第四句第五句に異常な力を感ずる。まことに神でゐらせられる、神で。といつた樣な表現である。こゝに「神」といふ語に特別な力がこめられてゐると思はれるのである。うつし身としてこの世にましました天皇（すめらみこと）ながら、神として今は慕ひ敬ひ奉るのである。作者は「神」に對する信仰の所有者である（參考欄參照）點を思ひ合せる時、この神の力が一層强くひゞいて來るのである。この歌も前の歌と同樣直敍體で平坦にいひ据ゑた點に虔ましい感歎がこめられてゐると思ふ。

大君の御幸をみむといい群れたる八十氏人はかすみのなかに

【大君】オホキミ　（一）天皇、帝王。（二）親王及び諸王、後には專ら諸王の稱。こゝは（一）。こゝでは今上天皇をさし奉つてゐる。

【御幸（みゆき）】行幸の意。主上の御他行。臨幸、臨御とも申す。上皇、法皇、女院の御他行もみゆきであるが、後には御幸（みゆき）と書き分けて音讀する。

【い群れたる】いは動詞に添へて語調を整へるに用ひる接頭語。古語である。「い這ひもとほる」「い行く」「い向かふ」等。

天皇（すめらみこと）のいでましを拜さうと無數の、さまざまのすがたの國民たちが群つてゐる。そこには春霞がこめて、打けぶる中にこの人々は集つてゐるのである。

【八十氏人】ヤソウヂビト　多くの姓の人々。八十氏とは多くの氏族。八十氏人は多くの氏族に屬する人々。こゝは勿論、行幸を拜し奉らうとして群れてゐる國民をさしてゐる。

鑑賞批評

「い群れたる」の接頭語がよくきいてゐる。それと「八十氏人」とは集つてゐる人々がおほみたからであること、樣々の階級に屬する人々である事と、その數の多さを表現してゐる。しかも霞のなかにこめられてゐる事から、い群れた國民たちの數の多さが重ねて現されて居り、更に和（なご）やかささへ加つて君民融和の情景が描き出されてゐる。只「みむ」がすこし粗末すぎはせぬか。

み車のタイヤの滑りやはらかう音もなくしもすぐるたふとさ

【タイヤ】走行する車輪の外周にはめられたゴム輪又は金屬製の車輪。こゝは自動車御鹵簿であるから、御召自動車のタイヤをさす。

【しも】しも、もも强指示の助詞。

自動車鹵簿の行幸である。嚴肅な御警衛の中を、前驅のオートバイの過ぎた後の靜けさの中を、御車のタイヤの滑りもやはらかう音も立てず、御通過遊ばす。をろがんでゐる作者の心にたふとい思ひが充ちあふれる。

鑑賞批評

「滑り」といひ「やはらかう」といひ、タイヤの動きを感覺的にとらへた表現である。特に音使うがよくきいてゐる。第四句の二つのもはこの滑らかな感覺によく調和した音感である。大君を敬ひ尊ぶ思ひが、その御車のタイヤの滑りの靜けさの中に感ぜられる思ひは、我が國民性の中にのみ見出される事ではなからうか。

み立たしの御眼下（おんまなした）にささやけき民のくらしもみそなはすらむ

【み立たし】みは敬意接頭語。「立たし」はサ行四段敬語動詞の連用形が名詞化したもの。こゝは、帝都復興を御覽遊ばすために、設けられた高樓の御座所である。その御座所に御立ち遊ばされたことを、「御たゝし」といつたも

【ささやけき】　形容詞連體形。極く小さなの意。「くらし」にかゝる。

の。

【御眼下】　オンマナシタと傍訓がつけられてゐる。「マ」は目、「ナ」は「の」。御眼の下にの意である。

お立ち遊ばしていらせられるその御眼下に展がつてゐる國民たちの小さな生活の有様をも、御覽遊ばす事であらう。もつたいない有難い事である。

鑑賞批評

「み立たし」「御眼下」「みそなはす」の敬語はあふれる感謝感激の思ひを物語つてゐてくれる。我が國語の敬語のよさはこんなところに力を持つ。充分に味はせたいものである。「ささやけき民のくらしも」には虔虚な思ひがもられてゐる。國民としての純眞な思ひに充ちた歌である。

以上三首とも比露思の歌同様直叙體で慎しみの極まりに溢れた尊敬と感謝が充ちてゐる歌である。義は君臣の如く情は父子の如き國體の美しさを感情によつてしる事が出來れば幸である。

三　備　考

1　指導研究

卷一に於ける明治天皇の御製に於ては、帝王としての叡慮と、重々とした御歌調とを伺ひ奉つた。啄木の歌に於ては自然主義風潮時代の現實苦惱と、ロマンチツクな咏嘆と、社會意識的な思想とを、口語調を以つて詠出した。啄木よりも一才の年長であり、しかも同じ新詩社出身である白秋氏が到達した境地は、自然の深い觀照による莊嚴祕密への參入である。しかも基督教的宗教意識から佛教的なものへ移り、次いで神道的思想にうつらうとする思想的背景を考へることによつて、その境は一層明確になるであらう。尚、卷一、十一の補材、結城哀草果の歌、同四、及び十六の若山牧水の歌、卷二、十三の補材伊藤左千夫の歌等との比較によつて、一層白秋的なる冴えわたるもの、つゝしみのきはまり、嚴肅なるもの、かゞやくもの、力づよきもの、幽玄なるものを浮び上らせたい。この事は卷一同氏の詩「新月」を思ひ出させる事によつて、一層明瞭になるであらう。尚、卷二の二「明治神宮」、卷一の二十四「清淨の國」は豫備知識として利用すべきである。

音調や語調のリズムや、韻、匂などが、その表現しようとする內容と如何に緊密であるかは、特に注意する必要があらう。「脊骨もひしがれる思がする」と推敲の苦をのべてゐる作者を思ふと、一語一句といへどもゆるがせに出來ないのである。

花田比露思氏も亦、歌は神への捧げものであるといふ敬虔に充ちた作家である事を思つて指導したい。

太田水穗の歌は、昭和五年の行幸を拜して、大君の御惠みの有難さと、心を一にして帝都復興につくした甲斐あつて、舊觀以上に立派に出現した帝都の偉觀を大君の御覽に供へまつる民草の喜びを、感極つた中から靜かに詠出した作であつて、こゝに採つた歌三首の中には、大君の行幸に晴れの感激をおぼえしめる心情が强くにじみ出てゐるやうに思ふ。但し、この三首は、特に、帝都復興行幸といふ背景的な事實を知らなくとも、充分に日本國民たる者の心を打つものであり、いづく、如何なる時であつても、大君のみゆきをし拜するならば、何人にもこの感懷は湧き起ると思はれるものである。この點で、水穗氏のこの作は、いはば我が國民全體の何人もが感じる有難さを、代辯した作品といひ得よう。歌も、直叙的に、すつきりと詠ひ下され、平明簡直である點、かうした國民的感激をもるにふさはしいと思ふ。

2　參　考

（イ）　白秋氏の歌風

二　明　治　神　宮

「花柽」の卷末に「私は十五歳の交より歌作に從つた。桐の花に至るまでにその歌風に二度の轉換期を持つ」と言つてゐるが、こゝには「桐の花」以後の氏の短歌の展開を跡づけて、白南風の歌調を把握する參考としよう。即ち「桐の花」「雲母集」「雀の卵」「白南風」の四つの歌集によつて發展段階を示してゐる。「桐の花」(自明治四十二年至大正元年)が「佛蘭西印象派の手觸に、象徴派の香韻を加へ、近代都會情調と官能とを清新に」歌ひ出した事は、改造社の現代短歌全集、北原白秋篇に氏自ら書いてゐるところである。即ち新しい感覺が眼につく。異國情調に對する憧憬と、古い江戸を偲ぶ哀愁と、新しい世界への驚きと、若き官能による苦惱とが、典雅なリズムによつて奏でられる。「雲母集」(自大正二年至大正四年)に至つては口語脈、童謡風の韻律が加はり、力と光と動との藝術を粗野奔放に表現した。第三歌集「雀の卵三部集」(輪廻三抄、雀の卵、葛飾閑吟集)(自大正四年至大正十年)によると、異國情調は次第に影を沒し、佛陀の法悦ともいふべき世界が展開される。

「眼に觸るゝもの光り輝き、耳に聽くもの喜悦の聲ならざるはない。渺茫たる海洋に愛慕の念を注ぎ、無窮の天地に感涙を流す。眞實にして謙讓、然して現世の肉體の力にすら喜悦淨土を見出したのである。爆發的大膽なる詠風は此期の一大特色をなしてゐる。」とは村野次郎氏が短歌講座第三卷北原白秋の項にのべてゐるところである。平靜に沈靜し、透徹し、東洋的な閑寂境に踏入り、自然對象に深く參入し、象徴に到達してゐるのである。この時代の後期、葛飾閑吟集に至つては、芭蕉の「さび」とも言ふべき境地に到達した。

第四は「白南風」である。(自大正十五年至昭和八年)これは作者の東京轉住以來の生活を主とした短歌及長歌集である。その念持するところのもの「古來の定型にして他奇なく」「居に從ひて選ぶ平々凡々の四圍」の自然を觀照した恭謙なる精錬道の賜物である。「白南風」の序の一節を記してその境地を窺はう。

「惟ふに風騷いやしくすべからず。かの光明に參じ、虚實交〻にして莊嚴の祕密を識る。畢竟は此の我を觀、我を識るなり。一なる生命の根源に貫徹すべきのみ。乃ち、心地清明にして萬象おのづからに透映し、品格整齊して氣韻おのづからに生動せむ。純情にして簡朴なる、幽玄にして富贍なる、情意臻つて詞華之に順じ、境涯極に入つて、象徴の香氣一に鍾る。一首は遂に一首にして亦生死の道なり。質實にして强靱ならざれば得べからず。」

身邊平々凡々の自然の中にも莊嚴の祕密を探り得て、幽玄なる歌調をとほして表現を完うしようとする。「克明に寫生をしようと思つてゐる」「しかしながら畢竟は幽玄を思ふものである。象徴を思ふものである。餘情を尙び風韻を愛してゐる。」「近代のわたくしの幽玄體は新古今のそれとちがふ。」と改造社現代歌論叢書白南風標筆にのせてゐるのである。

白南風はシラハエとよむ。ハエは南風である。故に白光を帶びた南風の意。白南風卷頭の序文に「白南風は送梅の風なり。白光にして雲霧昂騰し、時によりて些か小雨を雜ゆ。欝すれども而も既に輝き、陰濕漸くに霽れて愈〻孟夏の青空を望む。その蒸蒸するところ暑く、その蕩搖するところ、日に新にして流る。かの白榮といひ、白映と作すところのもの是也。蓋し又、此の白映の候に中りて、玆に我が歌興の煙霞と籠るところ多きを以て、採りて題名とす。もとより本集の歌品秋冬に尠く、春夏に多きもその故なり。」とあるから題名の所以は明であらう。

次に各時代の特徴を表はすと思へる歌を抄出しておかう。

手にとれば桐の反射の薄青き新聞紙こそ泣かまほしけれ

春の鳥な鳴きそ鳴きそあかあかと外の面の草に日の入る夕　(以上桐の花)

くわうくわうと光りて動く山ひとつ押し傾けて來る力はも

寂光の濱に群れゐる大鴉その眞上よりまた一羽來し　(以上雲母集)

月の夜の堆肥の靄に飛ぶ螢ほつほつと見えて近き瀧の音

枯れ枯れの唐黍の秀に雀ゐてひようひようと遠し日の暮の風　(以上葛飾閑吟集)

はゝそはのこれや我が母我がどちのこのよき母も老いましにけり　(雀の卵)

(ロ)　神苑の樹木について一言しよう。代々木は櫧帶(暖帶林)卽ちカシ類やシヒ類が主木をなす地域の北部に屬してゐるので、現在主木をなす松杉の類は、遂年これ等にその地位を奪はれつゝあり、二三百年後に於ては、カシ類、シヒ類、

クス、タブの類が、主木をなす大森林となるものである。こんな事も、ぐい〳〵成長しつゝある樫や椎の若葉の光を見るに參考となるであらう。

（八）花田比露思氏の心境を示すものとして大正八年一月の「しほさゐ」所載の記事を抄錄しよう。

「私は基督が身を殺して力説闡明した神を信ずるものである。釋迦と日蓮は知らぬけれども、親鸞の說いた「自然法爾」を信ずるものである。さうして神を信じ、神のはたらきを信ずる時に、最早私には基督も親鸞も必ずしも必要でない。神と私――そのなかに私以外の總ては攝取され、私自身も亦攝取されて了ふ故に――唯神のみ――が絕對の存在と感ぜられ、信ぜられるのである。此の時私の祈禱又は感謝に、基督の名を仲介とする必要はない。親鸞の存在を念頭に置く必要もない。神と私――唯神のみ――たゞそれだけである。私の願は、斯の如く敬虔極まれる純眞無二の境地から湧く神への捧げものでありたい。」

（ニ）太田水穗氏は、この歌集「鵜・鷺」の卷末に、自らを顧みて次のやうに述べてゐる。

「つゆ草」を自分の集の初として、次が「山上篇」、次が「雲鳥」、次が「冬菜」、さうしてこの「鵜・鷺」である。二十歳のころから歌を詠みはじめて、その間わづかに一たび斷えたことはあるが、それでもともかく歌から捨てられずに、寂しいことのある時、よろこばしいことのある時、世の有樣のはげしい流轉にうたれる時、こゝろは言葉をもとめ、言葉はしらべをそゝのかし、しらべはいつとなしに節となつてゐるといふやうなわけで、たうとう自分もこの一筋の流れにうき身を變す生涯を持つてしまつた。數奇といへば數奇、風流といへば風流である。

この集の趣きをいふならば、初めの方は大體冬菜の繼續であるが、昭和四年ごろに一たび變化し、五・六・七・八年と幾分〻つ若やいで來てをるやうである。これは老境に入るに從つて、心もちが寬いだためであらう。このかたむきは今後なほしばらくつゞくのでないかと思ふ。誰であつたか、「老後の花を忘るゝな」といふことを言つてゐたが、或はさういふ所に出てゆくのではなからうか。さうであるのならば老もまた怡しむべきものである。

とにかくこゝには私の五十歳時代の流風をかゝげつくした。よしあしはともあれ、「一つ脫いでうしろに負ひぬ衣がへ」。身世たちまちに輕きをおぼえる次第である。

以上の文でも察せられる通り、大正末年頃から氏の作は芭蕉の風韻を慕ふ風が强くあらはれ、さび・しをり・細味等を希求し、又連句の研究などよりして、詩材を廣く求めて、それをしをり、その細味を出すといふ風に努力して來たのである。近年、やゝ若やいだ新詩材にも向つてゐるが、やはり氏の作は、中世的な幽玄、芭蕉的な匂ひが、その目的となつて進んでゐると思ふ。たゞ氏のは、理念的にその世界へ押し進まうとする傾向がある。その點で、白秋氏の行き方とは全く異つてゐる。氏の作品に、白秋氏の作ほどのゆたかな滋味が乏しいといはれるのは、感受をふかめて幽玄に迫るのと、哲理的に幽玄へ進まうとするのとの差がかもし出した味の相違であらう。

尙參考のため、震災復興御巡幸一連の作を次に記さう。

東京の四方のそぎへゆ立つかすみ大君のみ眼に涙垂るらむ
いづる日の茜をつゝむあさ霞ありにし空の炎には似ぬ
大君のみ幸をみむとい群れたる八十氏人はかすみのなかに
燒けはてし阿鼻のあら野をひと時に都となしつ人のちからは
龍を彫り風をきざみし世はしらず汗かき垂れてつくりし都ぞ
みたたしの御眼下にさゝやけき民のくらしもみそなはすらむ
大君は神にしませば天が下なげかふ聲をしらしたまへり
お車のタイヤの滑りやはらかう音もなくしもすぐるたふとさ

三日滿の契

林出賢次郎

一　解　題

1　作者

林出賢次郎　ハヤシデケンジラウ　原籍和歌山縣日高郡湯川村大字小松原三二二番地、明治十五年八月生、明治卅四年四月和歌山中學校卒業、同卅八年四月上海東亞同文書院卒業、同年五月外務省から支那新疆省天山北路伊犂地方の露支國境視察を命ぜられ、支那人に變裝して、山西、陝西、甘肅を經て萬里長城西端嘉峪關を出でて哈密吐魯番、迪化を過ぎ九ケ月を費して目的地伊犂に達し夫より塔城方面迄露支國境を視察し、再び甘肅、陝西、河南を經て北京に着し、明治四十年四月東京に歸り復命した。明治四十年六月外務省通譯生となり、在官の儘清國政府に招聘せられ同年八月北京發、察哈爾から綏遠に出で、同地から駱駝隊に加り大砂漠を東より西に横斷天山北路に出で新疆省迪化城に滯在すること二ケ年、同地法政陸軍兩學堂の教習となり、又新疆蒙古地方の視察をなし、明治四十三年春迪化を出發し、天山北路奇臺より再び駱駝隊に從ひ、才壁大砂漠を西から東に横斷して同年七月北京に歸着、爾來北京公使館、奉天總領事館、上海總領事館等に在勤。大正十年八月外務省理事官となり外務省本省在勤。同十一年六月、北京に於ける山東懸案交渉委員隨員となり、同十一年一月から十四年八月まで南京領事、同十月北京公使官一等通譯官となる。同十五年九月から昭和四年三月迄英國へ出張ついで歐米各國へ出張、昭和三年瑞西國「ジュネーブ」に於ける第九回國際聯盟帝國代表隨員となる。同四年四月漢口領事となり同六月公使館二等書記官として支那在勤上海駐在。昭和七年二月には國際聯盟支那調査委員日本參與隨員となる。昭和七年六月奉天領事、八月大使館二等書記官となり、滿洲特派全權大使隨員となる。同十一年十二月大使館一等書記官に任じ關東軍囑托及滿洲國宮內府行走を兼ねた。滿洲建國以來武藤元帥、菱刈大將、南大將、植田大將等四代の關東軍司令官兼特命全權大使に從ひ、滿洲國皇帝陛下との拜謁及一般皇帝拜謁者への御通譯を申上げ、昭和十年滿洲國皇帝陛下御訪日の際扈從して御通譯申上げ、又昭和九年秩父御名代宮殿下の御來滿を始め其後御來滿遊ばされたる各宮殿下方の皇帝陛下との御會談を御通譯申上げてゐる。

2　出　典

訪日宣詔一周年記念日に方り、當時側近に奉仕した駐滿日本大使館二等書記官、滿洲國官內府行走林出賢次郎氏によつて編纂されたのが「扈從訪日恭記」である。日滿兩文を以て印刷されて滿洲國內に頒ち、滿洲事變後五周年を迎へて日本國內關係官民に貼られたものである。

こゝに引用された本文は「東京御滯在（四月七日）」と題されて記されたものの中、繪畫館からの歸途御訪問遊ばされた大宮御所の記事をのぞいたものである。この恭記では「日滿永久の契（四月六日）」と題されては、皇帝陛下の横濱御上陸、秩父宮殿下の御迎へ、並に東京驛頭に於ける我が　天皇陛下の御迎へ、兩陛下の御握手、當日午後皇帝陛下の宮城參入、午後三時四十分に於ける天皇陛下の御答訪、午後六時二十分よりの豐明殿の御盛宴が記され、現代を御統治遊ばす　天皇陛下との永久の御契りの程が記されてゐるのである。

然るに本課にこの題を掲げた事は日滿兩國の契りが、單に現代にあるのみならず、現代を築き給ひ、我等擧つて崇敬の的とし奉つてゐる明治大帝、並に尊い人柱との御契約である事を思ふからである。

3　主眼及び採擇の趣旨

日滿兩國の契りが君民一體の國體にある點を明にして滿洲國に對する認識を深め、ひいては東洋乃至世界文化の指導的

立場がこゝに建設せられる所以をしらしめる事が本課の主眼とするところである。

前に我が國に於ける君民の情を明にした第一課があり、滿洲國の認識を深める教材としては風土に關する次課がある。尙明治神宮の雰圍氣を味はしめるものとして第二課があつてこの御對面の感激を裏づけるものとして役立つてゐる。即ち本課の目的は第一課から第四課までを通じて完成されるものである。

二　解　釋

1　語　釋

【朝來】　テウライ　あさはやくより。

【春光】　シユンクワウ　(一)春のけしき。(二)春のあたゝかい光。こゝでは(二)

【和風】　ワフウ　(一)のどかな春風。(二)我が國ぶり。ことは(一)

【好日】　カウジツ　好き天氣の日。

【鹵簿】　ロボ　天子の行列の次第。鹵は矢を防ぐ大形の楯。簿は張簿。康熙字典に「兵衞以甲盾居外爲前導皆著之簿」。

【赤坂離宮】　アカサカリキユウ　東京市赤坂區にあり。もと紀州侯邸。靑山御所に隣す。明治五年赤坂離宮とせられ翌年皇居炎上の際假御所となり、のち東宮御所に充てらる。大正三年高輪御殿を東宮御所とせられ離宮の舊稱に復す。同十二年大震災に高輪御所燒失。爾來東宮御所となり、昭和三年今上陛下宮城に移らせ給ひ、再び離宮の舊稱に復す。

【外苑連絡道路】　グワイエンレンラクダウロ　明治神宮內苑北參道口と外苑西入口とを連絡する道路で心地のいゝ遊步道である。外苑は明治神宮の傍にある大苑で、面積十五萬坪、もと靑山練兵場のあつた所。古くは江戶幕府の雜兵百人組千人組の住所。明治天皇昭憲皇太后の神德鴻業を畫幀に收めて奉揭する聖德記念繪畫館を中心とし、靑山通からは銀杏樹の並木通で之に通じ、東方電車通を距てて憲法記念館がある。その外大競技場・野球場・相撲場・水泳場が附近に建設せられ、加之明快廣闊な芝生の淸綠を基調とした近代的公園の設備もある。

【神鎭りまします】　カミシヅマりまします　神として靜かに留つていらせられる。「ます」は敬語助動詞。

【神宮橋】　ジングウバシ　明治神宮南參道の入口原宿驛附近にある。之を渡ると直ちに右して第一の鳥居を入る。

【點綴】　テンテイ　程よくとりあはせて飾る。

【幽邃】　イウスヰ　しづかにおくふかし。邃とは深く遠い意。

【一入】　ヒトシホ　入(シホ)とは浸して染める度を數へるに用ひる語。即ち一入とは染物を或る汁に一度入れひたすこと。こゝでは副詞に用ひ、ひときは、一段、一層の意。

【森嚴】　シンゲン　森はおごそかにしてぞつとする貌。兩字でおごそかなありさまをいふ。

【南神門】　ミナミシンモン　神宮內苑の正門。即ち原宿方面からの南參道と千駄谷方面からの北參道との接合點に立つ大鳥居から左折して行くこと百五十間、更に右折したところに拜される南鳥居の內に造られてゐる檜皮葺神殿の御門である。俗に樓門と呼び、外院の正面に位し總檜素木造り十二坪半、結構壯麗、奧に見えるのは拜殿である。

【陸軍樣式通常禮裝】　リクグンヤウシキツウジヤウレイサウ　陸軍服制に於ける通常禮裝は、宮中若しくは皇族の午餐に陪する時、御座所に於て拜謁のため參內する時、命課布達式の時、伺候式の時、一般通常服着用の時に用ひる。因に陸軍服制を言へば正裝、禮裝、通常禮裝、軍裝略裝の五種に區別せられ、近衞騎兵聯隊附下士官兵及び軍樂部下士官は禮裝及び通常禮裝を缺き、自餘の下士官兵は軍裝及び略裝のみとする。正裝及び禮裝は正衣袴正帽及びこれに相應する裝具、軍裝及び略裝は軍衣袴(夏衣袴)軍帽及びこれに相應する裝具を附け、各兵科、各部、階級、特技はそれぞれ定色、衿部徽章、肩章、徽章、飾緖等を以て區別する。正裝は四大節、特に拜謁のため參內するとき、勳章親(奉)授式のとき、一般大禮服着用のとき等に用ひ、禮裝は宮中若しくは皇族の晩餐に陪するとき、任官補職の令書拜授のため參內する時、一般通常禮服着用のとき等に用ひる。

【凜々し】　リリし　凜々(リンリン)は寒さの身にしむ貌。又勢のりしき貌。「リリし」とは嚴美なること。

【狩衣】　カリギヌ　(一)元は狩獵に用ひた服である。制襖(ハフ)に似てゐるので狩襖(カリアフ)とも言ひ、袴を狩袴(カリバカマ)(指貫)とも言ひ、古くは上下共に布で製したので布衣(ホウイ)、布袴(ホウコ)とも言つた。衣には袖括があり、袴に裾括があるのは放鷹、射獵の時、引き括る爲であるが輕便であるから平時にも用ひるやうになつた。(二)公家常用略儀の布製の服。嵯峨天皇の頃から有文の綾絹などで製し、一位以上の服と

なつた。盤領で袖括があり、織紋、染色は種々である。白絹製のものは專ら神事に用ひて淨衣といふ。(三)德川時代に至り有文の狩衣を、公家では大納言以下の服とし、武家では諸大夫の官服とした。こゝに用ひられてゐるのは淨衣。

【權宮司】ゴングウジ　熱田、出雲、橿原、明治の四官幣社に於ける宮司の下におかれる神官。伊勢神宮には大少宮司、官國幣社には宮司が置かれてゐる。大宮司は勅任、少宮司は奏任もしくは勅任官で、宮司、權宮司は奏任待遇とし、宮司中特に功績顯著なもの十名を限つて勅任待遇とせられる規定である。すべてその社の祭祀を司り庶務を管理するものである。

【御先導】ゴセンダウ

【拜殿】ハイデン　廻廊內諸建物の中央に位し、南神門及北神門まで各四十間。規模宏壯雄大建坪五十八坪、拜殿迄を外院と稱し、拜殿より奧を內院と稱する。左右に續くのは複廊である。

【新しく調へられた】一般人の手水舍は正面南鳥居左前にある。

【御手洗】ミタラシ　たらしは手洗水(サアラヒシ)の約。みは神前であるからつけた尊稱。しは水(スキ)の音の約。水良玉(シラタマ)、水長鳥(シナガドリ)、の如し。神前の淸き流れや水などで手洗ひ口漱ぐもの。

【手水】テミヅ　(一)手を洗ふべき水。(二)手を洗つてから滴る水。(三)餅を搗くとき杵又は揑取の手をぬらす水。こゝは(一)

【修祓】シウフツ　穢を祓ひ淸めること。大幣で祓ふ。

【沈宮內府大臣】チンクナイフダイジン　宮內府大臣沈端麟

【中門】ナカモン　御本殿を圍む透塀(スカシヘイ)の正面に位置し、拜殿から正面に拜される。勅任官以上が參拜を許される。後に祝詞舍があり、御本殿に至る御扉には透し彫の菊花御紋章があつて崇高の感が深い。

【本殿】ホンデン　中門內中央に拜される。木曾產の檜造り、金光燦たる千木は彌高く崇高神嚴である。

【木階下】モクカイカ　御本殿內陣正面の階段の下。この階段は神官であつても供饌の外漫りに昇降を許さず、神神しき極みである。

【玉串】タマグシ　(一)榊の枝に木綿(ゆふ)を付けたもの。後には紙をつけるやうになつた。(二)榊。こゝでは(一)

【拜禮】ハイレイ　をがむこと。頭を低れて禮をすること。

【維新】キシン　これあらたなりの意。王政のあらたまるをいふ。こゝは明治維新。即ち維新の大號令(王政復古の大號令)によつて行はれた。其の文に曰く。

德川內府從前御委任大政返上將軍職辭退之兩條今般斷然被聞食候。抑癸丑以來未曾有之國難　先帝頻年被惱　宸

襟候御次第衆庶之所知ニ候。依之被決　叡慮王政復古國威挽回之御基被爲立候間、自今攝關幕府等廢絕、即今先假ニ總裁議定參與之三職ヲ置レ萬機可被爲行、諸事神武創業ノ始ニ原キ縉紳武弁堂上ノ別ナク至當ノ公議ヲ竭シ天下ト休戚ヲ同ク可被遊　叡慮ニ付　各勉勵舊來驕惰ノ汚習ヲ洗ヒ盡忠報國ノ誠ヲ以テ可致奉公候事。

【回天】クワイテン　君主の心を挽き回す。轉じて國勢を挽回すること。

【王道建國】ワウダウケンゴク　道德を以つて天下を治める帝王の道によつて建國すること。書經に「無偏無黨王道蕩々」と。王道は覇道の對。

【扈從員】コショウキン　扈とは君主の後に從ひ行くこと。即ち君主のおともをして行く者。

【御拜】ギョハイ　御拜禮。

【大床】オホユカ　(一)神社の簀子緣。(二)武家の邸宅で廣廂の稱。こゝでは(一)

【案上】アンジヤウ　案は机。ここは置座(オキクラ)即ち祓物を載せる臺。即ち置座の上。因に神祇官が案上に奉幣するを案上官幣と稱して大社であり、案下に奠いて祭るを案下官幣と稱し小社である。

【奉奠】ホウテン　奠は神佛に物を供へること。下に置く事をも奠といふが、こゝでは前者の意。即ち供へ奉ること。

【復命】フクメイ　命を受けて行つた次第を申し上げる。

【御幣物】ゴヘイモツ　幣とは(一)神に祈るに奉るもの。(二)祓に出すもの。こゝでは(一)。麻、木綿(ゆふ)、帛(ハク)(絹布の精美なもの)など、織つたもの織らぬもの共にいふ。

【寄進】キシン　社寺などに金品を差上げること。勸進の對。國字である。

【聖德記念繪畫館】セイトクキネンクワイグワクワン　明治、昭憲兩陛下御在世中の御治績を繪畫に調製して永くその鴻業聖德を記念し奉る。神宮外苑にあり。市電靑山三丁目から銀杏並木の道路の彼方正面に見える。建坪主階六百八十一坪、地階七百五十八坪、中央圓塔高さ百六尺、兩翼高さ五十五尺、繪畫揭壁八百尺の延長である。日本畫四十枚、洋畫四十枚。鐵筋コンクリート造、花崗石表裝の近世式建築である。外壁及外階段表裝の花崗石は岡山縣萬成產、屋根は一部銅板葺、急斜面は硝子張、中央大廣間の壁面及床、階段、休憩室、腰壁柱等大理石表裝に一部タイル張。大理石はすべて國產で其の量三二、五三四平方尺。起工大正八年三月竣工十五年三月。

【感激の場面のみ】或は御嘆聲を御洩らしになり、或は御獨言を申され乍ら御熟視遊ばし、或は御落涙になつた樣子を指したものである。最初から陛下があまりにも御繪

に接近遊ばされるので、少しお離れ遊ばした方が明瞭におわかり遊ばす由を言上したが、陛下はその事を御承知になり乍ら尙近々と御接近になつて御覽になつた由である。この事は陛下が明治大帝の御高德を御身近く御感じ遊ばし度き御希望に出でさせられたものと筆者林出氏も同恭記に語つてゐる。この事は「のみ」といふ言葉の內容を物語るものである。

【恐懼】　キョウク　恐は「かしこむ。」「おそれ多く思ふ。」懼は恐れをのゝく意。

【紫宸殿】　シシンデン　故實讀にはシシイデンと讀む。禁中の正殿の名。大禮正式を行はれる處。一名南殿（ナデン）。前殿。

【親王】　シンノウ　シンワウの連聲の轉。(一)ミコ。皇兄弟皇子の稱。皇姉妹皇女を內親王と申す。上代は皇族はすべて諸王と申す。後に天皇の御子女はすべて、親王、內親王と申し、其外を諸王と申す。又後には特に、王親王の宣旨あつた方を親王と申し、宣旨なき方を諸王の列とす。親王は五世を限りとし六世以下は王の名を得ども皇族の限りにあらず。諸臣の列に入る。(二)今は天皇の皇子皇女は宣旨なくて親王、內親王である。

【公卿】　クギヤウ　太政大臣、左大臣、右大臣を公（コウ）と言ふに對して、大納言、中納言、三位以上を卿と言ひ、參議は四位であつても之れに入れる。大臣公卿と連ねて言へば公卿は大、中納言、參議、三位以上を指す。

【諸侯】　ショコウ　(一)支那では公、侯、伯、子、男の爵ある者の總稱。(二)大名。こゝは(二)。

【天神】　テンジン　地祇に對す。(一)アマツカミ。天の神。(二)泛く神社の祭神、又は神社の稱。(三)天滿天神の略(四)袍直衣、直垂等を着た公家風の人。(五)太夫の次の遊女。(六)天神髻の略。こゝは(一)

【地祇】　チギ　地の神、クニツカミ。地神。說文に「地祇提出萬物者也」正韻「祇、地神」と。

【總裁局】　ソウサイキヨク　明治元年二月三日發布の三職八局設置の官制にある。總裁には宮を以て之に任じ、副總裁には公卿、諸侯を以て任ずとあり、三條實美、岩倉具視が之に任ぜられた。而して總裁局には總裁一人（宮之に任ず）副總裁二人（議定職、公卿、諸侯之に任ず）輔弼二人（議定職、宮、公卿これに任ず）顧問定員なし（參與徵士これに任ず）、以下辨事、權辨事、史官、筆生、官掌等があつた。

【副總裁】　前項參照。

【三條實美】　サンデウサネトミ　維新の元勳、公爵、東京府華族實萬の子。天保八年京都に生まれ、明治二十四年二月十九日麻布の私邸に薨ず。年五十五。夙に幕府の專橫を惡み、薩長の士と圖り、攘夷の實行をなさんとした。

適〻朝議俄かに變じ、攘夷の議に盡した公卿は朝に在る事を得ず、東久世通禧等と長州に奔る。所謂七卿落である。慶應三年罪を赦され、議定となり、明治元年正月九日副總裁議定職に任ず。五箇條御誓文を奉讀したのはこの在職中である。次いで外國事務總督を兼ね大納言左近衞の大將に轉ず。爾來、關東監察使、右大臣、太政大臣、賞勳局總裁、修史官總裁、內大臣を經て大業補贊の功績は大である。

【五箇條御誓文】　明治元年三月十四日、明治天皇御親ら南殿に臨御し、天神地祇を祀り、公卿諸侯を會同して神前に誓はせられた五箇條の國是大方針である。

一　廣ク會議ヲ興シ萬機公論ニ決スヘシ
一　上下心ヲ一ニシテ盛ニ經綸ヲ行フヘシ
一　官武一途庶民ニ至ル迄各其志ヲ遂ケ人心ヲシテ倦マサラシメンコトヲ要ス
一　舊來ノ陋習ヲ破リ天地ノ公道ニ基クヘシ
一　智識ヲ世界ニ求メ大ニ皇基ヲ振起スヘシ

この日午の刻群臣南殿に參集着座、それぞれの式禮を了へて天皇出御、御祭文讀上御神拜のことあつて後、副總裁御誓書を讀上げらる。御誓書には前記五箇條の列擧に續いて、

我國未曾有ノ變革ヲ爲ントシ　朕躬ヲ以テ衆ニ先ンシテ天地神明ニ誓ヒ大ニ斯國是ヲ定メ萬民保全ノ道ヲ立ントス衆亦此旨趣ニ基キ協心努力セヨ

との御言葉がある。それから公卿諸侯が一人づつ中央に進み出て神位並に御座を拜し「勅意宏遠誠ニ以テ感銘ニ不堪今日ノ急務永世ノ基礎此他ニ出ヘカラス臣等謹テ叡旨ヲ奉戴シ死ヲ誓ヒ黽勉從事冀クハ以テ　宸襟ヲ安シ奉ラン」の文句の後に順次執筆加名した。この五箇條の宣明は今日の眼から觀ても維新日本の國是として間然する所のない立派なものであるが、封建制度の思想的桎梏のまだ儼存してゐた時代に作られたことを考へると　當年の改革精神の如何に潑剌たる生氣に燃えてゐたかに驚かざるを得ない。封建時代に於ては百姓町人は勿論のこと、士人といへどもその職にあらずして天下の大政を私議するは死罪にも値する國禁とされてゐた。それが會議を起し萬機を公論に決するといふのであるから破天荒の變革である。事勿れ主義一點張りの退嬰政策から一轉して盛んに經綸を行ふといふ。新規なことは何でもいけないとされた時代から、人心を倦ましめてはならぬとて創造的精神の自由活躍を奬勵する時代となる。行動の基準は天地の公道である。舊來の陋習はどんゝ〻捨てろ、傳統因襲に拘はらず知識を世界に求めて皇國發展の基礎を振ひ起せといふのであるから、その氣魄の淸新にして

雄大なるたゞ〳〵感歎の外はない。尤も封建制度崩壞直後の明治初期にあつては、永い封建教化の精神的重壓がまだなか〳〵強かつたから、この種新精神の徹底的に行渡らなかつたことは已むを得ない。しかしながら年の進むにつれて古い文化は漸次跡を潜め、いろいろの方面に新しい制度文物が築きあげられることになるが、この趨勢を指導した一貫せる方針は疑もなく五箇條の御誓文であつた。而してこれは當年の日本國民の氣魄の鮮やかな表現には相違ないが、直接起草の任に當つた福岡孝悌と由利公正との功勞は永く國民の記憶すべきものであらう。木戸孝允、岩倉具視が側面からその制度發布に效せる貢獻も同時に看過することは出來ない。

【これは日本の精神である】　これとは陛下親ら群臣を率ゐて天地神明に御誓約遊ばすといふ事實と、五箇條の御誓文そのものの內容の示す氣魄とを御示し遊ばしたものと拜察してよからう。

【明治元年九月二十日】　太陽曆では十一月四日にあたる。

【車駕】　シヤガ　天子の御車。鑾輿、鳳輦。

【途次】　トジ　みちすがら。途ついで。

【蹕】　ヒツ　(一)さきばらひ、君主の他行に道路を警衛して行人をとどめること。(二)天子の行幸。(三)天子行幸の御車。こゝは(三)

【駐む】　トドむ　(一)留める。(二)車馬の止まること。(三)一定の地に長く留まつて居ること。

【君民一體】　クンミンイツタイ　君と民とが一つの體の如く有機的關係を持つてゐること。

【習志野】　ナラシノ　場所及命名の由來は頭註の通りである。こゝろばせをならす野の意。又ならしとは演習の意「信玄出陣の前に必ずならしあり」(武將感狀記)明治天皇の御命名までは小金原と稱せられたところである。

【近衞兵】　コノエヘイ　近衞師團に屬する禁闕守護の爲におかれた兵。

【演習】　エンシフ　(一)演べ習ふこと。稽古すること。(二)軍隊の調練。こゝは(二)。

【近衞都督】　コノエトトク　都督とは(一)すべとりしまること。(二)全軍を統べる將。(三)太宰帥の唐名。近衞都督は明治五年三月九日近衞條令によつて定められたもので、近衞兵の總帥としておかれたものである。卽ち同條令に「中將若クハ少將一人ヲ置テ都督タラシム。都督ハ直ニ聖旨ヲ奉體シ職務ニ從事スト雖モ、常例外ノ事務ハ必ス陸軍卿ノ決ヲ取テ始メテ服行ス云々」とある。

【宮司】　グウジ　權宮司の項參照。

【烈風】　レツプウ　(一)はげしく吹く風。(二)氣象學上では樹の大幹を動かすもの。强風より强く颶風より弱い。

【天幕】　テンマク　四月二十九日行幸同夜御露營遊ばされた天幕である。

【一代の碩學】　イチダイのセキガク　當世の大學者。碩は訓「おほいなり。(大)。」

【侍講】　ジカウ　君主に侍つて書を講ずる職。

【元田永孚】　モトダエイフ　幼學綱要の著者。その他は頭註の如し。

【竭す】　ツクす　よわらし盡す意。因に盡、悉、の區別をいへば、盡は器中空の意で皆さつぱりとなくなる意、悉は無くし盡すのではなく一一殘らずといふ意。

【君臣水魚の關係】　クンシンスヰギヨのクワンケイ　水の魚を住ましめるやうに臣の君を助ける深い關係をいふ。

【能樂】　ノウガク　舞樂の一種で初め神前の舞踊であつたが、當時の舞、音樂などを集めて大成し、後には將軍家の式樂となつた。

【能舞臺】　ノウブタイ　能樂を演ずる舞臺。原始期には平地であつたが、漸次神社の步廊、拜殿、神樂殿などを假用したものらしく、桃山期に入り專用の建物が確立した。現存の樣式は貞享・元祿の頃に成立した規矩を基準として居り、本舞臺三間四方、後座(アトザ)奧行一間半、地謠座幅半間、橋懸長さ八間五尺、幅七尺餘、床板までの高さ二尺六寸餘。

【崩御】　ホウギヨ　天皇、皇后、上皇、法皇、皇太后のかくれさせ給ふこと。

【華胄】　クワチウ　華は美稱、胄は裔。身分高い家柄、華族、貴族。

【儀衞】　ギエイ　儀仗の兵士。

【褥室】　ジヨクシツ　病室。

【滂沱】　バウダ　(一)雨の盛んに降る貌。(二)涙の盛んに流れる貌。こゝは(二)

【不豫】　フヨ　(一)よろこばざること。快からざること。(二)帝王のやみ給ふこと。こゝは(二)

【嗄れ】　シハガれ　こゑのかれること。

【陛下】　ヘイカ　天子を稱する辭。直接に天子を指すを避けて、其の階下に在る護衞兵をさして告げ、卑から尊に達せしめる義。我が國では天皇、皇后、太皇、皇太后の敬稱。

【人柱】　ヒトバシラ　昔橋柱を立てようして成らぬ時などに、人を生けながらに水底に埋めることをいつた。又その人をもいふ。河伯への生贄である。こゝでは東洋平和の建設を橋柱を立てることに比し、その爲の犧牲となつた人をさしていつたもの。

【曠野】　クワウヤ　ひろびろした野原。

【靖國神社】　ヤスクニジンジヤ　東京市麴町區富士見町三

丁目に鎭座。維新前後王事に盡瘁して命を殞したる勤王烈士の英靈を始め、爾後日清、日露、日獨、濟南事變、近くは滿洲、上海事變等各地の戰役等に於いて身を賭したる忠勇義烈の英靈十二萬餘柱合祀す。實に本社祭神は陸海軍所屬の將士はもとより、苟も帝國臣民にして死を以てこれに殉じたる精靈はこれに網羅せられ、永く護國の神となり、社稷の鎭護と仰がれる。始め明治元年六月嘉永以來の英魂を祀る招魂祭を江戸城内の大廣間に、及び同七月京都東山の河東練兵場に執行せられたが、翌二年六月更に明治天皇の叡慮により九段坂上なる現在地に招魂社假神殿を造營、合祀鎭祭の式を執行、勅使參向奉幣あり、時の齋主は畏も軍務官知官宮嘉彰親王にわたらせられた。これ本社創祀の起源である。爾來皇室の御崇敬大方ならず、同十二年別格官幣社に列せられ、靖國神社の社號を賜はり、或は神靈合祀の時には特に勅使を御差遣、嚴肅なる祭典を執行せられ、又每年春(四月三十日)秋(十月二十三日)二回の例祭には、勅使を立て拜禮せ

2　文の構成

第一節　八頁二行―八頁三行　　當日の天候。

第二節　八頁四行―一〇頁一行　　明治神宮御參拜。

1　赤坂離宮御出門から神域まで。(八頁四行―八頁九行)

しめられるのを恒例とし、或は明治七年以來行幸、行啓を辱うし親しく御拜を賜はること數十回、その外御代拜、各皇族宮殿下の御參拜等枚擧に遑がない。祭神の全國的なると共に、全國民の崇敬また啻ならず、例祭當日及び前後數日間賽者立錐の餘地なきまで雜沓し殷賑を極め、また各地より上京額づくもの數を知らず、或は臨時大祭には業を休む等國民上下の崇敬を一にする。社殿中本殿は壯大なる神明造にて東面し、社域また廣闊にして櫻、梅株を連ね、春花爛漫の候賽者踵を接する。社前には天下無比の銅造大鳥居あるは著名、中央には故兵部大輔大村益次郎の銅像あり、社前に遊就館があつて古今の武器、戰利品、御物、乃木將軍の遺品等を陳列する。その他能樂堂、相撲場等の設備もある。明治十二年東京招魂社が靖國神社となつたもので、地方招魂社はその祭神全部靖國神社へ合祀濟のものである。これは靖國神社が土地遠隔地方人民遺族等が親しく容易に參拜する事が出來ない關係からである。これに官祭私祭の兩種がある。

2　神宮御參拜。(八頁一〇行―一〇頁一行)

第三節　一〇頁二行―一六頁六行　　外苑に於ける聖德記念繪畫館御巡覽。

1　頭括、御巡覽全體的御模樣。(一〇頁二行―一〇頁五行)

2　「五箇條御誓文」の繪御覽。(一〇頁六行―一〇頁一二行)

3　「農民收穫御覽」の繪御覽。(一一頁一行―一一頁七行)

4　「習志野原演習行幸」の繪御覽。(一一頁八行―一二頁六行)

5　「侍講進講」の繪御覽。(一二頁七行―一三頁一行)

6　「能樂御覽」の繪御覽。(一三頁二行―一四頁一行)

7　「岩倉邸行幸」の繪御覽。(一四頁二行―一五頁九行)

8　「不豫」の繪御覽。(一五頁一〇行―一六首六行)

第四節　一六頁七行―終　　靖國神社御參拜。

3　文意

春光和風の好日を記して冒頭とし、第二節として友邦滿洲國皇帝陛下が明治天皇の神靈に額づき給うた事實をのべて、維新回天の大業を成就あらせられた大帝と、王道建國の盛業を成就せられた皇帝陛下との御對面といふ感激の場面を叙述した。

ついで第三節として繪畫館御巡覽について感激すべき七つの場面を記した。即ち五箇條御誓文の圖に對しては日本精神に嘆聲を洩らし給ひ、農民收穫御覽の圖に對し、或は習志野演習行幸の圖に對し、或は元田永孚御進講の圖に、或は岩倉邸行幸の圖に、君民一體、君臣水魚の關係を觀取遊ばされ感嘆の御獨言を洩らさせ給うた。又能樂御覽の圖に對しては大

帝の御孝心に御落涙遊ばされ「不豫」の圖に對しても同じく御落涙になり、國民至誠の表れと御獨言仰せられた。

次に第四節として靖國神社に戰歿勇士の靈に御參拜の御有樣を記し、滿洲國の今日が如何に多くの犧牲によつて打建てられたかを思ひ、更に皇帝陛下の御參拜あらせられた所以を考へ、勇士英靈の光榮を偲ばしめる。而して最後に社頭の櫻花爛滿の光景を敍べ光榮にかゞやく當日を表はして文を結んでゐる。

4　鑑賞批評

恭記の名の如く全文謹しみの態度で敬語を多く用ひた崇敬體の敍事文である。全文の中心の箇所は明治神宮御參拜の一瞬である。卽ち「この一瞬こそは、實にわが維新回天の大業を成就あらせられた明治天皇の御靈と、王道建國の盛業を成就せられた皇帝陛下との御對面でありまして、扈從員一同もいひ知れぬ感激に胸を打たれたのであります。」はそれを表現してゐると思ふ。この大なる二つの御心の御對面の感激は更に繪畫館に於ける御事跡御覽によりて深められ內容づけられる。かくて二つの國が精神的に深い結合一致を有する所以が明瞭にされるのである。

第一段冒頭は當日の天候を述べたのであるが更に結末から滿洲事變に至る大動亂のあとを受けて、ここに平和の天地の曙光として滿洲國が建國された事實を象徵したかとさへ思はれる一文である。尙進んでは明治大帝の御靈に額づき給うて精神的な日滿兩國永久の契約の結ばれる當日を慶祝するかに思はれる一文である。「春光和風の好日」は特にこの意義を充分に表現してゐると思ふ。全文の冒頭に價する表現である。故に全文の鑑賞に當つては常にこの天候を念頭におかねばならぬ。神宮外苑を經て新綠と櫻花の點綴する森嚴なる神域を進み給ふ自動車函簿に映える春光、日頃御敬慕あらせられる大帝の御靈に御禮拜遊ばされる軍服の御姿。御手にせられた玉串のかゞやき、秋岡權宮司の狩衣の色の冴え、すべて平和明朗、慶祝に滿ち、感激に充ちた繪卷物ではないか。

次に思はれるのは神宮の風光である。「新綠滴るなかに綻び初めた櫻花の點綴し」た光景はいかにも花やかであつて凡そ森嚴な趣とは對蹠的な感じである。しかもその光景が幽邃な神域を一入森嚴にしてゐるのである。卽ちこゝに醸し出されるものは明朗な、若々しい、生命に溢れた、しかも嚴肅な趣である。この風光も亦今日の日に似つかはしいものではないか。

南神門で御下車遊ばされる時「いとも御身輕に御下車になりました」といふ表現は實に若々しい陛下の御行動の描寫として、つゝましくもしつくりしたものである。玉串を御手にせられ恭しく御禮拜遊ばされた一瞬に對して「わが維新回天の大業を成就あらせられた明治天皇の御靈と、王道建國の盛業を成就せられた皇帝陛下との御對面でありまして」といふ感想はよく言ひ得てゐる。扈從員一同の感激は同時に讀者の感激とならねばならね。幼少からあらゆる辛酸を嘗め給うた若き陛下、しかも將來大いに爲すあるべき陛下にとつて、御少年時代から回天の大業を成就遊ばされた明治大帝は當に大いなる指導者であらせられる。現下の兩國關係から思ふと祖父君と御孫との御對面の如き親しささへ酌みとる事が出來て涙ぐましくさへ感ぜられるのである。

この御對面の感激と意味とを裏づける事實として繪畫館御巡覽は全く感激の場面のみでありました」といつてゐるのは全體をよく總べた表現である。文がついてゐる。「この繪畫館御巡覽の感激が次に記されてゐる。この記事に於ても頭括の一特に「のみ」といふ助詞に强い意味を感じなければならぬ。それは「度々御眼を潤はせ給」うた程であつたのである。

先づ五箇條御誓文と題する繪を御覽になつた記事である。この繪から「これは日本の精神である」といふ御嘆聲を洩らし給うたのはどんな意味からであらう。それがこゝに讀取らなければならない事である。五箇條の國是の內容は勿論、陛下親しく群臣を率ゐ給うて、先づ神明に誓ひ萬民保全の道を立て給ふ事がそれである。陛下御自ら國是を定め給ひ、群臣を率ゐて神に誓ひ給ふその事である。我が國體の特殊性をよく具體的に顯現してゐる事相である。これに嘆聲を御洩らし遊ばす陛下は實に我が國體の眞の理解者と申上げてよいであらう。

次は「農民收穫御覽」と題する繪である。この繪に對しては「君臣一體である」との御感想を御洩らしになつてゐる。この繪は岩倉具視が農民に命じて刈つてゐる稻穗を捧げしめ、天皇は農民に菓子を賜うて其の勞を慰め給ふ圖である。天皇が親しく稼穡の艱難を嘗し給ふ事に對し、君民一體となつて國家の隆盛に盡力する點を觀取された事はさすが新興國家の君主としての着眼の鋭さを思はせる。

第三は習志野之原演習行幸の圖御覽である。「明治天皇親しくこれを指揮し給ひ」と記されてあるが正にその言の如く、天皇旗燦たる下に陛下馬上に拔劍して指揮し給ふ圖である。この行幸に於ては天皇は途上終始拔劍騎馬を以て隊伍に列り給ひ、隆盛亦拔劍して徒步扈從したのである。又演習地に於ては荒野に幕營し給ふ事二夜、寢食共に一將校と異なる事がなかつたのである。この事を知れば三十日の夜の記事もよく納得せられるであらう。有馬宮司の御說明に對して、言下に西鄕隆盛の御警衞ぶりを仰出された事は陛下が如何に明治天皇の御事跡に委しくいらせられるかが拜察され、第一段に於ける「日頃御敬慕あらせられる明治天皇」といふ記事の內容が明にせられるのである。

次は「侍講進講」の圖である。「君臣水魚の關係である」と御獨言申されながら御熟視なさつたのである。二十年間一日の如くその身を竭し奉つた事實に對して君臣水魚との御感想である。「竭す」とは身をつからせることである。如何に粉骨碎心の忠誠であるかを考へたい。元田侍講の稍ゝ白髮の交りたる後姿と、實算二十二歲の大帝が何ものかを凝視されつゝ學び給ふ龍顏は熟視遊ばした若き陛下に如何なる感慨を呼んだ事であらう。

次に御落淚御感動遊ばされたのは「能學御覽」の圖である。こゝには何の御言葉もない。そして「はら〳〵と」御落淚になつてゐる。こゝに讀者は御淚の意味を拜察し奉らなければならない。日頃御孝心篤い陛下が明治天皇の御孝心に感動遊ばしての御淚であらうといふ作者の言葉以上に、御自身の境遇にひきくらべての悲しい御淚ではなかつたであらうか。明治天皇英昭皇太后兩陛下御睦じく御並び遊ばして翁を御覽になるこの繪が淚の種となることは如何に悲しい事實であらう。

次は「岩倉邸行幸」の圖である。陛下は「引きつけられ給ふやうに畫面に寄り添はれて御落淚遊ばされ」た。はじめ陛下が畫面に向はせ給うた時、あまりに畫面に近く御立ちになるので遠方の方がよく御わかりになる旨言上したが御遠のき遊ばさず、御離れがたき御樣子にてより添ひ御覽になつた事を恭記は記してゐる。故にこゝにいふ寄り添はれた事は非常に近々と御寄り遊ばした事と拜察される。侍講進講の場合にも「君臣水魚」との御言葉があつた。しかし今度は「噫」といふ感動詞がついてゐるのである。そして、御落淚御瞑目あらせられてゐるのである。「嗣子夫人に援けられて僅かに半身を起し、合掌して天皇を拜し感淚双頰に滂沱たる」具視、儀衞も整へ給はず親ら「具視どうか」といたはり給ふ大帝の溫顏、尊くも美しい一體の相である。維新回天の大業御成就の事を思ひ、それがかうした一體の力の下に完成された事を思ふ時、同じ境遇に立ち給ふ皇帝陛下の御心中を拜察する事が出來るのである。御落淚も御瞑目も尊い一體の相にひそむ「まこと」への感激のあらはれであるが、更に、尊い御體驗につまされての御淚を見のがす事は出來ないであらう。

最後は「不豫」の圖である。同じく御瞑目御落淚遊はされた。さうして「國民至誠の表れである」と仰せられた。圖は老若男女の群の祈願の姿でみたされてゐる。三歲の幼兒も母の側にあつて地上に手を揃へて拜してゐる。老婆は下駄をぬいで坐り、頭を地につけて祈つてゐる。紳士あり、女學生あり、男子學生あり、坐せるあり、立てるあり、皆「遙かに御座所を拜して天皇の御平癒を祈りつゝある」のである。彼時の經驗を持つ國民にはこの繪によつて又新たなる淚を感ずるのであるが、革命動亂の苦杯を嘗め給うた若き陛下には又一層深く御感動のあつた事と拜察されるのである。そしてこの項には三つの淚の綾があり、複雜な感情の交錯がある。第一には國民の至誠に感動あらせられた陛下の御淚であり、第二は有馬宮司の淚である。卽ち我が國民自身として過去の悲しみを再び胸に描ける宮司が異邦の君主がかく深い御理解を持たせられる事に對する感謝と感激の淚である。第三はこの二つの尊い淚に感激した作者たる通譯官の淚である。この三つ

の涙こそまことに日滿兩國を結ぶ尊い感情でなければならぬ。

最後は靖國神社御參拜である。東洋平和の人柱となつた勇士たちの靈を悼ませ給うた事である。滿洲國の今日をあらしめる爲に、命がけで働いた勇士たちの英靈の微笑を偲ばせるものとして社頭の櫻花を點出して、慶祝の幔幕をはたかに思はれる文章である。

全文が單調に流れやすい文であるに拘らず、常に意を用ひて變化をつけてゐる事が注意される。繪畫館巡覽に際しても「御嘆聲を御洩らしになりました」「御感想を御洩らしになりました」「御獨言申されながら御熟視なさいました」「御獨言仰せられ暫し御瞑目あらせられました」「御獨言仰せられました」の如く文尾に苦心されてゐるのである。

三　備　考

1　指導研究

（イ）覇道立國を排し、封建的軍閥政治の舊殼を脱して、王道政治を建國の基調とし、五族協和をモットーとして滿洲國が生れたのは昭和七年三月一日であつた。爾來財政の確立治安の回復に努力し國礎安定、更に日本の承認するに及んで名實共に國家としての體容を整備するに至つた。特に本課に取扱はれる昭和十年四月に於ける皇帝陛下の御訪日は日滿兩國が同心一體として、不可分の關係に立つ誓約の御旅と言つてもよい。即ち御歸滿後發せられた日滿不可分に關する詔書に（參考欄參照）明な如く、其國是が「朕與日本天皇陛下精神如一體爾衆庶更當仰體此意與友邦一德一心以奠定兩國永久之基礎發揚東方道德之眞義則大局和平人類福祉必可致也」に存する事を明にされたものである。故に日滿兩國が、同心一體となるべき御決意は御滯在中種々なる事柄によつてかためられた事を拜察する事が出來るのである。即ち詔書にある如く、我が皇室の御歡待、國民の熱誠なる送迎、我が國體が、仁愛、忠孝に基づいてゐる事並に國民の尊皇義勇奉公の精神等を眼のあたりに御覽になつた事がそれであらう。これら現代の日本それ自身もさる事ながら、この國をかくの如くならしめられた明治大帝を偲びまつる事は如何ばかり皇帝陛下の御心にふれるものがあつたであらうかは拜察するにあまりがある。本課指導の中心問題はここにあると思ふ。即ち皇帝陛下の御動靜によつて伺ひ奉る陛下の御心中である。そこを讀みとる事によつて日滿兩國の契が如何なる點に存するかを理解する事が出來るのである。そしてそれは我が國體の深い理解と滿洲國建國の理想の洞察とに歸着する點にまで、讀みを通して導いて來なければならないであらう。尙陛下の傳記への疑問を抱くやうに指導し、その智識の滿足によつてこの課に漲ふ感情の深さに達せられる事が必要である。

將來の我が國を背負ふ若い人々にこの兩國の精神的一致點を明瞭に示す事は實に東洋平和を導く根幹である。この點に深い理念と理解とを持つて指導せねばならぬであらう。

（ロ）文體が敬語を多く用ひた崇敬體であるから、こゝに醸される氣分を充分に酌みとりたい。

2　參　考

（イ）滿洲國皇帝御略歴。溥儀氏。

先の清朝第十二代の宣統帝である。光緒三十四年（明治四十一年）第十一代德宗、西太后相ついで崩ずるや、德宗の弟醇親王載澧の子溥儀が僅に三歳で次の皇帝に擁立され、翌年を以て宣統元年とし、新帝を宣統帝といひ父醇親王が監國となり政を攝行した。この頃民間には革命黨が大いに勢力を伸ばし、國會速開運動なども行はれて國内騒がしく遂に宣統三年八月（陽曆十月十日）には鐵道國有問題を導火として所謂武漢革命勃發し、爾來官革兩軍の交戰に勝敗決せず、清朝は引退中の袁世凱を内閣總理大臣に任用して局に當らしめたが、種々曲折の後、遂に同年十二月二十五日（明治四十五年二月十二日）宣統帝は退位の上諭を發して清朝はこゝに滅亡した。その後、帝は皇帝たる尊號を持續し、外國君主に對するの禮を以て民國國民から尊敬され、年金四百萬元を受け舊皇城若しく

は頤和園に居住する約束となつてゐたが、その後はなか〳〵實行されず、民國六年（大正六年）張勳、康有爲等が幼帝を擁して復辟運動を行ひ、舊官制を復し宣統九年と稱しなどしたが忽ち失敗し、その後は革命政府の帝に對する壓迫が急に激しくなつた。民國十一年帝は十七歳となつて結婚したが、後二年にして馮玉祥の兵が突如宮城を圍み、帝を廢してその退出を強要したので、全く一平民溥儀となつて宮城を出た。爾後最近に至る約十年間は天津附近で不遇な生活を營んでゐたが、滿洲國の建設と共に民國二十一年（昭和七年）三月同國最初の執政に推戴され新京に於て政務を總攬してゐたが、大同三年（康德元年、昭和九年）三月即位の式を擧げ、滿洲國皇帝となり、今日に及んでゐる。

（ロ）　滿洲國皇帝回鑾訓民詔書　（康德二年五月二日）

朕自ニ登極一以來、亟思下躬訪ニ日本皇室一修睦聯歡、以伸中積慕上。今次東渡、宿願克遂。日本皇室、懇切相待、備極ニ優隆一、其臣民熱誠迎送、亦無レ不ニ殫ニ竭禮敬一。衷懷銘刻、殊不レ能レ忘。深維我國建立、以逮ニ今茲一、皆賴ニ友邦之仗義盡力一、以奠ニ丕基一。茲幸親致ニ誠悃一、復加レ意觀察、知下其政本所レ立、在ニ乎仁愛一、教本所レ重、在ニ乎忠孝一、民心之尊レ君親レ上、如レ天如レ地、莫レ不ニ忠勇奉レ公、誠意爲レ國。故能安レ內攘レ外、講レ信恤レ鄰、以維中持萬世一系之皇統上。朕今躬接ニ其上下一。咸以レ至誠一相結、氣同道合、依賴不レ渝。朕與ニ日本天皇陛下一、精神如ニ一體一。爾衆庶等、更當ニ仰體ニ此意一、與ニ友邦一一德一心、以奠ニ定兩國永久之基礎一、稽古揚東方道德之眞義上。則大局和平、人類福祉、必可レ致也。凡我臣民務遵ニ朕旨一、以垂ニ萬祩一。欽レ此。

（ハ）　回鑾訓民詔渙發ニ際シ國務總理大臣（鄭孝胥）ノ謹話

我　皇帝陛下ニハ御訪日ノ盛事ヲ滯リナク御完了アラセラレ日本　天皇陛下及其重臣等ト御懇談アラセラレタル結果益〻日本ノ正義ニ信賴セラルルノ御心ヲ深クセラレ將來永久ニ兩國一體不可分ノ關係ヲ鞏固ニシ相提携シテ東方精神ノ結晶タル道德ノ眞義ヲ發揮スヘク聖慮ヲ定メラレ本日茲ニ今後我國民ノ率由スヘキ根本精神ニ關シ最モ意義深キ大詔ヲ渙　セラレ臣等一同感激ニ勝ヘヌ次第ナリマス

我等臣民ハ大詔ヲ奉戴シ陛下ノ御心ヲ心トシ實踐躬行上下一致　陛下ノ昭示シ給ヘル針路ヲ邁進シテ東洋平和ノ確立ト人類福祉トニ貢獻シ之ヲ子々孫々ニ傳ヘ不朽ノ典謨トシテ只管ニ其光大發揮ニ努力セラレンコトヲ自ラ誓ヒ國民ニ期待シテ居リマス

（二）　滿洲國史概要

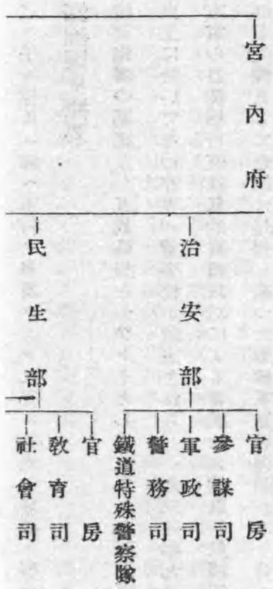
王道政治を建國の基調とし五族協和をモットーとして生まれた滿洲國はその成長への特殊な過程と立國指導精神との故に、東洋史上否世界史上に於いてその存在の重要性が規定される。一九三一年九月奉天柳條溝における支那正規兵の滿鐵爆破事件を直接の導因とする日本軍の自衛權行使は私的寡頭政治による苛酷なる搾取行動機關たる張學良政權と、それをめぐる一聯の政商を瞬時に覆沒せしめ、これを契機として急激に昂揚し來つた新國家建設運動が七ヶ月の短日月をもつて具現され、一九三二年春三月一日建國宣言、溥儀氏執政に就任して覇道立國を排し王道政治をもつて樂土建設の理想に進まんとする新たなる滿洲國が出現し、封建的軍閥政治の舊殼を脱して近代的中央集權國家體制への鮮やかな轉換をなした。爾來財政の確立、治安の回復に努めて國礎安定、更に日本の承認するに及んで名實共に國家としての體容を整備するに至つたが、三千萬民衆の熱烈なる要望と順天安民の大旨に則り、建國第三年（一九三四年三月一日）にして帝制を實施した。帝制實施後さらに國民の精進と盟邦のかはらざる肉身的協力によつて治安の維持は遠きに及び治績各般に揚り、國基ますます强固を加へてゐるが、歸滿後渙發された日滿不可分に關する詔書によつて國是も定まり、さらに康德三年にはドイツとの間に通商協定、日本との間には治外法權一部撤廢の條約が締結され、同四年五月には滿獨貿易協定の三ヶ年延長が調印され、日本の治外法權も近く全面的に撤廢される事に決定するなど、滿洲國は力强き躍進を續けてゐる。

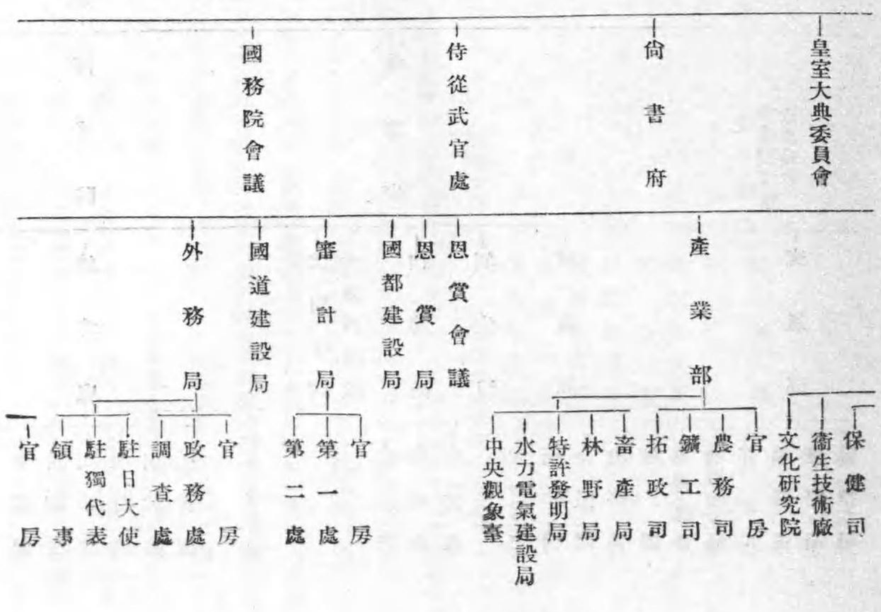
滿洲國では康德五年一月一日から新學制を實施する事となつた。新學制要項の根本は王道樂土建設への教育精神にあつて、その指示するところは建國精神及び訪日宣詔の主旨に本づき日滿一心一德不可分の關係および民族協和精神を體認し東方道德特に忠孝の大義を明かにして旺盛なる國民精神を涵養し德性を陶冶すると共に、國民生活の安定に必要なる實學を基調として知識技能を授け身體健康の保護促進を計り、もつて忠良なる國民を養成するといふにあり、初等教育（國民學會、國民學校、國民優級學校）中等教育（國民高等學校、女子國民高等學校）高等教育（大學）の三段階及び師道教育（師道學校、師道高等學校および主管大臣の指定する大學）職業教育（職業學校）の二部門に類別することとなつた。學校數は小學校一三・一〇七校、中學校一〇八校、師範學校八四校、

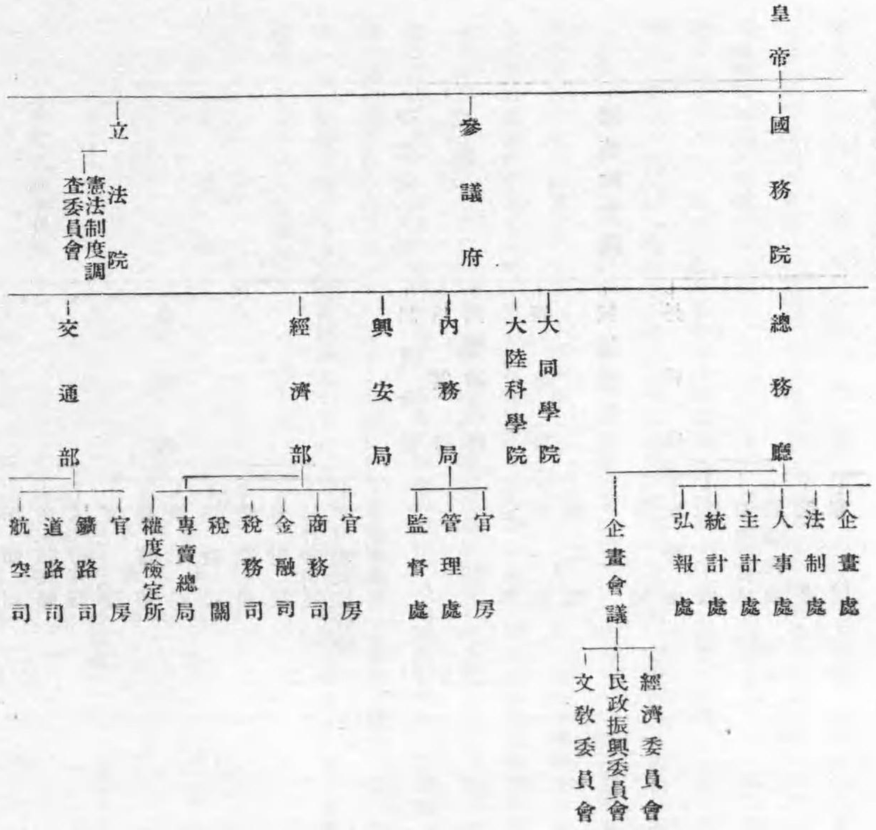
實業學校四六校、大學、專門學校一二校、他に私立の小學校二九五校、中學校三二校、專門學校三校がある。

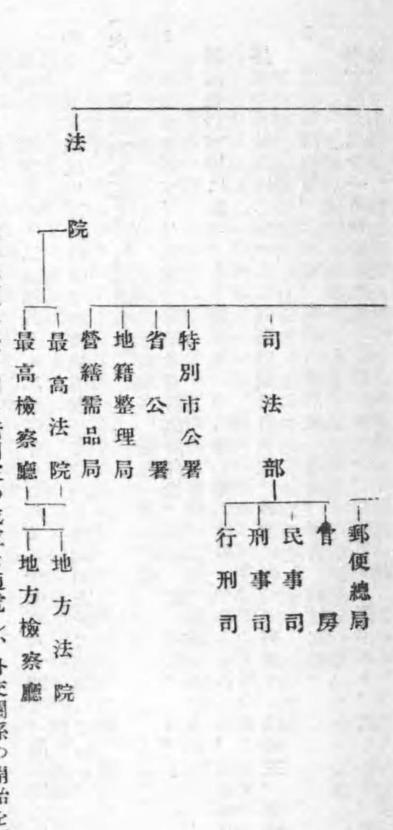
滿洲國陸海軍は皇帝（大統帥）の統率するもので國内の治安ならびに邊疆および江海の警備を擔任するものである。帝制實施に當り皇帝は國軍に勅諭並に軍旗を下賜された。陸軍は直轄部隊に禁衛軍あり、その他全國を六管區に分ち興安各省には警備軍あり兵力總計は八萬である。海軍は建國當時舊式砲艦利綏、利濟、江通、江平、江清の五隻のみであつたが、大同二年に大同、利民の二砲艦、恩民、惠民、普民の三砲艇を、康德元年に順天、養民の二砲艦、砲艇濟民を建造、康德二年に親仁、定邊の二砲艦を建造した。

滿洲帝國國政の根本を規範する憲法は目下政府當局において調査中で、憲法發布まで過渡期に於ける臨時憲法ともいふべき法令は滿洲帝國政府組織法として全部六章附則を合して四十二條よりなるものを發布されたが、同法第一條第二項に本づく帝位繼承に關する大典は康德四年三月一日「帝位繼承法」として公布された。滿洲國の統治主權は皇帝にあり皇帝は尊嚴にして侵さるることなし、皇帝は宣戰、媾和、條約締結の大權を有し、陸海空軍を統率し、大赦、特赦、減刑及び復權の命令權を有する。滿洲國の中央行政機構は建國以來何ら根本的變更を見ず、中央政府は四權分立の原則に本づいて立法院、國務院、法院、監察院の四院が設けられてゐたが第二期建設計畫の樹立とともにこれと關聯的に行政機構の一大改革を企圖し、當局に於いて愼重審議の結果「國内種族協和し日滿一德一心を徹底不變ならしめ新興國家としていよいよ健全なる發達を遂げん」とする根本理念に出發し、別表のごとき政府組織を康德四年七月一日から實施した。









滿洲國は建國と同時に世界十六ヶ國に新國家の成立を通電し、外交關係の開始を要請した。日本は滿洲國の獨立を尊重しその健全なる發達を促すは東洋永遠の平和を維持する所以なりとして昭和七年九月滿洲國を承認し共同防衛の盟約をも締結したが、國際聯盟はいはゆるリットン報告を採擇して滿洲國の存立を否認する態度に出たので、日本は昭和八年三月聯盟を脫退した。帝政實施なるや皇帝陛下は友邦日本の情誼に感謝の意を表するため鄭孝胥、熙洽兩修聘特使を派遣し、わが天皇陛下には秩父宮殿下を御名代として昭和九年五月滿洲國に御差遣遊ばされたが、更に昭和十年四月皇帝陛下には御親しく御訪日、ここに日滿兩國最高儀禮の御交換が行はれるとともに五月には北鮮に滿洲國稅關設置に關する日滿關稅協定、七月に入つて日滿經濟提携工作としての經濟共同委員會の設置、十二月日滿郵便條約、同三年六月の治外法權一部撤廢に關する條約などの成立によつて、日滿不可分の修交親善關係は日ともにいよいよ深きを加へてゐる。次に對外關係を見るに康德元年五月南米サルヴアドル國が聯盟の一員なるに拘はらず滿洲國を逸早く承認した。隣接するソヴエート聯邦とは特別なる關係に鑑み建國後間もなく局地的に相互に領事を派遣してゐるほか日本の斡旋によつて一ヶ年半餘にわたる北鐵買收交渉も康德二年三月正式成立調印を見、また黑龍江その他に關する水路會議も康德元年九月大黑河において滿ソ水路協定の締結に成功した。たゞソ聯及び外蒙との國境方面においては今日でも絶えず紛爭が繰り返され、東部國境に

關してのみはソ聯との間に康德三年四月紛爭處理、國境畫定兩委員會設置の諒解が成立し、外蒙との間にも目下境界畫定委員會および境界紛爭處理委員會の設置につき兩國代表間に滿洲里で討議が繼續されてゐるが、これらの解決は早急なるを期待しえないのみならず、折角締結された水路協定も康德四年四月末ソ聯が一方的にこれが廢棄通告をなし來るなど日獨防共協定成立以後はその影響をうけて滿ソの關係はいまだ友好の域に達せず却つて前途樂觀を許さざるものあるは甚だ遺憾とされてゐる。一方中華民國との間にも建國以來の懸案たる奉山、北寧兩鐵路の直通連絡と國境への設關問題も康德元年七月一日に解決し通郵も康德二年一月より實施、二月より滿支爲替、小包、七月より電話連絡の實施、康德三年五月一日よりは滿支貨物連絡協定の實施期に入るなど、滿支交通經濟關係が次第に緊密化される一方、同年四月と五月には冀東防共自治政府との間に修交使節を交換して正式に外交關係を樹立し、四月末にはドイツと貿易協定を締結、六月一日よりその實施期に入り、次で十二月にはイタリー政府との間に奉天にイタリー總領事館開設に關する協定が成立した。滿洲國成立以來日本以外の國にして正式に總領事館を開設したのはイタリーをもつて嚆矢とする。康德四年には五月末をもつて滿期となれる滿獨通商協定が三ヶ年間延長される旨五月二十一日兩國政府から發表されたが、滿洲國の內外庶政の躍進は諸國の對滿認識を著しく改めつゝある。

康德四年度豫算總額は歲出入とも二億四千八百九萬八千七百六十圓で、前年度に比して二千八百六十九萬三千七百六十圓の增加である。豫算編成の方針は從來の消極的健全方針から積極的方針に轉換してゐる。

（ホ）　聖德記念繪畫館壁畫解說

1　五箇條御誓文。日本畫、奉納者侯爵山內豐景、筆者　乾　南陽。

圖は敎科書扉にある。右手御屏風の中に座し給ふは陛下であらせられる。正面神前に向つて誓を讀むは副總裁三條實美。陛下の御屏風の手前左向に座せるは同副總裁岩倉具視。神前に向つて列座せるは親王、公卿諸侯である。

2　農民收穫御覽。日本畫、奉納者侯爵德川義親、筆者　森村宣稻。

男女農民二十一名皆紺色濃き衣服をまとひ、刈るあり、運ぶあり、拔くあり、唐箕にかけるあり。鳳輦は正面に駐められ、淡綠の廉をさげ給ふ。輔相岩倉具視御前に參進跪きて稻穗を献じてゐる。其左手には農民に下された御菓子が、堆く盛られた箱が置かれてゐる。鳳輦の御右手には名古屋藩主德川慶勝世子德川德成が謹んで控へてゐる。

3　習志野之原演習行幸。日本畫、奉納者侯爵西鄕從德、筆者　小山榮達。

右手に天皇旗燦として輝き、その左、圖面の中央より稍右寄に拔劍の陛下馬上ゆたかに立たせ給ふ。その左手に西鄕隆盛が立つてゐる。淺綠の野ははるかに打續き、近衞兵は白煙をあげて演習は酣である。

4　侍講進講。日本畫、奉納者臺灣銀行、筆者　堂本印象。

天皇御修學の始は安政六年で實算御八才であらせられた。初め伏原宣明、其の子宣諭、專ら明經の家學を以て奉仕したが踐祚の後更に高辻修長、紀傳の學を以て奉仕した。尋いで明治に至り、福羽美靜、加藤弘之、元田永孚、西周、西村茂樹、副島種臣等、前後侍講に任じ、各自和漢洋の學を進講して君德の啓養に竭した。就中永孚は明治四年始めて出仕し、八年侍講に任じたが、前後二十年間殆ど一日の如く經筵に侍し、只管力を聖德の大成に竭し奉つた。天皇英邁の資を以て猶此の如く講學に勉め、常に修養を怠り給はず、その盛德大業前古に比ない事は洵に所以ありと謂ふことができる。圖は明治七年の頃元田永孚の進講を聽き給ふ光景である。卽ち陛下御二十三才永孚五十八才の頃の圖である。御机御硯箱等すべて明治神宮寶物館に奉藏のものであり、永孚は菊花御紋章入の椅子に腰かけてゐる。

5　能樂御覽。日本畫、奉納者男爵藤田平太郎、筆者　木島櫻谷。

天皇御幼少で御父帝を喪ひ給うたので、登祚の後は專ら母后英照皇太后宮に孝事し給ふ。皇太后は能樂を好み給うたので、能舞臺を靑山御所內に造營して御心を慰め給うた。この圖は明治十一年七月五日舞臺開の能樂に金剛唯一の翁を御覽遊ばされる圖である。皇后宮も行啓あらせられる筈であつたが俄に病み給うたので果し給はず、こゝは皇太后と陛下と御揃ひで御覽の光景である。

6　岩倉邸行幸。洋畫、奉納者東京商業會議所　筆者　北　蓮藏。

挿繪左廊下前に立たせ給ふのが陛下。勞り給ふ御やさしき龍顏に心惹かれる。白羽二重の布團の上には袴がおかれてをり具視の合

掌の手及び蒼顏の筋肉の動き、二人の女性の平伏の樣子は見る者の心をうたずにはゐない。圖中二個の四角なものは氷柱である。

7　不豫。洋畫、奉納者東京市　筆者　田邊　至。

明治四十五年七月初旬以來、聖躬少しく勝れさせ給はなかつたが、猶政務を聳せ給ふと平日の如くであつたが、十八日夜俄然發熱あらせられ、既に御昏睡に陷らせ給うたので宮中の驚愕一方ならず、國民も亦之を傳承上下愕然たる有樣であつた。御容態は日を逐うて險惡となり、禁廷轉た悲愁の氣に滿ち、皇族以下文武百官愁然として宮門を出入するもの日夜相踵ぐに至つた。此の時に方り、國民上下御平癒を希ふの餘、都鄙到る所神社佛寺に詣でて祈禱に餘念なく、特に都下近鄕の老若男女は期せずして宮城正門の前に集り、炎天の下、終日端座祈願するものあり、平伏獻欷夜を徹して退かざるものもあつた。かうした上下の赤誠も遂に其の効なく三十日午前零時四十分寶算六十一歲を以て崩御あらせられた。圖は明治四十五年七月、老若男女が宮城二重橋前に集り、遙に御座所を拜して御平癒を祈りつゝある所で、暮靄の迫らうとする光景である。

四　滿蒙の四季

上田恭輔

一　解題

1　作者

上田恭輔　ウヘダキヨウスケ　ドクトルオブフイロソフイ。明治元年東京に生まれ、長く滿鐵に勤務して滿蒙研究家として知られてゐる。その著書及び論文には「松本博士の大黑天考を難ず」「道教教典天福天樂經」「露西亞時代の大連」「國語化した梵語」「死線を超えたる滿鐵」「旅順戰跡祕話」「滿洲の古今」「趣味の支那叢談」「陶磁雜談」「世界地理風俗大系」中「滿洲篇北支那篇」等その數が非常に多い。

2　出典

「滿洲事變上海事變新滿洲國寫眞大觀」の附錄「新滿洲國の全貌」中の「春夏秋冬」の文である。同書は昭和七年四月大日本雄辯會講談社發行のものである。

3　主眼及び採擇の趣旨

現在世界の問題となつてゐる滿洲國について、その自然風物を興味深く知らせようとするのが本課の主眼である。前課に於て日滿兩國不可分の精神的契りを明にし、滿洲の政治的方面に注意を惹いたので、こゝに自然的方面を明にして滿洲國の全體的理解を來さうとするのである。

特に地理の教科書では味はふ事の出來ない文藝味をもつた教材であり、尙且つ島國に育まれた者には大いなる驚異であ

る大陸の自然現象であるから、生徒は津々たる興味をもつて學習し、滿洲の新天地に對する憧憬をいだくに至るであらう。

二　解釋

1　語釋

【滿蒙】　マンモウ　滿洲と蒙古。滿洲とは舊東北四省と稱された奉天・吉林・黑龍江・熱河の四省の區域を包含し、北及び東北は黑龍江によつてシベリヤに連なり、南東は鴨綠江・圖們江・長白山脈を以て我が朝鮮と接し、南は黃海・渤海灣・中華民國の河北省に、西は蒙古に接してゐる地方をいふ。區域は北緯三八、五より五三、五度まで、東經一一六度より一三五度に及び、面積は一一九萬餘方粁、卽ち朝鮮・樺太・臺灣などの一切を含む日本全面積の一・八倍、內地の約三倍に當る。我が租借地たる關東州並びに南滿洲鐵道株式會社の附屬地は、この地域中の三六〇〇方粁（三百分の一）に當る。蒙古は支那本土の北に連なり、また西は新疆省、北はソヴイエイトロシヤ、東は滿洲に接してゐる地方をいふ。面積は約三五〇萬方粁、我が國全面積の五倍を越えてゐる。

【一望千里】　イチバウセンリ　一度遠見すると千里の遠方まで見通すことが出來るほど土地の廣々として目を遮るもののないことをいふ。

【關東州租借地】　關東州は滿洲の奉天省の南部にある我が租借地。遼東半島の南端。明治三十八年九月ポーツマス條約によつて此の地の租借權は我が手に入つた。租借地とは、一國が他の一國の領地の一區域を、その承諾のもとに、一定の期間中自國の統治の下におく地をいふ。

【遼東半島】　奉天省にあり。黃海の北部に位し山東半島と相對して渤海灣を形成して居る。明治二十七八年の役馬關條約によつて我が國の版圖となつたのを、露・獨・佛の三國の干涉により清國に返し、後幾許もなく露國はこれを借りて經營し、特に旅順口軍港及び大連の設備は見るべきものがあつた。然るに明治三十七八年役の結果本半島に於ける露國租借地（關東州）は我が國に讓與され、我が國は關東州の名稱で大いに之が開發をなしたのである。

【奉天】　奉天省の首都。遼河の支流瀋河の邊にあるから又瀋陽ともいふ。舊淸勃興時代にはその京師であり、民國時代には遼寧と呼んでゐた。明治三十七八年戰役の時露國はこの地をその一大策源地としてゐたが、遂に我が爲に占領された。滿鐵・奉山・瀋海三鐵道の交叉點に當り、商業は遊る盛大である。人口約四六萬。

【千山山脈】　センザンサンミヤク　奉天省の南部、遼東半島の基部、中央を南北に走る山脈。

【武藏野】　ムサシノ　武藏國の平野。關東平野南西の一部。武藏國の中部秩父山麓以東の地をいふ。東京府・埼玉縣に亙り、多摩川・入間川等によつて折開され、概ね波狀の臺地をなしてゐる。我が國最廣の平野である。

【長白山脈】　朝鮮と滿洲の境界をなし最高峰を白頭山といふ。高さ八千九百呎、鴨綠江・圖們江・松花江等の諸大河の水源となり、北に延びて小白山となり　奉天の北にやゝ高き庫勒山脈を隆起してゐる。古書に不咸山と稱するものがこれである。

【視界】　見渡す限界。見える所全部。「視界を遮る」とは見通しの邪魔をする。

【洮南】　トウナン　興安省の都會は海拉爾（ハイラル）・滿洲里（マンチユリー）・洮南がその主なものである。もと蒙古コルシン部の屬地で、人口約四萬三千。物產は雜穀・畜產を主とする。その都市計畫は碁盤の目のやうに整然としてゐるが、市街はまだその一半が出來上つただけである。建設後僅かに三十年の新開地だけに著しく素朴な荒削りの感じのする町である。併し町は南東は鄭家屯を經て四平街へ四洮鐵道を通じ、北は北滿鐵道の一驛たる昂々溪へ洮昂鐵道を開いてゐる。さらに南は熱河へ東は長春への豫定線をもつてゐるから此等の悉くが完成の曉には、東蒙古開拓の一大中心として盛んな市況を呈する事と思はれる。

【海拉爾】　興安省呵倫貝爾（ホロンバイル）の首府である。アルグン河の上流に沿ひ、北滿鐵道の要驛で、また外蒙古の庫倫方面へ至る重要交通路の基點である。町には駱駝が悠然と歩き、羊群が蒙古人に牽かれて泥濘や水溜の街路を急いでゐる姿などを見る。又南部に接しては草原が展がり、低い砂丘の起伏があり、灌木の林があつて、全く北滿洲と異なつた景觀である。人口は露・支・蒙古人などを合はせて約一萬二千人。物產は羊毛・羊皮を主とし、工業も多少行はれる。

【黑河】　コクカ　黑河省（舊黑龍江省の一部）の黑龍江沿ひの地帶。同名の都會がある。

【一眸（イチボウ）の內にある】　一目で見取れる。眼の前に鮮かに大觀される。眸は「ひとみ」。

【揚子江】　亞細亞第一、世界第四の長流。長江・大江ともいふ。顏巴喀喇（ヤンチヤクラ）山脈の一部に發し上流をムルウスー河ともいふ。支那本部に入り金沙江といひ、岷江・嘉陵江・烏江・漢江等の支流を入れ、上海に近く海に入る。長さ

凡そ五五〇〇餘粁、河岸に大市名邑多く、數多の開港場がある。舟揖灌漑の便よく、支那中部の富は此の河の惠である。

【五箇月】十一月頃から三月頃迄の五ケ月。

【松柏】柏は支那では側伯（コノテガシハ）扁柏（ヒノキ）の類たる常綠喬木の總稱。日本ではカシハ。

【滿目荒涼】マンモククワウリヤウ　見渡す限り、ものみながうらさびれてものすごいこと。

【ダイナマイト】Dynamite　ニトログリセリンを珪藻土、煉瓦粉或は木粉に吸收させて製した工業用爆藥。スエーデンのアルフレッドノーベル（ノーベル賞設定者）の發明にかゝる。

【枕木】マクラギ　鐵道にて軌道上を通過する車輛の重量を均一に道床面に配布するためにレールの下に敷設した木材をいふ。近時はコンクリート製のものもある。

【駛らせ】ハシらせ。

【煌々】クワウ〳〵　きらきら光る。

【アイスホッケー】Ice Hockey　ホッケーの一種。陸上ホッケーを氷上でするのである。ステックは先の曲つた幅の狹いもので、球は厚さ一吋、直徑三吋のゴムの平たい圓盤、之を幅六呎高さ四呎の網をゴールの後に張つた中に入れあふのである。人數は双方七八人づつで、比の七人が連絡をとりながら球を敵地へ持つて行きゴールへ打込むのである。競技場は幅五八呎乃至一一六呎、縱は二一二呎から二五〇呎の矩形である。試合時間は四十分で、その中間に十五分の休がある。得點は敵のゴールへ球を打込めば味方が一點を得ることになり、試合時間中の得點の多少で優劣を極める事陸上ホッケーと同じである。このゲームの勝利の第一要素はスケートが上手であるといふ事で、世界中で一番上手なのはカナダである。

【噸】トン。Jon　二二四〇ポンドの稱で我が國の約二七一貫に當る。アメリカでは二〇〇〇ポンドのことをいひ、二二四〇ポンドのものをロングトン（長噸）といふ。

【松花江】ショウクワカウ　黑龍江の一大支流で源を長白山脈白頭山に發し、北流して土門河に合し伊通河を入れ伯都納の南で嫩江を入れ、河身が漸く長大となる。全長約二〇〇〇粁。河幅は伯都納附近で約〇・七粁。夏期は水量が多く下流から約一五〇〇粁の間は汽船が通じる。教科書頭註に「興安嶺に發し」とあるは嫩江を主として云つたものである。

【遼河】レウカ　蒙古から來り、蒙古ではシラムレン河といふ。奉天府の西を過ぎ遼陽の西堺で渾河を入れ、牛莊の西を經て更に東に流るゝこと十三哩で遼東灣に入る。奉天省第一の大河で、十一月下旬より三月上旬までは河水の氷結を見、船舶の交通が絶える。

【鴨綠江】アフリヨクカウ　滿洲と朝鮮の國境を流れる河。源を白頭山脈に發して南西に向ひ西朝鮮海に注ぐ。長さ凡そ五一〇餘粁。

【特產物】主要農產物は、大豆・高粱・粟・小麥・玉蜀黍・米・煙草。

畜產＝牛・馬・騾・驢・豚・羊。

鑛產＝石炭・石灰石・菱苦鑛。

工業＝油房・製粉・釀造等が主なるものである。

就中大豆は最も有名なもので世界の年額を比較すれば、

滿洲	三、八〇〇萬石
支那	一、五〇〇
（朝鮮）	四七五
北米	三七八
日本	二九八

となる。

【魁】サキガケ　先鋒。

【黃塵萬丈】クワウヂンバンヂヤウ　黃色の埃が萬丈の高さまで立ちあがる。これはこの地方の土質による。この細かい土埃が風の爲に甚だしく立上るのである。ここで黃塵萬丈がおこるといふのは雪解時の大風期のことをいふ。

【白髮三千丈】李白の秋浦歌「白髮三千丈、緣レ愁似レ箇長、不レ知明鏡裏、何處得ニ秋霜一」。秋浦は支那安徽省地州府秋浦縣。李白はこの地に謫居の身となつてゐた。「三千丈」は大げさに言つたもので「似箇」は如レ此の俗語である。謫居の身となつて愁へてばかり居るに由つて白髮が三千丈もあるやうに此の如く長く白くなつた。明鏡を見るとそれがありありと見えるので氣が附いたが、どこからこんな秋の霜が降つて來て白髮になつたのであらうか。「李白」は支那唐代の大詩人、字は太白、青蓮と號す。玄宗皇帝時代の人、肅宗の寶應元年十一月歿した。年六十二。

【愚か】オロか　いふに足らず。まだまだそれ以上。

【青天白日】セイテンハクジツ　韓愈の詩に「漢々輕陰晚自開、青天白日映ニ樓臺一、曲江水滿花千樹、有ニ底忙時不ニ肯來一」などあつて、天は晴れて青く、日は輝いて白い意による。

【天地晦冥】テンチクワイメイ　黃塵のため天地がまつくらになること。

【日中】ヒナカと訓む。

【明治三十八年三月十日】日露戰役に於いて明治三十八年三月九日以後は我が滿洲軍は全力をあげて奉天を包圍し兩軍死力を盡くしての大會戰となる。即ち露軍が沙河線より渾河の左岸に撤退するや、川村軍は撫順方面に追擊運動を起し、黑木軍は王富嶺・舊站方面に、野津軍は河

北の線に向つて追擊した。九日風塵天に漲つた。各軍は之に乘じて渾河の右岸に突進。乃木軍は既に三度旋回運動を終つて奉天の西北方を包圍し、全包圍軍みな勇躍して奉天の大都に向つて包圍を完結した。乃ち正面攻擊はまづ野津軍より開始され、各縱隊は齊頭面に駢進し、十日拂曉左右兩軍の進展に伴なひ、前面の敵軍動搖の色があつた。奧大將之に乘じて前進し、遂に前線總攻擊に移り奉天停車場を占領した。乃木將軍既に北方に向ひて陣地の轉換を決行し尋で更に左翼を北方に延伸した。因に敵は無謀の逆襲をなして重圍を脫せんとし頻々續行したが、遂に大敗遺走し有史以來の大戰は我が軍の大勝に歸した。今、三月十日は陸軍記念日となつてゐる。

【玄海灘】　ゲンカイナダ　九州島一帶の海面の稱。東は響灘、北西は對馬海峽東水道、南西は壹岐水道に交り、北側に沖島、西側に壹岐島がある。海面風波高きを以て知られる。

【宇都宮】　ウツノミヤ　栃木縣の中央にある都會。もと戸田氏の城下で、今は縣廳所在地で市制を敷いてある。東京より六十六哩。

【蒲公英】　タンポポ　菊科に屬する多年生草本。

【土筆】　ツクシ　(すぎな)トクサ科に屬する多年生草本。根莖は長く橫走し、地上莖は綠色で圓柱狀をなし、外面に縱行肋線があり、明瞭な節を有し各節には小形鱗狀先端の尖つた八―一四の輪生葉を生ずる。春季、地下の根莖から筆頭狀の蕃殖器を有する淡褐色に濃褐色の輪生葉を有つ莖を出す。この枝を土筆と稱し、食用に供する。

【楊柳】　原書にヤナギと傍訓がある。楊は川柳・猫柳とも云つて多く水邊に生ず。春葉に先立つて花をつけ、蕾は白毛を被る。枝が垂れないで揚起して居るもの。柳は枝の垂れる柳である。

【柳絮云々】　リウジヨ　柳の絮（柳の花）が春の雪のやうになつて飄つて落花し、荷（蓮の葉）の上にたまつた水珠が水銀を漾はしてゐるやうである、の意。

登二江州百花亭一懷二荊楚一　　梁元帝

極レ目纔千里　何由望二楚律一
落花灑二行路一　垂柳拂二砌塵一
柳絮飄二春雪一　荷珠漾二水銀一
試酌二新豐酒一　遙勸二陽臺人一

とあるによる。

【梁の元帝】　名は肅。梁の武帝の子。即ち西紀五〇二年に建てられた梁國第三代の皇帝。性殘忍であつたが詩文を以て著れてゐる。諸戰を經て承聖元年（西紀五五二年）江陵に即位し三年西魏巴蜀が入寇した時、元帝は拒いて克たず遂に西魏に捕はれて殺された。

【翩々】　ヘンペン　柳の花が輕やかに飛行くさまを形容したもの。

【四散】　シサン　四方に散らばる。

【盆栽】　ボンサイ　觀賞用にする爲に陶磁器の盆又は鉢に栽培した植物。その箇體の風韻を發揮し自然の雅趣を形成せしむることを目的とする。

【杏】　アンズ　イバラ科に屬する落葉小喬木。支那原產の植物。白色又は淡紅色の花をつけ、梅よりはやゝ大きい。

【李】　スモモ　イバラ科に屬する落葉小喬木。ハダンキヤウ・ヨネモヽの名あり。

【濃艶】　ノウエン　こつてりした美しさ。

【馥郁】　フクイク　芳しい香を發するさま。

【胡藤】　コトウ　胡は北方の胡(夷)。即ち北地にある藤。

【アカシヤ】　Acacia　荳科の喬木。オーストリヤの原產。樹高一三餘米に達し、初夏に葉腋に花枝を抽き枝端に白い蝶形の小花を開く。樹幹は材木とし又アラビヤゴムを採る。

【花には純白があり、淡紅色があり、又淡靑があり】　列敍法。

【ゴールデン―チエーン】　Golden-chain　金鎖の意。

【旅順】　リヨジユン　舊帝政ロンアが東亞に於て求め得た唯一の不凍港。東亞侵略の中心地としてロシアはここに難攻不落を誇る要塞を築造した。日露戰役に於て我が乃木軍がこれを攻略する爲、如何に苦鬪したかは世人のよく知るところ。今我が旅順海軍鎭守府の所在地。

【大連】　タイレン　關東州大連灣內にある。海を隔てて柳樹屯と相對す。明治三十一年露國は此の地を租借し、名を「ダルニー」と改めたが、我が國に占領されるや再び大連と改稱された。埠頭は數十艘の大船が同時に碇泊することが出來、滿洲一の門戸であり、東洋有數の大貿易港である。又滿鐵はここに本社を置き、從つて滿洲開發の策源地でもあつた。市街は舊帝政ロシア時代の計畫に成り、その規模の整備に於て模範的のものとされてゐる。

【竝木】　ナミキ　街路樹。竝は並の本字。

【大和男子】　ヤマトヲノコと訓む。

【母國】　ボコク　わかれ出た元の國。本國・祖國。

【偲ぶ】　シノぶ　思ひ出す。

【石榴】　ザクロ　ザクロ科に屬する落葉灌木。高さ三米に達す。葉は長楕圓形で周邊に鋸葉なく、略對生する。初夏の候枝梢上に通常赤色の肥厚せる革質筒狀の萼と深紅色の花瓣を有する美花を多數に着け、花後の萼は發育して果皮となる。熟すれば破開して紅色の肉で包まれた種子を現はす。地中海沿岸の原產であるが、我が國では各

地で觀賞用として栽培せられる。實石榴と花石榴との二種があり、その幹及び根の皮は藥用となる。

【ライラック】 Lilac 紫丁香花（ムラサキハシドイ）。一名「すわうぼく」又「はなはしどい」と稱す。ペルシャ原產の小喬木にして高さ六米許に達し卵形或は心臟形にして長き葉柄を有する葉を對生す。夏日紫色或は白色の筒狀にして先端四裂せる合瓣花を圓錐花序に排列す。本邦にては主として觀賞用として栽培す。

【艶麗さ】 さは動詞・形容詞について名詞とし又名詞につく接尾語。

【南滿洲】 南・北の別は區分の方法に種々あるため一定し難い。

（一）省による區分　黑龍江省を北滿とし、吉林・奉天二省を南滿とする時と、黑龍江・吉林二省を北滿とし奉天省を南滿とする時。

（二）鐵道の勢力圈によるもの　東支・南滿二大鐵道の勢力の及ぶ後背地を以て北滿と南滿とに分つとするもので、凡そ長春がその劃線上に立つ。

（三）緯度によるもの　滿洲の南端なる北緯三十八度半と、北端なる北緯五十三度半なる中間緯度、卽ち北緯四十六度六分線に分たうとするので、この劃線はほゞ虎林・哈爾賓・洮南の諸都市を連ねる。

（四）地勢によるもの　滿洲を南北兩斜面に分ける黑遼分水嶺によりて分けようとするもの。一般に滿洲北部の方を北滿、南の方を南滿としてゐるやうである。

【鶯も、雲雀も、杜鵑も、…】 併列法。

【杜鵑】 ホトトギス　杜鵑目杜鵑科に屬する鳥で、古來詩歌に詠まれてゐる。卵を他の鳥の巢中に產むを以て世に知られ、郭公よりは稍小である。

【松葉牡丹】 マツバボタン　スベリヒユ科スベリヒユ屬の一年生草本。高さ一四、五糎に達し、葉莖共に肉質である。葉は互生、厚くて線狀を呈し、基部に毛がある。花は紫・紅・黃・白の美しき花瓣を有する。南米の原產である。

【玫瑰】 マイクワイ　濱茄（ハマナス）のこと。バラ科の落葉灌木。北國海濱の砂地に自生し、又栽培せられる。莖は密生せる刺を有し高さ一、四五米、樹皮は灰白色。新梢は黃白色の氈毛を密生す。七月頃花を開き、大方紅色、香氣がある。根皮は染料に花は藥用に供せらる。

【勿忘草】 ワスレナグサ　紫草科の一年生草本。原名をミオリチスといひ、形田平子、瑠璃草に酷似し春より夏に亙つて淡青紫に黃斑ある花を開く。

【茜草】 アカネ　茜草科の蔓生草本。莖は方形で葉と共に逆刺がある。葉は長卵形又は長心形で四箇づつ輪生し長い葉柄を有す。花は淡黃色で七八月頃に開く。根は染料又は藥用に供する。

【豆蔗子花】 マメカキツバタ　かきつばたの小形のもの。

【哈爾賓】 ハルビン　松花江に臨み、滿洲沃野の中心で且つ四通の要衝を占めてゐるから東淸鐵道布設と共に露國は專ら此の地を經營した。市街は新舊の二部に分れて居る。支那固有の都を舊市とし、これより西北やゝ高所にあるのが新市である。

【北滿鐵道】 本線滿洲里から哈爾賓を經てポグラニーチナヤに至る一四八二粁で、他に寬城子に至る支線あり、總延長一七二七粁、軌間は五呎。一九〇二年露淸條約によつて露國の東亞侵略の動脈として敷設されたものであるが、日露戰役の結果長春以南は夙に我が國に割讓されてゐた。此の部分は卽ち南滿鐵道である。其の名稱も東淸鐵道・東支鐵道・北滿鐵道と變遷したが、昭和十年三月二十三日滿洲國は蘇聯邦より之を買收した。

【毛皮を捨てるや否や、一躍して白服に白靴の世界と變る】 具體的表現描寫により季節の變化を示したもの。

【樺】 カバ　殼斗科の落葉喬木。山中に自生する。幹の高さ二七、八米に及び周圍も二米―二米半に達する。外皮白色、內皮淡褐色、早春葉に先だつて花を開く。果實は翅を有す。木材は諸種の用に供せられる。

【楡】 ニレ　ニレ科の落葉喬木。山野に自生する。高さ七、八米。夏秋の候葉腋に淡綠色の小花を開き、翅果を結び、木材は諸用に供せられる。

【挽茶】 ヒキチヤ　製茶を碾きて粉にしたもの。熱湯を注ぎ飲用に供する。薄茶と濃茶とあり、獨得の綠色を呈しその色は黃色味のある靑色で、鶯の羽の色の如くである。

【靑磁】 セイジ　鐵分を含有した靑綠色の釉を施した磁器。千餘年前支那で創製されたものと稱せられる。

【メソポタミヤ】 Mesopotamia　アジア州の西部地方。テグリス・ユウフラテイス兩河の流域。西紀前二二五〇年頃バビロニアが興り次いでアツシリアが興つて大いに榮えた。西紀前六〇六年アツシリア滅後新バビロニヤの有に歸し、上古においては甚だしく文化の開けた地である。

【蒙古の沙漠】 ゴビの沙漠をいふ。ゴビとは蒙古語で岩盤などの小さい窪みに砂礫などの積んだ場所を意味する。ゴビ沙漠は主として花崗岩質岩石の風化によつて生じた石英砂粒の連續で、四五月頃の狂風の時など濛々たる砂吹雪によつて丘陵や谷も一朝にして變ることがあると云ふ。遠く我が國までも襲ふ黃塵はこの風である。此の沙漠の廣さは全蒙古の三分、沙漠の以北を外蒙古、以內を內蒙古といふ。

【入梅】　ニフバイ　梅雨期に入るといふのが本義であるけれど、ここでは梅雨期をいふ。

【空一面の大きい盥の水を、一度にひつくり返したやうな勢】　誇張法。

【渾河】　コンガ　奉天省の東西部を流れる遼河の支流。九連城から遼陽を經て奉天府に達する進路にある。水勢が頗る強く、小遼河といはれてゐる。

【太子河】　タイシカ　奉天省にある。遼陽の東南から來り、三流に流れて遼陽城東を流れる急流である。雨季の候には三流合一して其の幅一六〇〇米にも至る。

【河床】　カシヤウ　川の底。

【男らしい雨】　擬人法。

【堰堤】　エンテイ　河流を堰いて貯水池（上水用又は發電用）とする、そのせき。ダム。

【裕に】　ユウに　十分に、の意。通例「優に」と書く。

【上水】　ジヤウスヰ　下水の對。飲料用の清水を通ずる溝。水道のこと。

【天は高く馬は肥え】　蒙古の地秋漸く老いて馬匹肥健して匈奴人が得意の候となる意を「秋高く馬肥ゆ」といふ。

2　文の構成

第一節　初―一八頁四行　　滿蒙の地勢、特にその平原について。

それによつて「秋」を「天」と分り易くした語である。漢書の趙充國傳に「匈奴秋に到れば、馬肥え、變必ず起らん。宜しく豫め備を爲すべし」などある。「事實に於て」といふのは、「文字通り形容だけでなく」の意。

【中秋】　陰曆八月十五日をいふ。仲秋を書く時は陰曆八月の異稱である。無樂錄に「八月十五日中秋節、此日三秋恰半、故謂之中秋、此夜月色倍明于常時、又謂之日夕。」

【持つてこいの】　あつらへむきの、ちやうど工合のいゝ。

【安奉線】　安東と蘇家屯まで二六〇、二粁の鐵道で南滿洲鐵道に屬す。明治四十四年十一月に今の線路に改造した。

【深山幽谷】　シンザンイウコク　人里離れた奥深い山や谷。

【比】　ヒ　くらべもの。仲間。類。

【實利本位】　ジツリホンヰ　精神的のものでなく實際の利益を第一とする物質至上主義の意。ここは風流よりも金まうけを好むことである。

【蟋蟀が合奏を始めると】　擬人法。

第二節　一八頁五行―二〇頁六行　　冬の滿蒙。

1　山川草木の結氷と雪及びこの期の競技（一八頁五行―一九頁五行）

2　冬期交通運搬の活躍（一九頁六行―一九頁一一行）

3　松花江・遼河及び鴨綠江の橇の輸送と臨時宿屋（一九頁一二行―二〇頁六行）

第三節　二〇頁七行―二三頁三行　　南滿の春。

1　春の魁滿洲の黃塵（二〇頁七行―二一頁四行）

2　四月中旬一夜の變化（二一頁五行―二一頁一〇行）

3　春の植物（二一頁一一行―二三頁三行）

第四節　二三頁四行―二七頁三行　　夏の滿蒙。

1　初夏の植物と九十度に昇る氣溫（二三頁四行―二四頁二行）

2　新綠（二四頁三行―二四頁六行）

3　盛夏の氣溫と汗の蒸發、日光の直射（二四頁七行―二四頁一〇行）

4　日出日沒時と夜空のすが〳〵しさ（二四頁一一行―二五頁四行）

5　日中と深夜との氣溫の變化（二五頁五行―二五頁一〇行）

6　七月下旬から八月中旬までの豪雨と鐵橋、貯水池（二五頁一一行―二七頁三行）

第五節　二七頁四行―終。

1　短い秋の植物（二七頁四行―終）

2　秋草の美や蟲の美音を顧みぬ滿洲人の農作物收穫（二八頁三行―二八頁六行）

3　**文　意**

滿洲の地勢の中でも特に平原について觀察し、その滿洲に於ける重要性を指摘し、次いで四季にわたつて氣溫、降雨、植物について述べた。

4　**鑑賞批評**

自然地理の紹介であり乍ら、文藝味の溢れた叙事文である。讀者が島國に育つたものであり、この國の自然風物に慣れてゐるものである事をよく念頭において書かれた文章である。卽ち日本の風物自然との相違點に常に心を配りつゝ、讀者の心にアツピールする題材を網羅する事に注意が拂はれてゐる。先づ第一節に於て地勢を說明するに當つて滿蒙の大平原に着眼した事、次に第二節に冬の結氷の有樣及び交通運搬の狀況、第三節に於ける春の黃塵、突如一夜にして綠地となる光景、百花爛漫の春の花、第四節に於ける初夏の花、新綠、さては粘りつかぬ汗、すが〳〵しい夜空、大氣の急變な變化、男らしい豪雨、第五節の中秋の滿月、安奉沿線溪谷の紅葉、濃艶華麗な秋の花等何れ心惹かれぬ題材はない。

その叙述に當つても讀者の心を惹く點にはよく注意が拂はれてゐる。次に各節の順を追うて述べて見よう。

第　一　節

先づ初に「滿蒙と言ふと、多くの人が一望千里の大平原を想像する」とのべてすべての人をうなづかせておく。しかもすぐ「しかし」といふ副詞味の强い接續詞をきかせて關東州租借地及び奉天以南の地等が豫想を裏ぎるものである點に注意して驚かせ、更に「しかし」によりて讀者の心を滿足させる一望千里、天地一眸の內にある壯觀を描出する。まことに變化の妙を酌むべきであらう。この間の消息は二つの「しかし」にかゝつてゐる。この點特に注意したい。

大平原の描寫は又おもしろい。次に句をあげて鑑賞を試みよう。

〔遙か東に長白山系を雲か山かと認めるだけで、云々〕

滿鮮國境に連互する長白山系が奉天から北行して見えるといふのだから、その平原振りも略ゞ想像し得よう。日本內地のやうな島國に育つた者には「雲か山か」といはれゝば賴山陽の詩「雲か山か吳か越か」でも聯想する位な所であるが、それは水上のこと。これは、見はるかす地平の果てにうす紺靑のなみが低く沈んだ姿である。

〔洮南以西の地、或は海拉爾地方或は黑河の平原に立つと、云々〕

洮南は內蒙の沙漠乃至半沙漠地帶に連なる處。思ふに浩々乎として平沙限りなしの趣であらう。海拉爾は大興安嶺を越えて、蘇聯シベリアの大平原に連なるホロンバイル平原の中心地。黑河は北滿中部平原のアムールの黑い流に連なる地帶。殆ど眼を遮るもののない貌を形容して「天地一眸の內にあり」といつたわけ。廣漠無邊の風物を寫すに此等雄大な漢語が十分利いてゐることに注意したい。

第　二　節

冬の天地である。「先づ山川草木あらゆるものが結氷する」と前提して、松柏の黃變、滿目荒涼一點の綠色を見ない光景から、五六尺の深さまで岩石の如くなる畑、鐵道を架けてもよい河や湖沼、小學校庭に於ける深夜のアイス-ホツケー等何れの一つも興味の湧く題材である。特に酷寒の結氷を述べて脅威をさへ感ずるかに思はれる後にアイス-ホツケーの記事によつてこの國で見得ない樂しみを思はせる等心を配つた叙述である。

次は橇や荷馬車による交通運搬の活況である。「何千萬噸と稱する大豆その他の穀類が、或は橇或は八頭曳の荷馬車によつて、北から南へと運ばれる」如何にも物語的な光景であり表現ではないか。後に記された氷上の臨時宿屋の記事と共に現實の勞苦を忘れて詩の國として憧れをさへ感じさせる。

第　三　節

春の魁として萬丈の砂塵を點出してまづ讀者の心を奪ふ。

〔滿洲では黃塵萬丈が起つて、云々〕

支那文學の誇張は天下に定評がある。「白髮三千丈」はその代表的な例としてよく引用される。しかし、「黃塵萬丈」だけは支那文學一流の誇張ではないといふのである。ない證據は晝の日中電燈をつけねば一米前もみえず、奉天會戰の快勝も黃塵に負ふ所多大だし、度をすごせば海を渡つて宇都宮あたりまでも黃沙をふらした程だと意想外な例をならべて說明してゐる。因みに奉天戰の黃塵に就いては櫻井忠溫少將が次の樣に書いてゐる。「三月九日奉天附近には恐しい大風が吹いた。石を動かし砂を飛ばし、目もあけて居られなかつた。それも日本軍の背後から吹いたので、露軍の彈は逆戻りして、味方うちをやるかと思はするほど、恐しい風であつた。翌くる十日は、一天拭ふが如き麗かな日であり、その朝目出度く奉天を占領した。」

次にいよ／＼春らしい光景に移る。四季を叙するに春から初めずに冬からはじめた手法、それがこゝに生々と効果を表してゐる。卽ち結氷の冬、一點の綠を見ない冬、から黃塵に魁された春が來た。しかもそれは「四月の中旬になると、突如一夜にして地上に綠草が萌え出で云々」の光景となる。こゝに讀者は滿蒙の人々と共に春に驚き春を歡ぶ思ひに充たされるのである。

〔柳絮春雪を飄して云々〕

ヤナギ、ドロヤナギ、それからポプラ、凡そ鮮滿地方にありふれた楊柳類の花は、例のエノコロのほゝけたのを考へれば間違ひないので、それが晩春の頃、風がなくてさへ翩々と飛散り、吹きたまつた所は作者は紹介的にたゞ美しいといつてゐるだけであるが、どんよりした晩春の午さがり、柳絮のたえまなく散る道など、深い春愁を感じさせずにはおかない。

〔胡藤といふのは、アカシヤを詩的に和譯した名前で、云々〕

アカシヤといつても鮮滿一帶のは大部分にせアカシヤである。草は香水の原料になるといふくらゐだから匂は實に深いが、甘酸つぱくて頭の痛くなるやうなあくの强いところがある。近くで見ればきれいだが、遠目には甚だパッとしない。ともかくその感じは頗るエキゾチツクで、胡の藤とはそこを狙つての譯だらうが、なか／＼風流氣がある。

〔櫻と藤は、大和男子が母國を偲ぶために、第二の故鄕へ日本から輸入した、懷かしい憧れの花である。〕

讀む者に滿洲自身を懷かしませる文である。日滿の契りを讀んだ生徒に、かうしたところにも着々二つの融和が成長してゐる點に氣づかせたい。

〔この他石榴・牡丹・芍藥・野生のライラツク云々〕

益ゝ强い憧れを感ぜさせる文である。

〔滿洲は決して荒地ではない。〕

滿洲といはれて、日本人の直覺に來るものは、廣袤千里とか零下三十度とかいふ荒々しい自然の風貌である。さういふ先入觀を覆す爲に作者はいま春の滿洲の百花繚亂ぶりを語つてゐるのである。此の短い一句が楔のようによく利いてゐる。

第四節

滿蒙の夏である。先づ北滿に於ける冬から夏への飛躍を述べる。そして新綠の美しさをいふ。

〔蘇生した松柏の葉までが、云々〕

一八頁「日本でならば常磐の綠に誇る松柏も凍えて黃色になる。」の一句を想起すれば蘇生といふ言葉が文字通りの意味だとわからう。鶯の羽のやうに美しい挽茶色の松柏の葉は洋畫家ならずとも一見したい思ひがするではないか。

〔星が近く大きく見える夜の空は、云々〕

鮮滿を旅行してきた人は殆ど例外なく空の美しさをほめる。濕氣が少なく雨が少なく、從つてもろ／＼の天象も日本內

地よりは遙かにかつきりと見える。同じやうな條件にあるメソポタミヤの平原でもきつと天體の印象は鮮明であらう。從つて住民の天體への關心も強まらうし、觀察にも便であらう。これが六千年も昔にメソポタミヤに天文學を發達させた理由であらうといふのである。

〔豪雨とはかゝる雨を言ふのかと思はれるほど、云々〕

いかにも滿洲にふさはしい雨である。勇壯極りなく、息づく隙もない大降雨、そして大河の氾濫をさへ惹起す亂暴さである。しかし忽ち降り忽ち青天白日となる。その點「まことに男らしい雨」だといふのである。斷と剛と淡、かうした點を男らしいと形容したのであらう。

第五節

愈〻秋である。「天高く馬肥ゆ」とか「中秋の滿月」とかいかにもふさはしい表現である。

〔濕つぽい日本の花〕

日本の花がすべて濕つぽいと讀んではなるまい。濕度の高い日本の花と讀むべきであらう。空氣の濕つぽい、濕度の高い日本――これは世界でも有名だ――では花の色も澁くくすみ勝ちだといふことはうけとれる。桔梗の紫、撫子の紅、ともに雨の少ない滿洲産のよりは色がうすいといふことはいかにもその通りであらう。だが作者は決して日本の花そのものが濕つぽいなどと言つてはゐない筈だ。

〔實利本位の滿洲の人〕

日本人の季節に對する感覺、花鳥風月の傳統といふものは聊か世界に誇るに足るものであつて、それがたま〳〵かゝる感覺にとぼしく傳統を持たない滿洲人と對比してきは立つてみえたわけであらう。滿洲人は美の感覺を全く缺き、金さへ儲ければいゝと考へてゐる人達だなどと行きすぎてはなるまい。

三　備　考

1　指導研究

文章の中心が政治的滿洲でなく自然的、風物的滿洲を紹介する點にあることを念頭において指導しなければなるまい。文章の上に於ては無味乾燥に陷り易いこの種叙事文をかく興味深く表現した點に妙味を探らせたい。內容それ自身が讀者の興味をひくものであるのみならず、理論的說明的な文と文藝的情緒的な文とが綾なされてゐる點に注意をしなければならないであらう。

2　參　考

賴山陽の「雲か山か」の詩

雲耶山耶吳耶越　水天髣髴青一髮
萬里泊舟天草洋　煙橫篷窗日漸沒
瞥見大魚波間跳　太白當舟明似月

補　材

久方の空ひろらなり鴨綠の流れのはてに低き山一つ

次の平福百穗の歌と共に、改造社の現代短歌集の中より採用した。本課が滿蒙の四季を扱つた作品であることにちなんで、アラ、ギ派の巨星等の滿家に關係した歌を採用したのである。島木赤彥が大正十二年に、滿州方面に遊んだ際の詠である。

【久方の】　ヒサカタの　天・空・日・等の語につく枕詞で　一　ある。枕詞の語源は種々に說かれるが、――例へば、日

刺方、日離方、久しき方、瓠形といふ如き――未詳とするが良い。

【ひろら】　廣々とした有様をいふ。「ひろらか」の轉約である。

【鴨綠】　アリナレ　鴨綠江の名を我が國では古く「ありな川」といつて居た。古いものとしては、平安朝末の顯昭の六百番歌合陳狀などに見えるから、平安時代よりの名と考へて良い。朝鮮滿洲の堺をながれる大河であることは衆知の通りである。

滿洲の廣漠とした原野に立つて、遙かに鴨綠江の流れゆく限りを遠望して、その漠々として莊嚴ともいふべき單調な一望の曠原に觸發せられた歌である。遙か彼方にたゞ低い山が一つかすかに見えるばかりといふ大原野、そこをゆるやかにうねり流れる鴨綠江、全體として如何にも廣大である。その廣々とした大觀を、野の廣さをいはずして、「空ひろらなり」と表し得た所、力を感じる。「流れのはてに」といひ、「低き山一つ」といつた所、人の心の視線を遠くへぐん〳〵と誘ひ込み小さき山を凝視せしめるはたらきがある。

曠原に濁りうねれる太子河はいづらに流れゆくにやあらむ

百穗畫伯が滿洲に遊んだ際の歌が四首のせられてゐる中の一首である。他の三首は

山だにも見えぬこの原とよもしし戰の蹟に我は來にけり

夜をつぎて戰ひ止まぬこの原にみちのくの兵士多くはてける

土凍てゝ見とほす原のま面に戰ひはてしかあはれ吾が兄は

であつて、肉親の兄の戰死せられた曠原に立つての詠であるだけに、誠に引き緊つた感慨のあふれた作である。

【曠原】　ヒロハラ　滿洲の廣漠たる原野をさす。

【濁りうねれる】　ニゴリうねれる　濁流をたゝへてうねり流れてゆくの意。

【太子河】　タイシガ　長白山脈に源を發して本溪湖より西流して、遼陽を南に經て、渾河と合して遼河にそゝぐ川である。日露戰爭、遼陽城の戰の時には、この太子河も一の激戰地となつて、多くの勇士が戰死した處である。

【いづら】「いづれ」といふ語の古語であつて、「いづ方」といふ語によく當る。「いづらに」は、どちらの方へといふ意。

この廣々とした滿洲の原野を、濁流をたゝへてうねりつゝ流れてゆくこの太子河は、全體どこの方へ向つて流れてゆくのであらうかといふ意である。一望無限の平野の彼方へ、音もなく流れ行く河、その行くへはいづこかと思ひやるのであるが、その背後に誠に大きくとりとめもない廣やかさに對する、しみじみとした哀感がある。

【島木赤彥】　アラヽギ派の歌人。本名久保田俊彥。明治九年長野縣諏訪町に生れた。長野師範を卒業し、教員をすること十六年、その間子規の歌風を慕ひ、左千夫に師事し、萬葉を研究した。大正三年上京して專ら和歌に專念、多くの名作を遺した。大正十五年三月五十一歲で病歿した。

【平福百穗】　ヒラフクヒヤクスヰ　本名貞藏。明治十年秋田縣角館町に生れた。美術學校に入つて畫事を學び、大正三年頃より畫名大にあがり、十一年に美術院の審査員となり、昭和七年美術學校の教授となつた。獨創的な名畫多く、大正昭和の一偉才として認められたが、昭和八年十月、五十七歲で歿した。和歌も、アラヽギ會員として有名である。

五　叡　山

一　解　題

1　作　者

夏目漱石　ナツメソウセキ　本名金之助。慶應三年、東京市牛込區喜久井町に名主夏目直克の末子として生まれた。三歳の時養子にやられたが十歳の時實家に歸つた。戸山小學校・市ヶ谷小學校・錦華小學校を經て一ツ橋中學校（府立第一中學校前身）入學半途退學、その間二松學舍に漢文、成立學舍に英語を學んだ。明治十七年、大學豫備門に入り、初め建築科に志したが、のち、文科に轉じた。一高卒業後は帝大英文科に入つたが、その頃正岡子規と相知り感化を受けること大であつた。卒業後は大學院に籍を置き、東京高師に教鞭をとつたが、肺患の氣味あり、保養のつもりで二十八年松山中學に赴任し、更に五高に轉任した。三十三年英國へ留國したが、發狂の噂まで立てられた。歸朝後は、本郷千駄木町にあり、第一高等學校教授に任じ帝大の講師を兼ね、大學では「文學論」を講義した。三十八年に及び初めて「帝國文學」に「倫敦塔」を發表、つゞいて「ホトトギス」に「吾輩は猫である」を發表して、忽ち文名を馳せた。やがて四十年、教職を去り、東京朝日新聞に入社した。この間「坊ちゃん」「草枕」「二百十日」「虞美人草」「それから」「門」「永日小品」「文藝評論」「思ひ出すこと」などの諸篇を發表して、旺盛なる創作活動を示した。四十四年、文學博士に推されたが、之を辭退した。その頃から宿痾と神經衰弱とは交互に發病した。

晩年の作には「彼岸過迄」以後「行人」「心」と深刻な心理主義傾向の作に向つたが、「道草」「硝子戸の中」を經て「明暗」を朝日新聞に連載中、大正五年十二月九日、享年五十歳を以て胃潰瘍のために長逝した。墓石は小石川區雜司ヶ谷にある。

その作品の特色は自然主義文學とは反對に、一貫して餘裕を存する所にあり、餘裕派の名の存する所以である。然し晩年の作は初期の輕妙絢爛なるものに比して內面的心理描寫に沈潛して行つた。評論の方面に於いては「文學論」「文學評論」は時代の文學に示唆を與へるところがあつた。

全著作は、漱石全集二十卷に收められ、氏の生活は、夫人の話述による「漱石の思ひ出」に詳しい。號漱石は、晉書の「漱ㇾ石枕ㇾ流」からとつたもので、氏らしいユーモアと皮肉に富んだ雅號であつた。

2　出　典

小說虞人草の最初である。虞美人草は明治四十年六月二十三日から四十年十月二十九日に出來上つたもので、繼母が自分の愛孃藤尾に後を讓りたい心から、それとなく先妻の子（甲野さん）を追出さうとしていろ〳〵策動するが、とう〳〵失敗に終るといふ筋である。

3　主眼及び採擇の趣旨

四課にまたがつた國民的教材の後に、方面を變へて配された文藝的教材である。二人の青年がお互に無駄口を利きながら、春の日永にぶらり〳〵と四明嶽へ上つてゆく情景である。その中にあらはれた低徊趣味、漱石風の氣品ある滑稽諧謔の味、自然と人事とにわたる寫生の筆致、暫く人生を忘れて洒脫な詩境に遊ぶ俳諧的態度等を讀みとらせ、その妙味にひたらせたい。氏の作品としては第一卷に「峠の茶屋」と題して「草枕」を、第二卷に「猫の垣巡り」と題して「吾輩は猫である」を出した。今又こゝに本文を以て漱石調の妙味を酌む第三段階とした。

二　解　釋

1　語　釋

【叡山】　エイザン　比叡山。山城、近江の境にあり、舊平安城の鬼門に當り皇城鎭護の寺延曆寺のある山。山の大部は古生層の岩石から成り、南部及び東麓には花崗岩の迸發があり、花崗岩や古生層に接觸變化を與へ、接觸鑛物たる櫻石等が山の南麓に於て發見される。山嶺に二高所がある。西にあるを四明嶽といひ標高八三九米、東にあるを大比叡といふ。高さ八四三米。京都方面から見た山容は頗る美しい。四明嶽は京都府に屬し、此處から京都近江盆地を東西に見下し、西には丹波高原が波浪の如く見える。四明嶽の南側には岩塊がある。これを將門岩と俗稱する。曾て平將門が藤原純友と共にこの山に登り王城の盛觀を見て不軌の念を發したといひ傳へる。山の東の中腹の凹地に延曆寺がある。往昔叡山の三千坊と稱し子院が附近に無數にあつたが、元龜二年織田信長のために燒き拂はれ、爾後豐臣德川二家の力によりて復興したが、昔日の面影はない。元來叡山には四箇の谷がある。東塔、無動寺、西塔、横川である。無動寺は南に、東塔は東にあり、此處に根本中堂があつて叡山の中心をなす。西にあるを西塔といひ、西塔を北に距る約四粁に横川がある。この山に登るには京都方面からの四路と、滋賀の坂本からの道とがある。京都方面のは最南にある白川道を始め、雲母坂、西塔越、長谷出道等である。中に雲母坂は修學院から上るもので最も嶮峻である。延元年間後醍醐天皇の屢〻叡山に行幸されたのもこの道で、中腹に王事に仆れた千種忠顯の碑がある。雲母坂の北にあるのは西塔越で、直ちに西塔に至るもの、今この邊は叡山電鐵の索線が架けられてゐる。最北は八瀨村から上る長谷出道で元黑谷を經て外國人の避暑地として一時盛んであつたテント村を過ぎ西塔へ出るものである。こゝに描かれてゐるのはこの道である。また直ちに横川へ出る山道もある。東側の坂本からの道は直ちに東塔に出で根本中堂に至るもので、此處にも比叡山鐵道の鋼索線が設けられてゐる。この山の登攀は老幼婦人にはなかなか困難であつたが、今は兩側に鋼索線が出來て登山が頗る容易となつた。

【隨分】　ズヰブン　(一)分際にしたがつて。分相應に。(二)

すこぶる。よほど。こゝは(二)

【無造作】　ムザウサ　(一)ザウサないこと。たやすいこと。手輕いこと。(二)費用のかゝらぬこと。こゝは(一)

【反を打つた】　ソリをウつた　廂の反りかへつてゐる。

【中折れ】　ナカヲれ　(一)中央の折れて曲り、又はくぼむこと。(二)なかをれげた。表附の駒下駄の一。臺の中央の折れて自由に曲る下駄。(三)頂の中央の縱に折れくぼんだ鍔廣の帽子。こゝは(三)

【深き眉】　フカきマユ　深い思索家らしい眉毛の意味に解したい。甲野さんの性格より考へて。眉毛も濃く重厚で、眉と眼の間が、まのびをしてゐない相貌を思はせる。

【吹けば搖るぐかと…】　おぼろに霞んだ大氣の中に漂ふ大空の藍色が、ゆるぎ波立つかと思はれるほどの柔かさをたゝへてゐる中に、の意。

【どうする氣か】「このわれをどうする氣か」の意。擬人法。

【頑固】　グワンコ　かたいぢなこと。

【日項からなる廂】　平常いつもかむつてゐる帽子の廂。

【頸窩】　頸の中央の窪んだところ。

【頓着】　トンヂヤク　普通「トンチヤク」と清んでよんでゐるから、教授は慣用音に從つて良いであらう。貪著とも書く。貪愛染著の略。(一)佛經の語。むさぼりつくこと。執着。(二)轉じてものにかまふこと。掛念。心配。こゝは(二)

【按排】　アンバイ　(一)物事の變遷に隨ふこと。(二)善く處分すること。又、程よくすゑおくこと。(三)樣子・狀態。こゝは(三)

【いとど】　(副)最最の約。彌々。甚しく。益々。

【榮螺】　サザエ　拳螺、榮螺子、とも書く。壺燒で有名な海産螺貝。殆ど本邦到る處に棲息し、多く外海に面した一―一〇米位の深さの海底岩礁などに發見せられる。カジメのやうな海草を常食とし、六月頃に産卵する。貝殼の形態はよく知られた如く拳狀を呈し、殼質はかなり重厚である。螺層の數は約六階で、各螺層の周緣には、二列の突起を有するものと、有しないものとがある。臍孔はない。殼表は暗青色であるが、多少赤味を帶びたもの等變化がある。殼口は圓く、殼口內面は眞珠光澤が強い。蓋は圓くかなり厚い。その外面は隆起した螺旋狀の肋があり、且つ多くの細かい顆粒を有してゐる。內面は褐色で約四卷、左卷である。分類上の位置は腹足類の櫛鰓目に屬し、拳螺科に入れられてゐる。

【榮螺の親類】　こぶしを振りかためた形容。「にぎりこぶし」といふのを面白い譬喩で表現したもの。

【平八茶屋】　古來有名な料理屋の名である。只今も存續してゐる。

【春はものの句になり易し京の町】　頭註漱石の句を、そのまゝにこゝに用ひたものである。句意は、「京都の春は、まことに詩趣にあふれた景色が多く、どこを見ても、すぐに俳句としてまとめることが出來るほどだ」の意。磧にのには場所を示す助詞。

【七條から一條まで縱に貫いて烟る柳の間】　これは、鴨川の堤防に植ゑられた柳が、春になつて、若葉を出して、煙つたやうに遠くから望まれる光景をいつたものである。鴨川は京都市を縱に貫流してゐるから「七條から一條まで縱に貫いて」といつた。但し原文には「横に貫いてとあるが、横では全く意味を成さない。恐らく作者の筆のまちがひであらうと思つたので、本課には、縱と改めたのである。

【溫き水打つ白き布を】　鴨川晒(さらし)をしてゐる光景。「溫き水」は春の水流であることをいふ。「打つ」といふのは、晒布を水中で洗ふ樣子が、兩手に持つた布で水面を打つ如き動作に見えるからである。現在は漸次に晒は少くなり、友禪染を、前同樣の方法でさらしてゐる光景の方が多く目につく。

【高野川の磧に數へ盡くして】　鴨川の一つ上流が高野川であるから、鴨川より高野川の磧に沿うて上れば、かやうな晒布をしてゐる光景がいくつも目に入る。それを見つくして、もう晒をする者もない上流にまでたどつて來たことをいふ。

【大方は二里餘りも云々】　二里といふのは、大體、七條大橋のあたりから比叡山麓の平八茶屋のあたりまでの距離に當る。しかし、比叡へ上るには、七條から歩き出すものではない。

【渥溪】　センクワン　谷水の流れる貌。又その響。

【折れる程に曲る程に】　進み行く道が、かなたこなたで屈曲してゐることをさす。

【山に入りて春は更けたるを】　山に入つて見ると、春はたけなはを過ぎてゐるが。

【山を極めたらば】　山の頂上まで登つたならば。

【大原女】　オハラメ　京都の北方愛宕郡大原村の婦人、風俗は近來白川・賀茂などに感化されて來たが、江戸時代末葉から傳はる正裝があつて、今も往々見ることが出來る。木綿小紋に黑掛襟のついた衣服、御所染といふ白小紋のある三尺帶の上に帶を抑へる抱え帶をしてその房を前に下げ裾をからげて白腰卷を出し、黑手甲に四隅に房のついた歌繪の繡のある手拭を頭に被り一は帶に挾む。體格極めてよく、働き多いのを女の誇としてゐる。この姿は昔阿波內侍が建禮門院に仕へ侍りし時、山に柴を刈りに出た哀れ深き姿である。京で儲けた錢で日用品を買ひ、星を戴いて出た村へ、月を踏んで歸るのである。

【虞美人草】　グビジンサウ　ひなげし　觀賞用として栽培される。歐洲原產のケシ科二年生草本。莖は高さ數十糎に達し、淡綠色で粗毛を有し、弱々しい。葉は不規則に羽狀に分裂する。花は二枚の蕚片に包まれ長い柄を有する。花瓣は薄い紙質で鮮紅色又は淡紅色で大きく四枚あり、雌蕊は倒卵形で大きく雄蕊は多數ある。九月下旬から十月上旬に花園に直接下種し、冬季は簡單な霜除けを施す。

項羽死シテ虞姫自刎ス、其墓上ノ草、人呼ビテ美人草トスト云（古文眞寶注）

この草花の名が本書の題目となつた事情は同書の出版豫告に次の如くかゝれてゐる所から察することが出來る。

昨夜豐隆子と森川町を散歩して草花を二鉢買つた。植木屋に何といふ花かと聞いて見たら虞美人草だと云ふ。折柄小說の題に窮して豫告の時期に後れるのを氣の毒に思つて居たので好加減ながらいい花の名を拜借して卷頭に冠らす事にした。純白と深紅と濃き紫のかたまりが、逝く春の宵の燈影に幾重の花瓣を皺苦茶に疊んで、亂れながらに、鋸を欺く粗き葉の盡くる頭に重きに過ぎる朶々の冠を擡ぐる風情は、艶とは言へ、一種妖冶な感じがある。余の小說が此花と同じ趣を具ふるかは作り上げて見なければ余と雖も判じがたい。

2　文の構成

第一節　初―三五頁一行　二人の歩き乍らの對話。

第二節　三五頁二行―終　高野川磧から八瀨への道。

3　文意

春の日永を駄洒落を云ひ乍ら四明嶽へ登る二人の青年。一人は、計畫もなしにとにかく登らうとする四角な人、宗近君、他は計畫的な考へる事を先とする細長い甲野さんである。底まで藍を漂はしてゐる空があり、屹然と叡山が聳え、潺湲たる高野川の響がある。峯の裾を縫ふ小暗い路を大原女が來る。牛が來る風景。この風景の中にこの二人の青年のゆく低徊趣味の世界、氣品ある滑稽の世界、それを生々と描寫し出す寫生の妙筆が動く。

虞美人草は漱石が朝日新聞に入社後長篇ものとして最初に書かれたものであるが、氏自身冷汗ものだとしてゐるものである。評者はこの作中の甲野さんと、小野さんと宗近君が、それ〴〵人間の心の一方面である知情意を代表する樣に作られてゐること、厭味な警句が多く、筋が通俗小說である點等をあげて、不成功の作品であるといふ。

然しこの作品の讀まるべき點はこれ等の點ではない。卽ちこの課にとられてゐるやうな情景である。或は保津川の奔湍を舟で下る光景である。或は春雨のしと〳〵と降る日、京の宿屋に閉ぢこめられて、頰杖を突き乍ら、隣家の琴の音に聞き恍れるところである。この課に於てはその情景にあらはれた低徊趣味、上品な滑稽味、寫生の味はひ、俳諧趣味などを味はなければならぬ。次に鑑賞を進めて見よう。

〔顏も體も四角に出來上つた男……四角な胸をつき出して……細長い眼の角から斜に相手を見下した痩せた男〕

二人の青年の風姿を描くに單純にかういつてのけた。しかもそこにものそのまゝの眞をつかんで、浮彫にした寫生的手腕がある。二人の性格とこの描寫とがあまりによく適合してゐるので、輕い滑稽を感ずるのである。

〔あの山は動けるかい〕……〔頂上まで一里半だ〕〔どこから〕〔どこからか分かるものか、高の知れた京都の山だ〕……〔君知つてるのか〕〔僕も知らんがね〕〔それ見るがいゝ〕〔何もそんなに威張らなくてもいゝ。君だつて知らんのだから……〕

これらの駄洒落には毒のない笑を誘ふ滑稽さがある。常に對者の虛を突いて笑を誘ふのである。

〔微かなる春の空の底までも云々〕

春の空の柔かさを、「吹けば搖るぐかと怪しまるゝ」といふ。實にせまつた寫生である。

〔相手は汗ばんだ額を云々〕

汗にぬれた額と髮、の描寫、それを拭つてゐる人の手つき顏つきまで想像されさうな表現である。

〔春はものの句になり易き……高野川の磧に數へ盡くして〕

文才溢れ過ぎて晦澁にならうとする瀨戸際である。青年が歩いたのが七條から一條までであつたといふ譯ではない。「烟る」までは柳の修飾語にすぎないのである。

〔山は自ら左右に逼つて……折れる程に曲る程に、……〕

對句法を用ひた美文脈である。

三　備　考

1　指導研究

文の妙味を讀みとり得ればよいのであるが、その爲には解剖を試みる事が必要であらう。卽ち滑稽味の如きは生徒が直ちに指摘し得るところであるから、その探索から、寫生味、俳諧味に及び低徊味に及ぶことが便利であらう。卷一の「草枕」卷二の「吾輩は猫である」と比較して指導すれば、更に氏の作品の面目を明らかにし得るであらう。

2　參考

（イ）挿繪は八瀨道を出る大原女。オホハラメともいふ。大原村及び八瀨村から出る女で、多く黑木を頭に載せて賣りに行く。（語釋の項參照）

（ロ）本課と同趣味を表はす保津川下りと京の町に琴をきく段を惹いておかう。

○柳彈れて條々の烟を欄に吹き込む程の雨の日である。衣桁に懸けた紺の背廣の暗く下がるしたに、黑い靴足袋が三分一裏返しに丸く蹲踞つて居る。違ひ棚の狹い上に偉大な頭陀袋を据ゑて、締括りのない紐をだら〳〵と嬾くも垂らした傍に、錬齒磨と白楊枝が御早うと挨拶してゐる。立て切つた障子の硝子を透して白い雨の絲が細長く光る。

「京都といふ所は、いやに寒い所だな」

と宗近君は貸浴衣の上に銘仙の丹前を重ねて、床柱の松の木を背負つて、傲然と箕坐をかいた儘、外を覗きながら甲野さんに話しかけた。

甲野さんは駱駝の膝掛を腰から下へ掛けて、空氣枕の上で黒い頭をぶくつかせてゐたが、

「寒いより眠い所だ」

と言ひながら一寸頸の向きを換へると、櫛を入れたての濡れた頭が空氣の彈力で、脫ぎ棄てた靴足袋と一所になる。

「寢てばかり居るね。丸で君は京都へ寢に來た樣なものだ」「うん實に氣樂な所だ」「氣樂になつて、まあ結構だ。御母さんが心配して居たぜ」「ふん」「ふんは御挨拶だね。是でも君を氣樂にさせるに就いては、人の知らない苦勞をしてゐるんだぜ。」「君あの額の字が讀めるかい」「成程妙だね。潺雨慟風か、見た事がないな。何でも人扁だから、人がどうかするんだらう。入らざる字を書きやがる。元來何者だい」「分らんね」「分らんでもいゝや。夫より此襖が面白いよ。一面に金紙を張り附けた所は豪勢だが、所々に皺が寄つてるには驚いたね。丸で緞帳芝居の道具立見た樣だ。そこへ持つて來て、筍を三本景氣に描いたのは、どう云ふ了見だらう。なあ甲野さん、これは謎だぜ」「何といふ謎だい」「それは知らんがね。意味が分らないものが描いてあるんだから謎だらう」「意味が分らないものは謎にはならんぢやないか。意味があるから謎なんだ」

……

古い京をいやが上に寂びよと降る糠雨が、赤い腹を空に見せて衝いと行く乙鳥の背に應へる程繁くなつたとき、下京も上京もしめやかに濡れて、三十六峰の翠の底に、音は友禪の紅を溶いて、菜の花に注ぐ流のみである。「御前川上、わしや川下で……」と芹を洗ふ門口に、眉をかくす手拭の重きを脫げば「大文字」が見える。「松蟲」も「鈴蟲」も幾代の春を苔蒸して、鶯の鳴くべき藪に、墓ばかりは殘つてゐる。鬼の出る羅生門に、鬼が來ずなつてから、門もいつの代にか取り毀たれた。綱が挽ぎとつた腕の行末は誰にも分らぬ。只昔ながらの春雨が降る。寺町では寺に降り、三條では橋に降り、祇園では櫻に降り、金閣寺では松に降る。宿の二階では甲野さんと宗近君に降つてゐる。

甲野さんは寢ながら日記を記けだした。橫綴の茶の表布の少しは汗に汚れた角を、折る樣にあけて、二三枚めくると、一頁の三が一ほど白い所が出て來た。甲野さんは此處から書き始める「一奩樓角雨、閑殺古今人」と書いて暫く考へて居る。轉結を添へて絕句にする氣と見える。

旅行案內を放り出した宗近君はずしんと疊を威嚇して緣側へ出る。緣側にも御誂向に一脚の籐の椅子が、人待ち顏に、しめつぼく据ゑてある。連翹の疎らなる花の間から隣家の座敷が見える。障子は立て切つてある。中では琴の音がする。

……

宗近君は籐の椅子に橫柄な腰を据ゑてさつきから隣の琴を聽いてゐる。御室の御所の春寒に、銘を給はる琵琶の風流は知る筈がない。十三絃を南部の菖蒲形に張つて象牙に置いた蒔繪の舌を氣高しと思ふ數奇も有たぬ。宗近君は只漫然と聽いてゐる計りである。

滴々と垣を蔽ふ連翹の黃な向うは業平竹の一叢に、苔の多い御影の突這ひを添へて、三坪に足らぬ小庭には、一面に叡山苔を這はしてゐる。琴の音は此庭から出る。

雨は一つである。冬は合羽が凍る。秋は燈心が細る。夏は褌を洗ふ。春は——平打の銀簪を疊の上に落とした儘、貝合せの貝の裏が朱と金と藍に光る傍に、ころりんと搔き鳴らし、又ころりんと搔き亂す。宗近君の聽いてるのは正に此ころりんである。

○浮かれ人を花に送る京の汽車は嵯峨より二條に引き返す。引き返さぬは山を貫いて丹波へ拔ける。二人は丹波行の切符を買つて、龜岡に降りた。保津川の急湍は此驛より下る掟である。下るべき水は眼の前にまだ緩く流れて碧油の趣をなす。岸は開いて、里の子の摘む土筆も生える。舟子は舟を渚に寄せて客を待つ。

「妙な舟だな」と宗近君が云ふ。底は一枚板の平かに、舷は尺と水を離れぬ。赤い毛布に烟草盆を轉がして、二人はよき程の間隔に座を占める。

「左へ寄つて居やはつたら、大丈夫どす。波はかゝりまへん」と船頭が云ふ。船頭の數は四人である。眞先なるは、二間の竹竿、續く二人は右側に櫂、左に立つは同じく竿である。

ぎい〳〵と櫂が鳴る。粗削りに平げたる樫の頸筋を、太い藤蔓に捲いて、餘る一尺に丸味を持たせたのは、兩の手にむんずと握る便りである。握る手の節の隆きは、眞黑きは、松の小枝に青筋を立てて、うんと搔く力の脈を通はせた樣に見える。藤蔓に頸根を抑へられた櫂が、搔く毎に撓りでもする事か、強き項を眞直に立てた儘、藤蔓と擦れ、舷と擦れる。櫂は一搔毎にぎい〳〵と鳴る。

岸は二三度うねりを打つて、音なき水を、停まる暇なきに、前へ前へと送る。重なる水の疊まつて行く、頭の上には、山城を屏風と圍ふ春の山が聳えて居る。逼りたる水は已むなく山と山との間に入る。帽に照る日の、忽ちに影を失ふかと思へば舟は早くも山峽に入る。保津の瀨は是からである。

「愈〻來たぜ」と宗近君は船頭の儀を透かして岩と岩の逼る間を半丁の向うに見る。水はごうと鳴る。

「成程」と甲野さんが、舷から首を出した時、船ははや瀨の中に滑り込んだ。右側の二人はすはと波を切る手を緩める。櫂は流れて舷に着く。軸に立つは竿を横たへた儘である。傾いて矢の如く下る船は、どゝゝと刻み足に、船底に据ゑた尻に響く。壞れるなと氣が附いた時は、もう走る瀨を拔け出してゐた。

「あれだ」と宗近君が指さす後を見ると、白い泡が一町ばかり、逆落しに嚙み合つて、谷を洩る微かな日影を萬顆の珠と我勝ちに奪ひ合つてゐる。

「壯んなものだ」と宗近君は大いに御意に入つた。

「夢窓國師とどつちがいゝ」

「夢窓國師より此方の方がえらい樣だ」

船頭は至極冷淡である。松を抱く巖の、落ちんとして、落ちざるを、苦にせぬ樣に、櫂を動かし來り、棹を操り去る。通る瀨は樣々に廻る。廻る毎に新たなる山は當面に躍り出す。石山、松山、雜木山と數ふる邊を行客に許さざる疾き流は、船を驅つて又奔湍に躍り込む。

大きな丸い岩である。苔を疊む煩はしさを避けて、紫の裸身に擊ち附けて散る水沫を、春寒く腰から浴びて、緣崩るゝ眞中に舟こそ來れと待つ。舟は矢も楯も物かは、一途に此大岩を目懸けて突きかゝる。渦捲いて去る水の、岩に裂かれたる向うは見えず。削られて坂と落つる川底の深さは幾段か、乘る人のこなたよりは不可思議の波の行末である。岩に突き當つて碎けるか、捲き込まれて、見えぬ彼方にどつと落ちて行くか、――舟は只まともに進む。

「當るぜ」と宗近君が腰を浮かした時、紫の大岩は、はやくも船頭の黑い頭を壓して突つ立つた。船頭は「うん」と軸に氣合を入れた。舟は碎ける程の勢に、波を呑む岩の太腹に潛り込む。横たへた竿は取り直されて、肩より高く兩の手が揚がると共に舟はぐうと廻つた。此獸奴と突き離す竿の先から、岩の裾を尺も餘さず斜に滑つて、舟は向うへ落ち出した。

「どうしても夢窓國師より上等だ」と宗近君は落ちながら云ふ。

急灘を落ち盡くすと向うから空舟が上つて來る。竿も使はねば、櫂は無論の事である。岩角に突つ張つた懸命の拳を收めて、肩から斜に目暗縞を掠めた細引繩に、長々と谷間傳ひを根限り戻り舟を牽いて來る。水行く外に尺寸の餘地だに見出し難き岸邊を、石に飛び、岩に這うて、穿く草鞋の滅り込む迄腰を前に折る。だらりと下げた兩の手は塞かれて注ぐ渦の中に指先を浸す許りである。うんと踏んばる幾世の金剛力に、岩は自然と擦り減つて、引き懸けて行く足の裏を、安々と受ける段々もある。長い竹を此處、彼處と、岩の上に渡したのは、引綱をわが勢に逆はぬ程に、疾く滑らす爲の策といふ。

「少しは穩やかになつたね」と甲野さんは左右の岸に眼を放つ。踏む角も見えぬ切つ立つた山の遙かの上に、鉈の音が丁々とする。黑い影は空高く動く。

（八）氏の滑稽諷刺について岩城準太郎氏が明治文學史に言ふところを抄出しよう。

夫れ滑稽諷刺の作の本邦文壇に存するや久し。明治に入りても、前に新二得知あり、後に綠雨あり、各々一方の雄なりしかども、畢竟前代戲作者流の繼承に過ぎず。漱石が日常偶發の事件に對して觀察を下すや、奇警鋭利、骨を刺し髓を抉らずんば已まざると同時に、飄逸冲澹にして餘裕綽々たる者あり、洒脫にして諧謔を極むると同時に、沈痛にして一種の悲哀を帶ぶる者あり。泰西ユーモアの風骨を得て氣品高尙に、理路を說いて剖析細に入り、實境を寫して揮灑微を穿ち、內容手法共に全然戲作の流風を擺脫せり。

六舊友

一　解題

1　作者

横光利一　ヨコミツリイチ　明治三十一年三月十七日生。本籍は大分縣宇佐郡長峰村。父は測量技師、大分縣の人。母は伊賀上野の人。松尾芭蕉の血縁に生れた人。父母に從つて轉々小學校を變つたが、幼年の多くは母の生地伊賀柘植で送つた。上野中學卒業後早稻田大學文科に入學、中途退學後再び入學。廿五歲父死す。

大正十二年文藝春秋同人となり、同年「日輪」「蠅」「マルクスの審判」を發表。大正十三年十月「文藝時代」を同人十七人と共に創刊。新感覺派の文學運動がこの時から始まつた。同年「御身」「無禮な街」「愛卷」發表。十四年「表現派の役者」「慄へる薔薇」「園」「靜かなる羅列」「街の底」發表。大正十五年「ナポレオンと田蟲」「街へ出るトンネル」「春は馬車に乘つて」「蛾はどこにでもゐる」發表。昭和二年「計算した女」「花園の思想」「朦朧とした風」「七階の運動」「皮膚」發表。又短篇集「春は馬車に乘つて」戯曲集「愛の挨拶」出版。「文藝時代」を解散、同人二十人と「手帖」を創刊したが同年十一月に廢刊した。昭和三年「眼に見えた風」「花婚の感想」「笑つた皇后」「風呂と銀行」を發表。五月には支那に遊び、十一月選集「新選横光利一集」出版。昭和四年「足と正義」「掃溜の疑問」發表。

昭和五六年の頃新興藝術運動がキラキラしく起ると、川端康成、龍膽寺雄等が盛な活動をしたが、横光利一はたしかにその時沈潛してゐた。そして昭和九年の頃は、叡智が冷たく澄んで人生の明るさを見つめてゐるにちがひないが、文學は

不思議に暗い。この頃に書いた「時機を待つ間」にしても、その主人公には人格的統一がなく、手脚胴體散漫になつてしまつてゐる。しかも用意周到な作品の樣にいはれるところに彼の危機がある。こんな事が「文藝」の昭和九年一月號には龍膽寺の言としてのせられてゐる。以來上海に遊んで「物質を極度まで書いて見よう」といつて「上海」を書き「機械」を書いた。更に昭和九年九月には「紋章」が出版された。現代企業の一つとしての釀造業、水產業、現代の社會問題としての食料問題が取扱はれて居り、封建的なものと資本主義社會との交鎖がとりあつかはれて居る。この作品は、(一)正に現代人を把へる問題を題材としてゐる點(二)作家が拂つた思索的努力と實驗室的努力が重壓をもつて現れて來ること(三)個々の描寫が稀な傑出力を持つてゐる點等に於て讀者批評家に眞劍にとりあつかはれたが、構想する小說家として登場した作家だとされて成功した作品とはされないやうである。以來「寢園」が書かれてその心理描寫はよしとされてゐる。

2　出典

現代隨筆全集第四卷横光利一篇に「早蕨艦長のこと」(昭和七年四月)として出てゐる文の殆ど大部分である。本文の後に「この暮になつて、五日の夜、夕刊を見てゐると、驅逐艦、早蕨顚覆すと、出てゐたので、まア門田の艦でなくつて良かつたと私は思つた。それからどういふ人が死んだのかと、死傷人員の方を見ようとすると、第一番に艦長、門田健吾とあつた。私はぎよつとした。」と書き、つゞけて門田の死についての感想をのべて終つてゐる。「現代隨筆全集」は全十二卷金星堂發行である。

3　主眼及び採擇の趣旨

二十二三年ぶりに逢つた舊友の人物描寫である。男性美のすべてを備へてゐるかの如くに成長した人の個性の描寫を味はせたい。又リアリスティックな描寫をしつゝ、作者の胸中に溢れる懷しみと誇りとが漲つて居り、友も亦軍人であり乍ら作者の作品を讀んでゐる程友の行方を見まもつてゐるのである。こゝに中學時代に袂を分つた親友の美しい心の通ひが

綾の如く描かれる。この點を讀取ることによつて友情の滋味に浴させたい念願である。しかもその友が理想的海軍將校である點に於て次課への聯絡が持たれて居り、人物描寫である點に於て前課とつながりを持つのである。

二　解　釋

1　語　釋

【大演習】　ダイエンシフ　陸海軍の演習の最大の演習。卽ち陸軍の特別大演習及び海軍の大演習及び特別大演習。

【横須賀】　ヨコスカ　神奈川縣三浦半島の東岸に位置し、千葉縣富津洲と相對して東京灣口を扼す。我が國最古の軍港で横須賀鎭守府並に東京灣要塞司令部があり、帝都守護の要鎭で全く軍事都市と稱することが出來る。人口約一一〇、〇〇〇。

【聯合艦隊】　レンガフカンタイ　二箇以上の艦隊を以て編成したもの。艦隊は艦船本來の目的たる戰時任務を基礎とし、戰鬪に際しその威力を十分に發揮するために定められたもので、聯合艦隊は平時常備艦隊たる第一艦隊及び第二艦隊を以て編成されてある。艦隊は戰隊、水雷戰隊、潛水戰隊及び航空戰隊を以て編成し、これに特務艦艇若干を附屬するを例とする。而して各戰隊の指揮官は少將または大佐を以てこれに任じ、艦隊は大、中將たる司令長官がこれを指揮し、聯合艦隊司令長官は第一艦隊司令長官がこれを兼攝する。

【同窓】　ドウソウ　(一)同學校の出身者。(二)同寮「士同レ業曰二同窓一」

【驅逐艦】　クチクカン　海軍艦艇の一。驅逐艦は大なる速力を有し、運動力最も輕快なる小艦であつて、攻擊武器としては有力なる魚雷發射管と輕砲を裝備し、敵の主力艦に對する魚雷攻擊を以てその本務とする。またその性能はほぼ巡洋艦に類似するを以て、警備その他概ねこれと同樣の任務に服するのが例である。驅逐艦は一八九三年イギリスに於て二百四十噸の Havock を建造したのがその嚆矢である。元來驅逐艦は水雷艇を驅逐擊攘するの目的を以て建造せられたもので、從來の水雷艇は日淸戰役に於ける我が軍の威海衞襲擊の活躍を以て終焉を告げ、自らこれに代つて出現したのが驅逐艦であつて、軍艦の攻擊は副任務に過ぎなかつたが、漸次發達して今や軍艦攻擊を本務とするに至つた。我が國に於ては明治卅年(一八九八)イギリスに注文建造した驅逐艦、雷、東雲、電、叢雲の四隻を初めとし、その後日露戰爭時代には三百八十噸級の所謂三等驅逐艦が建造せられ、戰後更に六百噸の櫻、橘級を經て更に大型の驅逐艦が出現するに至つた。二等驅逐艦は歐洲大戰の要求に應じ、桃、楢、榊級等が建造せられ遠く地中海に進出して、聯合軍側と協同作戰に從事した。一九一八年八百五十噸の樅級の建造より、重油專燒罐とタービンを採用し、次いで若竹級を建造したが、一九二四年を最後として二等驅逐艦の建造を止め、一等驅逐艦のみの建造を見るに至つた。一等驅逐艦は海風、山風級を初とし、排水量千二百二十七噸、速力三十四節の磯波級の建造を見たが、一九二七年これに多大の改良を施して千四百四十五噸三十四節の神風級及び睦月級の建造となり、更に翌年大型の吹雪級の建造を見るに至り、現今は千噸以上を一等驅逐艦、それ以下を二等驅逐艦の二種に區別し、從來の三等驅逐艦は水雷艇と改稱せられるやうになつた。

【紀州】　キシウ　紀伊の國。州とは行政區劃の名として支那に用ひられたものである。我が國でも薩州、豫州、若州等と用ひられた。

【新宮】　シングウ　和歌山縣南端の市。熊野川の川口にあり、紀伊半島の東南海岸の一中心であると共に熊野川流域の一大中心地である。熊野川上流の杉材は河によつて筏として流され、この地に於て集散取引される。

【趣味】　シユミ　(一)おもむき。おもしろみ。風韻、興味風致。(二)智的嗜好。(三)美を智覺辨別する能力。

【柔道】　ジウダウ　日本に發生し日本で發達した武術の一で、柔の理を應用して攻擊防禦の技を學び、同時に身體の鍛錬と精神修養を目的とするものである。

【機械體操】　キカイタイサウ　ドイツ式とスウエーデン式の二つに分けることが出來る。スウエーデン式は特に身體の姿勢上に効果あらしめようとするもので、例へば肩背、身體側面の筋肉を訓練するのがその主要な目標になつてゐる。練習教材は簡單で、それの姿勢もまた單純であるから、その効果も輕度のものと概觀することが出來る。器具は肋木、横木、長腰掛、格子梯梯、綱（吊索）等の簡單なものが使用される。この式では技術に熟達するといふことは、さまで主要な目的になつてゐない。この式の長所は美しい姿勢を得ることにあるが、短所は餘りに單調なため進んでやつて見たいといふ興味を起すことの薄い點にある。ドイツ式の器械體操に使用される器具の主なるものは鐵棒、平行棒、鞍馬、吊環等であつて、ドイツ體操家の先輩であるヤーン（一七七八―一八九一）アイゼレン（一七九二―一八四八）スピース（一八一〇

―一八五八）等の創始になるもので、元來技術的練習を主目的にするものであるから、スウエーデン式の器具と同一には考へられない。これ等によつてなされる運動は敏捷巧緻運動に屬するものであり、その優れた第一の點は運動種目の豐富なことであつて、次には種目が常に新しく、努力を要する困難なものはそれぞれ容易なものと調整して課し、心身に大なる鍛錬を與へることにある。また缺點は、運動それ自身に餘りに興味と愉快とを感ぜしめるので、やゝもすれば熱中して運動の正確さを缺き、且つそのために身體の自然的均衡を失することになる。よき體操家といはれるものは、例外なく立位及び歩行の姿勢に於て惡く、內臟器官の中特に心臟、肺臟を冒され易く、身體の均衡を保つてゐない。これ等の弊害を除去するにはスウエーデン式とドイツ式との持つ長所を結合して行ふことにある。日本では普通に器械體操と呼ばれてゐるのは、主としてドイツ式のものを指すのであつて、今日ではスウエーデン式の器械使用の體操と同樣、多くの學校または體操團體で行はれてゐる。全日本體操聯盟では器械體操の普及發達を目的として、これを競技化し、器械體操の選手權大會を催してゐる。

【容貌】　ヨウバウ　かほかたち。

【克明】　コクメイ　まめやか。じつてい。（東京地方の方言）

【精神的】　セイシンテキ　物質的、肉體的に對し、たましひ又は心のはたらきによるの意。

【軍港】　グンカウ　軍事上の特殊設備を有する海軍根據地。軍港は海軍區の警備、出師準備、港灣防禦、艦船兵器の修理及び軍需品の補給等の基地として必要なる港灣防禦を施したる策源地である。軍港の境域は要塞地帶と同じく、嚴重なる軍港規則の下に置かれ、撮影、漁撈、海軍所屬以外の船舶の入港等の禁止又は制限をなす。我が國の海軍は三海軍區に分れ、一海軍區每に軍港を置き其の所在は橫須賀、吳、佐世保にして、各軍港には鎭守府があつて、その海軍區及び所屬艦船部隊を管轄してゐる。

【實在性】　ジツザイセイ　哲學的用語。體驗、認識、思惟等によつて存在する觀念性に對し、かゝるものから獨立に實在する存在、時間空間的世界に屬する存在をいふ。故に存在必ずしも實在性をもつとは限らない。實在は存在の一種である。また現實性と同義に使用せられることもあるが、現實性は可能性乃至假象性に對し、實在性は觀念性に對して用ひられ、從つて兩者の意味に多少差異のあるのが普通である。

【ためつすがめつ】　うかゞひ見たり、目を細くして見たり。ためつはためみるの語根に副詞をつくる接尾辭「つ」をつけたもの。

【高潔】　カウケツ　けだかくいさぎよきこと。

【典型的な】　テンケイテキ　模範的な。規矩的な。手本となるやうな。典型とは、古來のおきて。てほん、のり、かた、ひながた。

【相貌】　サウバウ　「相」は姿の意。かほかたち、みめかたち。容貌。

【果敢】　クワカン　決斷のすばやいこと。

【剛健】　ガウケン　强くしてすこやかなること。

【中風】　チユウブウ又は、チユウブ　半身の不隨。或は腕または脚の麻痺したのをいふ。俗語中氣に同じ。醫學的には偏癱（半身麻痺）單癱（一肢の麻痺）截癱（兩下肢の麻痺）等を指す。これ等は出血、軟化、炎衝等の腦或は脊髓の器質的變化によつて起るもので、從つて原因には種々の場合があるが、一般には卒中發作（腦溢血）が起つてその後に現はれる麻痺の狀態をいふ。ときには卒中なくして徐々に起つて來る場合もある。

【背廣】　セビロ　背廣服の略。サツクコートまたはラウンヂコートとも呼ばれる男子用の折襟の略服で、通常服、ダブル襟折（兩前）その他登山用　ゴルフ用、乘馬用、船員用等の折襟の運動服の總稱である。現在一般に平常服として著用の範圍甚だ廣く、社交上特に儀禮を重んずる場合以外は大抵この背廣で差支へのない、とになつてゐる。しかし場合に應じ氣品を保つ著方としては、黑羅紗地の上衣及びチョツキに縞ズボンを著用するのが近時の流行である。

【母艦】　ボカン　英語 Mother ship の譯語。（一）自己が主體となつて、それより小なるものの賴りどころとなる軍艦。（二）海底電線を敷設するに用ひる船。こゝは（一）

【長門】　ナガト　戰艦の一。陸奥の姉妹艦で、現今我が海上戰鬪の主力である。大正六年八月吳海軍工廠で起工。同七年十一月進水、翌九年十一月竣工。なほ陸奥の方は更に一年後の十年十一月橫須賀海軍工廠で竣工した。長門の要目を概說すれば長さ二〇一米、幅二九米、平均吃水九米、排水量三萬二千八百噸、兵裝は四十糎主砲八門、一四糎副砲二十門、八糎高角砲四門、機銃三門、水雷發射管八門、速力二十三節である。長門の出現當時これに比肩し得たのは世界中でアメリカのメリーランド號だけであつた。なほ同艦は排水量三萬二千六百噸、主砲四十糎八門、水雷發射管二門、速力二十一節で、內容は長門よりも劣勢であつた。しかし大正十年から翌十一年に亘るワシントン會議の結果、陸奥の廢艦問題からその交換條件として、アメリカでは三萬二千噸、四十糎砲八門、速力二十一節の戰艦二隻卽ちウエストヴアージニヤ及びコロラドを、またイギリスはその後五年を費して三萬五

千噸、四十糎砲九門、速力二十三節の戰艦即ちドレッドノートとネルソンを建造した。從つて現代はこれ等六隻が日、英、米の三大海軍國に於ける代表的戰艦である。もと戰艦が初めて威力を發揮したのは日露戰役で、當時我が三笠級は一萬五千噸、三十糎砲四門であつたが、イギリスは戰後三十糎砲十門、排水量一萬八千噸の弩級戰艦を建造して大艦巨砲主義を實現した。弩級艦についで超弩級艦が生れ、更に世界大戰中に超々弩級艦が現はれた。長門は即ちこの超々弩級艦の一である。かうして戰艦の排水量は三笠級の一萬五千噸から攝津級の二萬噸、日向級の三萬噸を經て長門級となり、主砲も三笠時代の三十糎（十二吋）から三十六糎（一四吋）となり、遂に現代の四十糎（一六吋）に進み、世界大戰後は益々大艦巨砲時代が出現し、大正十年頃には日本とアメリカとがともに四萬噸級以上の巨艦を建造中であつたが、ワシントン會議で主力艦の排水量を三萬五千噸、主砲を四十糎に制限したから、大艦巨砲時代も長門級を以て終りを告げた。

【平然】　ヘイゼン　物事にあつて動じない有樣。平氣なさま。

2　文の構成

第一節　三六頁初―三七頁五行　門田に逢はうと誘はれた時の氣持。

第二節　三七頁六行―四四頁七行　門田に逢つて。

1　遠くから門田を見た時の感想と中學時代の思ひ出。（三七頁八行―三八頁六行）

2　近く逢つた時の門田の樣子とそれについての感想及び、自分の氣持。（三八頁七行―四三頁五行）

3　大船への車中できいた門田の覺悟と感想。（四三頁六行―四四頁七行）

第三節　四四頁八行―終　一年後の門田。

3　文意

二十二三年ぶりに逢つた中學時代の親友の描寫と感想である。重々とした體軀と、克明で立派な容貌と、精神的な高い優しさを持つ眼光とを有し、悠々とした足どりをする友である。彼を見てゐると、高潔な人間の典型的な相貌を見てゐる時のやうにのどかな、落着いたいつくしみを何よりも強く感じるのである。それにどつしりとしてゐて、壯麗で、果敢で、剛健な感じがする。又この人は、死に對する確かな覺悟を持つてゐる人である。この友に作者は見惚れて居るのであり、友も亦常に作者の作品を讀んでゐる。今も尙心と心との結ばれた親友である事を不言の中に語つてゐる。

4　鑑賞批評

二人の親友の心のつながりで綾なしつゝ、舊友門田の人物が描寫される。

二十二三年ぶりに逢つた中學時代の友、今は軍人と作家といふ隨分異つた生活をしてゐる二人である。しかも二人の心は常に結ばれてゐた。次の句はそれを示してゐる。

「出不精の私も行かうと返事をしておいた。」

「どちらも現在から氣持を放して歩みよる樂しみは充分あるだらうと思つた。」

「ためつすがめつ、暇さへあれば門田の委に見惚れにゐる自分にをかしさへ感じられた。」

「『全く立派な奴だ。』私は時々ぼんやりとしてひとりさう呟いては喜んだ。」

「併し、ひどく立派な男が自分の友人の中にゐたものだ。」

「見ると私の作集がその中にちやんと並んでゐる。それでは門田も私のことは忘れずにゐてくれたのだと思ひ、『あんなものを讀んで叱られるぞ。』といふと、『君のなら良いよ、ときどき讀んでみてゐる。』と言つた。」

「何よりも彼らしいことだと思つて喜を感じた。」

「現に自分の友人の中に、さういふ確かな覺悟を持つてゐる人物がゐるのだと思ふ氣持が強く私を喜ばしたのである。」

「あれには僞はない。」

六　舊　友

堂々と立派に成長した友を見る喜び、そして誇りさへも感じてゐる有難い友の心が語られてゐる。友も亦艦上生活の多忙の中に、作者の作集を持つてゐて讀んでゐるのである。お互に友の成功を祈りつゝ歡びつゝある美しい二つの心が眺められるではないか。かうした舊い親友の持つうるはしい眞實が織出されるところに、作者の腕の冴えがある。かうした心にうつる友の人物描寫は又力強い。先づ中學時代の運動家としての友を述べて重々とした體軀や容貌に成長した今日を描く前提とする。

「前には私と同じだつた背丈も、今は私などより遙かに大きくゆつたりとしてゐて」

「がつしりとした肩の巾」「容貌も克明で立派である」のを見て如何にも海軍の士官らしいと思ひ、「これが門田か、これが」と驚くのである。そして「全く立派な奴だ」と感歎の呟きを發しては喜んでゐるのである。

しかし特別に作者を喜ばしたのは門田の精神的な高い優しさであつた。そしてそれは友の眼を通して作者が讀んだものである。「彼の眼の光や云々」と四〇頁にもいつてゐる。

門田には又ゆつたりとした落つきがあつた。「梯子を登つて行く悠々とした足どり」をする彼である。

これらの三つのものを簡單に「彼の眼の光や、がつしりした肩の巾や……悠々とした足どり云々」とまとめ、ついで、「全く立派な奴だ。」と感歎と親愛の情をこめた言葉があり、更に「彼を見てゐると高潔な人間の典型的な相貌を見てゐる時のやうに、のどかな、落着いたいつくしみを何よりも強く感じるのである。それにどつしりしてゐて、壯麗で、果敢で、剛健な感じがする。」とその人物評の總括りをする。そして最後に「もう死といふことにだけは何の恐もない。」といふ友に對して「確かな覺悟を持つてゐる人物」として、強く作者は喜んでゐるのである。尙最後に餘韻のある表現を以てその人物の精神的な深さを暗示した。即ち艦長になり乍ら、その事は通知しないといふ記事がそれである。

これらによつて見ると、作者のなした友人の描寫には以上五つの段階が見られるのである。肉體の美と精神の美とを、螺旋形に述べ進み乍ら、遂に精神美の表現を以て最後の括りとしてゐるのである。かうした表現の間にしみ〴〵と友の成人を眺める親友の心情が盛られてゐるのである。

最後に注意すべきはリアリステイツクな表現である。門田の風姿の表現は勿論、遠くから門田を眺めた時の作者の氣持、作者との問答に於て「さうだつたかなあ、どうもよく覺えてゐない。」といふあたりにはそれがよくあらはれてゐる。

三　備　考

1　指導研究

舊友に逢ひに行く時の作者の氣持はどんなであつたか、逢つてからどんな心持になつたか、門田とはどんな人物であるか。前課との表現態度にどんな差異が認められるか、これ等の問への答が表現を探る事によつて明瞭に把握出來ればこの課の讀みの目的は達せられるであらう。

2　參　考

東京高師教授由良哲次氏の「横光利一の藝術思想」の中から作者の人物及び藝術思想を示す點を抄出して參考としよう。

（イ）横光利一は薩摩隻人の血を父より享け、松尾芭蕉の濃き血統を母より受けてゐる。この二つの血のつながりは同時にまた横光の裡に潜める二つの靈、二つの魂を指し示すものでなければならぬ。否彼の心理には、先天の、後天の種々なる靈が葛藤し、離合してゐるが、就中激搖的な心情のうちにたぎる熱情があると同時に、飽くまでも靜かに熟照して、ものの本質に徹してこれを眺め味はねば止まぬ叡智がある。

（ロ）現代のわが文藝はインテリイを深き意味に於て捉へてもゐなければ、民衆の嗜好品となる以上にそれの心の糧ともなつてゐない。横光は、深邃と暗さとそして永遠の幾何かをもつ作品をその未來に於て期待しうる唯一の作家である（横光利一の藝術思想序

由良哲次）

（ハ）横光の文藝生活は先づ詩の時代をもつて始まり、戯曲の精進時代を經て、象徴的な小説の時期に到達した。これが彼の前期に於ける三つの特質的な閲歴である。そしてこの前期の全體に亙つての基調は象徴主義的であり、物の見方は幻想的である。小説の創作に自らの快心の境地を見出して以來、潑剌なる魅力をもつて彼を捕へ、そして、彼の裡におのづからに收熟し行いたものは「純粹小説」の理念（彼の理想は純粹にして而して通俗的なる文學たることを一に具するにある）であり、この理念に貫かるゝ幾變轉の精進がその後の彼の今日までの文學生活をなしてゐる。この理念に導かれた創作は寫生より次第に寫實に趣き、初期の幻想的性格よりは次第に著しきリアリスティックに進み行いた。そしてこゝに彼に固有な根本的本質的な要求と特有な形相的感受的本性と合して、所謂新感覺主義時代を胚生した。この期に於ける彼の物の見方は著しく個性的である。この期以後の傾向はこの特質を基調とはしながら併しより多く觀念論的に傾き次第に構成的な傾向を増して行いた。事象の見方は根本に於て理念的となり、これに基づく構成的な特色が愈〻著しくなつた。或は先きの象徴的傾向がリアリスティックを包んで深まつたとも言ふことを得るであらう。

最近の傾向は一言にして象徴的觀念論的である。そしてこの間、また、最も人目に著しき特徴を示す時代區劃としては、彼自らも言へる樣に、國語との不逞極まる血戰時代、マルキシズムとの格闘時代、國語への服從時代である。……新感覺主義の時期に至つては彼は國語に服從し、適應し、否これを彼の個性に充ちた樣式をもつて驅使するに至つた。彼が後に文藝に於ける形式をその根本的なるものとして重視するに至つた「形式主義」は實にこの苦闘の贈であつた。これ等すべての變轉を通して彼の文藝的精進の目的は「美しき眞理」への到達であつた。彼は「眞理へ近づく爲には、心ならずも絶えず錯誤と虚僞との鶴嘴をもつて、現實の大斜面へ向つて攻め上らなければならなかつた。」のである。

七　日本海の海戰

一　解　題

1　作　者

東郷聯合艦隊司令長官の參謀であつた故秋山眞之中將（當時海軍中佐）が、東郷司令長官の命により、その意を體して筆を執つた所であるといふ。

2　出　典

「東郷聯合艦隊司令長官公報」から抄錄したものである。同公報は明治三十八年六月十五日附官報に掲載せられたもので、その後、日露陸海軍公報集（新橋堂編輯部編）・明治三十七八年海戰史（全二卷、軍令部編）等に收められてゐる戰捷後の確定詳報である。原文は詳報で記述分量も多く、隨つて戰況についても精細を極めてゐるので、主として第一戰隊（東郷聯合艦隊司令長官直率）の活動を中心とした戰況を摘載するの已むを得ざるに至つた。

3　主眼及び採擇の趣旨

世界史上に燦然たる光輝を放つてゐる日本海海戰の公報を熟讀させ、全國民にとり永遠の光榮であり感激であるその戰況を知らしめると共に、我が東郷聯合艦隊司令長官の報告がこの戰捷を天祐と神助とに歸し、天皇陛下の御稜威と神慮とに對する感激に終始してゐる。その敬虔な至情と偉大な人間性に觸れさせ、國民性の陶冶と國民的感情の育成に備へようとした。

二　解　釋

1　語釋

【日本海】　ニホンカイ・ニツポンカイ　アジア大陸の東、露領沿海州及び朝鮮半島と日本列島との間にある海。間宮・宗谷の二海峽によりオホーツク海に通じ、津輕海峽によつて太平洋に連なり、對馬・朝鮮二海峽を以て東支那海に接する。

對馬海峽を東水道ともいひ、又朝鮮海峽を對馬西水道ともいふ。

「日本海海戰」はこの東水道に始り、沖の島の北方で最も激しく、それから鬱陵島に至る間、各所にて行はれた。隨つて、こゝにいふ日本海は狹く鬱陵島以南に限られてゐる。尙、海軍では日本海海戰（ニホンカイカイセン）と呼んでゐる。

【天祐】　テンイウ　天佑とも書く。天の助。天贊。易、大有「上九、自レ天祐レ之、吉、无レ不レ利」

【聯合艦隊】　レンガフカンタイ　艦隊二隊以上を以て編制する。聯合艦隊司令長官は第一艦隊司令長官が兼攝し、天皇に直隷して聯合艦隊を統率しその隊務を總督する。

【艦隊】　軍艦は一隻を以て戰鬪の單位とし、驅逐艦、潛水艦は普通四隻から成る一隊を以て戰鬪の單位とする。その戰鬪單位に對して艦隊は戰略單位であつて、軍艦二隻以上を以て編制され、一方面の戰爭を遂行し得る兵力の海上部隊をいふ。現在は通常、戰艦・巡洋艦各々數隻から成る普通戰隊、驅逐隊四隊（約十六隻）とその旗艦（巡洋艦）とから成る水雷戰隊、潛水隊二隊以上とその旗艦（潛水母艦）とから成る潛水戰隊、航空母艦二隻以上にて成る航空戰隊及び特務艦・特務艇等を以て編成される。時には港務部・防備隊を附屬させ、艦隊が大きくなれば二つ以上の戰隊に分ける。各戰隊司令官は艦隊司令長官に隷屬し、司令長官は天皇に直隷する。

○日本海海戰前に於ける我が聯合艦隊

日本政府がいよ〳〵對露開戰を決した明治三十六年十月二十七日、常備艦隊司令部の異動が行はれ、これと相前後して常備艦隊が解かれて新に第一艦隊・第二艦隊・第三艦隊が編成せられ、第一・第二兩艦隊を以て聯合艦隊が組織された。第三艦隊も三十七年三月四日、改めて聯合艦隊に編入せられた。東郷第一艦隊司令長官は、聯合艦隊司令長官として總指揮を司どり、當時海軍中將であつたが、三十七年六月六日大將に補せられた。この聯合艦隊は、仁川沖の戰、旅順の水雷攻擊ついで封鎖、黃海海戰、蔚山沖海戰を經て日本海海戰に及んだ。この中、黃海海戰は、バルチツク艦隊の到着・合同前に東洋艦隊を全滅せしめた一戰であつた事に、しかも我が艦隊の戰鬪力を殆ど損はずに戰果を收めたといふ事に決定的に重大な意義がある。もし黃海海戰に於て東洋艦隊の勢力を半分殘したら勿論のこと、又たとひそれを全滅し得ても我が艦隊の勢力を半減しては、後の日本海海戰は成立しなかつたのである。

○日本海海戰に於ける我が聯合艦隊の陣容

聯合艦隊

司令長官　海軍大將　東郷平八郎

第一艦隊

司令長官（旗艦三笠）　海軍大將　東郷平八郎

司令官（旗艦日進）　海軍中將　三須宗太郎

司令官（第三戰隊を指揮す旗艦笠置）　海軍中將　出羽重遠

第一戰隊——一等戰艦三笠・敷島・富士・朝日・巡洋艦春日・日進・通報艦龍田

第三戰隊——二等巡洋艦笠置・千歲・三等巡洋艦音羽・新高

第一驅逐隊——驅逐艦春雨・吹雪・有明・霞・曉

第二驅逐隊——驅逐艦朧・電・雷・曙

第三驅逐隊——驅逐艦東雲・薄雲・霞・漣

第十四艇隊——水雷艇千鳥・隼・眞鶴・鵲

第二艦隊

司令長官（旗艦出雲）　海軍中將　上村彥之丞

司令官（第四戰隊を指揮す旗艦磐手）　海軍少將　島村速雄

司令官（第四戰隊を指揮す旗艦浪速）　海軍中將　瓜生外吉

第二戰隊——一等巡洋艦出雲・吾妻・常盤・八雲・淺間・磐手・通報艦千早

第四戰隊——二等巡洋艦浪速・高千穗・對馬・三等巡洋艦明石

第四驅逐隊——驅逐艦朝霧・村雨・朝潮・白雲

第五驅逐隊——驅逐艦不知火・叢雲・夕霧・陽炎

第九艇隊——水雷艇蒼鷹・雁・燕・鴿

第十九艇隊——水雷艇鷗・鴻・鴉

第三艦隊

司令長官（旗艦嚴島）　海軍中將　片岡七郎

司令官（旗艦橋立）　海軍少將　武富邦鼎

司令官（第六戰隊を指揮す旗艦須磨）　海軍少將　東郷正路

司令官（第七戰隊を指揮す旗艦扶桑）　海軍少將　山田彥八

第五戰隊——二等巡洋艦嚴島・松島・橋立・二等戰艦鎭遠・通報艦八重山

第六戰隊——三等巡洋艦須磨・千代田・秋津洲・和泉

第七戰隊——二等戰艦扶桑・一等砲艦高雄・筑紫・二等砲艦鳥海・摩耶・宇治

第十五艇隊——水雷艇雲雀・鷺・鶴・鶉

第十艇隊——水雷艇第四十三・第四十・第四十一・第三十九號

第十一艇隊——水雷艇第七十三・第七十二・第七十四・第七十五號

第二十艇隊——水雷艇第六十五・第六十二・第六十四・第六十三號

第一艇隊——水雷艇第六十九・第七十・第六十七・第六十八號

附屬特務艦隊

司令官（旗艦臺中丸）海軍少將　小倉鋹一郎

假裝巡洋艦——亞米利加丸・佐渡丸・信濃丸・滿洲丸・八幡丸・臺南丸・日光丸・臺中丸

水雷母艦——熊野丸・春日丸

運送船——大仁丸・平壤丸・京城丸・愛媛丸・蛟龍丸・高阪丸・武庫川丸・第五宇和島丸・海城丸・扶桑丸・關東丸・三池丸

病院船——神戸丸・西京丸

【敵の第二・第三艦隊】從來の太平洋艦隊（所謂東洋艦隊）にして新に增遣せる所謂バルチツク艦隊のこと。

明治三十七年四月三十日海軍元帥大公の發表に「現時絕東の海上にある艦隊を太平洋海軍第一艦隊と稱し、將に絕東に派遣せんとするが爲に準備中なる各艦を以て更に一艦隊を編成し之を太平洋第二艦隊と稱す」とある。又三十七年十月同艦隊出發後更に一艦隊を編成し、太平洋第三艦隊とし、三十八年二月に出發せしめた。

初の露國政府は、在來の太平洋艦隊が劈頭の敗戰以來常に退守するのみであるのに鑑み、本國からの增遣を決議した。併し當時バルチツク海結氷の爲、解氷期をまつて廻航を開始したものと思はれる。四月三十日太平洋第二艦隊編成を發表すると同時に、未成軍艦の竣工をあらゆる手段を盡して急ぎ、五月二日海軍軍司令部長心得侍從將官海軍少將（出航後十月十七日中將に昇進）ロゼストウエンスキーをして現職の儘太平洋第二艦隊司令長官を兼攝せしめ、漸次完全なる軍艦增加するに及び、七月四日太平洋第二艦隊編制を定めた。

第二艦隊

主力艦隊

第一戰艦隊——戰艦四隻

第二戰艦隊——戰艦三隻　裝甲巡洋艦一隻

驅逐隊——驅逐艦九隻

巡洋艦隊

第一巡洋艦隊——防護巡洋艦二隻　裝甲巡洋艦一隻

第二巡洋艦隊——防護巡洋艦一隻　巡洋艦三隻

運送船隊

第一運送船隊——運送船四隻　工作船一隻　病院船一隻

第二運送船隊——運送船十隻

特別任務船　汽船一隻

以上四十一隻のうち後發隊となれるもの五隻、遂に出發せざりしもの一隻、編成替となれるもの、その他出發前後に加りしもの等多少移動がある。出發の時期についても諸說があつたが終に十月出發と決し、先づ軍港リバウに廻航、石炭・軍需品を塔載し、十月十五日に出發した。

本隊は十月十五日リバウ出港、喜望峯を大迂回して翌三十八年一月九日佛領マダガスカル島ノシベ島に到着。こゝで前着の支隊と合同した。（到着前一月六日、始めて元旦に旅順口の陷落したことを知る。）支隊は英吉利海峽通過後本隊と分れてモロツコのタンジールに直航し、十一月三日本隊の到着を待つて、本隊中の吃水淺きもの十四隻をあはせてスエズ運河を通過してノシベ島に先行すべく出發。二十五——二十六日スエズを通過して十二月二十八日ノシベ島に先着し本隊を待つた。後發隊は十一月十六日にリバウを發し、二月十八日までにノシベ島に到り先着の本支隊に合同した。

司令長官ロゼストウエンスキーは孜々として艦隊出發の準備に務め、操練を勵行して本國の命を待つた。露本國の軍事當局者は旅順口陷落により、命令發送を躊躇したらしかつたが、遂にロゼストウエンスキー司令長官に向ひ「旅順口陷落し第一艦隊亡滅を告げたる今日、第二艦隊の任務愈々大なり。須く海上の勢力を挽回し敵の野戰軍とその本土との交通を遮斷すべし。若し第二艦隊の現況にして本問題を遂行する能はずとなさば、增艦としてバルチツク海に殘留する總軍艦を派遣するも可なり」と電報をよこした。以てこの來るべき海戰の重大性と露國の決意とを思ふべきである。ロゼストウエンスキーはこれに對して、老朽と建造不良の軍艦の增援は、むしろ艦隊の負擔であると答へ、尙、荏苒マダガスカル島に時日を費すの不利を附言した。時に滿洲に於ける大會戰も切迫し、遂に露本國の軍事當局者も斷行を決意し東航を命じた。よつて第三艦隊の到着を待たず、愈々三月十六

日第二艦隊四十五隻（その後途中からかへしたものもある）はノシベ島を出發し、四月八――九日にシンガポールを通過し、四月十四日佛領安南カムラン灣に投錨、四月二十五日同ヴアン-フオン灣（ホンコーヘ灣）に投錨して第三艦隊を待つた。

第三艦隊

先に太平洋第二艦隊を編成、遠征せしめたる露國政府は、その勢力薄弱なるを以て更に新艦隊を組織し、增援すべしと國論の沸騰せる爲、それが鎭撫策と且は日本に對する威嚇・牽制との爲、三十七年十二月中旬更に第三艦隊を編成した。

戰艦一隻　裝甲海防艦三隻　裝甲巡洋艦一隻　工作船一隻　艦船附屬運送船五隻　病院船一隻（他に一應編入されて來航しなかつたものもある。）

司令官に海軍少將ネボガトフを補し、三十八年二月十五日リバウ出發。三月二十四日スエズ通過、第二艦隊は既に三月十六日ノシベ島を出發し支那海に向つたため、直航すべき命令を受け、五月四日シンガポールを通過、同九日ヴアン-フオン灣附近で第二艦隊に合同した。

合同せる第二・第三艦隊は總計五十隻（前掲編成當時の艦數の合計とは途中から歸つたものもある爲、合致せず）の大艦隊となり、五月十四日ヴアン-フオン灣出發。五月二十七日愈々敵艦隊三十八隻（別動隊を除いた數）は朝鮮海峽にさしかゝつた。その勢力は左の如し。

司令長官（旗艦スワロフ）　海軍中將　ロゼストウエンスキー

司令官（旗艦ニコライ一世）　海軍少將　ネボガトフ

司令官（旗艦オスラビヤ）　海軍少將　フオンーフエリケルザム

司令官（旗艦アウローラ）　海軍少將　エンクウイスト

戰艦クニヤージ-スワロフ・アレクサンドル三世・ボロヂノ・アリヨール・オスラビヤ・シソイ-ウエリーキー・ナワリン・ニコライ一世・裝甲海防艦ウシヤーコフ・アプラクシン・セニヤーウイン・裝甲巡洋艦ナヒーモフ・モノマーフ・ドミトリードンスコイ・防護巡洋艦アウローラ・オレーグ・スウエトラーナ・巡洋艦アルマーズ・ジエムチウグ・イズムルード・驅逐艦ビエードウイ・ブイヌイ・ブイスツルイ・グロームキー・ベヅウプリヨーチヌイ・ボードルイ・ブレスチヤーシチー・ブラーウイ・グローズヌイ・假裝巡洋艦ウラール・工作船カムチヤツカ・運送船イルツイシ・アナヅイリ・ルス・コレーヤ・スウイーリ・病院船アリ

ヨール・カストローマ

【南洋】　ナンヤウ　南洋の稱呼については、その範圍は、國により又時代によつて異同變化があつて一定しない。（一）西曆一五一三年頃にスペインの探險家バルボアが中部アメリカの地峽を超えて太平洋を望んだ時　Mardel Sur（南洋）と呼んだのにはじまり、ヨーロッパに於ては嘗て太平洋をさして South Sea（南洋）と呼び、ドイツ人は今も時に Südsee（南洋）と呼ぶ。（二）支那では揚子江以南の海岸地方を南洋と呼ぶ。（三）今日我が國では、通常、ジヤワ・スマトラ・ボルネオ・フイリツピン等のマレー群島（表南洋）と、現在我が國の委任統治下にあるマリアナ・マーシヤル・カロリン・パラオの諸群島（裏南洋即ち今の南洋諸島）とを總稱し、又はその附近の海洋を呼んで南洋といふ。（四）委任統治決定以前に於ては、我が國では、北は北回歸線より、南は濠洲まで、東はハワイ諸島の西より、西はマレー群島までの諸島（即ち廣義の南洋諸島並びにマレー群島）並びに海を含めた太平洋一帶を南洋と汎稱した。換言すれば、我が國南方の大洋洲一帶及びマレー群島を含めた太平洋の汎稱であつた。

こゝでは（四）の範圍中の局限された區域――南支那海の南部ボルネオ海附近――をさすことは、次項によつて明らかである。

【上命】　ジヤウメイ　君命。お上のいひつけ。

こゝでは伊東軍令部長の東鄕聯合艦隊司令長官に傳へた四月十日の訓令「敵增遣艦隊の先頭は既に新嘉坡沖を通過せるを以て貴官は同艦隊の北上するを待ち之を全滅するの目的を達すべきを努むべし」のこと。

【近海】　キンカイ　陸地に近い海。ある地に對しそこに近い海。こゝでは日本近海の意。

【迎擊】　ゲイゲキ　迎へ擊つ。敵の來るを心構して待ち、これを攻擊すること。

【朝鮮海峽】　テウセンカイケフ　對馬、朝鮮間の海峽。對馬西水道ともいふ。又廣義には、朝鮮海峽、對馬海峽、壹岐海峽を總稱する場合がある。こゝでは後者の意。

【安南沿岸】　アンナンエンガン　こゝでは、安南の南部海岸、ヴアン-フオン灣（ホンコー（灣）・カムラン灣をさす。

〔安南〕 Annam　印度支那半島の東海岸、南支那海に沿ふ狹長な地域を占むるフランス保護領の一王國。住民は主に交趾支那族に屬する安南人で、漢字を用ひ佛教を信仰してゐる。早くから支那の政治的勢力の圈內にあつたが、十八世紀以來フランス人の侵略をうけ、遂に西曆一八八四年フランスの保護國となつた。一八八七年フランスは交趾支那植民地及び安南・東滿塞（トンキン）・東京（トンキン）・老撾（ラオス）の四保護領をフランス領印度支那と稱し、

爾來總督をして統轄せしめてゐる。

【哨艦】　セウカン　見張りの軍艦。敵の動靜を偵察する任務を帶びてゐる軍艦。こゝでは、假裝巡洋艦亞米利加丸・佐渡丸・信濃丸・滿洲丸及び第六戰隊の三等巡洋艦秋津洲・和泉のこと。

【果然】　クワゼン　(一)飽く貌。莊子、逍遙遊「腹猶果然」(二)果して。案の如く。こゝは(二)

【信濃丸】　シナノマル　日本郵船株式會社の汽船。總噸數六、三八七噸。當時シアトル航路に就航してゐたが、日本海海戰前に徵發されて假裝巡洋艦となり、特務艦隊に屬した。艦長海軍大佐成川揆。

信濃丸は僚艦と共に連日連夜南方哨戒勤務に當り、二十七日拂曉敵艦隊を發見し、同午前四時五十分「敵艦隊二〇三地點ニ見ユ、敵ハ東水道ニ向フモノノ如シ」の警報を發し、しかも敵に氣づかれずに、敵との觸接を和泉に引繼ぐ迄、よくその任務を果した。その發見報告は聯合艦隊の策戰を利するの功績頗る大いなるものがあり、後日東鄕司令長官より感狀を賜はつた。又翌二十八日は早朝より戰場清掃の任につき、傷ける戰艦「シソイ・ウエリーキー」を降服させ、その乘員を收容した。

【無線電信】　ムセンデンシン　電線の媒介によらずに遠隔の兩地間で電氣的に通信を行ふ方法。

西暦一八九六年、イタリアのマルコーニによつて發明された。彼の發明したのは火花式で、火花間隙に火花を飛ばし、それによつて起つた振動電流をアンテナから電磁波として輻射せしめ、空中線の電波による帶電の爲に生ずる電氣振動をコヒーラー檢波器で檢波し、モールス印字機によつて符號を記錄したのが濫觴である。その後送信裝置には電弧式・發電機式・眞空管式が發明され、現在では總べて眞空管式を用ひるやうになり、これによつて送信・受信の裝置は急進した。我が國では明治三十年東京月島海岸で始めて一海里の實驗に成功し、日露戰役の際には利用されて偉大な效果を示した。殊に世界大戰後は急激に進歩して、現代通信機關中最も重要な位置を占めてゐる。現在我が國は對米・對歐・對南洋の極東送受所を有してゐる。

【東水道】　ヒガシスヰダウ　通常對馬海峽といふ。對馬・壹岐間の海峽。

【踊躍】　ヨウヤク　はねをどること。歡びたのしみて勇み立つこと。「踊」「躍」をどる、はねあがる、の意。「踊」は小をどりすること。「躍」は勢よく速かに飛びあがること。

【和泉】　イヅミ　三等巡洋艦。排水量二、九六七噸、速力

一七節。日本海海戰當時は第三艦隊第六戰隊に屬した。艦長海軍大佐石田一郎。

二十七日內方警戒線の左翼哨艦として五島白瀨の北方にあり、信濃丸の無電により敵艦隊の出現を知つて索敵、六時四十五分遂に發見、信濃丸と交替してよく獨り敵艦と觸接を保ち、敵艦の數、變化する陣形等を報告した。又敵艦に逐はるゝ我が商船を救ひ、知らずして敵の所在地に向ふ陸軍病院船を避けしめ、同じく危險に直面する陸兵滿載の運送船に接近して、避難せしめる等掩護の功も多かつた。後、數艦の敵と應戰したり、或は敵の後尾を襲つて病院船を分離させたりして、午後三時四十分本隊に合した。その監視・報告の功は信濃丸と相並ぶべく、後日東鄕司令長官から感狀を賜はつた。

【片岡艦隊】　カタヲカカンタイ　本來、司令長官海軍中將片岡七郎麾下の第三艦隊をいふのであるが、こゝでは特に片岡司令長官直率の第五戰隊のこと。

この時同艦隊は第十一・第二十艇隊及び竹敷要港部所屬の第十七・第十八艇隊並びに第十六艇隊の白鷹を引率して尾崎灣を出發した。

【東鄕戰隊】　トウガウセンタイ　第六戰隊のこと。指揮者第三艦隊司令官海軍少將東鄕正路の名によつて斯く呼ばれる。

この時は秋津洲・和泉は內方警戒線左翼哨艦として出動中の爲、須磨・千代田二艦のみ第十・第十五艇隊を率ゐて尾崎灣を出發した。

【出羽戰隊】　デハセンタイ　第三戰隊のこと。指揮者第一艦隊司令官海軍中將出羽重遠の名によつて斯く呼ばれる。

【交】　カウ　あはひ。あひだ。ころ。月又は時候のかはり目。轉じて、十時十一時の交、といへば、十時頃か十一時頃にかけて、の意。

第五戰隊は午前九時五十五分に第六戰隊は同十時十五分に、第三戰隊は同十時四十二分に敵と觸接した。

【壹岐】　イキ　壹岐島(長崎縣壹岐郡)。昔の壹岐國(一島一國。)玄海灘の西方、對馬と佐賀縣との間に位する。海岸の出入大で良港がある。對馬とともに古來外國交通の要衝で、又外寇の焦點となり、殊に文永・弘安の元寇に當つては、虜掠を受けることも甚だしかつた。

【對馬】　ツシマ　昔の對馬國。主島二つ(上島・下島)からなり、行政上、長崎縣上縣郡・下縣郡と稱せられる。朝鮮海峽(廣義の)中央に位し、國防上・交通上の要地である。

島廳所在地嚴原(イツハラ)町の北方鷄知(クヂ)村に陸軍要塞司令部があ

り、兩島間の淺海灣に臨む竹敷港は日本海海戰の際に於ける上村第二艦隊の根據地として有名である。

【沖の島】　玄海灘の北方、對馬の嚴原のほゞ眞東七三粁の海上にある一孤島。行政上は四七粁を距てる福岡縣宗像郡大島村に屬し、定住する者はない。たゞ一等燈臺兼二等電信局に勤務する者數名と、官幣大社宗像神社瀛津宮の神官若干名が駐在して、一定期に交替する。その他漁期に滯在する漁師で一時期賑はふに過ぎない。

【濛氣】　モウキ　ぼうつと立ち罩めた霧。〔濛〕　ボウ・モウ（通音）こさめ・霧などの貌。

【展望】　テンバウ　遠くながめやること。見渡すこと。

【海里】　カイリ　Sea mile（英）　我が國法定略字で浬と書く。一海里は海面上の長さ或は航海上の里程の單位で、緯度一分の長さに相當し、一・八五二粁（一六・九七五町）に等しい。

船の速力を示す單位の節は、一時間に走る海里數（即ち、一時間一海里の速力を一節とす）である。

【二列縱陣】　ニレツジユウヂン　海軍用語で、艦隊陣形の一。軍艦が縱に二列に並んだ陣形。

【右翼】　ウヨク　陣列を鳥の左右翼に譬へ、その右方陣をいふ（左翼の對。）こゝでは二列縱陣の右側列のこと。

【本職】　ホンショク　本官。官公吏等の職務上の自稱。

ここでは聯合艦隊司令長官としての東鄕大將自身をいふ。

【心算】　シンサン　心にはかること。見込をたてること。立案。心計。

【主戰艦隊】　シユセンカンタイ　艦隊の主力として戰鬪の中心となる戰隊。こゝでは第一戰隊をいふ。

第一戰隊は東鄕聯合艦隊司令長官直率の下にその旗艦三笠を始め戰艦四隻・裝甲巡洋艦二隻及び通報艦より成り、事實、終始戰鬪の第一線に立ち最も敵の砲火の集中する所となつた。

【裝甲巡洋艦隊】　サウカフジユンヤウカンタイ　こゝでは第二戰隊（通報艦早を加ふ）をさす。旗艦出雲を始め六隻の裝甲された一等巡洋艦から成る故斯く呼ばれる。この時は、第二・第五驅逐隊を從へた。

第二戰隊は第二艦隊の主體で、司令長官海軍中將上村彥之丞直率の下に終始第一戰隊と協同動作をとつた。

【瓜生戰隊】　ウリフセンタイ　第四戰隊のこと。指揮者第二艦隊司令官海軍中將瓜生外吉の名によつて斯く呼ばれる。

【驅逐隊】　クチクタイ　驅逐艦二隻で編成する隊。當時の我が驅逐隊は第一より第五までの五隊二十一隻。

【興廢】　コウハイ　興替。興ると廢ると。盛になると衰へると。詩經、頌四序、疎「王者政有二興廢一」

【信號旗】　シンガウキ　信號に用ひる旗。「信號」　相隔つた雙方の間に一定の符號を用ひて意志を通ずる方法。色・音・形・光等が用ひられる。

【單縱陣】　タンジユウヂン　海軍用語で、艦隊陣形の一。軍〇が縱に一列に並んだ陣形。

【オスラビヤ】　露國太平洋第二艦隊第二戰隊所屬の戰艦。排水量一二・六七四噸、速力十八節、主要兵器、十二吋砲四門・六吋砲十一門を有す。司令官海軍少將フエリケルザムの旗艦。（同司令官は來航中病痾に冒されて危篤に陷り、遂に五月二十三日沖繩附近にて逝去したが、ロゼストウエンスキー司令長官は兵氣の挫折せんことを慮つて嚴重にその喪を祕して航行をつゞけた。）

第二　艦隊の先頭艦として勞頭から我が攻擊の焦點となり、遂に五月二十七日午後三時七分沈沒。乘員九百名中三百八十名が驅逐艦ブイヌイ・ブラーウイによつて救はれたのみで、他は盡く艦と運命をともにした。

【須臾】　シユユ　しばし。すこしの間。

【旗艦】　キカン　艦隊の司令長官或は司令官の坐乘する軍艦。海軍旗章令により大將旗・中將旗・少將旗等の將旗を揭揚する所からかく呼ばれる。

【クニヤージ・スワロフ】　露國太平洋第二艦隊第一戰艦隊所屬の戰艦（司令長官海軍中將ロゼストウエンスキーの旗艦。）排水量一三、五一六噸、速力十八節。主要兵器、十二吋砲四門・六吋砲十二門を有す。

二十七日午後二時八分この艦先づ砲火を開いたが、第一戰艦隊の先頭艦として我が攻擊の目標となり、忽ち火災を發し、益々猛擊を受けて司令長官も頭部に重傷を負ひ、舵機を損じて列外を彷徨するに至つた。五時三十分頃、司令長官を驅逐艦ブイヌイに移した後も、我が各戰隊の砲擊を受け、遂に七時二十分我が第十一艦隊の擊沈するところとなり、乘員は殆ど全部悲壯な戰死を遂げた。

【アレキサンドル三世】　インペラートル・アレキサンドル三世。露國太平洋第二艦隊第一戰艦隊所屬の戰艦。排水量一三、五一六噸、速力十八節。主要兵器、十二吋砲十二門を有す。旗艦スワロフの列外に逸した後代つて嚮導艦となつたが、我が集彈を蒙つて大火災を生じ、一時列外に遁れ火災を熄滅して戰列に復したが更に傷き、遂に午後七時沈沒。乘員は全部艦と共に沈んだ。

【騰煙】　トウエン　のぼる煙。

【靉きて】　タナビきて　なびいて。

【遁走】　トンソウ　逃走。にげはしる。

【扼して】　ヤクして　さへぎりて。「扼す」（一）おさへる。

(一)とりひしぐ。

【壯烈】　サウレツ　志氣がさかんで目ざましい。勇壯義烈。

【千早】　チハヤ　通報艦。排水量一、二三八噸、速力二一節。當時第二艦隊第二戰隊所屬。艦長海軍中佐江口鱗六。當初より哨戒にまた運送船掩護に活躍し、この海戰中屢〻敵彈に傷つきながらよく肉薄攻擊を試み、殊にこのスワロフに對する水雷襲擊については後日東鄕司令長官から感狀を賜はつた。三十八年十月二十三日の凱旋觀艦式には供奉艦の一として御召艦に從つた。

【廣瀨・鈴木の兩驅逐隊】

〔廣瀨驅逐隊〕　第二艦隊所屬第五驅逐隊のこと。司令官海軍中佐廣瀨順太郎の名によつて斯く呼ばれる。こゝのスワロフ攻擊の他、その夜の夜襲の强行に相當傷ついたが屈せず、翌二十八日不知火は假裝巡洋艦佐渡丸と共に敵艦ナヒーモフ號を捕獲し、更に敵驅逐艦グロームキーを追窮して遂にこれを蔚山沖に沈沒せしめた。後日東鄕司令長官から感狀を授けられた。

〔鈴木驅逐隊〕　第二艦隊所屬第四驅逐隊のこと。司令官海軍中佐鈴木貫太郎の名によつて斯く呼ばれる。このスワロフ攻擊の功により後日東鄕司令長官から感狀を授けられた。

【彷徨】　ハウクワウ　さまよふ。うろつく。

【春き】　ウスツき。

「春く」は、(自動、四)(一)物を臼に入れて杵にてつく。(二)陽が山の端などに入らうとする。三體詩「隔レ浸遙見二夕陽春一」こゝは(二)。

【水雷艇隊】　スヰライテイタイ　當時出動せる我が水雷艇は十一艇隊四十一隻であつた。

〔水雷艇〕　魚形水雷を以て敵艦を襲擊する小艇。日露戰爭當時最も活動したが、その餘りに小さく凌波性に乏しい爲、その後驅逐艦が水雷艇の役割を代行し、漸次廢止され、艦載水雷艇を水雷艇と稱するに至つた。併し、ロンドン軍縮會議の結果驅逐艦が制限せられるに至つた爲、最近また復活、整備した。昭和八年進水した「眞鶴」「千鳥」の如きはそれである。

【逼れる】　セマれる　近づいた。迫つた。

【鬱陵島】　ウツリヨウタウ　松島ともいふ。朝鮮半島の東方、日本海上にある火山島で、朝鮮慶尙北道に屬する。海岸は絕壁をなし、船舶の寄泊地に乏しい。

【結了】　ケツレウ　終る。すむ。かたづく。

【千載一遇】　センザイイチグウ　千年に一度相遇ふこと。容易に得難い好機會。千歲一時。

「載」はとし。夏の世には、「歲」、商には、「祀」、周には、「年」、堯舜時代には、「載」を用ひたといふ。

【風濤】　フウタウ　風と大波。

【蝟集】　キシフ　蝟(ハリネズミ)の棘の集つたやうに、事の一時に多く生ずること。

「はりねずみ」は、食蟲目、蝟科、はりねずみ屬の哺乳類。體背・體側に多數の棘を密生し、皮膚筋よく發達して、體を丸めれば栗のいがの如き狀を呈する。

【肉薄】　ニクハク　相手の身近くまで迫ること。

「薄」は「迫」に同じ。ちかづく。つめよる。

【探照砲火】　タンセウホウクワ　夜間戰鬪に於ける海軍の術語で、探照して砲擊すること。

【僚艦】　レウカン　仲間の軍艦。友艦。

【四分五裂】　シブンゴレツ　ちり〻〻に分れ裂けること。秩序なく裂け分れること。史記、張儀傳「天下四分五裂」

【血路】　ケツロ　敵の包圍を切りぬけて辛じて逃げ出る路。韓愈、城南聯句「羽空顚二雉鷄一、血路迸二狐麋一」

【覓めて】　モトめて　探し求めて。搜索して。

【應接に遑なく】　次から次へと生じ起る事に一々應じきれないで。

「遑」はイトマ　(一)ひま。(二)急ぐ。あわてる。

【俯角】　フカク　水平面より下方に測つた角度。(仰角の對)大砲には、構造上、仰角・俯角の限度がある。

【照準】　セウジユン　銃及び砲に方向と射角とを與へる操作。照準機により、方向照準と高低照準とを行ふこと。

【黎明】　レイメイ　よあけがた。あけるころほひの意。

「黎」はころほひ。一說に、天の色の黑き(クロ)義。史記、高祖紀「黎明圍二宛城一三市」

【白旗】　ハクキ　戰時國際法上、降服の意を示す時、又は敵軍と交涉の爲軍使が派遣される場合、その降服者又は軍使は白旗を揭げることになつてゐる。

【ネボガトフ】　ニコライ・イワノウイツチ・ネボガトフ　海軍少將。露國太平洋第三艦隊司令官。戰艦インペラトール・ニコライ一世に坐乘。明治三十八年二月リバウ出發。五月佛領安南ヴアン・フオン灣に於て第二艦隊と合同した。

二十七日、司令長官ロゼストウエンスキー中將の負傷後全艦隊の指揮權を讓られ、潰亂せる諸艦を集合し一意北走を企圖したが、盡く攻め立てられて夜に入り遂に翌二十八日朝に至り、その麾下にある軍艦僅かに五隻のみで他は全く分離して視界になく、前日來の激戰に自國艦隊の敗潰・殘滅したのに反し、日本艦隊は何等の損害も被らず艤容整齊たるを見て、抵抗の不可能と徒に部下將卒の生命を失ふの無益を覺り、日本艦隊の砲擊を受くるも應戰せず、午前十時三十分遂に降伏し、捕虜となつて佐世保に送られた。本國歸還後死一

等を減ぜられて流刑に處せられた。

【漣】サザナミ　第一艦隊の第三驅逐隊所屬。排水量三〇五噸、速力三一節。艦長海軍少佐相羽恒三。

五月二十八日敵驅逐艦ビエードウイ（ロゼストウエンスキー塔乘）捕獲の功績を以て感狀を授けられた。

【陽炎】カゲロフ　第二艦隊の第五（廣瀬）驅逐隊所屬。排水量二四七噸、速力三〇節。艦長海軍大尉吉川安平。動功により後日感狀を賜はつた。

【追蹤】ツキデフ　後から追ひかけること。

「蹤」は(一)ふむ。(二)はく。(三)追ひかける。

【ビエードウイ】露國太平洋第二艦隊第一驅逐隊所屬の驅逐艦。排水量三五〇噸、速力二六節。

【ロゼストウエンスキー】ジノーウイ・ペトロウイッチ・ロゼストウエンスキー　明治三十七年（西暦一九〇四年）五月二日、海軍軍令部長心得侍從將官海軍少將の現職のまま太平洋第二艦隊司令長官を兼攝せしめられ、十月十五日リバウ出航、十七日海軍中將に昇進した。

【幕僚】バクレウ　軍用語。陸海軍の司令官又は參謀總長・軍令部長などに直屬して、參謀の事務をとる將校をいふ。

【汲々】キフキフ　休まずつとめるさま。孜々。

【殘獲】ザンクワク　殘りの獲物。こゝでは、シソイ・ウエリーキー・ナヒーモフ・モクマーフ・グロームキーの捕獲・收容をさす。いづれもやがて沈沒した。

【水雷艇三隻】我が水雷艇隊中、第一艇隊の第六十九號艇（司令乘艇）、第十七艇隊の第三十四號（司令乘艇）、及び第十八艇隊の第三十五號艇の三隻は、二十七日夜の猛烈な水雷攻擊に於て、或は敵彈の爲、或は僚艇との衝突の爲、沈沒した。

【祖國】ソコク　(一)自己の祖先以來臣籍の屬する國。(二)國民の分れ出たもとの國。こゝは(一)

【勝を制して】勝利を專らにして。

【奇績】キセキ　すぐれたいさを。めづらしいてがら。

【御稜威】ミイツ　稜威に同じ。天皇の尊嚴なる御威光

【加護】カゴ　神佛の、力を加へて守護したまふこと。

【嚮に】サキに。

【成果】セイクワ　結果。

2　文の構成

第一節　初―四五頁二行　天祐と神助に依る敵艦隊の擊滅。

第二節　四五頁三行―四七頁九行　敵艦隊の發見と北進。

1　朝鮮海峽に全力を集中、敵艦隊の來るを待つ。（四五頁三行―七行）

2　「敵艦見ゆ」との第一報、つゞいて來る敵情報告。（四五頁八行―四七頁二行）

3　南方數海里に遂に現れ來つた敵影。戰鬪開始の令と我が陣形。（四七頁三行―九行）

第三節　四七頁一〇行―五二頁九行　戰鬪狀況。

1　戰鬪開始に際しての彼我の對勢。（四七頁一〇行―四九頁二行）

2　敵艦の擊破と進擊。（四九頁三行―五〇頁二行）

3　夜間に於ける水雷攻擊。（五〇頁三行―五一頁二行）

4　翌二十八日に於ける敵艦の捕獲と敵兵の捕虜。（五一頁三行―五二頁九行）

第四節　五二頁一〇行―終　兩日海戰の成果と將卒の感激。

3　文意

日本海海戰の快捷と我が將卒の感激。

4　鑑賞批評

〔天祐と神助とに依り、……遂に殆ど之を擊滅するを得たり〕――この冒頭の一句は、東鄕司令長官の敬虔な至情と沈毅な態度の結晶的示現に外ならぬ。名將の心境の躍如たるものが感ぜられる。

〔海上濛氣深く、展望五海里以外に及ばざりし此の日も、數十海里を隔てたる敵影恰も眼中に映れるが如く、云々〕――東鄕司令長官公報の一特質は、戰況の背景ともいふべき自然描寫が簡勁で、鮮明・的確な印象を與へることである。以下この類が少くない。

〔……騰煙西風に靉きて忽ち海面を蔽ひ、濛氣と共に全く敵影を包みぬ。〕――何んといふ壯快な文字であらう。騰煙・

濛氣忽ちに海面を蔽ひ、敵影を包んだといふ、しかも全隊の砲火集中についで起つた光景である。戰爭美を說くものがあるのも所以あることである。つゞいて「勝敗は既にこの間に決したるなり」と回想してゐるのも力强い何ものかに打たれしめる。

〔我は煙霧のうちに敵影を發見する毎に、緩やかに之を砲擊しつゝ、……〕――當時の光景が眼に見えるやうであり、敵に致命傷を與へた後の我が艦隊の餘裕綽々たる態度と、それ故に益々有效な動作が一語一句の上にひゞいてゐる。

〔この時夕陽すでに春き、……日沒と共に東方に變針し、……こゝに當日の晝戰を結了せり〕――既に擧げ來つた事項であるが、時の經過と戰況の推移を具體的に敍し、渾融の氣分を橫溢せしめてゐる筆力には驚異せざるを得ないものがある。

〔……左右應接に遑なく、且その距離あまりに近きために、備砲俯角の度を過ぎて照準する能はざりきといふ。〕――敵中に迫つて急擊する我が驅逐隊及び艦隊の奮鬪を表すにこれ以上の敍述はあるまい。强風浪の中をも顧みず、「千載一遇の時機」を取逃さんことを恐れ、危險を忘れて猛襲する將士の奮戰ぶり、言簡にして雄勁、眞に餘韻の盡きないものがある。

〔二十八日黎明、濛氣拭へるが如し。〕――傷ついた敵艦を搜索し、最後的處置を與へるには絕好の天象である。天祐・神助の語、所以なきではない。

〔本職は、特に將校以上帶劍を許して之を受けたり。〕――我が武士道に「武士の情」といふことがある。敗軍の將を遇するに禮を失はないこの床しい心こそ、眞に勇氣の源泉ともなり得るのである。

〔しかも我が聯合艦隊が、よく勝を制して奇績を收め得たるものは、一に天皇陛下の御稜威の致す所にして、もとより人爲の能くすべきにあらず。〕――空前の大捷を贏ち得た長官の至情には、眞に文字通り「奇蹟」と思はれたであらう。そして天皇陛下の御稜威と歷代神靈の加護を感謝してやまなかつたのが東鄕司令長官の衷情であると共に、又大事を成し遂げた人に共通な心理であらう。

日本海海戰に於ける我が軍の捷利はトラファルガル海戰に於ける英國海軍の捷利以上の大捷といはれてゐる。日本史上に於ても燦たる光輝を放つ事實で、恐らく、かの元寇と共に千古不磨の語り草となるであらう。新興の途上にあつた帝國の歩みをして、一躍世界列强の班に伍せしめたこの大捷を、その最大の名譽を擔ふ東鄕司令長官の言として讀み得ることは、我等に取りて無上の欣びであり誇りでなければならぬ。樸直の文から自ら感得せられるこの偉大さはすでに單なる一武人としてのそれのみではない。

三　備　考

1　指導研究

（イ）國史の上に、殊に最近世史の上に回顧することを忘れてはならない日露戰爭、就中興國の拍車となつた日本海海戰、それもだん〳〵過去の霧中にうすれて行かうとするこの際、殊に國寶的存在であつた東鄕元帥も旣に世を去られた今日に於ては、この文は一層重大な意義をもつて普く讀まれなければならぬ。あのZ信號はいつまでも懦夫を起たしむる警告と力とを與へる。戰鬪開始に於ける長官の氣構は仰げば仰ぐほど高く力强い。生徒には當時の歷史的情勢を示すことによつて、日本海海戰の重大性も、「皇國の興廢此の一戰にあり」の眞意義も、又東鄕司令長官の勳功の偉大さも良く理解せられるであらう。捷利に誇らず、その喜に醉はず、只管、皇威と天祐とに感謝を捧げてこの文を草し終つてゐる長官の眞心も、それによつて眞にうかゞひ得るであらう。

次に、武將としての長官が、敵を愛した人間的至情をも見逃してはならぬ。その敵ながらも祖國の爲に奮戰してゐる姿に敬意を表し、捕虜となつた敵將に帶劍をゆるしたことなど、感激なくして讀み去ることの出來ないものがある。

（ロ）本文は戰場の實況を正確に知らうとすれば、その資料に乏しくない。隨つてそれを精しく學習させようとすれば、

夥しい時間を要するであらう。これ本文が第一戰隊の行動を主として、それによつて全局の推移を知らしめようとした所以である。學習指導の方法も、詳細な事實をあげるよりも、戰局の推移を的確に把握させることを目標とすべきではなからうか。

殊に、名報告の稱に背かず、讀みかへせば讀みかへす程、簡潔な表現のもつ意義と力が感じられて來る文である。單にその日の情景を報ずるに過ぎないやうな簡單な一句が、我が軍の勝算を示して大本營に在つて胸を痛めてゐる人々をして安心させ、或は全國民の血を涌き立たせたのも無理はない。さういふ名報告の名報告たる所以の一端なりとも把握させるには如何にすればよいか。その一は指導者が兩軍の形勢とその由來を熟知して、文中の一語一句を具體的な情勢で註解することであり、他の一は生徒各自が先づあの文體を正しく讀みこなし、更に大局の推移を明確に跡づけるべく讀み考へることでなくてはならぬ。その中の前條に備へる爲に、本文の註解は事實の經過を明示し、學習指導を力あらしめようと計つてゐる。

2. 參考

（イ）曠古の日本海海戰が如何なる用意の下に開始せられたか、その一端を示すべく秋山眞之會編「提督秋山眞之」中の一節を左に引用する。

東洋艦隊を全滅せしめた我が聯合艦隊は、殆ど息をつぐ間もなく、新しい大敵バルチック艦隊を迎へねばならなかつた。しかも我が聯合艦隊が最も頭を惱ました問題は、敵が對馬海峽を通過するか、津輕海峽を通過するかといふことである。

この問題は又、日本の全國民の熱血を沸騰させたり、氷のやうにつめたくしたりした。「對馬だ」「津輕だ」さう言つて世間では隨分騷いだ。米國海軍のマハン大佐の如きは、「日本艦隊は澎湖島附近に位置を占むべきだ」と言つた。

だが、我が東鄕艦隊は沈着だつた。そして徐ろに敵艦の來るに備へた。敵が新嘉坡あたりへ來るまでは、專ら鎭海灣で訓練に從事しつゝあつたが、同時に、敵が津輕方面に向ふ場合を豫想して、哨戒の計畫は樹てられた。愈々敵が支那海に入り、臺灣の南方を通過したといふ情報があると、聯合艦隊は、今後或る時期までは對馬海峽に居るが、それから先は臨機、津輕方面に向ふといふ、前の哨戒計畫よりも一歩進んだ計畫が樹てられた。

併しながら敵は津輕海峽には向はず、對馬海峽を通過した。東鄕司令官は明斷を以て麾下艦隊を朝鮮海峽に集中し、之を迎へ擊つて一擧に擊滅し得たのであるが、さりとて津輕海峽通過の場合を全然考慮に入れなかつたわけではない。若し敵艦隊が津輕に廻るとの報があつたならば、鎭海灣の艦隊は直ちに猛然として活動を開始し、全速力を以て敵艦隊迎擊に向ふだけの手筈は出來てゐた。

戰務の上に於ても手配は遺漏なく行き渡り、沿海の要所々々には炭水彈藥の準備までして萬全を期してあつた（中略）

バルチック艦隊を迎へ擊つに當り、秋山參謀はかねてからの練りに練つた七段構を以てしたといはれてゐる。七段構とは、晝戰夜戰の正攻、奇襲を交互に活用するもので、濟州島近海から浦鹽沖に至る海上を七段に分ち、それ〴〵の區域に於て、最も有効適切な攻擊法によつて敵を擊滅しようといふのであつた。

時間的に言へば、第一段は主力艦隊が戰ふ前夜に、我が驅逐隊、水雷艇隊の全力を以て敵艦隊を襲擊せしめる。第二段は右襲擊の翌日、我が艦隊の全力を擧げて敵に正攻擊を加へる。第三段と第五段は、引續きその夜間に驅逐隊、水雷艇隊をして再度の奇襲的水雷攻擊を試みさせる。第四段と第六段は、その翌日我が艦隊の大部分を以て、敵の殘存部隊を鬱陵島及び浦鹽港前に進擊する。最後の第七段に至つて、かねて竊かに浦鹽の港口に敷設したる水雷沈設帶に敵を追ひ込む——大體かういふ作戰であつた。

その作戰の規模雄大にして而かも用意周到なことは、古今の海戰を通じて類が無いものであつた。

併し愈々海戰が始まつてから實戰に用ひられたのは第二段から第四段までに過ぎなかつた。夜戰を目的にした第一段が省かれたのは、戰爭が晝間から始まつた爲であるが、第五段以下が用ひられなかつたのは、第四段までで敵艦隊が全滅してしまつた爲である。

堂々たる七段構の戰法を案出した秋山參謀からいへば、いささか張合がなかつたかも知れないが、日本海海戰が雌期以上の大成功であつたことは、これだけでも十分わかるであらう。

（ロ）海戰に參加した彼我勢力の比較

	日本	露國
戰艦	四隻	八隻
裝甲巡洋艦	八隻	三隻
裝甲海防艦	二隻	三隻
巡洋艦	一六隻	六隻
砲艦	五隻	—
驅逐艦	二一隻	九隻
水雷艇	四一隻	—
特務艦船	八隻	九隻

	日本	露國
總噸數	二一七、八二八噸	一五〇、三八五噸
十吋砲	一門	二門
十二吋砲	一六門	二六門
九吋砲	—	一二門
八吋砲	三四門	一三門
六吋砲	二〇二門	一六〇門
四・七吋砲	一〇四門	二八門
小口徑砲	七五八門	四九七門

（八）戰績比較

A　我が軍の損失

沈沒艦艇　水雷艇　三隻　戰死　一一〇人　負傷　五八〇人

B　敵軍の損失

喪失艦艇

1、我が艦隊に擊沈せられたるもの

戰艦　六隻　裝甲巡洋艦　三隻　裝甲海防艦　一隻

巡洋艦　一隻　驅逐艦　三隻　特務艦　三隻

2、我が艦隊に擊破せられて自沈したもの

驅逐艦　二隻　特務艦　一隻

3、坐礁自沈したもの

巡洋艦　一隻

4、我が艦隊に捕獲せられたもの

戰艦　二隻　裝甲海防艦　二隻　驅逐艦　一隻

病院船　一隻

5、中立國港灣に遁入して抑留處分を受けたもの

巡洋艦　三隻　驅逐艦　一隻　特務艦　二隻

（自國港灣に到着若しくは歸航したもの）

巡洋艦　一隻　驅逐艦　二隻　特務船　二隻

戰死　約五、〇〇〇人　俘虜　約六、一〇〇人　中立國抑留　約二、〇〇〇人

（ニ）日本海海戰當時の艦隊編制を理解する爲に、參考として現在の我が艦隊編制を左に揭げる。

昭和十一年度艦船役務表

聯合艦隊（司令長官　海軍中將　高橋三吉）

○第一艦隊（司令長官　同上）

第一戰隊——山城（聯合艦隊旗艦）・長門・扶桑・榛名

第八戰隊——川內・神通・長良

第一水雷戰隊——阿武隈・第九驅逐隊・第二十一驅逐隊・第三十驅逐隊

第一潛水戰隊——迅鯨・第十八潛水隊・第十九潛水隊・第二十八潛水隊
第一航空戰隊——鳳翔・龍驤・第五驅逐隊
○第二艦隊（司令長官　海軍中將　加藤隆義）
第五戰隊——妙高・那智・羽黑
第七戰隊——青葉・衣笠
第二水雷戰隊——那珂・第六驅逐隊・第八驅逐隊・第十九驅逐隊・第二十驅逐隊
第二潛水戰隊——鬼怒・第十二潛水隊・第三十潛水隊
第二航空戰隊——加賀・第二十九驅逐隊
附屬　間宮・鳴戸・鵜見

○第三艦隊（司令長官　海軍中將　及川小四郎）
第十戰隊——出雲（第三艦隊旗艦）・球磨
第十一戰隊——安宅・鳥羽・勢多・堅田・比良・保津・熱海・二見・浦風・栗・栂・蓮・〔小鷹〕
第五水雷戰隊——夕張・第十三驅逐隊・第十六驅逐隊
附屬　嵯峨
○練習艦艇　比叡・春日・木曾・嚴島・第三驅逐隊・第七驅逐隊・第九潛水隊・第一掃海隊・大井・長鯨・第十二驅逐隊・第十四潛水隊・伊號第五十一潛水隊

八興國の樅

一　解題

1　作者

内村鑑三　ウチムラカンザウ　宗教家。文久元年舊暦二月十四日、高崎藩士内村金之丞宜之の長子として江戸小石川松平右京亮邸に生まれ、元治元年父母に伴はれて高崎に歸つた。明治五年上京、私立有馬學校に入學。同七年、東京外國語學校英語學下等第四級に編入。十年、札幌農學校第二期生として入學、同校を卒業後、開拓使御用掛・民事局勸業課に勤務した。十六年農商務省囑託、水産課に勤務し、翌年渡米、ペンシルヴェニア州立白痴院に勤め、十八年アマスト大學に入學し、二十年同大學卒業後、コネチカツト州ハートフォルド神學校に入學したが中途退學した。翌二十一年歸國し、新潟北越學館に赴任した。二十三年第一高等中學校（今の第一高等學校）囑託となつたが、翌年退職、二十五年大阪泰西學館、二十九年名古屋英和學校に勤務した。三十年萬朝報社に入り、英文欄主筆となつて活躍したが、翌年退社、同年「東京獨立雜誌」創刊、三十三年同誌廢刊後「聖書の研究」を創刊した。この年第一回夏期講談會を開き、その後も三十四年・三十五年と二回に亙つて講談會を開いた。所謂角筈時代で、都下の學生の多くがその周圍に集つた。明治四十年居を柏木に移す。大正七年基督再臨運動を起し、神田基督教青年會館に於て聖書講演を始め、翌年大手町衛生會館に移り、大正十二年關東大震災の結果柏木今井館に會場を移した。十三年米國排日法案に對し反對をなした。昭和四年暮まで柏木今井館で講演を續けたが翌五年三月、東京府下豐多摩郡淀橋町柏木九一九（今の東京市淀橋區柏木）の自邸で病歿した。享年七

十。遺志により「聖書の研究」は廢刊され、講演會は散會された。その立場は基督教各派から全然獨立し、キリストの純福音を提唱するにあつた。主著には「基督信徒の慰め」「求安錄」「余は如何にして基督信徒となりし乎」（英文）「後世への最大遺物」「所感十年」「研究十年」「羅馬書之研究」等がある。その著作は内村鑑三全集全二十卷に收められてゐる。

2　**出　典**

「明治四十四年十月二十二日、東京柏木今井館に於て述ぶ」と旁註され、「信仰と樹木とを以て國を救ひし話」と副題せられてゐる「デンマルク國の話」から抄錄した。「デンマルク國の話」は明治四十四年十一月聖書之研究第一三六號に掲載され、大正二年更に聖書研究社から小冊子として出版せられたもので、内村鑑三全集第十四卷に收められてゐる。（内村鑑三全集。全二十卷、岩波書店發行）

3　**主眼及び採擇の趣旨**

忠誠と謙讓の美德を讃歎すべき海戰の捷報の後を承けて熱誠と忍耐とが國を救つた話を掲げ、平常時非常時に於ける興國の原動力が如何なる所に潜むかを考へしめようとした國民的教材である。殊に今日、平安・和樂の理想鄕として世界の羨望を集めてゐるデンマルクが、實は單なる天與の樂園ではなくて、人間の熱誠と忍耐との力によつて開拓せられた樂園であることを讀みとらせ、それが如何なる際時に胚胎した力であるか、又さういふ際に於ける、集中せられた人間の力と、實行から來る智慧とが如何なる意義を國運の上に、又全人類の向上の上に齎らすものであるかを覺らせ、更に、現下の我が國際的狀勢と國内的事情の下に於ける第二の國民が、將來如何なる覺悟を以て立つべきか、その方向を見定めさせることは、本課に配せられた重要な一意義でなくてはならぬ。

二　解　釋

1　**語　釋**

【樅】モミ　松科中、主として樅屬(Abies)、はりもみ屬(Picea)等に屬する常綠喬木をいひ、英語の Fir 若しくは Spruce にあたる。但し、Fir には栂屬や松屬の或ものも含まれてをり、本課に出る「アルプス產の小樅」といふのは、實は Fir の中の松屬(Pinus)のものである。「ノルウェー產の樅」とある方は典型的な Spruce で、はりもみ屬に屬する。參考の爲に植物學でいふ狹義の「もみ」（本邦產）に就いて記せば、これは Fir にあたる樅で、松科、樅屬の一種。本州中南部・四國・九州の山地に生じ、樹高は三〇米内外。葉は深綠色を呈し細長、扁平で先端二裂し、二列生で密に互生する。雌雄一家で、長い卵圓形の大毬果を直生せしめる。その果鱗は熟すれば脫落する。花候は六月。建築材・器具材・製紙原料等に用ひられる。

【デンマルク】Denmark　ドイツの北に連なる王國。ユトランド半島及びシュルランド・フイエン・ラーランド、その他の島嶼から成り、西に北海、東にバルチツク海を控へ東北はズンド・カテガツト兩海峽を挾んでスウエーデンに、北はスカゲーラク海峽を挾んでノルウェーに對してゐる。面積約四三、〇〇〇方粁、人口約三六〇萬。他にグリーンランドに廣大な植民地を有し、又デンマルク國王はアイスランドの國王を兼ねてゐるが、この兩地は共に人口稀薄である。

地勢は一般に低平、西海岸は沼澤・砂丘が連續し船舶が近づけないが、東岸は良港灣に乏しくない。島嶼部及び半島の東南部は海岸林・農場・牧場に富むが、北部・西部・内地には灌木の茂つた荒野が多い。氣候は灣流の影響により、高緯度の割に溫和・濕潤であるが、夏期には霧が多く、冬季バルト海方面は寒さがきびしい。古代氷河に襲はれた爲、地味が瘦せてゐるが、國民の勤勉な性質は、法律による土地所有の制限、學理の周到な應用と相俟つて、惠まれない風土を化して生產的に新な價値を生ぜしめるに至つた。產業は農牧を主とし、全面積の四分の三は開拓せられ、その一部分を放牧地に割いた殘り、即ち全面積の六〇％は美しい農耕地である。數年前の調査によれば大麥・燕麥・馬鈴薯の產額は何れも百萬噸を超え、小麥・ライ麥・甜菜の產も少くない。他には漁業が相當行はれるが、鑛業には惠まれず、工業としては磁器・毛織物等の製造、造船・製糖業等が行はれるに過ぎない。半島の北部及び群島地方には原始時代から北ゲルマン族のデーン人が住み、南部にはドイツ人が住んでゐる。政體は立憲王政で、首府コペンハーゲンが東方に偏して

ゐるのは、嘗つてこの國が榮えて今のスエーデン・ノルウエーの二國を併せてゐた時の名殘である。教育はよく普及し、農業教育と體育とが特に重んぜられ、その國民高等學校は各國識者の注目するところである。宗教は新教で、風俗習慣はスカンディナヴィア半島のそれに近い。

デンマルクの歴史はデーン族の侵入に始る。この地に先住したアングル・サクソン兩族がイングランドを征服する頃からデーン族は續々侵入して半島全部・ユットランド地方一帶・スエーデンの南部等を領し、やがてノルウエーを奪ひ、十一世紀のカヌート大王當時には一時イングランドをも征服した。十二世紀に至り十世紀以來臣屬したドイツ皇帝の羈絆を脱し、一三九七年にはノルウエー・スウエーデンを合併して三國統一の宿望を達し、次いで（十五世紀）シュレスウイヒ・ホルスタイン兩公國をも兼併して國勢を張つたが、まもなく（一五二三）スウエーデンは分離・獨立し、爾來兩國の間には屢々戰爭が行はれた。ナポレオン時代にはフランスと結びイギリス・スウエーデンと戰つて敗れ、前者にはヘルゴランドを、後者にはノルウエーを割讓するに至つた。十九世紀中葉クリスチヤン九世の時、シュレスウイヒ・ホルスタイン兩公領はデンマルクの支配から分離せんとして紛爭を生じ、爾來兩公領の歸屬問題は永くこの國の癌となつた。そして、一八四九年の憲法發布後まもなく、本課に出る對獨戰役の勃發となつて、兩公領及びラウエンブルクを失つたのである。世界大戰中は終始中立を守り、戰後人民投票によつてシュレスウイヒの北半を併合したが、その他は依然として回復し得ない。

【富饒】　フゼウ・フネウ　富んでゆたかなこと。饒はゆたか。多い。地味がこえてゐる。

【船舶】　センパク　人又は物を輸送するため、水上を航行する建造物。法律上飛行船・浮船渠・筏等は船舶に含まれない。

法律上一種の動産であるが、名稱・船籍港・國籍等を有して特殊の取扱を受ける。その構造によつて西洋型船舶と日本型船舶とに分け、その運轉力によつて汽船・帆船及び櫓櫂船に分ける。舶はおほふね。

【其の牧場と、其の家畜と】

現在デンマルクの牧畜殊に酪業の發達は世界の模範といはれ、同國の經濟的生命をなしてゐるが、六七十年前のデンマルクは、米穀その他の農業が發達し、低廉な穀物が輸出されてゐた爲、農作物栽培によつて國民の貧窮を救はうとする試みは失敗に終り、土地は益々荒廢する狀態にあつた。しかるに當時英國に於ては、近代工業の發達につれて都市が急激に膨脹し、食料・農産物輸入の要求が切實で、殊にバター・卵・ベーコン等を必要としてゐた。デンマルクの賢明な指導者達はこの點に注目し、牧畜・酪業の研究と實際經營とを國民に勸め、優良な牝牛・馬・豚・鷄等を飼育し、牧草・野菜を栽培し、全國に農業組合・農事試驗所・農學校等を設け、堅實な發展を續けた。かくてデンマルクバターはロンドンの市場に絶大な名聲を博するに至り、過去の貧困は今日の繁榮と化した。西暦一九二七年（昭和二年）に於ける同國の輸出總額八億三千萬圓中、對英輸出額は五億三千萬圓に上り、そのうちバター・卵・ベーコンのみで四億五千萬圓を占めてゐる。

【白樺】　シラカンバ・シラカバ　樺木科、しらかんば屬の落葉喬木。樹皮は白色で紙狀に剝離する。花は穗狀花序をなし、單生で雌雄異花、雄花は花被を有し、二乃至一〇箇の雄蕊を附け、葯は二裂。雌花には花被がない。二枚の心被が一箇の下位子房に癒合し、花柱二本、子房の基部は二室。葉は三角狀又は菱狀卵形。果實は堅果狀の閉果。北半球の溫帶に産し、アンデス地方にも少數見出される。我が國では樺太・千島・北海道及び本州の北・中部に分布し、約六〇種を數へる。異名―がんぴ・おほばしらかんば。

【沿海の漁業】

デンマルクに於ては、漁業も相當重要な位置を占め、鮮・鰊・鮭・鯖・鱈・海豹・牡蠣等を産する。

【牛酪】　バター　Butter　牛乳中の脂肪を分離して融合させ、これに食鹽を加味して造つた滋養に富む食品。主成分は脂肪で八五％に達し、他に水分・蛋白質その他の有機物、灰分及び食鹽を含み、ヴイタミンAに富む。消化によく、歐米人の食卓に缺くことのできないものである。我が國でもその需要が次第に多く、北海道・大島その他各地に良品を産する。

【乾酪】　チーズ　Cheese　牛乳中の乾酪素を凝乳素によつて凝固し醱酵せしめたもの。定量的組成は、大體に於て水四〇％、固形分六〇％で、固形分は蛋白質三〇％、脂肪二四％、糖質二％、灰分四％、食鹽二％位である。滋養に富む。硬・軟二種があつて料理・製菓に用ひる。

【トルヴァルドセン】　Bertel Thorvaldsen　デンマルクの彫刻家。近代古典主義彫刻の代表者。西暦一七六八年コペンハーゲンに生まれ、同地の美術學校に學んだ。カルステンスによつて古代の美に眼を開かれ、一七九六年ローマに遊學し、以後は主としてローマで創作した。一八四四年コペンハーゲンで歿したが、今、同市にはトルヴァルドセン美術館があつて彼の遺作またはその模造品を藏めてある。その作品に「ヤソン」「基督と十二使徒」「夜と朝」「ガニメード」「四季」「アレクサンデルの凱旋行列」「ル

ツエルンの獅子」等がある。

【彫刻術】　テウコクジユツ　粘土を以て、又は石・金屬・木材・象牙等を以て、三延長的に物象を形成する藝術。彫刻には丸彫と浮彫の二形式がある。丸彫が、對象をそれ自身に纏つた一體として立體的に表現するのに對し、浮彫は或平面に於ける凹凸の關係によつて表現するもので、古來寺院その他の建築の一部、例へば壁・柱・扉等に裝飾として施されたものが多い。

【一新紀元を劃し】

新紀元を劃すは、make an epoch（英）などから來た歐文脈的成語であらう。一つの事項に於て、その前後の時代が截然たる區劃をなす程に根本的な改革をなすこと。

【アンデルセン】　Hans Christian Andersen　デンマルクの詩人。西暦一八〇五年オデンスに生まれ、貧困の中に長じたが、保護者を得てコペンハーゲン大學に學んだ。詩・小說・戲曲など多方面に活動したが、中にも前代の宮廷派風の童話に對し素樸な農民童話を創めたことはグリム兄弟と共に彼の功績で、自由な空想と、子供らしい純情の中に、自然の諧調が迸り出てゐる彼の童話は、各國語に譯されて子供にも大人にも愛され、豐富な內容と、自由な併し精錬された形式と相俟つて、世界童話文學に燦然たる光輝を放つてゐる。彼は生涯各地に旅し、多くの紀行を遺してゐるが、一八六三年以後はコペンハーゲンに留り、一八七五年同地に歿した。生地には彼の記念館がある。その作に、「卽興詩人」「一人の胡弓ひき」「身の上物語」「繪のない繪本」等の小說・自叙傳・散文詩、イタリア・ギリシヤ・スウエーデン・スペイン等への紀行と共に、「人魚」「雪の女王」等一五〇篇の童話がある。

【お伽噺】　おとぎばなし　こゝは童話と同じ意味に用ひられたものである。童話は成立から分類すれば、古典童話（古事記・ギリシヤ神話等）・口碑童話（桃太郎の話・グリムの童話等）・文藝童話（文藝家の創作した作品）に分けられるが、こゝに近世お伽噺の元祖といつてゐるのは、アンデルセンがこの文藝童話をつくつたことをさすのである。又童話はその內容から神仙譚（浦島傳說等）、英雄譚・奇人傳（牛若丸・一寸法師等）、寓話（動植物にに假託して敎訓を傳へたもの、イソツプ物語等）に分けられる。英語の Fairy tale 獨語の Märchen は童話に相當するものであるが、語源からすれば日本の「お伽噺」が「子供の話」と云ふ意味を最もよくあらはしてゐるやうに思はれる。

「お伽噺」の語義は伽の折に話される話の意で、この語を童話と云ふ意味に使ひはじめたのは、新しいことである。「とぎ」といふ言葉の語源は不明であるが、眠らないでゐる意味を含むことだけは確である。通夜や看病の徹夜を「とぎ」といふ地方もある。「伽」といふ字を當てたのも、多くの人が參加しなければ自然の睡眠を防ぐことが出來ないからであらう。足利時代には「御伽の衆」といふのが大名の夜の話相手をつとめたのが、時代の經過と共に次第に「お伽」の內容が變り、話者と聽者の關係も變化して、御伽何々といふやうな話の本が御伽の衆に代つて行はれるやうになり、更に明治になつては所謂お伽噺となつて、子供らしい童話のみをさすやうになつた。

【獨・墺二强國】

獨・墺は獨逸（ドイツ）と墺太利（オーストリア）を意味するが、こゝの獨は特に普魯西（プロシヤ）をさしてゐる。當時はオーストリアも、ドイツ聯邦の一國としてプロシヤと覇を爭つてゐたのであるが、まもなく聯邦から脫退して別の聯合國を作つたから、便宜上、獨・墺といつたのである。

プロシヤ（Prussia）の地はもとドイツ武士團に領されてポーランド王國に屬してゐたが、十六世紀に入つて武士團は解散してプロシヤ公國となり、十七世紀の初、ブランデンブルグ選擧公の領に歸した。その後、完全にポーランドの羈絆を脫して獨立の公國となり、フレデリツク一世のとき（一七〇一）ドイツ皇帝よりプロシヤ王國の稱號を得、その孫フレデリツク二世（フレデリツク大王）に至るや、オーストリアに戰ひ捷つて一躍强國の列に入つた。ナポレオン戰爭に當つては一時分裂の悲境を見たが、戰後大いに復興して北ドイツに覇を稱へ、次第に南ドイツにも手を伸してオーストリアに拮抗し、ウイリアム一世の卽位するに及んで、鐵血宰相ビスマルクを登用して、自國を盟主とするドイツの統一を策した。デンマルクとの開戰はあたかもこの間に起つたのである。

オーストリア（Austria）はもとハプスブルク家の采邑として興つた。十三世紀の中葉、神聖ローマ帝國（ドイツ帝國）の帝權が衰へて七選擧侯の制度が設けられるに及び、オーストリアを根據とするハプスブルク家は次第にその領邑を廣め、十五世紀以來數百年に亙つて引續き皇帝に選ばれるに至り、ドイツの帝位は全く同家の世襲となつた。その後幾多の消長があつたが、十八世紀中葉、プロシヤの勃興を見るに及んで、これと對立してドイツの覇權を競ふに至り、ナポレオン戰爭後はメツテルニヒの活躍によつて大いに國際的地位を高めたけれども、同時に大ドイツ黨（オーストリア中心のドイツ統一派）と小ドイツ黨（プロシヤ中心派）との對立は益々尖銳化したのである。

かくて普・墺兩國は先づ關稅同盟問題に於て反目を表面化し、次いでデンマルクとの戰爭（次項參照）によつて得たシュレスウイヒ・ホルスタイン兩地の處分問題を導火として遂に開戰するに至つた。この普墺戰役（一八六六）の結果、プロシヤの覇權は全く確立し、オーストリアは聯邦を退いてオーストリアハンガリー聯合國を作り墺帝がこれに君臨することとなつた。プロシヤは更にフランスとの戰役（一八七〇－七一）に捷つてドイツ帝國の統一を完成し、プロシヤ王はドイツ皇帝として聯邦を統治し、以て世界大戰に至つたのである。大戰後は兩國とも共和國となり、ドイツは辛うじて舊態を保つたが、オーストリアは四分五裂して一小國と化してしまつた。

【遂に開戰の不幸を見、云々】　デンマルクは西暦一八四九年（嘉永二年）立憲王國となつたが、一八五二年のロンドン條約により、シュレスウイヒ・ホルスタイン公であつたクリスチヤン九世（在位一八六三―一九〇六）が即位し、公國領と共通の憲法を發布し、次いでシュレスウイヒをデンマルクに併合した。然るにアウグステンブルク公フレデリツクは兩公領の繼承權を主張し、援助をドイツ聯邦に求めた。プロシヤ及びオーストリアを中心とするドイツ聯邦會議は新憲法の改正を要求したが、デンマルクはこれを拒絶し、遂に一八六四年（元治元年）一月開戰した。激戰の後デンマルク軍は普墺軍に敗れて、同十月ウイーンに媾和條約を結び、兩公領及びラウエンブルクを兩國に割讓した。その結果デンマルク領土の縮小は前古比なく、國民の自負心は大いに挫けた。

【シュレスウイヒとホルスタイン】Schleswig と Holstein　ユトランド半島の基部に當る約一萬九千方粁の地。南半をホルスタイン、北半をシュレスウイヒといひ、東はバルチツク海に、西は北海に臨む。この地は以前ドイツ・デンマルク二國の間に介在する二つの公國で、古來その歸屬を爭はれてゐたが、十世紀以後多くデンマークの勢力下にあり、一八一五年のウイーン會議も同地のデンマルク所屬を決定した。しかるに住民の大多數がドイツ人である爲に以後も係爭が絶えず、遂に一八六四年デンマルクはプロシヤ・オーニトリアに敗れてこの地を奪はれ、普・墺は更にこの地を爭つた末、一八六六年の普墺戰役の結果、最後にプロシヤの所屬となつた。現在は、世界大戰後のヴエルサイユ條約（一九一九）による人民投票によつてシュレムウイヒの北部四千方粁はデンマルクに復歸し、殘りの一萬五千方粁は合してシュレスウイヒ・ホルスタインの名の下に、ドイツ聯邦のプロシヤの一州となつてゐる。

この地方の土地は低平で湖水・河川が多く、中央をキール運河が横斷して二海を連絡してゐる。中部の沼澤地以外は地味肥沃で、農牧に適し、殊に穀物及び馬鈴薯の產が多く、又、牛・馬の飼養が盛で、乳牛ホルスタイン種の原產地である。

【荒漠】　クワウバク　あれた砂原。こゝでは荒れ果てた地の意。荒はあれる。草が地を掩ふ。果物・穀類がみのらない。すたれる。漠はすなはら。ひろい。ひろくはてがない。

【腦漿を絞つて】　なうみそを絞つて。あらん限りの智慧をはたらかせて。腦漿はナウシヤウ。腦の粘液。腦の汁。

【精力】　セイリヨク　事をなしとげる力。心身の能力又は元氣。根氣。エネルギー。

【經營】　ケイエイ　(一)家屋をはかり營むこと。規模を定め基礎を立てて造り構へること。(二)事業をはかり營むこと。工夫を凝らして物事を營むこと。こゝは(二)。經は繩張をすること。地を測量すること。營はいとなむ。はかる。計畫する。

【宣揚】　センヤウ　のべあげる。廣く天下にあらはす。宣はのべる。しく。ひろめる。

【暗黑】　アンコク　(一)くらいこと。(二)精神上・生活上に不安や悲慘なことがらの存すること。こゝは(二)。

【悲憤】　ヒフン　かなしみいきどほること。

【工兵士官】　コウヘイシクワン　工兵は陸軍兵種の一種。戰場に於ける技術兵として、築城・交通・通信・架橋・坑道・爆破・照明・測量等技術的作業に從事し、他兵種の戰鬪動作を助けると共に、また自らも銃器を執り、敵と火戰及び白兵戰を交へる兵種。

【ダルガス】　Enrico Mylius Dargas（1830?―1900）デンマルク農林業界の先覺者。諸種の人名辭書等にもその名が見えず、精しい傳記は不明である。デンマルクの農業に關する諸書に散見する所によれば、地質學者・植物學者で、西暦一八六四年の對普墺戰役に工兵大佐として出征したが、不幸同役がデンマルクの敗戰に終るや、母國の國土を開發せんとする希望と決心とを抱いて歸國し、一八六六年三月二十八日、ペテルゼン・ドリユーゼン・モルビル等の憂國の志士と共に、デンマルク-ヒース協會（デンマルク荒蕪地改良組合）を設立した。爾來同協會は彼の指導の下に荒蕪地の開墾・植林、耕作地の排水・灌漑・施肥、沼澤の排水、河川の治水、泥炭の採掘などに力め、デンマルク開發の原動力となつた。今北ユトランドのオールフース市に彼の記念像がある。

今、協會の設立された一八六六年に於ける同國の荒地面積と、それから三十年後の一八九六年のそれとを比較

すれば左の如くである。

	（一八六六年）	（一八九六年）
ヒ　ー　ス地	二、〇六五方哩	一、二七六方哩
沼　澤　地	三六五方哩	一五〇方哩
砂　丘　地	二〇〇方哩	一四二方哩

最初組合の活動は北ユトランドにのみ限られてゐたが、後全國的となり、ハロー島に及び、更に北部シュレスウイヒに向けられてゐる。一九一四年大戰勃發當時の調査によれば、協會は會員六、五〇〇名、國庫その他から受理する補助金二四〇、〇〇〇圓餘、會の名義を以て所屬する新開地三、〇〇〇餘町歩。尙、個人所有の一三、六〇〇餘町歩の開墾に援助を與へる外、その活動範圍は極めて廣い。

【フランス系】　フランス人の血統を引いてゐること。フランスは France 西フランク王國の後身で、十世紀の頃パリに都してフランスと呼稱されるやうになつた。十四世紀の百年戰爭によつてほゞ今日の國土を確保し、十六世紀の宗教改革時代には、舊教主義の盟主として中央集權を完成し、十七世紀のルイ十四世の治世に於ては文化燦然たる黃金時代を現出したが、王權の强勢に伴ふ專制政治は遂に十八世紀末の大革命を生み、やがてナポレオン時代を迎へた。その後も數度の革命を經て、當時はナポレオン三世治下の君主國となつてゐたが、普佛戰役の後再び共和國となり、世界大戰の苦難を凌いで、ヨーロッパ大陸に重きをなし、藝術國としての傳統と陸軍の强大とを以て著れてゐる。住民は主としてラテン種族のフランス人で、舊教徒が多い。首府はパリ。

【地味】　チミ　土地の肥瘠。土質の良否。土地の生產力の程度。

【地質】　チシツ　地球の表層をなす地殼を構成する岩石のあらゆる方面から見た性質。普通、岩石の崩壞及び分解によつて生成された土壤は含まない。

【恢復】　クワイフク　(一)衰へたものをもとのとほりにかへす。(二)失つたものをとりかへす。こゝは(一)。恢は大きい。ひろい。大きくする。ひろめる。

【ユトランド】　Jutland (Jylland) バルチック海口の半島で、デンマルク王國の大陸部を形成してゐる。(廣義には、獨領のシュレスウイヒ・ホルヌタインを含む。)地形その他については「デンマルク」の項參照。

【荒漠を化して、之を沃饒の地にしよう】

【其の頭に希望の睿を戴いてゐました】

【曠野を化して薔薇の花咲く所とする】

これ等の言葉乃至思想は、「レバノンの榮をあらはす云々」のそれとともに、イザヤ書三十五章からヒントを受けてゐる所が多いやうに思はれるから、次にその全文を掲げよう。(この中の第一節と第二節とは作者が原文の卷頭に引用してゐる。)

一荒量とうるほひなき地とはたのしみ沙漠はよろこびて番紅の花の如くに咲きかゞやかん　二盛に咲きかゞやきて喜び且よろこび且うたひ、レバノンの榮をカルメルおよびシヤロンの美しきを得ん、かれらはヱホバのさかえを見われらの神のうるはしきを見るべし○　三なんぢら萎たる手をつよくし弱りたる膝をすこやかにせよ　四心さわがしき者に對ひていへ、なんぢら雄々しかれ懼るる勿れ、なんぢらの神をみよ、刑罰きたり神の報きたらん、神きたりてなんぢらを救ひたまふべし　五そのとき瞽者の目はひらけ聾者の耳はあくことを得べし　六そのとき跛者は鹿のごとくにとびまはり啞者の舌はうたうたはん、そは荒野に水わきいで沙漠に川ながるべければなり　七やけたる沙は池となり、うるほひなき地はみづの源となり、野犬のふしたるすみかは蘆葦のしげりあふ所となるべし　八かしこに大路あり、そのみちは聖道ととなへられん、穢れたる者はこれを過ぐることあたはず、たゞ主の民のために備へらる、これを歩むものはおろかなりとも迷ふことなし　九かしこに獅をらず、あらき獸もその路にのぼることなし、然ばそこにて之にあふ事なかるべし、たゞ贖はれたる者のみそこを歩まん　十ヱホバに贖ひすくはれし者うた歌ひつゝ歸りてシオンにきたり、その首にとこしへの歡喜をいたゞき樂とよろこびとをえん、而して悲哀となげきとは逃去るべし。

沃饒はヨクゼウ。地味が肥えて作物のよく出來ること。頭はカウベ。こゝは「かしら」「くび」とよまず、原文の振假名どほり「かうべ」とよむがよからう。希望の睿は春は萬物の生命の新なる發展に向ふ歡喜の時で、一年の季節の中、最も待望される時期であるから希望の象徵として用ひられる。曠野はアラノ。人氣の疎く遠い野。開拓されてゐない野。薔薇はバラ。こゝは特に美しいものの象徵として擧げたもの。「薔薇の花咲く所」は、理想の樂園の意を寓してゐる。(英譯の聖書では、前掲イザヤ書三十五章中の「番紅」の所に rose の字があてはめてある。)

【夢想家】　ムサウカ　原文には「ゆめみるもの」と振假名を施してある。現實にないことを心にゑがき夢みる人。

【土木學者】　ドボクガクシヤ　土木は道路・砂防・橋梁・港灣・鐵道・水道等の如く、すべて木材・鐵材・土石等を用ひて行ふ工事。土木學は土木工學。道路・河川・鐵道・橋梁・上下水道・測量・港灣・運河・砂防・都市計畫等の施設に關する理論及び實際を研究する工學。

【地質學者】　チシツガクシヤ　地質學は地殼の成立・地層

の構造・地殼の變動に伴なふ水陸分布の變異、その他地球上の變動・沿革等を研究する學。一般地質學・動力地質學・岩石學・鑛物學・應用地質學・地史學・層位學・構造地質學・古生物學の諸部門に分たれる。

【植物學者】　ショクブツガクシヤ　植物は動物を除く生物。葉綠素を有し無機物を有機物に變じ得るもの。嚴密には、動物と區別し得ない。植物學は動物學と相對して、生物學の一部をなす自然科學の一分科。植物界の狀態事項を研究する學の總稱。植物體の各部分の形狀・特徵・構成・變態・相互關係を研究する學を植物形態學、個體としての植物發生及び植物全體の發生順序關係を研究する學を植物發生學、植物細胞を觀察し實驗する學を植物細胞學、植物の生活現象を研究する學を植物生理學、植物と外界との關係を研究する學を植物生態學、地理學上植物の分布狀態・原因を研究する學を植物地理學、植物の遺傳現象を研究する學を植物遺傳學といふ。

【詩人】　シジン　狹義には詩を作る人、廣義には詩人的性格の人卽ち想像力に富み直觀力の豐な人。こゝは廣義。

【理想】　リサウ　現實的・具體的人性に內在する、一定の方向を有する可能性（卽ち本質）が發展し行く窮極として考へらるべき完全な相の概念。意志が努力して到達すべき最高目標。理性によつて想像し得る最上の狀態。理想は現實に對立するが、實現の可能性ある點で現實と內面的に關係し、それに意味を與へるもので、これが空想と區別される所以である。

【實現】　ジツゲン　可能性として潛在してゐるものを意志に從ひ、實行によつて、具體的・現實的なものとしてゆくこと。

【するの術】　する方法。この「の」（助）は次の如く體言に準ずべき種々の語について、下の體言を修飾限定する。（この場合は用語についた例である。）

（副詞に）たゞの人。暫しの間。

（副詞の語幹）まれの細道。さやうの遊び者。

（形容詞の語幹に）面白の舞。有難の仰言。

（助詞で終る句に）昨日よりの雪。公園への道。

（用言・助動詞の連體形に終る節に）天に昇るの思。成功の上ならでは歸鄕せざるの覺悟。

【不毛】　フマウ　地のやせて穀物その他の作物の生じないこと。又その地。土地に五穀・草木の生ずるは、身體に毛を生ずるに似てゐる故にいふ。

【外に失つた所のものを內に於て償はうとするのが云々】　工兵士官であつたダルガスは兵の解隊にあたつて、次のやうなことをいつたといふ。

我々は今二州を獨逸に割かれ、只ヒースの荒れたる地に空しく歸り行かねばならぬ。されど我々は國外に失はれた所のものを內に得ねばならぬ。その爲に我々は新しき戰を開始する。我々の戰は新たなる戰に向つて進むべき時が來たのだ、それは銃に代ふるに開墾のショベルを以て土地を國內に恢復することである云々。（「働いて摑んだ丁抹」）

【夢】　ユメ　（一）睡眠中に現（うつつ）の如く見る現象。いめ。（二）ぼんやりしたこと。はかないこと。頼みがたいこと。（三）まよひ。迷夢。（四）この他にDream（英）などから來た用法として、現實にないことを心に描くこと、又は描かれた觀念。空想。理想。こゝは（四）。

【ヒーズ】　Heath　ヒースのこと。石南科（しやくなげ）の中、カルナ屬（Calluna）又はエリカ屬（Erica）に屬する常綠小灌木の總稱。ヨーロッパ地方に廣く分布し、多くは丈が極めて低いが、アフリカ種にはやゝ高いものがあり、又南歐種には時として喬木に類するものがある。土地・氣候・溫度等に左右されることなく繁茂するので名高い。最もよく知られてゐるのは、カルナー屬に屬する歐洲產普通種のヒザー（Heather）であつて、ヒースの語はこれから出たといはれてゐる。ヒザーは一名リング（ling）ともいひ、我が國では「ぎよりうもどき」の和名が附されてゐる。葉は長楕圓狀線形。花は淡紅白で總狀花序を呈し、萼片は四、花冠は鐘形で四裂してゐる。花候は夏。乾燥した不毛の高地では一〇糎足らずにしか成長しないが、紫の莖及び相接して出てゐる綠の嫩枝と羽毛のやうな穗狀の花は荒野の一美觀である。その大小の莖は箒や刷毛を作るに用ひられ、長く垂れた嫩枝は籠や笊等に編まれる。又、根の周圍の泥炭苔（どろもごけ）と共に不毛の地に於ける得難き燃料となる。往時スコットランド高地人はこの莖と泥炭とを固めて小屋を造り、今日でも時として假小屋建築に利用される。

尙、ヒースの生じた荒蕪地も亦ヒースと呼ばれ、デンマルクでは、西曆一八六六年以來、荒蕪地（ヒース）開拓を目的とするヒース組合が設立され、農事改良・農村教育等に關して、驚くべき成績が擧げられてゐる。

【馬鈴薯】　ジヤガイモ・ジヤガタライモ・バレイショ　茄科・茄屬の多年生草本。高さ六〇—九〇糎。葉は羽狀分裂をなし裂片は六乃至七對である。花は腋出し、花形は茄の花に似、花色は白又は碧紫色を呈する。花候は夏。實を結ぶことは稀で、地下の塊莖で繁殖する。チリ原產の栽植種で、慶長年間にオランダ人によつて我が國に輸入されて以來、各地に栽培されてゐる。塊莖を食用に供する外澱粉を製し、又酒・味噌・醬油を釀造する。

【牧草】　ボクサウ　野草に對していふ。家畜に給與し、そ

の莖葉を飼料として利用せしめる草類で、主として禾本科及び荳科に屬する。歐米では牧草の栽培が盛で、つめくさ(clover)・どくむぎ(rye-grass)・からすむぎ(oat-grass)等は、その代表的なものである。

【レバノンの榮をあらはす樹】

繁茂してレバノン山の森のごとき壯觀をあらはすべき樹の意。レバノンはLebanonパレスチナの山名。語原「レベン」はヘブライ語で「白くなる」意。山巔が七箇月雪を頂く爲か、又は山が石英岩から成る所からこの名を得たのであらうといふ。北ナールのカスミエ河に起り南ナールのエンケビル河に終る、延長約一五三粁に亘る山脈で、西地中海海岸から漸次屋根狀に高まり、その高さ一、八〇〇米乃至二、四〇〇米。峯嶺はエベルムクメルと稱し三、一〇〇米餘。東は斷崖をなしてブカの谷に降り、谷の向うに對レバノン山がある。(この兩山を合して大レバノンと云ふ。)

この山は舊約聖書に記されること六十回以上で、その三分の二は詩歌的の句中に顯れてゐる。新約聖書には一回も記されてゐない。ソロモンの治世にはこの山はツロ王ヒラムの所領であつたやうで、彼はソロモンの需めに應じ、エルサレム神殿の用材としてレバノン山の香柏・松及び白檀を伐り筏に組んで海路ヨーロッパに送つた。

そしてソロモンはこれをエルサレムに運びモリア山上にヱホバの宮を建てたと歴代志略に出てゐる。その他、列王紀略・イザヤ書・詩篇・雅歌・ホセア書等によれば、レバノン山は地味豐饒で香柏(ヒマラヤすぎ)や縱の美しい森林に蔽はれ、香木・芳花がかほり、清らかな泉が流れ、野獸もまた多く棲んでゐて、その山の美はイスラエル人の想像に深い印象を與へ、これを以て莊嚴と堅固との表徵としたもののやうである。現今はトルコ領に歸し、レバノンには基督教徒が住居するが、對レバノンは回教徒がこれを占有してゐる。

【ノルウェー】 Norway 那威、諾威とも書く。スカンディナヴィア半島の北部及び北西部を占める北ヨーロッパの立憲王國。土地は一般に高原で、峽江(フィヨルド)が隨所に發達し、東南部の低地には松・縱等の森林が繁茂し、林業が頗る盛である。又、縱を原料とする製紙業もよく知られてゐる。住民はチュートン族で、新教を奉じ、古來海上に活躍して世界屈指の海運國である。首府はオスロー。

この地は古くノルマン人の住地で盛に四方を劫掠し、九世紀の後半統一國が成立して十四世紀に至つた。同世紀に入り、スウェーデン・ノルウェー・デンマルク三國の王位は互に兼併が行はれたが、一三九七年に至り三王國の聯合が成り(後スウェーデンは離脱)、結局ノルウェーはデンマルク王家に服屬した。然るにナポレオン戰役後、スウェーデンは反佛同盟に加つた功により、一八一四年この地をデンマルクより奪つて領有することを許され、爾來幾度か紛爭を重ねた結果、一九〇五年に至つて、ノルウェーは完全にスウェーデンを離れて獨立の王國となつたのである。

【ノルウェー產の縱】

所謂ノルウェー縱(Norway spruce)一名赤縱(Red spruce)である。(デンマルク公使館の教示に據る。)學名は、Picea excelsa ドイツたうひ又は歐洲たうひの和名がある。我が國のたうひ・はりもみ・えぞまつ等と同じくはりもみ屬に屬する常綠喬木で、好適の狀態では、樹高五一米餘に達し、根幹は直徑一・五乃至一・八米に及ぶ。樹皮は薄く鱗苞狀をなし、幹は死ど垂直で、暗綠の葉の簇出した枝はやゝ不規則に輪生して擴がり出で、樹形はピラミッド形をなしてゐる。下列の枝は成長に隨つて垂れ下り、往々地に達する。葉は針狀・四稜で互生。圓柱形の毬果を結び、熟すれば懸垂する。果鱗は脫落しない。用材上最も重視される縱で、又パルプの原料として名高く、風致林としても利用せられる。北ヨーロッパの山地地方・アジアの北部・北米大陸等に廣く分布し、ノルウェーではこれが南方峽谷の密林の主要部を形づくり、海拔九〇〇餘米の斜面まで繁茂して峽江(フィヨルド)の水邊を飾つてゐる。

デンマルク研究家である米人フォート博士(H. W. Foght)の「農村丁抹と其の教育」(Rural Denmark and Its School)にもダルガスの植樹のことが記されてゐるが、それには單に赤縱と出て居り、「デンマルクの植林には最適の樹木であると知られてゐたが、開拓したての荒蕪地には容易に成長しなかつた」とある。

【强硬】 キヤウカウ　つよくて屈しないこと。てづよいこと。礪は(一)强い。(二)ふさがる。

【アルプス】 Alps ヨーロッパ西南部、伊・佛・瑞・獨・墺諸國に亙る大褶曲山脈。長さ約一、一〇〇粁、幅一二五乃至二七五粁。最高峯モンブラン(海拔四、八一〇米)を始め海拔四千米以上の高山が多い。山脈の高所には今もなほ氷河が懸り、高山植物の華やかな彩りがあり、美しい數多くの瀑布が見られる。山麓は鬱蒼とした森林に蔽はれ、又は牧場が開けて牛の群が青草を食み、更にこれを飾るのに氷河の跡に湛へた紺碧の湖があつて、ヨーロッパ洲第一の雄壯な風景を展開してゐる。

【アルプス產の小縱】

前提「農村丁抹と其の教育」によれば「フランスの山縱」(French mountain fir)とあり、如何なる屬種か不

明であつたが、デンマルク公使館の教示によつて、松科・松屬の Pinus montana なる一種であることが明瞭になつた。卽ち、邦譯すればモンタナ松或は高山松ともいふべきもので、實は所謂「樅」ではない。獨名は Knieholzkiefer 又は Alpenkiefer 該種は、高さ數米の小喬木乃至は灌木で、高地生のものは匍匐性であるが、中には直生してピラミッド形をなすものもあり、形態は非常に多樣で、植物學者によつては多くの種に分つてゐる。樹皮は暗褐色で大きく剝離し、葉は短い針葉で雙生する。雌花は直生し、卵形の毬果を結ぶ。アルプス・ピレネー等、南・中ヨーロッパの山脈地方に廣く分布し、高山性であるが又平原にも生ずる。よく寒冷・酷烈な氣候にも耐へ、アルプスでは一、四〇〇乃至二、〇〇〇米附近の灌木帶以上に於て、雪崩・山崩に對する有力な防禦林を形成してゐる。木質が緻密で年輪美しく、種々轆轤細工や差物細工に用ひられる。「農村丁抹と其の教育」によれば、すべての常綠樹中最も丈夫なもので、砂地にも酸性の土壤にも成長し、植樹も容易であるとされてゐる。又デンマルク人は、伐採後の材を燃料や支柱に利用してゐるといふ。

【「ダルガスよ、汝の豫言せし材木を與へよ」云々】

原文の省略部分に「恰かもエジプトより遁出(のがれい)しイスラエルの民が一部の失敗を以てモーゼを責めたと同然でありまして」とあるやうに、この句は、自由と獨立とを求めて祖先の地カナンに歸らうとして、エジプトに於ける四百餘年の奴隷生活から漸く脫出したイスラエルの民が、シナイの曠野に於ける苦難と彷徨の旅に際し、指導者モーゼに對して「我等エジプトの地に於て肉の鍋の側に坐り飽くまでパンを食ひし時ヱホバの手にて死にたらば善かりし者を、汝等は此曠野に我等を導き出して此會衆を飢に死なしめんとするなり」といつて追つた舊約聖書出埃及記（十六章一―三節）の記事を心においていつたものであらう。預言はヨゲン。（一）キリスト教で、神の靈に打たれたと自覺する者が、神託として述べる言葉。英語の Prophecy にあたる。（二）未來の物事を推測していふこと、又、その言。豫言。こゝは（一）。

原文の省略部分に「此工兵士官に預言者イザヤの精神がありました」とある。「預言者」は Prophet の譯で、古代イスラエル人の間の宗教的指導者をいひ、必ずしも將來のことを豫言するものではなく、神との深い內的の交を經驗し、政治的・道德的に困難してゐる國民に宗教的立場からの警告と神の啓示とを語り指導を與へようとするものである。「參考欄」參照。

【フレデリック-ダルガス】 Frederick Dargus E. Dargas の長男。父のヒース協會の事業を助けた。ことに植林した大樅が或程度で成長が停止する爲に父の事業が行詰つた際、併植した小樅を間伐すれば大樅は成長する事實を發見して確實な荒地挽回策を得たことは、彼の功績であるといふ。

【小樅は或程度まで大樅の成長を促す云々】

「農村丁抹と其の教育」にはこの現象を左の如く說明してある。

然し其の後數年にして此の赤樅（大樅）は發達を停止して何等成長の徵候を表はさなくなる。乃ち赤樅は或理由の下に彼等を繁茂せしむるに必要なる窒素の成分を大氣中及び土壤より吸收する力を持たなくなるといふ事が發見された。玆に於て著しく窒素採取の能力を有するフランスの山樅（小樅）と混合して植林を試みた。その結果は赤樅に新生命を注入する事が實驗された。そこで將に枯渴せんとした植林は再び綠滴たる森林と變化した。而して根毛研究の結果、山樅の根毛に簇生するバクテリヤが赤樅の根毛にも簇生する事が發見された。然し赤樅のみを植ゑたのでは幾年を經るも見出す事は出來なかつた。されど山樅は赤樅に比較して其の成長は實に著しく漸次赤樅を壓倒せんとする模樣を示した。次いで彼等の間には、若しも山樅を栽伐すれば此の赤樅が成長を續けるならんとの疑問が起り、相當の實驗の後にこの疑問の正當なる事が證明された。卽ち赤樅は最初保姆木として其の助けを借りたる山樅の援助なしに單獨に成長する事が出來た。そして今は赤樅が成長して繁茂する徵候を示して來ると山樅を伐採するのが習慣となつた。（水野常吉氏抄譯に據る）

【奇態】 キタイ　珍しいさま。不思議なさま。

【開發】 カイハツ・カイホツ　新に地を開き起して田畑とすること。

【挽回】 バンクワイ　もとにひきもどす。

【鬱蒼】 ウツサウ　樹木が青々としげつた貌。物事の盛な貌。鬱葱。鬱はしげる。むらがる。木の茂つて盛な貌。物事の盛な貌。蒼はあを。草のあを色。深青色。しげる。

【併し植林の効果は云々】

一般に森林氣候の特質の一つは、寒暑の差が酷烈でないこと、卽ち冬季の最低溫は森外よりやゝ高く、夏季の最高溫は林外より低いこと、又濕度の高いこと及び雨量の多いこと等とせられてゐる。植林はショクリン。苗木を植ゑつけて、それを林に仕立てること。

【黑麥】 クロムギ　（一）蕎麥の異名。（二）ライ麥をいふ。デンマルクには蕎麥も產するがその產額はライ麥のそれとは比較にならない程少量であるから、こゝは（二）の意

であらう。ライ麥は禾本科、らいむぎ屬の一年生草本。莖高一・五米に達する。大麥に似てゐるが莖・葉は剛直、穗は一五糎位、二花づつの小穗花序の集合で芒を有する。六月頃開花する。中央アジアの原產で、暑氣には弱いが耐寒性が强く、又劣等な砂質土土に於てもよく生育するので、ヨーロッパやアメリカの山地地方、特に北ヨーロッパで多く栽培され、同地方の主食物である。その他家畜の飼料となり、又ウイスキーやジンの原料ともされる。藁も强く長いので樣々に利用せられる。

【小麥】　コムギ　禾本科、こむぎ屬の一二年生草本。莖高約一米。大麥よりやゝ遲れて花莖を抽き、長さ八乃至一二糎の穗狀花序に穎花を排列して著ける。穎果は楕圓形で腹面には溝がある。ペルシャの原產で、現今世界各地に栽培され、歐米では穀物の首位を占めてゐる。品種には赤・白の二種があり、白小麥を優良とする。製粉して麪麭・麪類・菓子等の食料に供するほか、醬油や味噌の原料とし、また麩は家畜の飼料として最良品の一つである。稈は大麥に比較すると一層强剛で屋根を葺くに適し、長穗は麥稈眞田その他種々の細工製造に使用される。

【砂糖大根】　サタウダイコン　蓼科、あかざ屬の二年生草本。高さ約一米に達する。葉は長卵形で緣邊出入多く、葉面は平滑である。夏日梢上に長穗花序に排列して黃綠色の小花を多數著生する。根は肥大して紡錘形を呈し、肉質で一二乃至一四%の糖分を含有する。原產は南歐であるが、一般には稍寒地に栽培される。我が國では特に北海道の氣候・風土に適するので、主として同地で栽培されてゐる。根の液汁を甜菜糖の製造に用ひるが、他に蔬菜として食用に供し、また家畜の飼料ともする。フランスでは酒精の製造に用ひる。甜菜。甘菜。異名さたうぢさ。

【北歐】　ホクオウ　北部ヨーロッパ。ノルウエー・スウエーデン・フインランド・デンマルク・エストニア・ラトヴイア・リトワニア・及びヨーロッパロシアの北部等の諸地方を概括していふ語。狹義にはスウエーデン・ノルウエー・デンマルク三國の地方をいふ。

【田園】　デンエン　(一)田と畑と。(二)ゐなか。郊外。ことは(二)

【北海】　ホクカイ　North Sea　大ブリテン島とヨーロッパ大陸との間にある大西洋の一支海。ノルウエーの海岸に沿うてノルウエー海溝（最深八〇〇米）があり、イギリスとデンマルクとの間にドッガーバンクスといふ淺瀨がある。ヨーロッパ及びバルチック海からの陸水が注入する爲に南半は鹽分が淡いが、北半はメキシコ灣流系の高鹹な水の爲に鹽分が濃い。鰊や鱈の漁場である。

【砂丘】　サキウ　原文には「すなやま」と振假名を施してある。海岸又は沙漠地方で風が砂を吹き上げて作つた低い丘陵。その傾斜は風向の方が緩やかで、反對側の風蔭に急なのを常とする。分布地によつて海岸砂丘と內陸砂丘とに分け、又形狀によつて橫砂丘・縱砂丘・馬蹄形砂丘等に分ける。高さは數米から數百米、長さは數十米から數百米に及ぶ。

こゝは海岸砂丘で、この砂丘は汀線に平行し、海面より來る風の爲に生ずる。海風が砂を海岸に堆積させてこれを內方に送り、次第に新しい砂丘を作るので、平行したものが出來るのである。デンマルクの海岸は一般に低い砂丘で、殊に半島の西岸は卓越西風による砂丘に掩はれ、淺い潟が連續して船舶の海岸に近づくことを困難ならしめるので、屢〻鐵海岸と呼ばれる。又砂丘の內側には沼地が多い。

【北海に濱する國】

北海に濱するのはイギリス・ノルウエー・デンマルク・ドイツ・フランス・オランダ・ベルギー等の諸國であるが、砂丘の生ずるのはデンマルク・オランダ・ドイツ・フランス等の海岸である。濱するはヒンする。水にそふ。

【海拔六百尺を以て最高點とするユトランド】

試に我が國の諸地と比較すれば、ユトランドの一八二米に對し、富士山三、七七八・五米、筑波山八六七米。

【地價】　チカ　土地のねうち。一般には、土地賣買の標準價格をいひ、こゝもそれである。

【四國全島】　シコクゼンタウ　面積一八、七七二方粁。

【復活】　フククワツ　(一)死んだものが復び活きかへること。(二)不用にしたものを再び役立たせること。(三)キリスト教で、死者の肉體が再生してその靈魂と一緒になるといふ信仰。こゝは(一)

【更生】　カウセイ　(一)死んだものが再び生きかへること。再生。回生。(二)キリスト教で、キリストを信ずることによつて起る心靈に於ける根本的且永續的な變化をいふ。こゝは(一)

2　文の構成

第一節　初—五五頁四行　小さくて靜かな國世界の樂園デンマルク。

第二節　五五頁五行—五七頁七行　弱小國にしてしかも戰敗國となつたデンマルクとその立場。

第三節　五七頁八行—六四頁七行　このデンマルクを救はんが爲に起つたダルガス父子の植樹事業。

1　ダルガスの人物とその計畫（五七頁八行―五九頁二行）
2　ユトランドの荒地とダルガスの植樹事業（五九頁三行―六二頁終）
3　若きダルガスの植物學上の發見と植樹事業の改善（六三頁初―六四頁七行）

第四節　六四頁八行―終　林の效果とその感化。

1　氣候の變化と荒地の田園化及び砂丘の擊退（六四頁八行―六五頁一〇行）
2　洪水の害を除く（六五頁一一行―六六頁四行）
3　ユトランド全州の一變―市邑の再興、地價の騰貴、道路鐵道の敷設（六六頁五行―六六行一一行）
4　國民精神の變化（六六頁終―六七頁六行）

3　文　意

一人の愛國者が、信仰から來る熱誠と忍耐によつて荒地に樅を繁茂させ、これによつて遂に衰頽の底にあつた故國を更生させるに至つた話。

4　鑑賞批評

全文の基底に信仰に徹した人の確信が具現せられてゐる。深い理解と徹した感激とが文致の上に溢れてゐる。平凡な敍事の底に深い信仰の閃きがあり、堅い信念が敍事に生氣あらしめてゐる。文章として推敲せられたものではなくて講演の筆記であり、行文は作者獨特のやゝ生硬な直譯的な歐文脈があるが、しかもなほ永く國民に讀まるべき有力な文字であると信ずる。以下順を逐うて鑑賞を進めよう。

〔トルヴアルドセンを出して世界の彫刻術に一新紀元を劃し、……デンマルクは、實に柔和な牝牛の產を以て立つ、小さくて靜かな國であります。〕

世界の精神文化に偉大な貢獻をなしてゐるデンマルクは平和の象徵ともいふべき乳牛の產を以て立つ國、豐かな、靜かな國土であるといつて、その昔、衰亡に瀕した弱小國であつた事など想想されさうにないことを暗示してゐるのである。それと共に、平和や柔和や靜かさを求めてやまぬこの作者の、神の目には大なるものとせられるであらうデンマルク國に對する讃歎の聲でもある。

〔どんな國にも時には暗黑が臨みます。其の時之に打勝つことの出來る民が、永久に榮える民であります。〕

知の力、情の力だけではどうする事も出來ない時、意志の力、信仰の力が始めて輝きを示す。永久に榮える民は信仰に生きる民でなくてはならぬ所以を言ひ得て剩す所がない。一時的の榮は偶然によつても與へられるが、永遠の榮は決して所以なくして來るものではないことに對する徹した信念の道破である。

〔彼は、天然は此の難問題をも解決して呉れると確信してゐました。彼は更に研究を續けました。〕

目的に達するに餘りに困難である。人間の力はあまりに弱い。併しダルガスの胸には信仰がある。目的は遠くとも、人間の力は弱くとも神の仕業は全能である。その全能の示現たる天然に難問題の解決を期待しつゝひたすらな努力をつゞけたのである。これも人間以上のものを知る人のみの能くなし得る所である。

〔デンマルク人の精神は、ダルガスの植林成功の結果として、茲に一變したのであります。殆ど絶望に陷つてゐた彼等は、茲に絶大な希望と勇氣とを以て立ち上るに到つたのであります。〕

前々頁に「ユトランドは大樅の林の繁茂によつて、良い田園と化しました。木材を與へられた上に、善い氣候を與へられました。」といひ、前頁に「斯くの如くにして、ユトランドの全州は一變しました」といひ、又「ユトランドは復活しました。戰爭によつて失つたシユレスウイヒとホルスタインとは、今日已に償はれて尙餘りあるとの事であります」といつてゐる驚異すべき事實の敍述を承け、更に一歩を進めて、さういふ物資的利益のみならず、更に重大問題である國民精神の興起とな

り、眞に故國の更生を得たことを示したのである。この間の消息は大きく「しかし」の接續詞にかゝつてゐる。信仰から來る力と事業とはどんな些事に於ても心ずかくの如き無限の意義を發揮し來るのが常である。我々はこの深い事實に目を醒すと共に、又この一事實をかく意味深く理解し得たものは作者の信仰そのものであることに思ひを致さなくてはならぬ。

三　備　考

1　指導研究

（イ）この文指導の主眼は無論、信仰から來た熱誠と忍耐とが衰頽した故國を更生せしめたことにある。國を愛するといふことは單なる觀念・感情ではいけない。堅實な意志であり、實踐でなければならぬ。信仰を說く作者の立場はこゝに一つの根柢を有してゐることを見逃してはならぬ。信仰に徹した境地が人間生活の理想であるなら、それは國民生活の上にも同樣に成立つ眞理でなければならぬ。この意味に於て、グルンドヴイヒの國民高等學校建設の精神と事業とが思ひ合はされてよいであらう。

（ロ）日本海海戰に於て東鄕聯合艦隊司令長官は「皇國の興廢此の一戰に在り」と信號したことはあまりに名高い。そして天皇陛下の御稜威と我が海軍の將卒の勇戰とは、この危難を轉じてこれを「興國の一戰」たらしめた。デンマルクの愛國者ダルガスは、敗戰國となつたデンマルクを植樹の事業によつて根本的に救つた。併せ讀んで國民たるものの覺悟を確立させるべきであらう、作者によつて語られた縱は、いづれかといへば「信仰の縱」であるが、これに「興國の縱」と題して、更に國民的意義を深めようとしたのは現下の時勢に思ひ見る所があつたからで、功利にのみ着眼して根柢たる信仰の意義を輕んずるが故ではない。

（ハ）本文はもと講演筆記である爲にひとり机上に向つて一字々々書きつけて行つた文章と異なつて、聽衆を前に說き進めたらしい一種の氣魄と熱情が行文の上に感じとれ、そこに更に作者その人の風丰が感じられる。これは、一語一句の吟味に先立つて、全文の朗讀に於て直接に把握させなくてはならぬ學習の對象である。

2　參　考

（イ）作者はこの文の結末に「今、此處にお話し致しましたデンマルクの話は私共に何を敎へます乎」なる問題を揭出し、自ら三條項を以てこれに答へてゐる。第一に、戰敗の不幸は、その國民の平素の修養によつては、卽ち善き宗敎・善き道德・善き精神があれば、却て國民を興起させる機會となること。第二に天然は無限的生產力を有してゐること。第三に信仰は國の實力であることであるとしてゐる。今、その所說の趣を示す爲に、第二のみを引用する。

第二は天然の無限的生產力を示します。富は大陸にもあります、島嶼にもあります。沃野にもあります、砂漠にもあります。大陸の主必ずしも富者ではありません。小島の所有者必ずしも貧者ではありません。善く之を開發すれば小島も能く大陸に勝るの產を產するのであります。故に國の小なるは決して歎くに足りません。之に對して國の大なるは決して誇るに足りません。富は有利化されたるエネルギー（力）であります。而してエネルギーは太陽の光線にも在ります。海の波濤にもあります。吹く風にもあります。噴火する火山にもあります。若し之を利用するを得ますれば是等は皆悉く富源であります。必ずしも英國の如く世界の陸面六分の一の持主となるの必要はありません。デンマルクで足ります。然り、其れよりも小なる國で足ります。外に擴がらんとするよりも內を開發すべきであります。

（ロ）作者が原文の冒頭にイザヤ書三十五節の言葉を引いてゐることによつても、又原文中に「この工兵士官に豫言者イザヤの精神がありました。云々」といつてゐることによつても、作者が私かにダルガスの人及び事業を豫言者イザヤのそれに擬してゐたことが察せられるのみならず、これは、神を愛する者にして始めて眞の愛國者たり得るとするこの作者にとつては、極めて當然なことであつて、豫言者イザヤの血は又この作者にも流れてゐたといはねばならぬ。この意味に於て、イザヤがいかなる人であるかを知ることは、この作者のダルガスを知ることであり、作者その人を知ることに外な

らぬ。

イザヤは西暦前八世紀、ウジヤ・ヨタム・アハヅ・ヒゼキヤ等の諸王の時代のユダヤの豫言者であつて、その人格と政治才能と愛國的精神と、後世に及ぼした感化等によつて、豫言者中最大なる者と稱せられてゐる。彼はエルサレムの市民で常に朝廷に出て王に接近してゐた。これよりさき西暦前九七五年頃、イスラエル人の土國は二分して、北方十州はイスラエル王國（北朝）南方二州はユダヤ王國（南朝）となつてゐたが、當時兩國の東にはアツシリア、西にはエジプトがあつて各〻覇を地中海沿岸に爭ひ、又シリア・アラム等が兩國を窺つてゐたにも拘らず、國内には更に國事を憂ふる者がなかつた爲、前七二二年にはイスラエル王國の首府サマリアが陷落して北朝はアツシリアに滅されるに至つた。イザヤは南朝ユダヤの人々が眼前にこの悲劇を目擊しつゝしかも顧みることなく一時の苟安を貪る有樣を見て悲憤慷慨に堪へず起つて迷へる人心を指導しようとし、前七〇一年アツシリア王セナケリブがユダヤの首府エルサレムを圍むや、神の都の不落を豫言して民を激勵した。彼は神を以てイスラエル人の聖なる支配者となし、同胞の社會的無秩序と政治的無定見とを攻擊し、アツシリアの來襲を以て神の審判となし、イスラエル人はアツシリアをもエジプトをも後援せず、たゞ神にのみ賴るべきことを敎へた。彼は又、强き正しき王メシアがユダヤの中から出て國民を救ふべきことをも期待してゐた。かくてエルサレムは一貫して彼の思想の中心、終局の目的であり、又彼の希望の頂點であつた。彼が五十年間の奪鬪は一にエルサレムの爲であり、彼の豫言は唯エルサレムに新生を得させることに外ならなかつた。（豫言は聖書には預言とあるがこゝには實用に從ひ豫言とした。）

イザヤ書は舊約豫言書中の一書で六十六章より成り、第三十九章まではイザヤの著であり、第四十章以下は一般に第二イザヤ書といはれてイザヤ時代より約百五十年後、卽ちイスラエルの民がバビロニアに俘囚となつた時代の作である。前後作者を異にしてゐるけれども、この書は、その規模の廣大・思想の莊嚴・表現の美に於て、舊約文學中の一大偉觀であつて、舊約の精神はイザヤ書に於てその絕頂に達し、新約の精神はその源をイザヤ書に發するといはれてゐる。

（八）デンマルクの農業については、農家戸數が二十萬六千戸あつて、内十九萬戸は自作農である。農家一戸の平均耕地面積は約十五町歩で、同國が高級食料品の生産販賣に於て世界市場に優位を占めるに至つたのは、農業組合の發達に負ふ所が多いといふ。

又デンマルクの農村文化の發達が世界無比であることも羨望せられてゐるが、これはグルンドヴイヒの創始にかゝる國民高等學校に負ふものであることはいふまでもない。今、これらの點に關して參考すべき著書の一例を擧げれば次のやうである。

北海道畜牛研究會編	丁抹の農業	
アイナルヴエールム著 實業補習教育研究會譯	丁抹の農村事情	
平林廣人著	丁抹の農民の努力	
神田不二夫著	丁抹獨特の國民高等學校	
小出滿二 内山數雄著	デンマーク農村生活	
平林廣人著	農民國のデンマルク	
ホルマン著 木下一雄譯	丁抹の國民教育と國民大學	
野田義人著	丁抹國民高等學校の研究	
岩井尊人著	最近のデンマークと農業の合理的共同經營	
フオート著 水量常吉抄譯	丁抹の農村とその教育	

3　**補材**

デンマルクを救つたダルガス、荒地を化して沃野としたダルガス。それを考へると、直に連想されるのは、我が國の二宮

尊德翁である。翁も窮乏の農村を化して立派に更生せしめた大偉人である。それで翁の意見を二宮翁夜話より採り、對照的に考へしめる補材とした。こゝで教授者の注意して頂きたいのは、洋の東西による物事の考へ方の相違である。ダルガスの行き方はあくまで科學的物質的であり、二宮翁の行き方は、科學的方面も勿論備へてゐるが、精神的なるものが何としても中心である點である。「先づ精神を。」これが二宮翁の偉大なる點である。そしてこの補材は又、次の「誠の說」とも深い連關を持つものである。

【翁】二宮尊德翁をさす。天明七年（一二四四七）相模國足柄柏山に生れた。その行實は生徒の熟知する所であると思ふ。安政三年十月廿日歿。年七十歳。

【本願】ホングワン　本來の願望。最も希望するところのもの。

【心の田の荒蕪を開拓して】人間の精神がすさんでゐるのを、教育によつて立派な心がけの者として。「心の田」は人の心を田にたとへ、人心の輕浮・弛緩・不信等を、荒地にたとへたもの。荒も蕪も土地のあれてゐること。

【天授の善種】次の仁・義・禮・智等の德をさす。天より人間に授けられたところの、心田の善き種である。

【培養】バイヤウ　培はつちかふこと。養はそだてる。

【善種を收穫し】人心に仁義禮智等の善德を生ぜしめることを收穫にたとへたもの。

【蒔き返し〳〵】他人を教化して倦まざることにたとへる。

【國家に善種を云々】國民すべてが、仁義禮智の德をそなへるをいふ。

【心の荒蕪云々】こゝに翁の信念と報德の教の大本がある。人心さへ、誠實を以て分度推讓の道につくすならば、荒蕪地は何萬町歩ありとも、必ずこれを開拓して美田と爲さずにはおかないからである。二宮翁の教が、精神の開拓を以て土地の開拓よりも急務としたのは、これによる。しかも、翁の教には、農村振興に對する實際的な周密な計企が具はり、それを實踐すれば、必ず成功するだけの工夫がつまれてゐる。その「實踐」といふ事には、精神力の緊張が大切であり、精神力を生むものは誠實であり、誠實心を養ふには仁義禮智信の五倫五常の德育が根本をなす。この點を考へて、この補材を活用せられたい。

【二宮翁夜話】明治二十年に出版されたもの。著者福住正兄（フクズミマサ）は、二宮翁について教訓を受けた人であつて、序文に

おのれ翁のみもとに有りしこと七年なれば、折にふれ事にふれ、翁の論說教訓をきゝたることいと多かり。されど洪なる鐘も小さきしもともてうちたらんには、その響かすかなるをいかにかはせむ。その上に己が耳は世にいふ味噌漉耳にしあなれば、道の心の深遠なる甘味なるは皆漏れ去りて、殘れるは粕のみなり。かゝる粕を書き殘すは道をまどはする恐なきにあらねば、たえて人には見せざりしかど、本年は六十一にしなりぬれば、殘る齡も多からじ、せめて書淸めてだにとて草稿したるを、親しき人達、櫻木に物せよと言ひすゝむれど、もとより才なく、力なく殊に文書くわざにうとければと、否めども中々にその打聞のまゝにて飾らずつくろはぬ俗文こそ良からめと、責めて止まず。今はいなむに言葉なくて、かく世にひろむることとなりぬる故よしを一言そふるになむ。

とあるので、本書の成立事情は明かである。

九誠の說

一　解題

1　作者

三浦梅園　ミウラバイエン　儒者。本名は晉。字は安貞、後、安鼎と改めた。洞山・攣山・季山・東川・二子山人・無事齋主人等と號した。享保八年（一七二三）八月豐後國杵築に生れた。父儀一は醫を業とした。幼にして穎敏、初め藩儒綾部綱齋に學んだが、十七歲豐前中津に赴き、藤田貞一の門に遊び、俊才を以て稱せられた。天地造化の理に疑を抱き、まづ文學に志し、年二十餘で自ら簡天儀を作り、天文に關することはほゞ了解したが、哲學上の疑問はいまだ解決することが出來ず、寢食を忘れて研鑽し、年三十に至つて、天地に條理のあることを發見し名づけて條理學と稱した。これより益々研學を積み、遂に梅園三語卽ち「玄語」「贅語」「敢語」を著した。「玄語」は彼の所謂條理學の玄理をのべ、「贅語」は「玄語」の所說を一層明瞭に論述し、「敢語」は彼の道德說をのべたものである。安永二年「價原」一卷を著し、貨幣及び物價の原理を論じた。その名聲の高まるに及んで、諸侯の招聘頻りに至つたが、皆辭して仕へなかつた。天明三年杵築侯松平親賢が新に立つに及んで、召されて家老職の禮遇を受け、常に政事の諮問に應じ、大いに封內の福利を增進した。寬政元年三月歿。享年六十七。明治四十五年從四位を追贈せられた。學殖該博で、天文・物理・哲學・倫理の外、政事・經濟・醫學・博物・文學・語學の諸方面に通じ、著書頗る多い。總べて梅園全集（全二卷）に收められてゐる。

2　出典

「梅園叢書」中卷の「誠といふの說」の抄である。「梅園叢書」は教誨を主とした隨筆で、上・中・下の三卷からなり倫理道德は勿論、學術・技術・醫術・佛道五行說など多方面に亘つて、論辨・說話四十九篇を收めてゐる。寬延三年の自跋があり、安政二年刊行された。梅園全集・百家說林・日本隨筆大成・有朋堂文庫等に所收。

3　主眼及び採擇の趣旨

誠とは如何なるものか、誠なるには如何にあるべきかを考察したもの。哲學的思索の表現として文化的教材であり、古人の實行を敍した文として國民的教材である。

二　解釋

1　語釋

【妄】　バウ・マウ　（一）みだりなこと。眞實又は誠實でないこと。（二）愼重でないこと。こゝは（一）。

〔その辨をもとめずして可なり〕その區別を求めなくてもいゝ。增したか增さないかはどうでもいゝ。

【妄語】　（一）バウゴ　みだりにものをいふこと。道理に合はないことを言ふこと。（二）マウゴ　佛語。十惡の一。うそをつくこと。こゝは（一）。

【實】　ジツ　まこと。まごころ。

【衞の靈公】　エイのレイコウ　支那春秋時代の諸侯。皇紀一二〇乃至一七〇年頃の人。名は元。襄公の子。その三十八年孔子の來訪を受けて、大いにこれを重んじたが、長くは止め得なかつた。その後も孔子は屢〻衞を訪れてゐる。深くその夫人南子を愛し、つひに所謂南子の亂を生じた。その四十二年に歿した。

【夫人南子】　フジンナンシ　宋の人。頗る靈公に寵せられて勢力があつた。

【闕下】　ケツカ　（一）宮門のもと。（二）天子の御前。ここは（一）。

【蘧伯玉】　キョハクギョク　名は瑗。伯玉は字。衞の大夫。賢德を以て敬重せられ、孔子が衞に行く時は殆ど常にその家に宿した。老に至るまで進德の工夫を積んで倦まず、年五十に至つて四十九年の非を知つたといはれてゐる。

【下二公門一式二路馬一】　君の門前を通る時は車を下りて徒歩し、君の馬に對しては車上の禮をする。

「公門」おほやけの門。君主の門。公家。

「路馬」天子又は諸侯の車馬。「路」は大、の意。天子服御の物品に冠する。

「式す」は「軾す」とも書く。車上の人が車の横木（式・軾）によつて伏して行人に敬禮する。

【不下爲二昭々一信も節云々】　人の見てゐる明らかな所であるからといつて特別に自分の節操をのべひろげるやうなことをせず、又反對に、人の見てゐない所だからといつて德行を怠り捨てるやうなことはない。

【さして】（一）これぞと指していふ程に。さほど。（二）さしあたつて。さしむき。こゝは（一）。

【筈にあふこと】「弓の弦が矢の筈に合ふ」の義。物事の調子・都合がよく合ふ。適合する。ぱつが合ふ。うまくゆく。

【如レ見二其肺肝一】　この五字で大學の傳の言葉を代表させたやうないひ方である。その意味は「小人は閑居して際限なく不善を行ふ。そして君子の立派な樣子を見ては、すつかり不善をおほひかくして、たゞ善い所だけを外に表はさうとする。けれどもそんな細工をしても他の人にはその肺肝を見るが如くはつきりとその實狀が分る。そんな細工は一向益のないことだ。」といふのである。

【なき名ぞとの歌】　そんな評判は跡方もない僞だと、人にはいつてすみもしようが、若し自分の心が尋ねたら、どう答へたものであらう。眞實であるだけに何とも答へやうがない。

後撰集卷十一、讀人知らずの歌で、題詞に「親ある女に忍びて通ひけるを男もしばしは人にしられじといひ侍りければ」とある。

【鎌倉殿の不審を蒙りし時、云々】　文治三年九月、伊勢國沼田に於ける畠山重忠の代官に狼藉の振舞がある由、伊勢大神宮の神官から訴訟があり、重忠は關知しないことであつたけれども、その罪に坐して四箇所の所領沒收の上、千葉胤正に預けられた。重忠はこれを恥ぢ、寢食を絶つこと七日に及んだので、胤正はこれを賴朝に告げた。賴朝は大いに驚き、十月罪を赦して伊勢以外の本領を安堵し、重忠また深く不明を謝して武藏に歸つた。然るに十一月に至り、梶原景時これを讒して、重忠は微罪にして囚はれたのを恚つて叛を企てつゝある旨を賴朝に告げたので、賴朝は小山朝政・下河邊行平・小山朝光・三浦義澄・和田義盛を召してこれを謀り、朝政の說を容れて行平をして狀を候はせた。重忠憤懣して自殺せんとしたが、行平に宥められて鎌倉に同道、まづ景時について辯疏すると共に、景時が誓書を求めたのに對しては、武士に言背なき旨を答へてこれを拒絶した。賴朝はこれを聞いて重忠・行平を引見し、たゞ世上の雜事を語るのみで一言も事に及ばず、重忠は謝して退いた。

【起請】　キシヤウ　（一）事を發起して上に請ひ願ふこと。又、その文書。主として平安朝時代の末頃まで行はれた。（二）神佛に誓を立てて、僞のないこと又は約束に背かない旨を記すこと。又、その文意。起請文。誓狀。ことは（二）。

【いみじく聞ゆれ】　立派に思はれます。

「いみじ」は、（一）甚だしい。著しい。（二）すぐれてゐる。（三）かりそめにしまい。大切である。

【實といふもの】　マコトといふもの。

【此の意】　コのココロ　我意。

【奉行】　ブギヤウ　承りて行ふこと。又官府の命を受けて、その公事を行ふこと。鎌倉時代より武家の職名となり、專務の職掌により恩澤奉行、安堵奉行などがあつた。豐臣氏の時、執政を大老といひ、その下に參政の職五人を單に奉行、又五奉行などと言つた。江戸時代になつては寺社奉行、勘定奉行、當物奉行、旗奉行、幕奉行などあり、又別に町奉行、郡奉行、長崎奉行、伏見奉行などと言はれるのはその地の地方官である。

【探題】　タンダイ　鎌倉・北條氏の頃、六波羅探題（京都）中國探題（長門）、筑紫探題（筑前）、陸奥探題などありて遠隔重要の地に置かれた職名。その一地方のことを奉行し、訴訟成敗を掌り、外寇などの鎭とす。

【頭人】　トウニン　（一）かしらだつた人。をさ。かしら。頭目。首領。（二）鎌倉時代引附衆などの頭首。（三）室町時代、政所、評定所、侍所などの長官。

2　文の構成

第一節　初―六八頁四行　　誠をつくすは君子の道。

第二節　六八頁五行―六九頁七行　　僞をいはぬのみならず僞なきが眞の誠。

第三節　六九頁八行―七二頁四行　　人を欺かぬのみならず、己の心を欺かぬが眞の誠。

第四節　七二頁四行―終　　我意を捨てて己の心を欺かぬが眞の誠。

3　文意

人は欺くとも自己を欺くことは出來ぬ、內に省みて恥づかしからぬ行ひをするのが眞の誠である。

4　鑑賞批評

〔一勺の水を海に入れて、海の水增したりといはんは愚なり。增さずといふも妄なり〕――誰にも理解せられやすい譬喩を設けて、深い人生哲學を說かうとしてゐるのである。「我」と「我にあらざるもの」とを明らかに分析し、誠を盡くす眞風光を會得させようとする用意は誠によく行屆いてゐる。

〔僞を言はぬに對する信は小さし。僞なきに對する誠は大なり〕――「僞をいはぬ」と「僞なき」との關係を「信」と「誠」との關係に對比させたのである。そして「信」と「誠」と、隨つて「僞をいはぬ」と「僞なき」との距離が大であることをいはうとしてゐるのである。そして「僞なき」誠の意義を定位しようとしてゐることはいふまでもない。

〔昔、衞の靈公といひし君、夜夫人南子と共に坐し給ひけるに、遙かに車の轟く聲しけるが、闕下にして聲なく、闕下を過ぎて又鳴りけり〕――奧床しい情景が浮んで來る。この具體的情景の中から、「誠」の姿を見出し來るのである。

〔人知るまじとて欺くは妄なり〕――この命題の理解は容易い。併しその實行は如何に困難なものであるか。實踐に心を碎いたことのない者の窺知を許さぬ風光である。

〔人の見ぬ間とて間斷あらば、草木も思ふままには伸びもすまじ。深き谷の蘭も、遙かなる山の紅葉も、人なしとてもよく薰り、うつくしく照ればこそ、人至りたる時も香淸く色麗しけれ〕――誠の道の眞風光をかういふ事實の上に指摘して會得させようとしてゐるのである。

〔我一生僞を言ひしことなし。僞なしと申す上は、此のことに限りて起請を書くまじ〕――「この事に限りて起請をば書くまじ」といつてゐる氣魄が面白い。

〔人には我意といふものありて、一旦我が言ひ出しし詞は、たとひ惡しと案じ當りても、是非に言ひ募りて我を立つるものなり。これ腐りたる實の如し〕――人性の弱點をよく見透してゐる。人は我意で誠を殺してゐる。我意のあるのを「腐りたる實」に譬へる所以である。我意を捨てることによつて始めて己の心を欺かぬ誠が現れて來るのである。

これは教誨の爲の文であるが、本質的なものを求めてやまぬ作者の態度の故に、又例話が淸新で生きてゐる爲に、比較的教誨文らしい臭味がなく、讀者をして思索に導く力がある。眞の誠の實踐的定位が的確であつて、讀者をしてその實踐に向かしはめる原動力が感じられる點に於ても、この文の力が認められてよいであらう。

三　備　考

1　指導研究

讀みに於て、難解な文であると感じさせるであらう。併し心を集中して文脈を辿つてゆけば、段々そのもつれが解けて來ることを體驗するであらう。分節し、部分を摘出して、何遍も讀ませ、讀みを十分ならしめて解釋の事に入る順序を辿らなくてはならない教材である。

解釋に於ては、一つの章句から次の章句へ發展してゆくその關係が明瞭に跡づけにくい敍述ぶりである。さういふ箇所はその部分のみに囚はれてしまはず、前後の關係から推せば正しい理解に導くことが困難ではない。又論と譬喩及び事例との關聯をよく吟味すれば、論旨の展開としての構想が見えて來るであらう。今試みに、まづ論の方向のみに著眼すれば、最初に「愚」と「妄」とを戒めて「信」を提出し、更に「信」を破つて「誠」を指示してゐる、「誠」の定位と、「誠」の發現としての實踐問題についての考察である。又譬喩・事例の方面のみに著眼すれば、譬喩には海の水の增減とか、罌粟の子、煙草の實の誠とかいふやうな自然觀察から來たのもあれば、一升の米の增減とか、俄掃除とかいふやうな人事觀察に成る假設もある。事例は何れも史上人物の逸話で適切なのみではなく、偉れたもののみである。譬喩・事例と論との關聯

に於て注意すべきことは、罌粟の子、煙草の實について「奪ふべからず、隱すべからず、昧ますべからず、覆ふべからず、其の時至るに及んでは、芽を出し、葉を生じ、花を開き、實を結ぶ。」といつてゐる譬喩が、誠の積極性・實踐性に轉ずる基礎を成してゐることである。この消極的な誠から積極的な誠への移動は、うつかりすれば生徒は氣づかずに、又理解し得ずに終ることがないとは保し難い。靜寂といへば無音狀態とも考へられるが、眞の靜寂はもつと積極的に身に迫るものを持つてゐるものであるやうに、誠も單なる「僞なき」狀態から進んで人を動かす力となるものであることをよく理解せしめたい。

2　參考

本文中例話として引かれてゐるものをその出典と思はれる書からそれ〴〵左に抄出する。

衞靈公與二夫人一夜坐。聞二車聲轔々至レ闕而止。過レ闕復有レ聲。公問二夫人一曰。知二此爲レ誰。夫人曰。此遽伯玉也。公曰。何以知レ之。夫人曰。妾聞。禮下二公門一式二路馬一。所二以廣レ敬也。夫忠臣與孝子。不レ爲二昭々一信レ節。不レ爲二冥々一惰レ行。遽伯玉衞之賢大夫也。仁而有レ智。敬二於事レ上。此其人。必不レ以二闇昧一廢レ禮。是以知レ之。公使二人視レ之。果伯玉也。（小學卷四）

廿一日（文治三年十一月）。戊午。行平相具二重忠一。自二武藏國一歸參。重忠屬二景時一。陳レ申無二逆心一之由。景時云。無二其企一者。可レ進二起請文一者。重忠云。如二重忠一之勇士者。募二武威一奪二取人庶財寶等一。爲二世渡計一之由。若及二虛名一者。尤可レ爲二恥辱一。欲レ企二謀叛一之由風聞者。還可レ謂二眉目一。但以二源家當レ世。仰二武將主一之後更無レ貳。而今逢二此殃一也。運之所レ縮也。且重忠。本自心與レ言不レ可レ異之間。雖レ進二起請一。疑レ詞用二起請一給之條者。對二奸者一。時之儀也。於二重忠一。不レ存レ僞之事者。兼所二知食一也。速可レ披二露此趣一者。景時申二其由一。付二是非一。無二御旨一。則召二重忠行平於御前一。談二世上雜事等一給。曾不レ被レ仰二出此間事一。少時令レ入給之後。以二親家一賜二御劍於平行一。無爲相二具重忠一。爲二大功一之由云々（吾妻鏡卷七）

補材

誠の說の、概括的なものとして、中庸の有名な一句を採つたのである。原文は

誠者天之道也。誠レ之者人之道也。誠者、不レ勉而中（アタリ）、不レ思而得、從容中レ道（アタル）、聖人也。誠レ之者、擇レ善而固執レ之者也。

とあつて、その最初の二句を引用したのである。

意味は、「誠といふものは天の道であり、その道に合するやうにと努めるのが人道の誠である」といふのである。誠は天理であり天道である。そしてその誠を受けて、そのまゝ天道天道のまゝに行動し思索し得る人は聖人である。聖人の如き誠があれば、別に努力し勉めずとも、その行ふ所は天地の誠の道に中（あた）る、又別に思慮分別を加へなくとも、自然にその思想は誠を得て天道に合する。從容として（別に身心を勞せずして）充分にこの天道に合するのが聖人である。

しかし、人間はすべてが聖人たり得ない。從つて、努力し力めて、この天の道の誠を身に體するやうにしなくてはならない。かく努力する事が、「誠レ之（スルヲ）」である。そして「これを誠にする」ことが、我々人間の行ふべき道であるのである。「誠レ之（スルヲ）」には如何になすべきかといふに、「善を擇んで固くこれを執る」ことである。善きことを擇び求めて、それをあくまで堅持し固執して、その善を實現することである。「固くこれを執る」といふ所に、努力が必要となつて來るのである。

中庸は四書（大學・中庸・論語・孟子）の中の一つであつて、孔子の孫、伋字は子思の著である。

10 歸り來て

一　解　題

1　作　者

古泉千樫　コイヅミチカシ　明治十九年九月二十六日千葉縣安房郡吉尾村細野に農、古泉彌市の長男として生れた。本名幾太郎。十歳父に四書の素讀を習ふ。十三歳小學校の傍、漢學塾へ通ふ。三十二年（十四歳）「心の花」を讀み、萬朝報歌壇へ投書して屢〻賞をうけた。十五歳小學校卒業と共に代用教員となつた。三十四年（十六歳）四月千葉市教員講習所に入り、翌年卒業、田原小學校に奉職。「心の花」新聞「日本」に歌を投じた。九月十九日子規逝去。此頃から根岸派の歌に據る。三十七年（十九歳）「馬酔木」に歌を發表し、伊藤左千夫に激賞された。又「比牟呂」「鵜川」に歌を發表した。四十年（二十二歳）五月上京して、初めて左千夫に逢ふ。翌年、教員を辭して上京、帝國水難救濟會に奉職した。此年九月「アララギ」創刊。翌四十二年九月「アララギ」は左千夫の手に移り、その編輯を助けた。大正二年（二十八歳）「屋上の土」を出版しようとしたが、果さなかつた。三年、萬葉集輪講をアララギに載せた。五年、最新和歌講義錄に「古今集和歌評釋」を連載した。大正十三年「日光」創刊さるゝや、釋迢空、石原純らと共に之に加はつた。大正十四年五月、自選歌集「川のほとり」を出版。大正十五年一月病のため水難救濟會を退く。四月、名古屋より「正岡子規に就て」をラヂオにて放送。五月、門下十一名と共に青垣會を組織した。七月アルスより「長塚節選集」を出版。昭和二年一月から全く病臥した。「青垣」發刊の議起る。五月小康を得たが六月再び重態となり「青垣」發刊の前、八月十一日逝く。四十二歳。昭和三年五月、歌集「屋上の土」、五年三月隨筆集「隨緣鈔」（青垣會同人編）、昭和八年三月「屋上の土」以後の歌を集めた、「青牛集」が、何れも改造社から出版された。門下によつて「青垣」が月刊されてゐる。彼は島木赤彦、齋藤茂吉、中村憲吉等と共に伊藤左千夫門下の逸足で、歌集の發行が遲れたりした事情もあり、一般に認められることが少かつた遺憾があるが、その歌風は柔軟にして詩味豐かなるもので、島木赤彦等とは異つた持味を有した傑れた歌人といふべきである。根岸派及アララギの人々と共に寫生を生命としたが、それは象徴の道に入つてゐる。

文章は遲筆歌は苦吟、卽興風にやればやれるだけの才能はありあまる程あつたのであるが、靜かに心に押し鎭めて純熟するのを待ち、而して「生みの苦しみ」を人一倍深く嘗めた。そしてすべてを諦視しきつた無爲の心境の深さ、冴えとか鋭さなどといふものではなく、もつぱら「さび」の世界を求め、晩年には「芭蕉を味へ」といつてゐる。

氏の特色の尤なるものは土の生活を具象的に詠み出した最初の人ともいつてよい點であらう。古來農民生活を傍觀的に抽象的に詠出した歌は多く存在してゐる。しかし乍ら土の感覺、農耕の直接端的な感覺を披瀝した歌人として氏の如きは稀有である。

木下利玄　キノシタトシハル　明治十九年一月一日、岡山縣賀陽郡（今の吉備郡）足守町に木下利永の次男として生れた。二十三年伯父木下利恭の養嗣子となり、東京の子爵家に入つた。學習院初等科から、中等科、高等科を經て三十九年（二十一歳）東京帝大文科に入學、四十四年卒業した。歌は三十一年（十三歳）佐々木信綱の門に入り竹柏園集第一編第二編及び、竹柏園選集「玉川集」等にも載せられ、四十一年の選集「玉琴」には五十三首掲げられた。「心の花」以外、四十三年、武者小路等の「白樺」同人となり、そこにも歌を發表した。大正元年目白中學國文講師となり、五年辭職。大正三年第一歌集「銀」出版。四年「萱山」一聯の作を得た。五年六月より妻と共に大旅行を始め、京畿、但馬、出雲、岩見、周防、九州に至り越年、南九州に遊び翌年十月歸京した。年末兵庫縣住吉に假寓、翌八年鎌倉に移住した。八年「紅玉」

出版。十一年肺結核に罹り以來病臥を續く。十三年「日光」同人となる。「一路」を心の華叢書として出版。自選歌集「立春」の編纂に着手したが、十四年一月末危篤となり二月十五日逝去。年四十。五月「立春」、七月改訂版「紅玉」、十二月歌文集「李青集」が夫々出版された。十五年七月「木下利玄全歌集」を石樓茂が編輯して出版した。

利玄は年少より竹柏會の門に入り明星派風の歌を作つたが、空穗の歌に教へらるゝ處あり、又北原白秋の「桐の花」の影響も受けた。程經て大正四年箱根に遊び「萱山」一聯を得て悟入し、本道に出でたと自任し、アララギ調を多く加味して來た。この頃より客觀寫生、繪畫的立體描寫風の歌を作り、口語脈的發想の破調を伴ひ、世に利玄調と稱するに至つた。更に晩年には、自由な童謠的格調に進み獨自の素朴調といふのを創めた。利玄は橘曙覽を好んだといふが、後年の作はそれと相近似してゐる。

彼の晩年の歌はかなり獨自性の著しいもので、昭和年代に入つても、多くの模倣者を生ぜしめてゐる。たゞ歌をたのしみ歌にくるしんだ利玄は、大正期の代表的歌人として永久にのこるであらう。

若山牧水　ワカヤマボクスヰ　明治十八年八月廿四日、宮崎縣東臼杵郡東郷村坪谷の醫家の長男として生れた。本名は繁。初め野百合と號し、廿歳の時、牧水と改めた。三十二年縣立延岡中學校に入學、在學中文學を愛好し、「文庫」「新聲」等に投稿した。三十七年早稲田大學文學科高等豫科に入學。翌年尾上柴舟を訪ひ、又北原射水（白秋）等と交つた。翌卅九年柴舟の「車前草社」に加はり、夕暮、露風等と知り又哀果、勇等とも交つた。四十一年七月第一歌集「海の聲」出版。同月早稲田大學英文科卒業。四十三年一月第二歌集「獨り歌へる」出版。三月詩歌雜誌「創作」を創刊。四月歌集「別離」出版。四十四年一月創作社を起し、九月解散。四月「路上」出版。四十五年三月歌書「牧水歌話」、九月歌集「死か藝術か」を出版。この年五月太田喜志子と結婚した。大正二年八月「創作」を復活、九月「みなかみ」出版。大正三年四月「秋風の歌」出版。十月以後「創作」休刊。四年四月自選歌集「行人行歌」を十月、「砂丘」を出版。この年創刊された水穗の「潮音」に關與した。五年六月散文集「旅とふる鄕」、歌集「朝の歌」、十一月自選歌集「若山牧水集」出版。「潮音」を離る。六年二月「創作」を復活し「和歌講話」を出版した。八月「白梅集」（喜志子と合著）出版。七年五月「溪谷集」、七月「さびしき樹木」、散文集「海より山より」出版。八年九月紀行文集「比叡と熊野」出版。九年八月年來希望せし田園生活に入らうと決し、靜岡縣沼津（現在は市）町在に一家移住。十二月評論集「批評と添刪」出版。十年三月「くろ土」を、七月紀行文集「靜かなる旅を行きつゝ」を出版。十一年十二月「短歌作法」出版。十二年六月「山櫻の歌」出版。十三年六月紀行文集「みなかみ紀行」出版。十四年二月隨筆集「樹木とその葉」、十二月自選歌集「野原の郭公」出版。大正十五年五月宿望だつた「詩歌時代」を創刊したが、九月廢刊。昭和二年朝鮮に揮毫旅行をした。昭和三年九月初旬病起り十七日歿した。四十四歳。四年より翌年にかけて牧水全集十二卷が改造社から出版された。

牧水は明治の末期、自然主義の擡頭と共に現實に苦悶する寂寥と豐かなる抒情とを歌ひ、その哀韻は大正當時の青年を風靡した。後、多少の屈曲はあつたが、「くろ土」「山櫻の歌」の東洋風な自然諷詠に至つて、所謂牧水調の完成を示してゐる。牧水の生涯は歌と酒と旅であつた。

2　出典

古泉千樫のものは家集「川のほとり」中の「屋上の土」（自明治四十一年至明治四十五年）中の歸省五首中の一と青牛集（自大正七年至昭和二年）中大正十三年の沼畔雜詠二十四首中の二である。川のほとりは氏の第一歌集であつて明治三十七年から大正十三年までの作品の選集である。青牛集は大熊長次郎氏等によつて編轉されたもので「屋上の土」の後をうけて、大正七年から逝去の年昭和二年迄の作品中、印刷發表されたものを全部集めたものである。

木下利玄の歌は第一首は大正七年の大和路三首の終のものである。即ち大正六年十二月長女夏子を逝かせ、悲しみを抱いて大阪住吉に假寓中、しば〳〵奈良京都有馬等に遊んだがその中の作である。

第二首は大正五年の草の穗十一首の中第六首目である。

第三首は大正四年の萱山十七首中の第九首目である。この萱山一聯によつて悟入したと稱する歌である。

若山牧水の第一首は氏の第一歌集海の聲（明治四十一年五月）からとつた。二十四歳の作である。その序文に柴舟氏は「あゝ喜を見ていよ〳〵よろこび悲にあひてまたますます〳〵よろこぶ牧水君の今の時は幸なるかな」といつてゐる。又自らの序に「まこと、われらがうら若の胸の海ほど世にも淸らにまた時おかず波うてるはあらざるべし。そのとゞめがたき心のふるへを歌ひいでてわれとわが思ひをほしいまゝにし、かつそのまゝ盡くるなき思ひ出の甕にひめおかむことげにわれらがほこりにしてまた限りなきよろこびならずとせむや」といつてゐる。若き日の情感を熱烈に歌ひ出した歌集である。

第二首は第四歌集路上（明治四十四年九月廿七歳）にのせられたものである。路上は明治四十三年一月以降のもので、「痛ましき動搖と朦朧とを投げて」ゐる透徹せざる作者の生活陰影の記錄である。

第三首は最後の歌集「黑松」からとつた、黑松は大正十二年から昭和三年の最後に至るまでの作品集である。生前に上梓の意志があり書名まで確定してゐながら、身邊の匆忙と健康の思はしからぬためにその意志を果し得なかつたものであるが、歿後に編輯されたものである。東洋風な自然諷詠、牧水調の完成を示す最後の作品集である。こゝにとられた歌は「鮎つりの思ひ出」と題された廿五首の中の一首である。

3　主眼及び採擇の趣旨

農耕生活の純朴な感情と農村生活にあふれるゆたかな詩情、或は自然風物との交りの樂しさ、父を思ふ純情等、農村的なもの、自然的なもの家庭的なものをとり出してそこに感ぜられるよさを味讀させようと思ふ。次課の都會的な情調と共に自然人事に對しては豐かな詩情を養ひたい。文藝的教材であると共に生活指導の教材である。

二　解　釋

歸り來て坂にわが見るわが家はまだ灯もささず日は暮れたるに

【ささず】「さす」とは、(一)潮上げ來る。(二)生ず。(三)とぼる。(六)さしつかへる。こゝは(四)。

雲などたちのぼる。(四)光線がうつる。映ず。(五)浸み

【坂に】には場所を示す助詞。坂で見るの意。

故郷を出てはじめての歸省である。「ま晝のあかるき村を歸るにもためらはれる胸のさびしみ」こんな氣持を抱いて夕暮故郷の家を見おろす位置にある坂の上に立つた。なつかしく見やるとその家にはまだ灯も映つて居ず、淋しくひそまつてゐる。わびしい極みである。働くべき長男たる自らがおいて去つた家、そこには父と母とが働いています。そしてもう暮れたのに灯もともしてゐないのである。

鑑賞批評

この歌につゞいて

いましがた田ゆ歸りしと軒闇に母が立たすにわが胸せまる

村人ら植付前のいそがしくはたらくらしもわが父母も

がある。長男たる自分がはげしい農業を父母にまかせて出て行つた事を思ふと、申し譯ない心で一杯になるのである。かうした心を思ふとき「わが見る」「わが家」のわがが特別なひゞきを持つて來る。第四句、第五句のまだといふ副詞と、暮れたるにのにといふ逆說の條件を示す助詞も力强い表現力を持つてゐる。

夕されば馬の親子は歸りをり蚊遣してやるその厩べを

【夕されば】　夕になるとの意。さりは助詞しと動詞ありとの約語。「夕しあれば」の約語。

【蚊遣】　カヤリ　蚊を逐ひやらんが爲に烟をくゆらすこと又そのもの。

夕方になつたので馬も親子揃つて歸つてゐる。その厩には蚊が群れてゐるので、蚊遣をしてやるのである。

鑑賞批評

第四句と第五句を到置法にしたところ親愛の情がこめられてゐる。農耕生活の中にこもる純朴の情である。人畜ともに一つになつて親しみあひ、いたはり合つてゐる情景が出てゐる。さびの一筋道につながれる歌境であらう。教科書には、誤つて「親子の馬」となつてゐるのもある。「親子の馬」でも意は通ずるが、「馬の親子」でなくてはならない。教授の際の訂正を願ふ。

夕ふかし厩の蚊遣燃えたちて親子の馬の顔あかくみゆ

【夕ふかし】　夕暮がふかくせまつた。

夕闇は深くせまつて來た。物の相も見分けにくい程になつたのである。點火した蚊遣が燃え上つてそのあたりだけを明るくする。親子の馬は何れも顔を火にむけて眺めてゐるのである。二つ馬の顔があか〳〵とてらし出されてゐる。やさしい馬の眼もあかく輝いてゐよう。

鑑賞批評

蚊遣火にてらし出された馬の親子の顔である。農村のかはたれ時の厩の光景。繪畫的描寫。しかも些の鼓張もなく「顔あかく見ゆ」といつた平明な表現は素朴な歌境にふさはしい。

大和路は田圃をひろみ夕あかるしいつまでも白き梨の花かも

【大和路】　ヤマトヂ　路は路、街道の意。

【ひろみ】　ひろいのでの意。みは接尾辭。形容詞の語幹についてその狀を示し、又其狀を思惟するにいふ。古昔四段に活用せる用語でその連用形であらう。

大和平野がひろ〳〵とひろがつて初夏の田圃は青々とくりひろげられてゐる。夕といふにあかるくはろ〳〵にみわたされる風景である。その中に梨畑も遠くつゞいてその花が白々と浮き上つてゐる。

鑑賞批評

田圃のひろい大和の夕暮にむかつて「あかるし」と感じた。そして梨の花の白さをみて「いつまでも白し」と思つたのである。初夏の大和、廣い青のひろごる大和、梨の名産地として梨畑の多い大和、その夕暮に立つて、明るさを感じ、梨の花の白さにみ入つた時の主觀が客觀の描寫と共に生き〳〵と描かれてゐる。純粹觀照の三昧境である。

夕冷ゆる道となりけり刈草のにほひの中に我家こひしも

【けり】　咏嘆のけり。

散歩に出た道であらう。夏とはいひ乍ら夕方にもなればさすがひやりとして來たのである。道のほとりには草が刈りほされてその特有のにほひを放つてゐる。甘いかなしいにほひである。冷えて來た大氣の感觸とこのにほひとは我家こひしく思はせる。

鑑賞批評

自然を內面的に把握して全體的詩境に入つてゐる。「なりけり」のけり、「こひしも」のもの如き咏嘆助詞がその主觀をよく表現してゐると思ふ。

この歌、教科書には「わが家」として出した。「わぎへ」は少し古語に過ぎるために二年の教材として、特にかく改めたものである。

山の下湖のすぐそばに灯をともしこの村の家はよりそへるかも

【湖】ウミ　箱根蘆の湖である。

山が湖にせまつて裾野をおろしてゐる。その山と湖の間のわづかの場所に村の家々は仲よくよりそつて立ならんでゐる事が、夜の灯火によつて一層明にされて來た。暖い人の心まで感ぜられさうな自然の相である。

鑑賞批評

第四句第五句はまことに主客合一の三昧境を示してゐる。黒々とそびえる山、黒々とひろがつた湖、その間に集つてゐる村の灯を見て「よりそへる」と見、「かも」と咏歎的表現をした點にそれを感ずるのである。「灯をともし」に不足を感ずると島木赤彦氏は大正四年十一月號のアララギ誌上にのべてゐるが、どういふ意味であらう。或は「ともし」の方がいゝのではあるまいか。

春は來ぬ老いにし父の御瞳に白う映らん山さくら花

【老いにし】にしは過去完了の連體形である。「老いてしまつた」の意。

【瞳】ヒトミ　眼球の中の黒い部分。くろめ。

あゝ春が來た。故郷には六十歳を越えた父がゐるのだ。裏の背戸の山には相變らず山さくらが咲き滿ちてゐる事だらうが、父はいつもの如く眺めておはす事だらう。そしてその御瞳に花は白々と影を映してゐる事であらう。

鑑賞批評

この歌を鑑賞するに當つて先づ思はれるのは牧水氏と父君との關係である。氏は歌集みなかみの序文に、「私とは親子といふより寧ろ親しい友達といつた樣な關係を保つてゐた。永い間の私の不幸に對しても露ばかり恐るるでもなく恨むでもなく、終始他に對して私を辯護愛撫することにのみ力めて居た。一度、病氣も快くなつてゐたので、今年の春には兩人相携へて上京する約束が出來てゐたのである。いろ〳〵な大きな病院を參觀し、いろ〳〵な好い酒と料理とをあさることを子供のやうな彼がどんなに樂しんでゐたであらう。考へだせば、いつもの微笑を失はずに冷たく眠り去つた彼の顏が眼に浮び、いつでも涙が流れてくる。」とあるのを見てもわかるのであるが、尙參考欄にあげた歌を參照すれば一層明瞭になるであらう。全く冷い周圍の中にあつて同じ性をうけよき理解者であつた父と子である。だからこそ故郷の春をおもへば老眼の瞳までもが偲ばれるのである。

家の背戸の山に山櫻のあつた事は、母の病をよんで

さくら早や背戸の山邊に散りゆきしかの納戸にや臥し給ふらむ

と歌つてゐるのから想定されるところである。

「春は來ぬ」のはが主語の强指示助詞として力を持つてゐる。そこに咏嘆的な味がくみとられるのである。

多摩川の淺き流に石投げて遊べばぬるるわが袂かな

【多摩川】タマガハ　多摩川本支流の水源は所謂關東山地本體の山岳地域で源流は山梨縣に出づ。八王子市を流れる淺川を合流してから東京の郊外を流れ、郊外の散策地として利用され、川崎に至つて海に入る。

二月の多摩川、その淺い流にひとりで石を投げて遊ぶのである。石を拾ひにしやがんだ拍子にか袂は冷い水にぬれた。

さびしさ、わびしさが一入に心に沁む。

鑑賞批評

路上に於けるこの歌の前後のものをあげると

たまたまにたゞひとりして郊外にわが出で來れば日の曇りたる
瀬もあさく藍もうすらに多摩川のながれてありぬ憂しや二月は
曇日の川原の藪の白砂にあしあとつけて啼く千鳥かな
川千鳥啼く音つづけば川ごしの二月の山の眼に痛み來る
山のかげ水見てあればさびしさがわれの身となりゆく水となり
山かげの小川の岸にのがれ來てさびしやひとり石投げ遊ぶ

これ等の歌がある。淺き流が二月の川である事、そしてそれが曇日である事、ひとりで遊んでゐる事、わびしい氣持である事等がこれ等から思はれるのである。第四句第五句、特に最後におかれた「かな」には涙ぐむばかりの響がある。賜にしむさびしさが、「ぬるゝ」「かな」の音調にも滑らかでしかもしつくりと出て居ると思ふ。

淵の鮎は大きかりにき釣りがたみあきらめて見れば大きかりにき

【鮎】アユ　サケ科の硬骨魚。清水に棲む。肉は柔かく香氣を持つてゐるので川魚の王といはれる。十月産卵孵化幼魚は海に入り、翌年三四月頃群をなして川を溯る。初は小動物を食し後には硅藻を食す。

【にき】過去完了終止形。過去の追憶である。
【大きかり】形容動詞連用形。
【釣りがたみ】みは接尾辭、ひろみと同樣。

故郷の日向の山の溪の水は清く澄んでゐた。その溪の淵には大きな鮎が棲んでゐた。その泳いでゐる姿がよく見えたものだつた。よくそこに釣りに出かけたものだが、未だ十歳にみたなかつた作者には釣りにくいのであきらめては見るが、あきらめればあきらめる程鮎の姿は大きく心を惹くのであつた。

鑑賞批評

鮎つりの思ひ出一聯の歌から參考となるものを抄出すると、

故郷の溪荒くして砂あらず岩を飛び飛び鮎は釣りにき
われいまだ十歳ならざりき山溪のたぎつ瀬に立ち鮎は釣りにき
上つ瀬と下つ瀬に居りてをりをりに呼び交しつつ父と釣りにき
瀬の渦にひとつ棲むなり鮎の魚ふたつはすまずそのひとつ瀬に
淵の鮎は釣りにくかりき水澄みて影の見ゆるをくちをしみ見き

これ等によつて見ると谷の有樣も、釣りがたかつた理由もたしかに推定出來るのである。

「大きかりにき」を重ねたところに口惜しさ、殘りおしさが巧に表現されてゐる。玲瓏洒脫、天眞流露、外廓的な絢爛さが去つて內にしみじみと輝かしいものを包んでゐる。

三　備　考

1　指導研究

第二課の明治神宮の歌に對し、これは純粹に自然觀照、或は主客合一の三昧境であるだけに豐かな藝術境を鑑賞させたい課である。それにはやはり正確な解釋が先行する事はいふまでもないが、終には暗誦によつてその歌境を把握させたい

ものである。

2　參　考

（イ）千樫の歌についての釋迢空の批評を抄出する。

沼の歌は（沼畔雜歌、即ち教科書の第二、第三の歌はその中のものである）千樫の連作の中第一位のものだ、が意識した別樣の寂しさがまじつてゐないとは言へない。さうしたものの外に歸郷の歌を見ると、牛馬に對しても鄕人に對してもおなじ態度で歌つてゐる。寂しい故家を見ても、弟の娘の嫁入るを見ても、母子の牛の描寫とおなじ心持である。好意に充ちた表情ながら言ふ語は寂しい。千樫の歌には最初から哀感はあるが、かうなるとその個性的言語情調は著しい効果を示す。喜びの聲をあげても母を懐かしんでも皆朗らかな寂しさでなくば、誇張した感激に墮ちる。（現代短歌全集古泉千樫集追ひ書き）

（ロ）木下利玄の萱山一聯抄錄

木の花の散るに梢を見あげたりその花のにほひかすかにするも

向うの山の大きな斜面彼處には百合咲いてをりはるかなるかも

山獨活の花うかび見ゆふか〳〵とふもと萱原遠ひろき上

まろらなる青萱山のふもと風萱おしなびけ光りはしるも

山百合の咲かんとおもひ萱ふかき土よりいでてふくらむ苔

山の中の畫はたけなはしんかんたるしじまをきゝきゝみづからを堪ゆ

（ハ）牧水の歌を鑑賞するに當つては先づ思はれるのは牧水氏とその父君との關係である。それを示す歌を抄出しよう。

姉はみな母に似たりきわれひとり父に似たるもなにかいたまし

口ぎたなく父を罵る今夜の姉もわれゆゑにかと心怯ゆる

まんまるに袖ひきあはせ足ちゞめ日向にねむる父よ風邪ひかめ

父よなど坐るとすればうとうとと薄きねむりに耽り給ふぞ

ほたほたとよろこぶ父のあから顔この世ならぬ尊さに涙おちぬれ

わがそばに心ぬけたるすがたしてとすれば父の來て居ること多し

あなかしこし靜けき御魂に觸るゝごとく父よ御墓にけふも詣で來ぬ

御墓にまうでては水さし花をさす甲斐なきわざをわがなせるかな

父の死後いまだ十日を出でずわがこゝろ川原の砂の白くすさみたり

二　燈影雜興

一　解題

1　作者

馬場孤蝶　ババコテフ　本名を勝彌といふ。明治三年十一月九日、高知市に生まれた。東京に遊學して明治學院を卒業した。中學校の教諭として教鞭を執ること二年、日本銀行員として勤務すること九年に及んだ。また三十九年から昭和五年に至るまで慶應義塾大學講師の職に在つた。早くから翻譯に從事し、「戰爭と平和」「イリアード」等多くの譯書の外に「葉卷のけむり」「鬪牛」「紫煙」等、數種の隨筆集・評論集がある。

明治文藝界のモダンボーイとして硯友社に小波山人があり「文學界」に馬場孤蝶ありといはれた氏も、多年の文學界に於ける功勞を殘して、今では好きな煙草「みのり」と隨筆に悠々自適してゐる。

2　出典

野客漫言（昭和八年書物展望社發行）中の一文である。本書は「野人閑話」「雜書漫錄」「煙草味覺趣味」「文學雜記」と部類を分つて各隨筆を多數集めたものであるが、燈影雜興は「野人閑話」中に同名の見出しで收められて居る。教科書に採錄されたものは、船の燈の記事の前にある、牧方の華街の軒燈の暖みと艶つぽさを書いたものと、終に、溫泉、島、港の燈火、物を隔てて見る燈火、燈火の發達歷史等を書いたものを除いた文である。昭和二年十月に「マツダ新報」に出たものである。

3　主眼及び採擇の趣旨

自然の生活、農耕の生活の端的な感覺を披瀝した千樫の歌、田園風景を敍した利玄の歌、自然にあそぶ牧水の歌等について、文化的都會的な電燈の情趣を知らせ、趣味生活の世界のひろさを示すところに採擇配列の用意がある。

二　解釋

1　語釋

【燈影雜興】　トウエイザツキヨウ　燈火について、感興を催すことがらを次第もなく書き集めるといふ程の意。燈影とは、燈そのもののすがたであり、水に映つた影である。即ち影に關する二つの意味を理解せねばならぬ。

【夜の闇は燈火によつて命を得る】　夜の暗さは、燈火のおかげで、活を入れられ、趣のあるものになり、興味の豐かなものになるとの意で、つづいてあげてある多くの例は、その具體的證明と見るべきである。

【鎖して】　トザして。

【黑白】　アヤメ　物の區別。物の條理。文樣。語源は「文目」（衣服の文樣）から來たものといふ。黑白は宛字。

【如法の闇】　ニヨホフのヤミ　眞の暗。全くの闇。「如法」は、かたの如くすることの義。轉じて眞に全く・もとより・いふまでもなく、等の意に用ひられる。保元物語に「十一月の如法夜ふけて。」

【畦】　アゼ　土を盛りあげ、田と田との間に道をつくつて界とするものをいふ。くろ。

【雜木】　ザフキ　楢、櫟などの如く專ら薪炭用等に供する樹木をいふ。「雜」は種類の多い義でなく、「精」「醇」に對する語で、品質の劣つてゐる義である。「雜兵」「雜巾」「雜煮」「雜言」などの「雜」も同義である。

【燈火は夜の生命を活躍せしめる興奮劑といへよう】　闇ならば死んだやうにひつそりとして單調なる夜が、燈火がある爲に生々として活氣を帶びて來、興趣を增して來ることを、かうした言ひあらはし方をしたものである。夜の生命を活き〳〵とはたらかせる、その直接原因であるところの興奮劑になるものが燈火であると言ふのである。興奮劑とは、神經を刺戟して引きたてるために用ひる藥劑をいふ。貧血の場合の酒精含有物、疲勞の場合の茶、コーヒー等のやうな普通のものをはじめ、醫療の上

に用ひられるものが多數ある。

【愛】人生には道義・習慣・法律・秩序等が整つてゐても、愛がなかつたなら無味乾燥、殺風景なものになるであらうが、愛があるために人生は潤ひが出來、滋味を生ずる。丁度料理に味をつける鹽にあたるものである。

【有明の燈】アリアケのトモシビ　終夜とぼして、夜あけまでも點しておく燈火をいふ。往昔は、有明行燈といふものもあつた。

【菜種の油】ナタネのアブラ　菜種の實から搾りとつた油。燈用又は食用に供する。「たねあぶら」といふ。

【行燈】アンドン（この音は行燈の字の宋音である。行をアンといふ例に、行脚アンギヤがある。）携へて行く燈火の義である。四方に框を作り、紙を貼り、燈蓋皿を中に置いて、油火をとぼす具。

【蠟燭】ラフソク　紙又は木綿絲を心として、これに蠟、又はステアリン酸に少量のパラフインを混じたものを塗つてこしらへたもの。點燈用に供する。

【瓦斯のあかり】瓦斯燈のあかり。石炭を乾溜して發生する氣體を精製して得た水素・メタン・エチレン・アセチレン・酸化炭素等を成分とする石炭ガスを、點火口に瓦斯マルトンと稱する網狀筒を取りつけた瓦斯燈に導き、點火して燈用に供する。

【行き暮れる】ユきクれる　道を歩行してゐて、まだ目的地へ着かぬうちに日の暮れること。

【一つ家】ヒトつヤ　ただ一軒孤立してある家。あたりに他の家のない處にただ一軒ある家。

【火影】ホカゲ　火の光。あかり。

【夜が勝ちすぎて云々】ただ一つあるあかりが、石油ランプか何かのやうに光力の弱いものであるならば、夜の闇の方があまりに優勢である。隨つて、その暗黑の强さにおされて、あまりに寂しさを感じすぎるであらう。

【いはば】言つて見れば。たとへていへば。申すならば。

【贅澤】ゼイタク　（一）無益なおごり。分限に過ぎたおごり。（二）費用の多くかかること。極めて高價なこと。

【常住】ジヤウヂユウ　生滅・變化等の事なく、常に存在すること。いつもかはらぬこと。ここでは前の「珍しいもの」といふに對して、常にふだん使用するものとなつては、の意である。

【照明】セウメイ　各種の光源に適當の方法を講じて、夜を明るく照らすことを總稱する。光源としては、白熱電燈・弧光燈・放電燈・瓦斯燈その他種々のものが使用される。照明方式としては、屋內照明・屋外照明・建築化照明等がある。屋內照明は間接照明・直接照明に分たれ、

屋外照明は、街路照明・廣告照明に分れる。

【街燈】ガイトウ　街路の照明のために設けられた燈火。

【電燈の光には暖みがある云々】電燈の光は黃色味がかつてゐるので、暖さ、或は華やかさを感じる。瓦斯燈は青味がかつてゐるために、冷たい、寂しい感じが伴なふのである。

【駛る】ハシる。

【檣燈】シヤウトウ　檣にかかげた信號用の燈火。

【青い檣燈】舟の檣燈としては、右舷に綠燈、左舷に紅燈をつける。その光力は二海里に達するものでなくてはならないとせられてゐる。青い檣燈のみの舟といへば、恐らく客船でない貨物船などが、右舷をこちらに向けて駛つてゐるのであらう。

【滿船を照明した船】恐らく客船であらう。

【一つの燈の焰とも見える燈火の一簇】多くの燈火が一箇所へ多くかたまつてゐるのを遠くから望むと、ちやうど大きな一つの燈火の焰があがつてゐるかのやうにかたまつて見えるのである。それを言つたもの。「一簇」（イツソウ・イチゾク）は、一かたまり。一むら。

【夜の旅の單調を破る色彩であり】夜の旅はどこも暗黑で單調なものであるが、さうしたあかりのところへ出て來ると、この單調が破られる。卽ち暗黑の連續の中へ、光明といふ色彩があるために單調が破られるのである。

【長き旅程の一畫を我々の心に刻みつける里程標である】長い旅の道中に、或一區を經過したといふことを、その燈火が旅人の心に知らせてくれる道しるべである。

【里程標】里程を示すために建てた道しるべ。

【慰藉】ヰシヤ「藉」は、たすける義である。慰めたすけること。慰めて力をそへること。

後漢書に「素聞二其風聲一、報以二殊禮一、云々、所下以慰二藉之一良厚上」

【安堵】アンド　堵の內に安んじて居る義。ここでは、心の落ちつく意。安心する意。

【幸なるかな現代の我々は電燈を有する】「現代の我々の電燈を有するは幸なるかな」の意。電燈の光は明るく、華やかで、暖げに見えるから、それでかういつたのである。

【磧】カハラ　川のほとりの石の原。

【渡し小屋】ワタしゴヤ　渡守のゐる番小屋。

【野川】ノガハ　野原の間を流れる川。

【水車小屋】スヰシヤゴヤ　水車のしかけてある小屋。その水車の廻轉を動力として米を搗いたり、粉をひいたりする小屋。

【漁港】ギヨカウ　漁業の根據地となる港。

【かゝり舟】　海の上に碇泊してゐる舟をいふ。
【舷燈】　ゲントウ　舟べりにともしてある信號燈火。
【大川端】　オホカハバタ　東京市を貫流する隅田川を大川といふ。但し向島區あたりでは、まだ隅田川といつてゐる。本所區・淺草區あたりから川口あたりまでを普通に大川と呼ぶやうである。大川端はその大川の岸をいふのであるが、これも、西岸の淺草・日本橋側を主にいふやうである。
【欄干が水の上へ】　この欄干は、川添ひの家々の、川に臨んだ方に作りまうけられた手すりをさしてゐる。
【一脈】　イチミヤク　ひとすぢ。
【奈良】　ナラ　奈良市。奈良盆地に位し、鐵道關西本線・奈良線・櫻井線・大阪電氣軌道線等に沿ふ。元明天皇以來七代七十五年間の帝都のあつた平城京の古址で、現市街は古都の郊外に當つてゐる。隨つて名所舊蹟が極めて多く、歴史の都、古美術の都として遊覽客が多い。現在奈良縣廳の所在地。
【宇治】　ウヂ　京都府久世郡にある町。京都の南方にあたり、宇治川の西岸にある。京都への關門に當り、古來軍事・交通の要地である。附近一帶は宇治茶の産地としてその名を知られてゐる。町の内外には平等院・宇治上下社・宇治の浮塔・萬福寺・興聖寺・三室戸寺等の名蹟が多い。

2　文の構成

第一節　七六頁初行―七六頁八行　燈火は夜の生命を活躍せしめる興奮劑である。
第二節　七六頁九行―七七頁一〇行　行燈・瓦斯・石油のあかりの風趣。
第三節　七七頁一一行―終　電燈の情趣。
（イ）都會地の街衢に於ける電燈の趣（七七頁一一行―七八頁五行）
（ロ）海上を行く船の電燈の趣（七八頁六行―七九頁一行）
（ハ）汽車が大きい町の電燈の一簇に近づく愉快、殊にそのあかりが旅程の目標となる時の慰藉（七九頁二行―八〇頁二行）
（ニ）水際・川邊に於ける電燈の影の風趣（八〇頁二行―終）

3　文意

電燈の趣味風情をいろいろの場合をあげて隨筆的に述べてゆく。夜の趣は燈火にある。燈火の夜に於けるは、恰も愛の人生に於けるが如く大切なものである。菜種油の燈火や瓦斯のあかりは室内のあかりの趣であり一種の贅澤としての趣である。然し電燈のあかりは外で見るあかり、廣いところで見るあかり、遠くで見るあかりである。商店街の店内店外の火影や、海上を行く汽船の照明には或は、暖みと艶味を覺え、或は人間力の愉快な出現を感ぜさせられる。時に都會地の燈火の一簇が長途の里程標となるのも大きな慰藉である。又、水際に於ける火影は、或は艶やかさ或は涼しさ或は和かみを興へて、特に限りない情趣を醸し出すものである。

4　鑑賞批評

燈火を定義して「夜の生命を活躍せしめる興奮劑」といひ「夜に味をつける鹽」であるといふ。そして舊時の燈火を排して「外で見るあかり、廣いところで見るあかり、遠くで見るあかり、」として電燈をとりあげ、その明るさ、華やかさ、さては艶つぽさ、涼しさをあげる。かうした電燈の趣味をいふに、この燈火の定義はまことによくいひ得て居ると思ふ。「興奮劑」といひ「鹽」といふ言葉の持味は、かうした内包を持つてはじめて生きて來る。この鹽の味がよくのみこめれば此の課の鑑賞は終つたものと言ひ得るであらう。

かうした電燈趣味は近代的、文化的な趣味であるが、それを最もよく表現してゐるものとして、滿船を照明した船の駛るのをあげ、汽車の旅に見る燈の焔とも見える燈火の一簇をあげ、都會の川べりの燈影をあげた點は妥當である。更にそれ等の持つ風趣をそれぞれに味ひ分けてゐるところは巧であり、趣味の人としての作者のしのばれる點であらう。

三　備　考

1　指導研究

(イ)全くの趣味教材で、しかも隨筆であるから、理窟を言はないで靜かに味はせるやうに導いたならばそれでよいと思ふが、生徒はかくの如き燈火の趣味を果してどれ程自得してゐるであらうかと氣づかはれる。やはり教授者が相當に導いてやらねばなるまい。

殊に冒頭の理論めいた處、就中鹽についての譬喩を用ひてゐる前後は深い指導が必要であらう。

山路で見る一つ家の灯、遠い離島の燈火などはよくお伽話などに出て來る風景であるので問題でなからうが、それでもこれを景色・風情そのものとして味はせることはこの課に於ける一任務である。

(ロ)七八頁二行目から五行目までに電燈の光には暖みがあり艶つぽさがあることを言ひ、瓦斯の光は冷い感じがするといつてゐるが、この事は前文と何等關係がない。原文ではこの「得るのだと思ふ」の次に牧方の華街の記事があるのでこの艶つぽさと瓦斯の光が生きて來るのである。然しこゝには教材としての關係から省略せざるを得なかつた。

2　參　考

原文には本課採錄の部分についで左の如き數節がある。

北海道の秋は早く來る。內地では大抵曆の立秋はまだ夏のうちであるが、北海道では立秋後ぢきに秋の心持が明らかに感ぜられる。舊曆七月の月は內地の中秋の月の如く澄渡る。夜深き時刻の秋霧の風情も十分に味ははれる。登別溫泉は狹き溪間の小村で、戶數はいふに足らず、湯宿の設備も田舍風をまだ幾分も脫して居らぬが、地獄と稱する湯の涌口の壯觀と湯の量の豐富である點とに於ては內地に於ても、別府以外にはその匹儔を見まいと思はれる。この八月半ばに行つた時には、もう其處は秋の氣分が可なり加つてゐた。

夜深くもう二時過ぎてゐたらうと思ふのだが、寢た時に少し雨が降つてゐたので、溪流の音を急雨の音と聞きちがへて目を覺まし、三階の部屋の緣側の硝子戶を締めにと、障子をあけて立ち出ると、餘り廣からぬ谷合には一面に夜霧がかかつてゐて、溪を隔てた向ふ側の家々の燈火がぼんやりと、まるで白い霧に滲んでゐるとでもいひたい樣に見えるのが、何ともいへぬ快さであつたので、その儘其處に籐椅子の上に腰を下して、じつと物音一つ聞えて來ないその沈靜な夜景に眺め入つた。まるで、此方の家と彼方の家とが溪を大きな中庭にして續いてゐるやうな氣もして、如何にも面白い氣分であつた。

船から見る島の燈火、港のともしびも風情のあるものである。嘸方に船が入る時に、伊豫の興居島の火と高濱のともしびを快く見た。この初秋、琵琶湖を觀に行つて、船が大津へ入る時のその町のともしびの眺めに快さを感じた。また、湖畔の宿に泊つてゐて、夜になつて入つて來る火をつけた船が黑い水面を渡つて近づくのを美しいものと眺めたのも幾度であつたらう。その宿の三階の上の露臺へ登ると、町の西寄りの燈火を前景にして、高觀音、三井寺から掛けて、坂本あたりまでの燈火が、雲から出たり入つたりする折からの十五夜の月の下で如何にも美しく見えた。前面に大きく黑く橫たはつてゐる叡山の右と左の兩肩ともいふべきあたりにそれぞれきらきらと燈火の一簇が見える。右に少し高く見えるのは、京都側のケーブルの終點のあかりだといふのであつた。これらの燈影は見る地點によつては殆ど精々二三丁の前方にでもあるかのやうに近々と見えることがある。晝間は登りがたいやうに見えるこの大きな山に對しても、夜はこの燈火のお蔭で、まるで庭のうちにあるかのやうに見えて來て、親しみが覺えられ、懷かしみが生じて來るやうな氣がする。

物を隔てて見る燈影は、旅客の胸には何となく旅愁を喚び起す。其所にわれわれには趣を感ぜられ、快さも覺えられるのであらうと想ふ。

思へば、われわれだけが知つてゐる燈火の發達でも隨分大したものである。菜種の油の行燈から今日の電燈までは驚くべき大變化であることは、一寸回顧すれば誰にでも分ることである。けれども、面白いことには、その暗かつたことはわれわれの心からはもう消え去つてゐる。僕等には石油ランプの時代が隨分長かつたのだが、今日五十燭・三十燭のマツダランプをつけてゐる僕等が昔は

暗かつたが、今は明るくて實にいいといふ風に、現代の照明の恩澤を心にしみじみ感ずるやうなことは殆どないといつてよからう。これが逆である場合はすぐに暗さを感じ、不便の思を忘れることはできないであらう。その最も好き例は、先年の大震災の時の電燈のなかつた數日間のわれわれの心持である。あれはまだしもあんな異常な災禍であつたから、あかりの殆どなかつた不便にのみ、われわれの心は集中しなかつたけれども、他の場合であつたら、尙一層暗さの苦しみを感じたであらうと思ふ。電燈のない土地へ時たまに行つてのわれわれの心持は、われながらみじめなものである。古き苦しみを忘れ得るわれわれの心は、やがて古き怨みをも忘れ得る心なのであらう。或人は別莊で風流な暮しをしたいといふのでわざわざ短檠を使つてゐた。仕事の念を離れて全くの休みの心持をもたうといふのにはそれもいいものであらうとは思つたが、仕事に二六時中追はれてゐる僕等には、とてもやれない贅澤である。

三　海邊の觀察

寺田寅彦

一　解題

1　作者

寺田寅彦　テラダトラヒコ　ペンネームは吉村冬彦。物理學者・隨筆家。明治十一年十一月東京市麴町區に生まれた。父は高知縣の人で、陸軍會計監督であつた。明治二十五年、父の鄕里の中學に入學。「佳人之奇遇」「經國美談」「歸省」などを讀み、又「ミゼラブル」や「リンカーン傳」などに印象をうけた。同二十九年、第五高等學校に入學。夏目漱石に英語と俳句を敎はつた。同三十二年、東京帝國大學理科に入學。同三十六年大學卒業。漱石の指導をうけ「ホトトギス」に小品を出した。この間、音響學・磁氣等に關する種々の論文を發表し、後、理學博士の學位を得た。同四十一年大學院卒業。同四十二年から四十四年まで獨逸に留學を命ぜられ、その間諸國を遊歷し、歸朝後、理科大學に奉職した。俳句は「澁柿」に寄せてゐた。專門の物理學方面でも有數の大家であつたが、昭和十年五十八才を以て歿した。

著作には「地球物理學」「海の物理學」「藪柑子集」「冬彦集」「萬華鏡」「蒸發皿」「柿の種」「椽の實」等の外に學術論文報告等がある。

2　出典

寺田寅彦全集は昭和十一年に岩波書店から發行せられ、文學篇（全十六卷）、科學篇（全七卷）に分れてゐる。

これは大正七年八月「ローマ字少年」第一卷第八號に發表せられ、後、全集第一卷に收められたもので、標題は「海邊の觀察夏の小半日」となつてゐる。本書には採錄しなかつたが、その前書によつて、夏休みに海邊へでも行く少年等のた

めに何か觀察の材料になりさうな事をといふ意圖を以て執筆せられたものであることがわかる。

3　主眼及び採擇の趣旨

作者が前書に於て言つてゐるやうに（參考欄參照）少年の觀察に對する興味を誘發しようとする教材である。科學者であり、しかも隨筆家である作者、科學の世界と文藝の世界との接觸面を見出さうとする作者によつてものされた隨筆であつて、索寞として無味なるかに見える科學の世界が、如何に興味深い世界であり、生徒の生活をとほして直ちに參入し得る世界であるかを知らせたいのである。

特に夏休みを前に控へた生徒にとつて、直ちに生活の手引となるやうにと心を配つたのである。

二　解　釋

1　語　釋

【波】　ナミ　水面の高まりまた低くなる運動をいふ。表面波、暴風浪、地震浪、潮浪の四種がある。表面波は日常水上で見る波で、これを更に風によつて直接起される風浪と、暴風雨の中心で起された波が洋上を傳はつて來るウネリとに類別し得る。表面波は水分子の圓運動或は橢圓運動によつて起るもので、その運動を水の一分子が隣の一分子に傳へ、かうして波は次から次へと起つて進行して行くが、水そのものは進行しない。またこの波が岸に向つて進行する時には波の底部は海底の摩擦抵抗のために止められて、波頭のみが前進するため岸に向つて倒れる。これを磯波または卷波といふ。また暴風浪は低氣壓の中心に生ずる海面の隆起で、その生因は氣壓が周圍より低いために海水が吸ひ上げられるのと、中心に向つて吹き込む強烈な風のために海水が吹き寄せられるからである。地震浪は海底火山の爆發、海底の陷落、崩壞等によつて起る巨浪で、これが陸岸を襲へば津浪となつて恐るべき慘害を人畜、家屋、農作物等に及ぼす。潮浪は主として太陽及び太陰と地球との間の引力と、公轉によつて生ずる離心力のために起る極めて長大な波長を有する波で、それによつて生ずる海面の昇降を潮汐といひ、その差を潮差と呼ぶ。

洋上の風浪―最大の風浪は長さ三五〇―四〇〇米、速度二四秒米、週期一五秒、高さ一五米であるが、通常暴風時は波長二五〇米、速度二〇秒米、週期一二秒、高さ一〇米程度である。方向の異なる二つの波が出會ふと盛り上つた三角波を生じ、稀に高さ二〇米以上にも達する。風浪の波長數百米といふのも大洋の深度數千米に較べると小さいから表面波に屬し、實測の結果もよくそれと符合する。波の高さは風速及び海の廣さが增すほど大きくなり、波形はトロコイド波よりも少し急である。風速が大きくなると波頂は泡立つて白波となるが、これは波頂と波谷との間に風壓差が生じ、それが波山の表面張力以上に達して水面が破れ、水沫が空氣を混じて飛散するからである。波の影響の届く深さは不明であるが、大體二〇〇米位といはれてゐる。

海岸の波―遠淺の海岸の波、遠淺の海岸では沖合から來た表面波が特殊な性質の磯波 Surf となる。波山の方向は洋中では風向に直角であるが、海濱に來ると風向に關せず常に海岸と平行になる。また波長は次第に減じて高さが增し、波頭は前に傾いて遂に崩れる。この原因としては、洋中では表面波であつた波も陸に近づいて淺瀨に來ると、水深に比し波長は小さくなり長波の性質をもつやうになる。長波の速度Vは $V=\sqrt{gh}$（gは重力加速度 hは水深）であり、淺いほど遲くなる。故に淺所の波は深所の波より進行速度が鈍り波の間隔が縮まつて波頭は多くは海岸に平行して走る等深線の方向に平行になるが週期は不變である。また一つの波について考へれば、前部は後部よりも進行速度が遲いから波形は前方に傾き遂に崩れるやうになるが、他の原因は海底の摩擦及び岸に打上げた水底を傳はつて逆流する底退きにもよる。波の崩れる位置は大體波高が水深に等しくなつた附近にほぼ一定してゐる。また磯波は多少移動性の波の性質を帶び、水の分子は全體として前進するやうになり、特に崩れた後は水平流動となり、水の壁を形づくつて突進する。かうして水が岸に來て水位が高まると重力の作用で底退きを生じて後退する。（二）絶壁海岸の波、絶壁や防波堤のやうに水深が岸まで相當にある場所は磯波とは狀態が異なる。寄せて來た波が水深より波長が小さく高さの低い表面波の場合は岸に當つて反射し、次の波と干渉して定常波を生じ、絶壁の所を波動の腹としそこは最も振幅が大きく、少し岸の所に節を作り、そこでは常に上下運動が行はれず、更にその二倍の距離の所に腹を作る。定

常波の高さはもとの波の二倍に過ぎず、磯波のやうにもとの數十倍になるやうなことはない。故に平日は磯濱より靜穩である。若し外洋から來た波が水深よりも波長が大きく高いと移動性の波になるから、絶壁に當ると急流を堰止めたやうに大奔騰して泡沫を天に冲する。暴風の日の波はこのやうなものである。

波浪の發達―波浪は風に比例して發達するが、水中に氷、海藻、浮木、魚群がゐると多少靜かである。これは一つには水分子の運動をそれ等によつて妨げられること、風の力を殺ぐこと、物體の間に定常波を生ずるのに勢力が費される等のためである。水上に油、特に動物性の油を撒くと水面は油の薄い層で被はれ、內部摩擦が大きくなるため小波の發生を止め、また油と海水との間に內部靜振（定常波）を起すために勢力が使はれ、表面の波が少なくなる。故に航海者は難船の時人工的に油を撒くことがある。

【物理學】　ブツリガク　Physics　自然科學の方法を用ひて、自然現象中の生命に關する部分を取除いたその他のものに對し、普遍的に共通する法則的關係を求めようとする自然科學の一部門。特に現象をあらはす諸概念を數量的に定義し、從つてその間の法則として常に數理的關係を確立し、また同樣に種々の根本的假說を設けて數理的理論を展開し、總ての現象を統一的に整序して一つの理論體系、卽ち物理學的世界形象を構成すべきことを以てその窮極の目的とする。この點で、精密自然科學の最も重要なものとして見做される。但し物質の變化に關する部分は從來化學に於て取扱はれ、また結晶形に關する部分は鑛物學の一部として取扱はれてゐたが、これ等に對する基礎的の理論が近時に於ては物理學によつて發展されたので、結局これ等もまた物理學の對象と見做して差支へはない。

【仕事】　シゴト　物體に力が作用し、その方向に作用點の移動を生ずるときはその力が物體に仕事をなしたといふ。力學上仕事の量としては、力の大きさと、その力の方向への著力點の變位との積を以て定義する。

【颱風】　タイフウ　Typhoon　熱帶性颶風のうち特に極東に發生するものをいふ。フイリツピン群島及びその東方の多島海に發して、移動經路に當る支那大陸、東支那海、日本、太平洋西部に襲來し、猛烈な暴風を起す。正體は深厚な低氣壓で、その等壓線はほぼ圓形、最低壓部卽ち颱風の中心に近い所が密で、遠方は疎になつてゐる。この點は中緯度低氣壓、卽ちいはゆる颱風では中心近くに氣壓傾度が疎で、比較的遠方に於て急峻になつてゐるのと正反對である。從つて颱風の時の風は中心近くの比較的等壓線間の間隔の狹い部分に猛烈で、遠方ではさほどでないが、旋風ではむしろこの逆になる。風の方向に就いても、旋風では進行の前面と後面に於ての差異があり、通過の際に風向と氣溫との急變を伴なひ異系の氣流の轉換することを暗示し、いはゆる不連續線が常に存在するが、颱風では原則としてこのことなく、ただこれが比較的高緯度にまで移行して旋風類似の形象に轉化した際にのみ、これに類する特質を帶びて來る。卽ち風は圓形等壓線と僅少の一定角度をして中心に吹き込み、完全に近い渦卷を形づくる。天氣は中心から遠い所では卷層雲や卷積雲のやうな上層雲を見、殊にいはゆる鯖雲が放射狀に全天を橫ぎり、銅色の物凄い夕燒けが颱風の近づく前兆を示すことがある。やがて中心が近づくに從つて中層雲も下層雲も濃密となり、中心近くでは厚層に亘つて黑雲に覆はれ、積亂雲さへ交へて强烈な雨を降らし雷鳴さへ伴なふことが往往ある。いよいよ颱風中心が迫つて來ると異常な蒸熱を感じ、地平線に雲堤の寄せて來るのを見ることがあり、猛風强雨を伴なつて來襲するが、風勢は息をつくやうに週期的に强まり或は弱まる。しかしたまたま中心が一地點を通過する際には、一時風收まり雲散じて晴空をさへ見ることがある。これを「颱風眼」といふ。颱風眼を見得る場所は中心の左右十粁內外の極めて狹い帶域に限られ、それ以外では依然として强雨と大風が吹續き、また眼に當る所でも數十分で再びもとの颱風が盛り返して來る。この眼を見得るところは主として琉球以南に限られ、颱風に轉化しかける北方の地では甚だ稀な現象である。颱風が南方海上に發生する前には、所所に空氣の沈滯した極めて蒸し熱い所が出來、雷雨がしきりに起つて氣流の局部的の小渦動が彼方此方に簇生する。それが次第に集結して大渦動となるに及び初めて全系としての運動を起すものであるが、晩秋以後初春まではこの情勢も優勢な颱風に育成するに至らずして消滅し、たまたま可なりの勢力を得ることはあつても多くは太平洋を東方に斜走して北アメリカの東岸に向ひ、途中で衰勢に傾くを常とする。颱風の最も頻出し且つ勢力を得るのは盛夏から初秋の間で、初夏晩秋には少ない。初夏に生ずるものは比較的西方の海上に起り、西乃至西北西に進んでルソンや香港方面を衝き、盛夏に向ふに從ひ發源地も次第に東方に移り、台灣や琉球方面を襲ふやうになる。颱風の名稱はこれより起るともいはれる。この候にはその後の進路を餘り變へず、南支那に上陸して福州や長江方面に向ふを常とするが、沿岸海上に顯著な風害を及ぼすだけで、陸上に行くと衰へるものが多い。しかしその際却つて强雨による洪水の慘害が甚しい。この

進路を取る颱風は後更に遠く迂回して北向し、一層東方に轉じて北支から滿洲國に雨を降らせ、次いで日本海を斜斷して我が國の東北北海道地方に洪水を起すことがある。盛夏以後の颱風は一時琉球近海に滯留して後北上し、そのまゝ黃海に入り朝鮮西岸や關東州を荒してから南滿洲に入るもの九州西方海上に出て北東に日本海へぬけるもの、又は九州に上陸して猛威を振ふもの等もある。いづれにしてもその際最も長く颱風の影響の下にある地方は沖繩及び八重山群島で、同地方では秒速數十米の風勢が長時間吹きつづけ、ときに五十米を超える風速を觀測した例も屢〻ある。本邦內地に襲來するのは多くはこの時期を過ぎてからで、琉球近海で進路を北東に轉ずる結果である。八月に入つては土佐沖から四國を橫ぎり、もしくは豐後水道を經て內海にぬけ、中國を橫斷して日本海に出て衰勢に向ふものや、或は大阪灣から上陸するものもある。更に八月末から九月末にかけては往々東海道沖をかすめて北東に去り、もしくは紀伊半島から東京灣の間に上陸して本州を斜斷し、再び東方海上に出ることもある。每年立春の日から二百十日目に當る九月初頭か、二百二十日ぐらゐで陰曆八月朔頃に當る九月中旬が厄日として農家に怖れられるのは、これによる風水害が折から米作上最も重要な開花時期に當るためである。しかし

颱風の害は海難を主とし、巨船大船もなほ覆沒の危險があり、漁船が颱風に襲はれて行方不明となるもの年々百を以て數へられる。また陸上では樹を倒し家を覆し田畑を吹き荒し、颱風一過その損害數千萬圓に上る例も稀ではない。陸上に於ける颱風の害はまた一面に洪水となつても現はれる。これは陸地や山岳の障礙によつて氣流の錯綜を惹起し、局部的の小渦動核を簇生して異常の昇騰氣流を生じ、水分の凝結急激となり、大雨を降らすによるらしい。なほ颱風が本州太平洋岸に近寄るとき、往々日本海沿岸に派生する副低壓の如きも、この種の分裂作用と見られる。颱風の强裂な風勢が長時維持される原因に關しては種々の學說があるが、四周から中心に吹き入る溫濕な空氣が上昇する際に水分の急速な凝結を起す結果、上昇に伴なふ必然の冷却を緩和されて常に周圍より高溫度に保たれ、しかも上昇力を失はずして更に四周の空氣を吸引するによるといふ考へが最も有力である。卽ち水蒸氣に潛在する熱のエネルギーが運動エネルギーに轉化するわけで蒸氣機關類似の作用と見られる。颱風發生箇所の緯度が主として北緯五度—一〇度の邊にあつて、赤道に餘り近い所からは發生しないのは、地球自轉のため運動物體の右にそれる轉向力が赤道では働かないため、ここでは風が中心にまともに吹き込み渦とならな

いからといはれてゐる。また發生の場所と時期とに對する解釋としては、太陽輻射の最も强烈な時期と場所に於ては蒸熱著しい空氣の生じ易きこと、定風が强くなく、ために空氣の沈滯を助長して多數の小渦動が生じて發育し易いこと、及び上記の時期に南半球より赤道を超えて張り出して來る高氣壓から吹く南西風と、北半球の中緯度地方から南西に吹續ける信風の延長とが、低壓構を挾んで相反氣流による低氣壓の育生を助けるためと解するものが多い。

【うねり】(一)うねること。曲りめぐること。(二)大浪の高くうねり立つもの。ここは(二)

【波の峯、……谷から谷】波の項參照。

【尋】ヒロ　度の名。兩手を左右へ伸べひろげた長さ凡そ六尺。

【潛航艇】センカウテイ　船體を水中に沒して、航行する船。

【波長】ハチヤウ　波動に於て、同一位置を有する相隣る二點間の距離をいふ。例へば水面波に於ては山と山、谷と谷との距離は一波長に等しい。

【海軟風】カイナンプウ　Sea breeze　夜間地上の空氣は海上よりも低溫で重く晝間は之に反する。このために陸地周緣の海岸地方では風は夜は海の方へ、晝は陸の方へ交代に吹く。前者を陸軟風といひ、後者を海軟風といふ。

【方言】ハウゲン　言語の音聲、意義、文字について地方的に特殊性を有するもの。

【膨脹】バウチヤウ　熱、濕度、壓力等によつて物體の體積の增加すること。熱によるものは固體、氣體、液體によつて左の如き相異がある。

固體は其膨脹量が液體、氣體に比し、著しく小さい。溫度一度上昇につき物體の膨脹した量の原體積に對する割合を膨脹係數といふが、之には線膨脹係數と體膨脹係數とがある。後者は前者の三倍である。

液體の膨脹係數は固體のそれに比し頗る大きい。

氣體は一定壓力の下に於ては或質量の氣體は溫度一度の降昇につきその零度に於ける體積の $\frac{1}{273}$ づつの體積の增減がある。

2　文の構成

第一節　初—八五頁五行　波の觀察

（イ）波の仕事（初—八三頁一行）

（ロ）　波動の理（八三頁二行―八五頁一行）
（ハ）　波の週期（八五頁二行―八五頁五行）
第二節　八五頁六行―八八頁三行　砂の觀察
（イ）　漣痕（八五頁六行―八六頁一行）
（ロ）　砂塊の力學（八六頁二行―八七頁四行）
（ハ）　砂礫が類を以て集まる理由（八七頁五行―八八頁三行）
第三節　八八頁四行―終　風の觀察
（イ）　海軟風の起る理由（八八頁四行―八八頁一一行）
（ロ）　海軟風の吹く場合の現象（八八頁一二行―八九頁終）

3　**文　意**

海邊で一番見飽かず興味をひくものとして波をとり出した。そしてその作用、構造及び運動の時間等について實驗觀察を遂げる。更に進んで砂濱に印せられる漣模様に及び、その實驗觀察から砂の諸性質に及ぶ。波頭が砂濱を這ひ上つて引いたすぐあとの、濕つた細砂の表面を足で踏むと、その周圍二三尺の程が急に乾くが、其のまま立ち止つてゐると、すぐ濕つて來る事實、或は又砂礫の類を以て集る現象について觀察を遂げる。

ついで話は海軟風にうつる。海軟風の吹く理由から、この風の起る際の海面の現象の觀察に至つて筆をとめた。忠實に細心に觀察の指導に當りしかも興味深い海邊の觀察の敍述である。

4　**鑑賞批評**

物理を通して風雅のまことをせめ、月花の生活裡に科學の眞を求めた作者である。故に海に對する研究はまことに獨創

性に充ちたものであつた。それだけにここに採られてゐる波と砂と風とに關する敍述もその觀察實驗をとほして科學の世界の眞祕を興味深く示してゐるのである。

題材そのものが海邊に於て接する自然現象中人の興味をひくものである事と、詳しい觀察研究の報告とはそれ自身讀者の興味をひくに充分である。しかも更に作者の隨筆的手腕は簡潔な文章と、自然現象に對する情趣的理解のゆたけさと、手近な事實によつて證明してゆく手法とによく現れてゐる。次に順を追うて鑑賞を進めよう。

〔一番見飽かず面白いと思ふのは遠い沖の果から寄せて來ては濱に碎けるあの波でせう〕

波の興味に對し「遠い沖の果から寄せて來ては濱に碎ける」波といふ表現は讀者をその興味の中に誘ひ込む力を持つてゐる。更に海水を生きてゐるもののやうな氣がするといふ人々の例をあげ、「實際、波は或る意味で生きてゐる。」といふ斷定を下して人々の興味を力強く惹く表現はさすが物理學者であり隨筆家である氏の面目を示すところである。

〔海岸の崖などは……よく氣をつけて御覽なさい〕

問題を提出して興味ある觀察を促す。かういはれれば見ようとする氣にもなるのである。

〔このやうな能力を何か有益な事に利用したいと……〕

觀察から更に發明發見への暗示を與へて研究心をそそつてゐる。しかも教訓的な表現を避けて「まだ餘り成功した人はありません」といひ切つて「それでは自分がして見よう」といふ樣な意慾を感ぜさせる手法は氏の學生後輩の指導の一面を示すものである。「世の中につまらぬなどと言ふものはない。つまらぬと云ふのはつまる樣に出來ない人の云ふ事です。學問に成功するのは頭の良し惡しではない。學問を熱愛する人です」實際先生に鼓舞せられた人は誰も『俺でもやれば何か出來る』と云ふ信念を持つ事が出來、實に明るい彈んだ氣持を抱いて歸るのが常であつた。」と宇田氏（思想昭和十一年三月號）が言つてゐるのが思はれるのである。